THE CENTRAL REVIEW

中央公論

三月號

第三十六年 第三號 第三百九十三號

大正十年三月一日發行（毎月一回一日發行）

獨逸ショーペンハウエル著
増富平藏譯

處世哲學

三版

ショーペンハウエルの處世論は類書中の最尊也。偉大なる哲學者『人間を知れる者』としての著者が晩年に於ける深遠の觀察と老熟の思想とを挙げて人間處世の妙諦を説き人生に於ける明闇、幸不幸、安危得失等の根源を論じて一大秦鏡を懸くるが如く、譯文亦明快を極む。

四六判總布製 四百七十頁
定價 貳圓八拾錢
郵税十二錢

佛國ブーリエンヌ著 文學士栗原古城譯

奈翁實傳

▲寫眞版二十二頁菊版總
▲布製、紙數九百五十頁
定價一圓五十錢
送料 內地三十六錢 其他六十五錢

原著者は、幼少の頃より奈翁の親友で中年迄其家庭の一員として公私内外の樞機に參畫し而も後年其反對者としてルイ十八世王の下に國務大臣たりし人、本書が材料の豐富と記事の徹底とを以て古今第一のナポレオン傳と稱せらるゝも偶然でない。カーライル、エマーソン等の奈翁に關する評論も主として材料を之に採つた事は周知の事實で本書を讀まずして奈翁を語るべきでない。

獨逸イエナ大學名譽教授ヘッケル博士著
文學士栗原古城譯

宇宙の謎

十版

▲四六判總布製 定價參圓 送料十二錢

◉萬朝報評 『少しく心ある人にしてヘッケルの「宇宙の謎」の名を知らざる人は無かるべし…譯筆快暢にして凝滯なし。』

◉東京朝日新聞評 『同教授一代の研究を壓搾したる精髓たるのみならず、實に歐洲の科學界、哲學界を震撼せしめたる名著なり。』

東京本郷西片町 玄黄社 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番

早稻田大學教授 杉森孝次郎氏著（四六判、クロース美本、箱入、定價壹圓參拾錢、送料十七錢）

（最新刊）

新社會の原則

本書は新思想界の權威たる著者が多年の研究と表現の總粹たり、著者の偉大なる智識と哲學と思想とは諸種の問題を解決して永遠に本質的光明を放ち、新らしき社會の原則を提唱す。混沌たる思想界は蓋し本書に依りて其の歸趣を知るを得ん。希くは速かに一本を手にせられよ。

ラッセル氏原著。稻毛詛風氏譯（四六判、クロース美本、箱入 定價貳圓四拾錢、送料十七錢）

（再版）

新哲學綱領

ラッセル氏將に來らんとす。

社會改造の大獅子吼をなしたる同氏が哲學は生活改造の原動力なる事を説明せんがため、實用主義の新哲學を創設せり。本書は實に其の最初の提唱に係るものにして「哲學は一片のパンだに燒かず」といふ、古來の非難を一擊の下に打破したる快著なり。「社會改造の原理」を讀みたる諸氏は併せて本書を讀まざるべからず。

東京市麹町區飯田町壹の貳 株式會社 天佑社（電話九段長一一七三 振替東京一〇一二八）

七色おしろい



色の白い人	肉黄色の白粉
色の赤い人	白又は緑白粉
色の黄い人	ばら又は牡丹白粉
色の黒い人	紫又は黄白粉
色の蒼い人	ばら色白粉

各七十錢

東京新橋 資生堂化粧品部

大阪支店 東區南久寶寺町

鷹印帽子

帽子と文化生活（其三）

（流行と其の範圍）

目下倫敦で人氣を沸騰せしめて居るのは「デリーメール」の一千圓懸賞で「年中被リ得ル新案帽子」の大募集で有ります、が一向面白い名案が出現致しません。之は「年中被リ得ル」と云ふ點に根本的誤謬が有るからです。春が來れば春の帽子、夏が近づけば夏帽子、之が自然の要求で一種の帽子で「年中」とは無理な話です。

元來帽子は其の時の氣候と用向と服裝とに適合するので無ければ折角の趣向は臺なしに成る譯で只だ不釣合と不快とを殘す計りです、又他人樣に申譯に被るので有りますまいから何時も自己を本位にして保健と裝身と嗜好とに依り御選擇が必要で流行も畢竟之の範圍を越える事は無いのであります、然も尙ほ此の間に否む可からざる嗜好の潮流が有りまして時代の反影、思想の變遷、服裝の變化は結局帽子趣味の根柢を動かします。

近來黑色や濃鼠色の中折が流行致しますのは戰時の哀悼や憂苦的情緒の表象でやがては平和爽快を熱望する氣分は必ず薄グリーンか薄茶色を呼ぶに相違ありません。

此等流行に關して鷹印帽子は常に他の追隨を許さゞる獨特の手腕を有し最近の傾向を洞察し各種各樣の意匠を凝し必ず皆樣の御滿足を得べき製品を市場に提供し四時も御稱讃を博しますが今日では「鷹印帽—卽流行帽」と云ふ事になりました是非御鑑賞を願ひます。

純品質主義

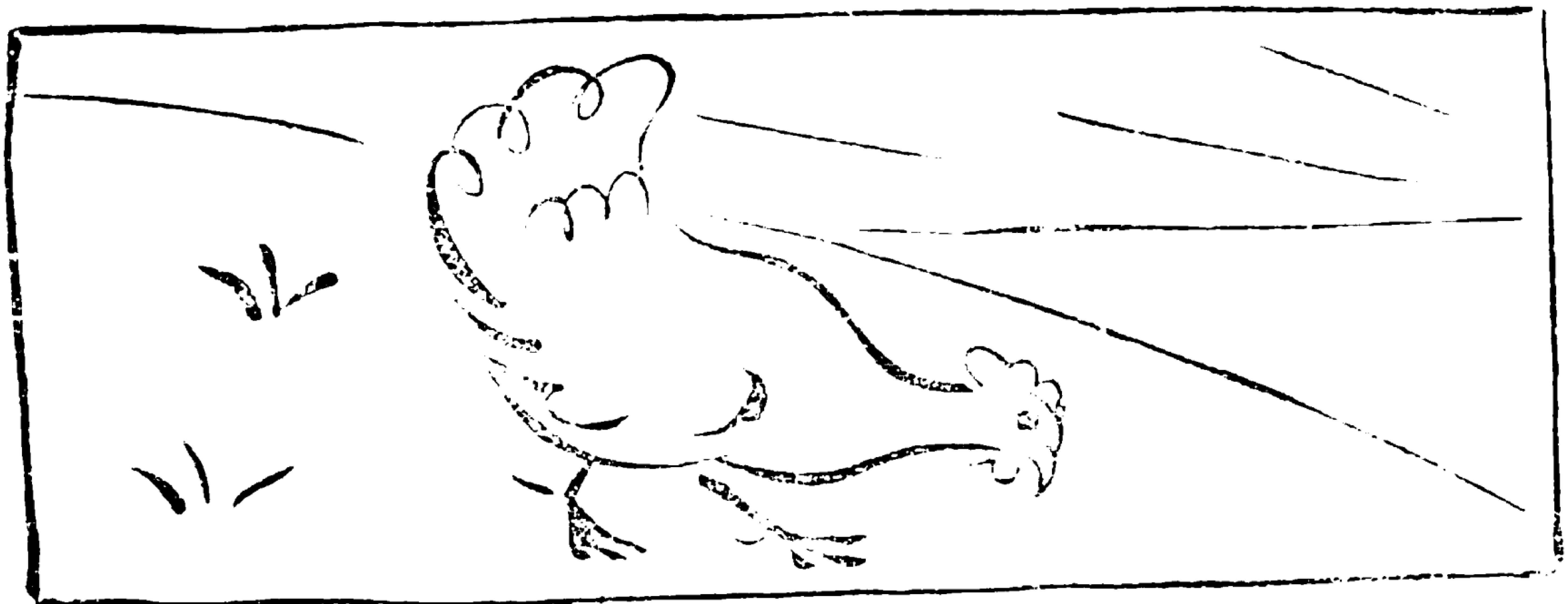


大阪 株式會社 髙橋製帽所



中央公論第卅六年三月號目次

▼公論





"THE ARTIST" BY SIR WILLIAM ORPEN, A. R. A.

東宮殿下の御外遊を祝す

我が東宮殿下は本月吉辰を卜して御外遊の途に上り給はんとして居る。我々國民は衷心から其征途の安學を禱り御見學の目的を十分に達し給はんことを望んで熄まない。

殿下御發程の旨の公表と殆んど時を同うして殿下の御婚儀に係はる一種の風聞の民間に傳つたことは、我々の恐懼して措かざる所であつたが、幸にして其が一個の流說に過ぎなかつたことが明白にされ、我々國民が何のわだかまりもなく安じて殿下を送り奉るを得たるは此上もない福と謂はなければならぬ。只之に關連して一部の人々の間に殿下御外遊の中止を奏請せんと熱中するものあるは、我々の聊か意外とする所だけれども、是亦國民の皇室を思ふの至情に出づるものとして今更ながら我々は君民相倚るの敦厚なる美風を喜ばざるを得ない。

只此際殿下の御外遊の中止を切諫せんとするのは如何なものであらうか。人は曰く陛下御不例の際の殿下の御外遊は時の宜しきを得たものでないと。又曰ふ國外に於ける不逞兇漢の徒より蒙ることあるべき萬一の危害を如何すると。陛下の御不例は我々の洩れ承つて日夜痛心する所なるも、しかし極めて輕微の御症狀に渡らせらるゝとの事である。不逞兇漢の徒の危害萬一を測られずと雖も、これは自ら取締りの道もあらう。況して殿下自ら進んで外遊御見學を熱望し給ふといふに於ては、臣子の分として强て之を御引き止め申すべきではないと思ふ。我々は寧ろ今日を以て殿下御外遊の絕好の機會であると拜察するものである。御外遊にして好ましい事とする以上、今日の場合を逸し給ひては、他日再び適當の好機は容易に來るまじく思はるゝからである。

いよ〳〵御外遊の途に上り給ふとして、吾人の切に扈從の臣僚に望む所は、殿下御外遊の御目的は專ら御見學に在るの意を奉體し、徹頭徹尾この御目的の達成を助けられんことである。殿下が御外遊に依つて爲し給はんとする所は、海外の元首と交驩を訂して政治的目的を達けんとするにあるので無いは勿論、又固より日東帝室の威容を海外に示さうとするに在るのでもない。帝室の威容を顧慮しなくとも宜いと申すのではない。又對外的政治關係を等閑に附しても構はないといふのでもない。が、只之等の方面に餘りに意を注ぎ過ぐると、殿下本來の御志望たる御見學の目的に幾分邪魔をするの恐がないでもないと思はるゝ。殿下が斯の機會を利用して十二分に御滿足を得給ふ樣に努力するは、一に繫りて扈從の臣僚の責任であると信ずるものである。

何れにもせよ、東宮殿下の御外遊は殿下御自身の發意に出で給ふ所であらうが、又國民の夙に希望してやまざりし所であつた。今や萬障を排して御實行の途に上り給はんとする。我々は茲に謹んで御行程の康安を祝し、やがて十分なる御滿足を以て目出度御歸朝あらんことを祈るものである。

中央公論



第卅六年第三號
三月號
第三百九拾三號

婦人問題の論理

杉森孝次郎

近代の社會運動が、不完全ながら宗教改革に着手し、續いて佛革命に政治生活の新方向を豫言し、更にその足跡の乾かぬ内に、勞働者の位置の昂擧に取りかゝつた。こゝまでは、人格的個性主義の社會的徹底の自然にして且つ當然な發展であつた。理性ある人の否定しえざるべき事理だ。しかし、もしもこの人格的個性主義の社會的徹底の運動が、或ひは努力が、そこまで進んで、それで打ち切りとなつたならば、世にこれよりも不思議の現象はない事にならう。春が來て、梅櫻桃は開花したが、李だけは冬ながらの不遇無機會を脫却しないと同じ不合理、不可能事だ。

女性が、動植物界の雌性をまでも含めて、腕力及び經濟的生産の二事にかけて、男性に、動植物界の雄性をまでも含

めての男性に對比して、先天的劣者たる制限を通有しまた固有してをるかどうかは、廣汎精微な研究を要する問題だらう。スパルタの婦女でさへ、武藝や力技に優秀の成績を示したといふ。けれども、社會の習慣及び制度が看板となつてをる限りに於いて、大體に於いて女性は腕力と經濟的生産の二必要については、男性の從位に立ち、男性に依賴して來た事は事實だ。

腕力上の優者たる男性は、その腕力的優越を恃んで、女性に對して命令者の態度を執つた。歐洲の中世に發達した騎士道に、女性を腕力の支配以上に奉戴擁護した部分があるのは、それこそ「一般を證據立てる例外」とも見るべきだ。荒ら武者も、女性の前には恭敬服事の態度を必ず執る事を誇りとし、女性にむかつて暴力を加へる事を却つて腰拔武士の一證として大恥に算へたのは、それが異彩を放つところに、通則が挑示される。況んや、シヷルリそのものは、及びそれの生き殘りの一部とも稱しえらるる歐米今日の「女性優先」の多少の習慣は、眞實に健全なる道徳ではない。そこには人格的個性に對する自覺及び認識の基礎がない。すべての道徳的生活に最必要な根本條件たる基礎がないのだ。そも〱中世の騎士道は、ローマ帝國以來の階級主義、專制主義の精神と、基督教の虔神皈依及び愛の精神との混成とも見るべき一面を持つてをる。虔神皈依と愛とは結構だが、それが人格的個性の確認に出發してゐない時には、價値は半減する。或ひは大半減する。それは自然力と運命を神と名づけ、卑屈求憐に機會を準供する立ち場の比較的精煉されたものと評される餘地があるのだ。人の權利といふ思想は佛蘭西革命の當時までは眠つてゐた。佛蘭西革命及びそれ以來の世界が、人の權利として要求し、主張したところの目的內容を、中世の敎會は施捨、慈惠の名と形に於いて意識し、追求したといふ事實が、たま〱その一象徴だ。シヷルリの殘照としての作爲的女性優先は、變裝した男性優越だ。保護者としての強者の位置を、男性は女性に對して實は保留してをるのだ。弱者と公認されてをる女性にむかつて威張るのは、強者

たる男性の誇りにそむくといふのが、シヴルリの女性優先の心理だ。そこには道德の微影だにないと評し去つても殆んど過言でない。最近の資本家のいはゆる温情主義と同じ正銘の化け者だ。眞の道德は、對等者、同格者の間に成り立つ。ミルが切言したところに、多少の不完全はあつたが、大體に於いて豫言的提出であつた。從來の社會に道德はなかつた。今でもない。なぜかといふに、眞の道德は、人間の場合にあつては、先づ人格の目的價の承認から出發する。カントを聯想させる平凡なる眞理だ。然るに從來及び現存の道德は、多くは、命令と服從の二要素だけから成り立つてをる。爲政者は命令し、國民は服從し、資本家は命令し、勞働者は服從し、夫は命令し　妻は服從し、父は命令し、子は服從する。神と教會さへも、信徒と國家に對して、同じ原則を把持してをる。實をいふと、この最後の事實が、すなはち哲學上の專制主義と隷從主義とが、政治、經濟、性、齡といふやうな特殊的具體的社會方面に於けるすべての專制主義と隷從主義との背景だ。素地だ。基調だ。哲學と常識とに病因は存するのだ。世界の價値の中心は、個性にある、殊に人格的個性にあるといふ公理中の公理が閑視されてゐないところに、社會上の百弊は發生するのだ。

從來及び現存の道德は、威張るでなければへつらふのだ。命令するか、服從するかのどちらか一方を選擇採用するにきまつてゐるのだ。ニーチェは、基督教道德を奴隷道德だと觀て、君主道德を高唱した。眞の道德は、この場合に於いても、第三社會の樹立を要件とする。命令と服從を超越したところに、眞の道德は成り立つのだ。シヴルリ傳來の女性優先を見よ。形から觀れば、男女對等の協力ではなく、男性が女性にへつらふのだ。英國の夫妻は、人前にでては、强き服從者と弱き命令者との喜劇を常演する。日本のやうに、第三者の眼前地域とあれば、夫は妻を、いにしへの暴君が、捕虜にされた謀叛者にでも對する如き態度を執るのは悲劇だが、西洋のやうに、見え透いた女性優先も、たしかに齒が浮く現象だ。前者は原始的野蠻だが、後者もまじめでない。日本の男性は、自己の優越腕力を意識して、それに性

道德に於ける支配權を與へる低劣醜惡だ。西洋の男性も、自己の優越腕力を意識して、それの惡用を愼むところに性道德上の注意を集中してをる薄弱幼稚だ。淺くして輕い。男女間の道德は、腕力の强弱などを特に意識の焦點に置き据ゑるやうな、趣味いやしく、聰明にぶきものであつては決してならん。腕力などは、最初から計算にのぼらない筈のものであるべきだ。人と人との直接關係を決定するに、腕力を揮ふの、揮はないのといふ事を問題とするのが、すでに道德上の低能だ。腕力は、物を扱ふための人間の一要具だ。人格と人格との競爭は、すくなくとも腕力にだけはうつたへずに濟まされなくては、現代のわれらとしてはあまりに粗質な就ちだ。殊に況んや、家庭や子孫を、女性が必要とする程度に劣らず必要とする男性は、女性が、種族保存の最直接の能力者且つ責任者たる關係上、腕りを養成したり、發揮したりする機會が、男性に比して必然的に乏しいといふ事情に對して、わが身上の事としての自覺を銳くすべき理由あるに於いてをや。

いはゆる産業革命の影響を受けた社會に於いては、隨つていはゆる文明諸國は、過去およそ一世紀以内の、多少の長短別ある期間に亙つて、女性に與ふるに、從來の腕力上の劣者たる位置に加へて、富の生産者としての劣者たる位置を以てした。産業革命以前の社會に於いては、工業も商業も家庭的規模に於いて營まれたから、夫婦共稼ぎであつた。然るに、産業革命以來は、生産は家庭から工場へ場所を移した。家庭は生産の單位ではなくなつた。紡績でも、機織りでも、裁縫でも、製靴でも、石鹸作りでも、金工も木工も、生産業は、工場の獨占となる概を呈した。家庭は經濟的方面に於いては、生産の單位でなく、消費の單位となつた。妻はその消費的單位の責任者、代表者となつた。稼ぎ儲ける人は夫だけとなつた。夫は妻の腕力上の保護者であるに加へて、妻子の衣食住の支持者となつた。夫はこの新獲の位置を利己的に解釋せずには措かなかつた。妻子の生殺權、妻子の所有の與奪權は、夫に集中してをると考へ信じた。夫自身が

基づき考へ信じて、妻子も多く獨立の判斷を施こす餘裕もなく、同樣に考へ信じさせられた。家庭の費用を、妻は夫に乞ひ求め、妻子の生きるために必要な富を、妻は、自己の當然の權利としてではなく、また夫の義務責任としてでもなく、夫の自由意思を恩惠的、寵愛的に動かす態度を以て夫から仰ぎ受ける習慣が生じた。銀行の出納係りが銀行の支持者であり、工場の支配人が全工場員の支持者であると考へ信ずるにも似た非論理だ。

一國の武力的侵略主義としての帝國主義の時代は漸く過ぎて、經濟的侵略主義としての帝國主義が尙ほ隆興しつゝある今日の國際關係を、その背景の原理に隨つて讀む人は、腕力的專制の支配を或ひは脫し、或ひは脫せず、經濟的專制の支配をば全體としては殆んどいさゝかも脫しない今日の女性の位置に、相當の理解を持つ事が出來よう。武力と財力とは、それが一人なり一團體なりによつて、明らかに優越な程度に所有された時には、その人なり團體なりをして、同じ社會内の、武力と財力の弱劣な人や團體に對して、いかに正義の濫信者とならしめ、同情不能者とならしめるかは、逆近に例證事實が堆い。家庭も、社會も、人間の世界は、或ひは文明は、悉く男女の連帶責任であり、協成功績である事理に、男性及び女性が開眼する事が急務だ。

夫をして家庭の信者たると同時に、すなはち家庭の自由所有者、享樂者たると同時に、社會の　として、生産その他の形に於いて、奉仕と自己表現とを可能ならしめる一大條件は、妻が家庭の經營を引き受けるにある。夫は家庭及び社會を所有し、利用し、享樂しうるのに、妻は家庭のみを天地としなくてはならん制度習慣は、一とたび深刻なる批判の對象とされる餘地と必要がある。家庭は、妻に取つては、至寶だ。夫に取つては、社會の方がしばしば家庭以上の引力を示す。社會奉仕、良心誠意といへば立派だが、一身の世俗的功名心が、むしろ適當な稱呼である場合がある。社會に於ける家庭の位置は、その住宅の間口と奥行が空間的に占めるだけの大きさに相當したものであるといふ誤解でもしてゐる

のではないかとさへ疑はれる現象もある。妻は人だといふ眞理に、われらの思想實行に徹底してゐない。經濟生活方面から觀察するならば、そとに於ける夫の生產的活動と、うちに於ける妻の消費的活動とは、主從の關係を意味すべき事實ではない。妻は自己のために消費せず、家庭のために消費するといふ一大方面を有するからだ。子供の養教育費の支出をまでも、夫が妻に對して自己の手柄のやうにでも思ひふるまふならば、その夫は、現象が見えて論理が見えず、部分と全體との關係を正視する品性智能のない人だ。女性の人格價が比較的に認められてゐるといはれる英國あたりでさへも、妻が、衣服や裝飾品を、夫に「おねだり」するといふやうな言ひ草や、多少の現實が習慣的に公認されてゐる事は男性の威儀をもそこなふし、女性の美をもきずつける。女性は、生きた玩具の眞似をするでなければ、本然らしなく、また男性の興味に遠ざかるといふ事は、噂に聞く阿片中毒にも比すべき人間の自暴自棄だ。腕力の優越を恃む夫は、その夫に屈從する妻と共に、聰明に觀察すれば、ヴイオレーシヤンを實行しつゝあるのだ。經濟的に夫婦關係を、恩惠者と求寵者、權力者と倚賴者との關係だと心得る男女は、プロスチチューシヤンの自身當事者であるのだ。一步を進めて考へれば、今日の社會に於いて、そとにいでて生產またはその他の形に於ける社會奉仕に從事するのと、うちにゐて一家族の消費及びその他の形に於ける家庭奉仕に從事するのと、どちらが割りがよいかといふ問題は、現代の夫は羨むべく、現代の妻は氣の毒だといふ解答に、ほぼ疑ひなく研究者を導く。表現は個性の生命だ。その表現の機會が、現代の夫と現代の妻とに對して、いかに不公平に分配されてゐるかは、多く考究するまでもなく明白だ。わが國に於いてその不公平は殊に甚だしい。婦人は、婦人だけの社交界をさへも殆んど有せず、男女共通の社交界をば尙ほ更ら有しない。社交界の有無大小でさへも、婦人の個性の表現に對する機會の有無大小を、相應に意味するのだ。相應にと制限したのは、婦人の自由選擇に委すべき專門や職業が多々存するからだ。それらの專門や職業が婦人の前に閉鎖されてゐる現狀は、婦人

の個性の表現のそれだけの無機會を意味する。

家庭は必要なりや、保存すべく發達さすべきものなりやといふ問ひは、全然無資格な問ひではない。こゝでは、その必要と、保存及び發達の價値を假定して論を進める。家庭の一要素は子供だ。育兒は、誰れかがその任にあたらなくては不可能でもあり、成功もしない一大事業だが、母以上の適任者はあるまい。すくなくとも父母兩人のうちでは、母の方が適任者であるばかりでなく、父の方は殆んど本質的に無資格だ。無能力だ。育てらるべき小供が幼少なほどますますさうだ。妊娠期をも育兒の範圍に入れて考へるならば、父の無資格は絶對的だ。男女共通の必要事にして、しかも女子獨り有能なる事實がこゝにも一とつあるのだ。女性は、社會の人としては、例へば學者としても、藝術家としても、その他の多くの專門的職業の人としても、大體に於いて男性に劣る成績を古來示した。しかし、往古の事はしばらく問はず、近代殊に現代に於いては、各專門と各職業とは、集中的教養と、集中的從事を必要とする。片手間では物にならない。競爭の落伍者となる。男性は、たとひ天分に於いて、素質に於いて、女性に等しく、或ひは劣つてゐても、後天的に集中的教養の機會と、集中的從事の機會とを社會から與へられる。女性にはそれが與へられない。殊に結婚した女性に於いてさうだ。結婚前の女性といへども、或ひは獨身女性といへども、結婚前の男性、或ひは獨身男性に比すれば、學窓時代にも、卒業後にも、專門や職業の研究や營爲に集中する機會がすくない。邪魔が多いのだ。身なり臉容をいはゆる女らしく美にするために要する精力と時間とは、到底男子とは比較にならぬ多額のものと思ふが、それは、改良された社會に於いても打ち續くべき、生活價値の一種として認めて、邪魔として算へないとしても、その他の雜務が、女性にはおびたゞしく多い。身邊に於ける物の仕末や修繕位の些事は、女性は、自分でその面倒を見ないと、女の癖にといふ社會的非認を受ける。男性の方は、別に學藝等に有能な人でなくても、その邊の勞をみづから執ると、男の癖に

といつて嘲笑される。結婚した女性に取つては、かの女自身の時間は殆んどないのだ。夫の身の上に、隨時臨時に起こり來たる用務が、無遠慮に妻の負擔としてかの女の時間と精力の上にふりかゝる。夫には定業と定職とが公認されてゐて、それに從事してをる間は無論の事、それに直接執掌してゐない時でさへ、間接に、すなはち意味に於いて從事してをるといふ默解が成り立つたり、聲明が通用したりして、かれは社會的一藝一能に集中する事が出來る。このあたりの習慣と制度とが、いかに人格的個性保護と社會奉仕增進の論理に緊合してゐないかは、學藝等には天性不得意な、そしてまた怠惰な夫が、單に夫だといふだけの理由で、ふところ手に鼻歌位の調子で、膳が出來、ベッドが布かれ、戸が明けられ、座敷が掃き淨められるのを待つて、坐はつてたべるだけの勞、橫たはつて眠るだけの勞等を執る他面に、天性學藝等に得意な、そして深强なる研究的興味をさへも潛有してをる妻が、單に妻であるといふだけの理由で、食前には夫の箸をまで揃へ、食後には夫の皿碗をまで洗ふといふ事實が、一向にあやしまれずに、世間に散見するのを例として擧げれば、說明を加へる餘地はないやうに思ふ。夫の人格的個性を保護する目的からいふても、能力を適藝に使用する事が肝要だ。妻は食膳の調ふまで讀書し、創作し、夫は、食前には妻の箸をも揃へ、食後には妻の皿碗をも洗ふといふやうな場合が、當然ありうる事として、世間からあやしまれない時代は、すでに始まつて遲過ぎるほどだ。富家の男女として生まれ合はせたといふだけの理由で、學藝にかけては低能的でも、大學に殺到し、貧家の男女として生まれ合はせたといふだけの理由で、大いに伸びうべき學藝上の才を懷きながら、早く錢儲けに從事するのと、原則に於いて同一な社會悲劇だ。われらの不聰明と無良心とに原因を有する社會悲劇だ。一國にしては國民の、社會にしては人類の、半分の個性を、われらは習慣と制度の力で壓殺しつゝあるのだ。社會の文化的、經濟的能率を高める目的から見ても、人類の一半が有する潛在能力に、發揮顯揚の機會を與へないのは、愚といふほかかない。

妻の生活は雜務から成り立つ。然るに夫の生活は專務から成り立つ。生産者としての夫と、消費者としての妻の特異點だ。生産者は、すべて專務的たらざるをえないのだ。同樣に、消費者は、すべて雜務的たらざるをえないのだ。生産者としては、われらは、農人か、漁人か、鍛冶か、大工か、石炭ほりか、鐵道從業員か、紡織工か、陶工か、製紙業者か、出版印刷業者か、例へばこれらについていふても、そのうちのどれか一とつだけを選ぶほかない。然るに消費者としては、例へば一家の主婦としては、衣食住その他の日用品の形に於いて、多少の程度に於いては、殆んどあらゆる種類の生産物を消費する。醫師と僧侶とは、社會奉仕の供給者としてはおの／＼別人の專務に屬するけれども、消費的單位としての家庭の代表者たり、責任者たる主婦は、一人にしてその兩者の專門を使用する必要がある。家庭は單位的社會だ。その社會の成員には、すくなくとも成長せる一男一女がある。それから通則としては男女兒がある。その男女兒は、著しい速度を以つて發達する。發達そのものともいふべき男女兒は、主婦をして、家庭に不斷更新の努力を重ねしめる。すなはち主婦の注意は、成長せる男女と成長しつゝある男女の一單位的社會の內外務全體に向けられる。一國の總理大臣職に似た責務を、主婦は帶びるのだ。家庭の雜務は、その一々を取り立てゝしらべれば、些事のやうに見えるかも知らぬが、それが必要不可缺の事務である事と、それが主婦といふ一人格的個性者の限りある時間と精力とを、殆んど限りもなく奪ひ取る事を考へれば、些事どころではない、實にこの上もない重大事だ。非凡有能の男子といへども今日の社會において妻たり姉妹たる人が、家庭のために必要的に費やすだけの時間と精力を專門職業以外の雜務に費やして、尙ほ且つ婦人を凌駕するほどの能力と功績とを、いかなる一專門職業においてなりとも示しえようとは想像されない。雜務の鬼に生き血を吸ひほさるべく、今日の女性は、存在を宇宙に受けるのだ。

女性はすべて雜務に適し、專門には適しないやうに本質的に出來てをるのか、同時に男性はすべて專門に適し、雜務

には適しないやうに本質的に出來てをるのか、この問題を研究解決せずに、現代の制度習慣上の男女差別待遇もしくは兩性の社會的分業を是認する事は、良心なく、聰明なき人のする事だ。私は思ふ、雜務と專門とは、兩性の本質的能力に對する自覺または認識の基礎の上に現はれた社會的分業ではなく、主としては、男性が、その腕力的及び經濟的優越を恃んで、人格的個性の保護發展といふ、人間最貴重の目的を、利己的專横的に自性に壟斷した結果であり、現實である。その證據がほしいなら、教育の機會の比較的に完備した今日に於いても、そして現代の社會が供給しうる限りの教育上の機會を制限なく使用し、享受しうる境遇に生まれ育つ男性のうちにも、いかに大多數の雜務向き、專門不向きの人が、本質的には存在し、いかに僅少數の專門向き、雜務不向きの人が、本質的には存在するかを一瞥すれば足りる大學や專門學校の學生が、勿論これは今日においては、男性の特權だが、かれらはすべて雜務向きに出來てゐないから。そして專門向きに出來てゐるから、入學し、在學し、卒業するのだと思ふ人は、恐らく今日の世に一人もあるまいと希望するが、もし一人でもあるならば、それは實に不聰明なる例外として、思ひなほして貰ひたい。人格的個性の保護とそれを基礎條件としての社會奉仕の增進を目的として考へるに、今日に於いて、高級の專門に、形式上志業を有する男性のうちには、當人の眞のためからいつて、隨つて社會のためからいつても、早く雜務に志業を決定する方が正しく、善く、美くしいと確實に判斷される人の數が實に多い。人は、すべて、自己の本質に忠實でありたい。竹が松をまね、梅が櫻をまねるのは、自信なく、世界限なき、すなはち同情なき醜現象だ。人類の一半たる女性のうちには、雜務に不向きで、專門に向いてをる人が、本質的には、今日の制度習慣下の現實が示すよりは、たしかに遙かに多い。高等女學校の生徒は、綻びを縫つたり、襟をかけたり、足袋をついだり、多少の洗濯ぐらゐは是非なしにする。中學生はそんな雜務からは放免されてをる。高等女學校以上の女學生でも、男の大學生や、高等專門學校生にくらべて、同樣の餘計の

負擔がある。英國あたりでも、女學生は、靴したのつぎはぎや、多少の縫ひ物や、編み物や、洗濯ぐらゐは、殆んどいや應なしにする。もしも雜務の負擔を男女にむかつて平等に分配したならば、そして專門的修業及び從事の機會を、男女にむかつて平等に分配したならば、社會に有益なる研究、創作、事業が、女性からも從來とは比較にならぬほど高い程度に於いて顯示されるにちがひないと想ふ。育兒の一事を除いては、本質的に男女間に社會的分業を施こすべき標準は、固定した形に於いては存しないでないか。

女の本性がなんであるかは、われらに取つては閉ぢたる卷であると觀じたミルに、かなり大きな眞理がある。われらが知る女は、金魚の如く、雞の如く、豚の如く、猫犬の如く、また溫室の植物の如くに、或る程度までは男性の創作だ。その程度が、果たしてどんなであるかは、女性を、不合理的な社會的壓抑から解放して、自由にその性能を伸暢開發させて見なくてはわからない。女は型に出來てゐ、男は流動的だといふ考察がある。生物學者の方面からだ。もしもこの考察があたつてをるとすれば、發明創始の歷史が、すくなくともその第一流は、古來、各民族に於いて、概ね男性のみから成り立つてをるといふ事實は、本質的基礎ある現象となる。科學、哲學、繪畫、作曲、彫刻等に於いて、第一流の天才は、女性からは曾つて出なかつた。詩歌文章に於いても、第二流以下だ。俳優が殆んど唯一の例外だ。しかし、政治に於いては、大にしてはエリザベス女皇や、小にしてはヴィクトーリア女皇が例示する如く、立派に第一流が出てをる。乏しき機會のもとに於いてさへ、すなはち、一國の治者の繼承者たるべき子孫に、たま／＼男子の適當者がなかつたといふやうな、消極的、變則的、例外的事情のもとにさへ、歷史が示す通りの能力成績を、女性は政治にかけては示したのだから、女性の政治的能力は、機會全備の社會に於いては、恐らくは、われらの習慣的判斷を不聰明だと宣告する事實をしば／＼顯示するだらう。會計等も女性の適藝かも知れない。ミルの觀測には、篩ひ落とされる部分はたしか

にあるが、或る部分もある。

社會の成員の一半たる女性を、今日の如く個性開發の機會から隔離して置く事は、直接に男性自身の損失ともなる。社會上の事件に興味を持つ方法に於いても、讀み物の選擇に於いても、問題の大小輕重を識別する力に於いても、すなはち知識と趣味に於いて、今日の多くの女性は、あまりに際立つて男性の下風に立つてゐるではないか。若かき男性は若かき女性から受ける評價に冷淡無頓着でありえない場合もある。かゝる時にも、知識と趣味の低い相手に評價されるとあつては、若かき男性の向上的刺激とはならない。妻としては夫の常識を補助し啓導し、母としては子供の教育を、他の何人よりも主となつて引き受けべき女性は、社會の一人格として、男性といふ人格をも、人格的に感化し、啓發する責務を自覺すべきだ。男性と女性とは、すべての場合を通じて、公平の競爭であるべきだ。すなはち公平の協力者であるべきだ。そのためには、現在のやうに、女性を智識趣味の低級者として放置する事は、女性の醜を増す方針であり、男性の墮落を奬勵する方法だ。眞の女性美は、聰明を最大必要條件の一とすべきだ。現代においては、たま〳〵聰明なる女性は、或ひは聰明に興味を有する女性は、しば〳〵女性美に乏しい。これは過渡時代の犧牲的現象と見るべきだ。女性的魅力も有りあまり、ふくらみもあり、潤澤もあり、光彩もあり、それでゐて、智識、趣味、品性が、眞に男性の尊敬を刺激するやうな人格が、新女性の風丰のスケッチでなくてはならん。

わが國の女性が、目下採用すべき實行目錄の一細項は、外遊にある。男性にも世界を知る必要はあるが、女子には殊にその必要があるのだ。女性は一國の女性であると同時に、社會の女性だ。社會すなはち國際的社會の女性として、進歩向上の艦隊の最弱船であるやうでは、どの點から判斷しても恥ぢだ。罪悪だ。社交と、專門と、外遊とは、わが國の女性の取り敢ず着手すべき眼前卑近の要務に屬する。國際的社會の、立派に一成員たる責任の自覺を、わが國の女性が持たずに濟ましてよいわけはない。人格的個性主義の社會的徹底は、女性の解放と向上とに、一部分は懸かつて存する。

國家結合の原力

法學博士　上杉愼吉

（一）日本人の國家觀

國家は最高の道德なり、之不肖の國家學說の根本を成す所の思想である、之不肖の普遍にして如何なる國家にも妥當するの眞理なりと確信する所であつて、其れ故に之を基礎として不肖の憲法及政治に關する理論を發展するのであるけれ共、此の理論を樹立するの根柢は不肖の日本人として有する所であつて、離るべからさる日本國家に對する信念感情に在ることを疑はぬ、凡そ如何なる國人も其の構成分子として、血肉を其の國家と一致せしむる其の國家に對する信念感情あり、之を先づ基礎として國家なるものを考察するは當然である、恰も人を考察する、先づ我より初むべきと同一であらう、汝自身を知れと云ひ、我疑ふ故に我在りと云ふが如く、我を措きて人なるものを考察することとは能はぬのである、自己の屬せさる國家に於ける國民の心は我固より之を知ること能はぬ、知るとも他の言ふ所爲す所を自己の心鏡に映して判斷するのみであつて、我が血肉たり我が生命たる信念感情となることは出來ぬ。學問に國境なしと云ふも、我が心を他の心と爲すことは出來ぬ、世界何れの處に到るも二に二を加ふれば四となるは普通の眞理であらう、然れども如何に國家を見るか、日本人が日本人としての生れ得たる信念感情を以て之を考察して理論を發展し行くは當然なるのみならず、他に方法無きのである、他國人の國家觀の到底我に理解すべからさるを、其の儘に我が心胸に盛ることは出來ぬ、蓄音機の如く我に精神なくんば、他國人の論を國家理論なりとして耳に聞きて之を口に發することを得んかなれども、之我が見る所我が信ずる所ではない、我が見ざる所我が信ぜざる所を如何にして眞理なりと主張することを得るか、唯だ眞理であると云ふ噂なりと云ふ傳聞を傳ふるのみ　眞理を探求する者は固より傳聞を求めねばならぬと云ふを竢たぬけれども、自己本來の信念感情に基づかさるものは畢竟無價値である、正を持して

異れず之ならざるべからずとして貫くことを得ぬ、世人或は不肖の態度を以て頑冥なり偏執なりとする者あるが故に、今國家の本質を論ぜんとするに方りて之を一言するのであるが、啻に其れのみではなく、耳學問の我が日本を毒せる甚だ久しきに及びて浮薄の慨くべきものあるを思ふに出づるのである、學問の工夫は日日新を期せざるべからざるも、眞理と信ずるを危ぶみつゝ之を説くは學者の態度ではあるまい。

（二）人の相關と連續

凡そ人は一切萬物と同じく本性を有する、我あること即ち人の存在である、而して人は不斷に我を充實し發展して居る、而して一切の人が我を充實し發展するは相互に關聯して離れぬ、各我皆悉く我を充實し發展するのである、而して我の我を充實發展するは他の我の我を充實し發展するの原因たり結果たり相條件するのである、不肖は之を人の相關と名づく、我の能く我を充實し發展するは他の一切の我の我を充實し發展するに由る、我遺憾なく我を充實し發展するが故に他の一切の我は能く我を充實し發展するのである、一切の人の相關の間に於て一切の我は一と揃ひに我を充實し發展するのである、此人の相關を離れて我の充實と發展とあるべからず、我其れ自身有ることを得ぬ、我は人の相關の間に於て我である、一切各我相關して一と揃ひ一我を充實し發展する之を道德と爲す、其の範圍と種類と最も廣く最も多く人生の一切全體に及ぶ、其の最も簡單にして根本的なるは親子夫婦兄弟の倫常なるも彼の經濟上分業協力するの關係も亦之に含まるとするのである。

人は相關するのみならず、又連續するのである、連續と不肖の特に名づくるは、時を異にする人の相關である、我の生存活動は一として我よりも前に無數の我の生存し活動せるに由らざるはない、我の生存活動は如何なるも皆我より後なる無數の我の生存と活動との原因たるのである、近きより遠きに波紋漸く及ぶも前人後人脉胳相通じ相應ぜぬはない、人は空間に於て又時間に於て環を連ぬるが如くに離るべからざる引き續きを成して居る、一處を打てば他處響き一處動けば他處又應ずるのである、我が一舉手之を左すると、右すると人生は未來永劫異るのである、靈魂は眞に不滅である、我が生存と活動と一切靈魂の爲さしむる所である、我が靈魂永久滅びず生々して後人の生存となり活動となるのである。

人の相關と連續との間に於て一切各我一と揃に我を充實し發展する之が道德である、我の道德上の本務道德上の責任道德上の權利なるものは人の相關と連續との間に存するのである、凡そ

文明の進步又は文化の發展なるものは要するに人の相關と連續との集約擴張である、相關し連續する一體の人之文明又は文化の概念の基礎であらねばならぬ。

此の理を明かにすれば利己即ち利他たるを知らん、其の一致するを道德と爲すのである、自我實現は人の相關と連續とありて行はるることを得、而して自我を實現するは即ち人の相關と連續を全うし他の一切各我をして我を充實し發展せしむる所以にして即ち自己犧牲である、全體と各我とは合一する、相共に進むのであつて相反撥し衝突するものではない、全體の爲めに我を犧牲とすること即ち自我實現である、之を自由の伸張と云ふも、能力の發展人格の確立と云ふも、本性又は本能を遂ぐると云ふも、皆同一であらねばならぬ。

（三）國家は最高の道德なり

國家に於て人は完全に人の相關と連續との間に我を充實し發展することを得る、道德は國家に於て最高の段階に達することを得る。之國家は最高の道德なりと云ふ所以である、文明又は文化は國家に於て進步し發達する、國家に於て人は同胞兄弟として相互に關聯して各我一切其の本性を遂ぐることを得る、國家に於て子孫は祖先の子孫として又子孫の祖先として相連續して統一ある文明文化を構成する、之日本民族の日本國家に於て百千年實行し來れる事實である、我々は一家の内に生存すると意識し感覺する、日本國家は一大家族たりと云ふは文字通り具體の家族なりとして主張することを得ぬけれども、我々の信念感情は日本を一家とする、かくてこそ一切各我横に連なり縦に續きて密接不離なる一個の全體を成すのである、若し人を國家より分散して碩に石塊の累々たるが如くせば固より人の相關と連續とあるを得ぬ、國家なきも弱き程度の相關と連續とあるべきは否むべからざるも、之を國家に於けるが如く完全ならしむるを望むことを得ぬ、國家を撤去して一世界となすも無論多少の相關あり連續あるは人性の自然である、然れども若し之を發展して完全ならしむるを欲せば自ら國家を成すに至らなければならぬ、國家は人の本性の其れ自身の發展である、人は國家的動物なること先哲の言の如くである、我々は偶然に父子たるに非ず、一時の便宜の爲めに頬ひて夫婦たるに非ず、實に人の本性の趣く所に從ふのである、人の具ふる本性諸德躍して國家に到らなければならぬ、國家は最高の道德である。

國家は最高の道德なりと云ふも現實の國家は既に最高完全至善の域に達して之れ以上進まぬと云ふのではないこと勿論である、我が日本とても現狀は誠に不完全である、唯だ最高の道德

に至るは國家に於てするのみと云ふのである、最高に登るの途は國家あるのみと云ふのである、凡そ道德の最高なるものは現實にはない、進みても尚ほ一歩を進むべく無限に到り盡すを得ぬ、止るべき最高の局限あるのではない、不斷に無限に進むに從て前途益々廣漠たるは人生の理想である、國家は既に造り上げられたる過去のものではない、人は國家を無限に創造しつゝあるのである、我々は完全に最高に出來上がれる國家の內に無爲にして化して居るのではない、人の努力を以て時々刻々繼續して不斷に最高の道德を創造しつゝあるのである。

されば國家を以て敢て之を否認せざるも、或は他の段階に到るの中間なる過程として認むると云ふは、未だ國家の本質を正しく見ざるものであるとせねばならぬ、國家に國家として精進向上止むときなく途に最高の道德に到るのである、今の國家の不完全を見て之を廢すべしとすると同じく、人の德なきを見て自殺すべしとすると同じく、かゝる悲觀論は人類の進んで止まざる理想を解せざるものとすべきである、人は其の人たることに絕對の信頼を置かなければならぬ、人の理想に疑はざる希望を繫けねばならぬ、我々は不斷に國家を創造しつゝある、不退轉の努力必ず國家に於て最高の道德を見るべしとするもの、眞に之國家の倫理上の意義でなければならぬ。

(四) 國家結合の原力

以上は不肖が國家理論の根本として常に說く所の一端を簡略に概說せるものである、此の理論に從へば凡そ國家結合の原力は人の本性であることを知るであらう、カントの所謂るカテゴリッシエ、イムペラチイブである、フイヒテの所謂る人の良心の義務である、其の外に何もない、人の本性の稱ふ所に從て茲に國家を成したるものである。日本人は未だ嘗て國家は何を原力として結合するかを考察したることもない、其の儘に日本國家を成して居るのである、されば國家は一個自然の存在なりと云へる見解は舊時の國家說に一轉機を成して國家の眞義を知らしめたりとせらるるのであらう、國家は固より事實上のみ說きて盡せりと爲すを得ず唯だ自然に存在すること木石の如きものではない、然れども人の本性と否とに拘はらず、又或は一端にホッブスの如く人の本性に反して造られたるものではなくして、人の本性の自然の歸趨である、造られたるに非ず成れるものなりとせるは正に國家の本質を明かならしめたる新說なりとせねばならぬ、宜なるかな其の一時學界を風靡せることや、實に人の國家に結合せらるるの原力は強制に非ず、合意約束に束縛せらるるに非ず、利益獲得の動機に非ず、協同保護の目的に非ず、

人の本來具有するの本性である、人の相關と連續との間に我を充實發展するの道徳之國家結合の原力である。

國家即道徳とするは東洋に於ては古來普通の考である、殊に日本人は國家を以て道徳と合一せしめ國家以外に道徳あるを知らなかつた。最も明に之を示して誰も之を知るは教育に關する勅語である、勅語は我が國民道徳の基づく所を示さんとするに方り、劈頭國を肇むること宏遠なるの一事を擧げて居る、之を我が一切の道徳あるの根源とするのである、而して徳を樹つること深厚と重ねて肇國に樹徳を配し其唯一無二なるを明かにせられた、此の樹徳と一致して建てられたる日本國家に於て克く忠克く孝人各々其の本性を充實し發展するを得た、億兆一心皆相關して離れぬ、世世厥の美を濟し祖孫連續して文明文化を發達して今に及んだ、此れぞ我が國體の精華なれ教育の淵源道徳の根本茲に在りと宣はせられたのである、不肖の上來述べたるは之を敷衍したるに外ならぬ、神武天皇の即位したまふや、詔して此の意を宣べたまふた、曰く上は則ち乾靈國を授けたまひしの徳に答へ下は則ち皇孫正しきを養ふの心を弘むと、之日本人の國家觀である、孔子の教は要するに道徳を以て政治とするを根本とした、之不肖の嘗て詳述せる所であつて試に大學一篇を取るも、明徳を明かにするは即ち政治の極致至善に止る所以なりとするの意を述べたるものたるを知るのである、聖人位に居りて政治するは道徳の理想なりとすること儒教を終始するの思想である、此の思想を血肉とする東洋人殊に日本人は未だ嘗て道徳の外に在るの國家なるものに思ひ込んだこともない。

(五) 利益說

然れども西洋に於ける國家說は實に多岐を極めて居る、之其の國家成立の事實及性質に本づくことであるけれども今は唯だ其の理論として表はれたるを見るに止むる、吾人をして最も奇異に感ぜしめたるは國家は個人の利益の爲めの結合なりとする說である、其の傾向の說古來行はるるも最も著しく且つ徹底せるは社會契約說である、人は自己の利益を防禦し且つ増進する爲めに約束して國家を造爲すと爲すのである、利己主義の倫理說に立ち入りて其の當否を批評するは今之を試みざるも、此の說たる人は本來國家を爲さざるも亦其の本性には關する所なしとするのである、甚だしきは人の本性を萬人の萬人に對する爭鬪なりとし、國家は此の本性に反して本性を矯めて約束に依りて造られたるものなりとするのである、國家は人が一時の便宜の爲めに協同の利益を遂せんが爲めに、強ひて造爲せる機械的の團體なりとするのである、國家は恰も商事の株式會社の如

きものである、利益獲得團體であるとする、故に其の利益の爲めに必要なる限度まで存在の理由あるものであつて、若し利益の達すべきなく又は個人の利益に反するに至れば國家を解體することと當然なりとする、利益を以て國家結合の原力とするが故に固より國家と道德との如きは全然沒交渉なりとする、人の本性に基づくに非ず一時の利益の爲めの結合なりとするが故に固より人生の全部を包括して殘す所なきものではない。

(六) 權力支配說

他の極端にして吾人の了解を離からしむるは權力支配說である、國家を以て力強き者が力弱き者を壓迫して一體に結合するものと爲すの見解である、之又西洋に於て古來一派の思想を成して絕えざる有力なる學說である、權力は權利たりと云ふ思想である、强者の弱者を威壓支配するは之止むを得さるの事實にして國家は唯だ其れだけの事實に外ならぬと見る、されば人の本性に合するや否やと云ふ如きは問題とならぬ、道德不道德を超越したる出來上りたる事實である、此の說は君主國の說明に用ゐられるのみならず近時民主國を說明するにも多數の少數を支配するは力なりとする者を見た。

(七) 生存競爭說

國家は人類が生存競爭の武器として構成するものであるとする考は右の利益說と同一である、然れども此の說は一時廣く我が國に行はれ其流弊今に及ぶが故に別に之を擧ぐる、加藤弘之先生の說は生存競爭一點張りなりしこと人の知る如くである、先師穗積八束先生も其の國家觀の基礎を常に生存競爭に置かれた、生存競爭の理論は如何なる次第か我が國に於て疑ひなき定說として取られて居た、人は相互に敵である、爭鬪が本體であると云ふ如き考は固より古來我が國には無かつた、生存競爭を根據とする國家論は固より明治以後の西洋輸入說であるか、深く人心に浸染して居る、然れども人の本性は生存競爭ではなく相互協同であること明である、固より生存競爭もあり、相互協同も生存競爭の副效に出づることあらんも、生存競爭のみを以て人の本性を說き盡くすことは出來ぬ、人のみならず一切の生物の生存に就て生存競爭を窮局根本の原理とすることは出來ぬ。

(八) 無政府主義

相互協同を以て人の本性なりとし、故に國家を無用なりとするの論はアナルキズムの一派である、無政府主義と云ふも不平

憎惡の感情を高唱するあり、資本を否認するより推し及ぼして國家をも破壞せんとするあり、又一切萬物現に在るものは悉く排斥して顧みざるの論もある、然れども其の自暴自棄失望落膽の極凶暴破壞の言動を爲すは經世の眼光より見て甚だ注意すべしと雖も理論として之を取扱ふことは能はぬ、凡そ感情に發し感情に訴ふるの言動と雖も、此の故を以て一概に捨て去りて顧みざるを許さぬ、感情も亦人を動かし世潮を捲き起すの大勢力である、何事かその起るの原因なきあらん、此の如き感情の烈しく起り人をして痛快を感ぜしむるものあるは、若し起るべき相當の原因あらんには正確合理の主張の爲し得ざる所を爲すに至る、經世の士須らく霜を蹈んで堅氷の到るを知るべきであらう、然れども理論を以て此の感情に對應することは出來ぬ、理論として無政府主義の說く所の僅かに見るべきは、人は相互協同又は相互扶助の本性を有するが故に、自然に放置して其の本性を遂ぐべきであるとするに在る、故に國家の如きは無用有害なりとするのである、其の人の本性を基礎として立論し相互協同を認むるは甚だ可である、然れども此の故を以て國家を無用とするは解せぬ、國家ありて初めて人の本性の充實發展を完うすることを得るのである、國家は相互協同又は相互扶助其れ自身であるとも云へる、無政府主義者の說く所を見るに國家を破壞するも何ほ且つ之に代はるべき或る人の結合を豫想するが如くである、スチルナアの利己主義者の聯合と云ふは甚だ奇異なるもプルウドンの協同社會（フェデラシオン）バクニンの自由結合クロポトキンの新社會等皆何等か人の結合を認めざるべからずして、全然如何なる結合もなく人を放置並列すると云ふことは斷言出來ぬのである、果して然らば何故に此の新なる結合を國家と云はざるか、若し今の現實の國家を不完全なりとし其の改良を企圖するならば即ち可、何が故に今の現實の國家に慊らぬとて國家を未來永劫絕滅せねばならぬと云ふか、不肖が前に國家は不斷に創造せられつゝありと云ふ所以は玆に在るのである、今の現實の國家を見て國家として既成完全の機械と見るから、不完全ならば之を破壞すべしと云ふのであらう、然らずして國家は有機的に成長しつゝあるのである、人は不斷に努力して無限の上に更に進步して止まざる最高道德を創造しつゝありとせば、國家否認破壞の說は全然無意味に歸するであらう、無政府主義者若し眞面目ならば所謂、新社會新結合は即ち國家の發展と見るべきではないか、此の立脚點を執つたならば無政府主義即ち國家絕滅論は起り來らぬ筈である。

然れども無政府主義者は其の目標とする新社會は國家とは全然別種のものとなりとするであらう。即ち權力なるものを否認

するど云ふのである、權力なくして人の結合を完了することは能はぬは後に說く所の如くにして、此の點に於ては無政府主義の非論理を爭はねばならぬけれども、若し彼等は權力を非なりとするならば權力を以て唯一の國家結合の原力なりとする其の考を根本より改めて其の主義の名を非國家主義無政府主義と云ふを止めて非權力主義とせねばならぬ、而して果して權力なくして人の本性に基づく國家あることを得るや否やの論に主力を集中せねばなるまい、斯くの如くに態度を改め來れば、若し無政府主義にして唯だ感情を吐露するに非ずして理論を構成せんとするならば、必ずや權力を否認することなく人の本性を結合の原力とする國家を承認し、吾人と共に國家の不斷の創造に努力するに至ると不佞は確信するのである、元來無政府主義者又は社會主義者は權力を重視するに過ぎて居る、國家は即ち權力の別名ではない、權力のみに依りて國家は結合すと爲すが故に、權力なきも人の本性に依りて結合すとの極端に陷るのである、前に述べたる人は利益のみに依りて國家を成す、又は權力の支配の關係之國家なり、又は國家は生存競爭の道具なりと言ふ如き國家觀普く行はれ、且つ事實西洋の國家は然りしが故に無政府主義の如き極端過激の思想も湧き來つたのであらう。

我が日本人は古來日本國家を結合して生存しつゝ未だ嘗て權力の下に在ることを感覺したることはなかつたのである、或は德川氏の下に於ては人爲にして我に固有ならざる權力を振り舞はす必要上極端なる壓迫も行はれ人民之を感覺したらんも、天皇を以て權力者なりと感覺したることは一たびもない、天皇の權力の下に壓迫束縛せらるると感覺するが如きは夢にもなかりしことである、然らば權力なくして日本國家ありしかと云ふに決してそうではない、儼然たる權力である、然れども人の相關連續の間に我が本性を遂げて同胞兄弟結合すと感覺せるのみ、祖宗建國の道德の下に結合するを知れるのみ、それにて足り權力を感覺する所に到らなかつた、斯の如き狀態に於ては無政府主義なるものの起るの動機はあり得ぬ、日本人の信念感情に於て無政府主義の深刻なる意義を納得し能はぬ所以である、西洋の國家あり故に無政府主義あるのである、無政府主義は要するに西洋現實の國家を否認するの理論であつて、一切國家を否認するの普遍なる理論ではない。

(九)　社會主義

社會主義の國家を觀る所亦二樣である、本來社會主義は個人主義に反對して起つたと云ふのが其の理論である、されば國家に對しては其の全能を信じ凡て國家の力に依りて共產經濟を實

現せんとする、然れども社會主義は其の實極端個人主義であつた、物質欲の競爭を目的とする方面に馳せた、遂に資本家の跋扈する國家其の者を倒すべしと云ふに至つたのである、不肖は今之を論評せぬけれども、其の何れにしても、社會主義なるものは國家を物質の一方面にのみ見て居るの根本的誤謬たるを示さんと欲する、之を深く論ぜずとも社會主義が唯だ物質のみを見るの思想たるは人の知る所である、故に其の國家を生産分配の經濟團體として其の力に一に之依らんとするも、國家を資本家專制の機關と見て之を破壞せんとするも、皆國家の本質を知らざる考であることを述ぶれば足るであらう、かの國家社會主義と號し國家に依りて所謂社會政策を實行せんとするの說は誤に非ざるも、其の物質に偏するものありて國家の偉大高尚なる所以を忘れしむる嫌なきやを恐るるのである。

(十) 國家の定義

國家とは何ぞや、西洋國家學政治學國法學の書籍を開けば、國家とは一定の多數の人民が一定の領土の上に於て一定の主權に依りて結合統治せらるるの團體なりと定義して居るを一般普通とする、然れどもかゝる形式構成を示さるるも實質の國家とは如何なるものであるか全然分らぬ、人が多數集まりそれだけで國家を成すが、其の人の內容を問はぬ、人さへ機械的に集れば國家を成すが、全體その樣な國家があるか、其の荒唐無稽なること眞面目に論ずる値もない、然れども西洋の國家の定義に恰も如何なる人と雖も多數集りさへすれば國家を成すが如くに云て居るのであり、實際そう考へたのである、かゝる機械的國家觀は啓蒙時代の產物である、その極端なるに社會契約說である、英吉利のジョルヂと佛蘭人のアンリと、獨逸人のウヰルヘルムと云ふ工合に多勢寄り集まつて約束すれば國家が出來ると見た、個人主義に徹底すれば玆に至らざるを得ぬ、然れどもかの權力支配說も同じく機械的である、主權あり服從者あればそれで國家であると見るのである、二者實質の關係は毫も顧みぬ、人民の上に離れても宜しい主權者を戴せれば國家が出來るかに云ふ、全體そんな國家が事實存在するか。

然しながら國家は一定の多數の人の一定の主權の下に結合するの團體なりと云ふ定義は我が國に於ても如何なる書籍にも載つて居るのである、中等學校の法制經濟の教科書を見ても一冊として國家をかく定義してそれで國家の說明完了せりとして居らぬものはない、然しながら之を讀む者は人の喉を開く樣な心持で之に依りて國家なるものを概念するとは出來ぬ、明治の西洋學問輸入の日本は劈頭こんな國家の定義を突き附けられて何

のとか分らぬけれども西洋の學問でそう云ふのなら止むを得ぬとして之を受取つた、恰も一家親子夫婦和氣藹々と暮らして居る所へ家庭とは數人の人が親爺の權力の下に集合する團體なりと云ひ聞かされた如き有樣である、日本人の日本國家に對する崇仰愛着憧憬感激が突然として無味乾燥なるものとならざるを得ぬ。之が如何に我が國民の國家に對する信念感情を低く且つ輕くしたるか之が中學校の教科書にまで普く載るに至ては、國家を見る路傍の他人の如く、毫も執着を感ぜざるに至るは當然である、今日思想の頽廢は主として五十年間西洋學問の輸入に之力めたる我が先輩の罪であるとすべきであつて、其の功罪何れが大なる容易に判斷すべからざるものかあるのであるが、かゝる形式的機械的なる國家の定義がどれだけ人の國家觀を冷淡たるものたらしめたか思ひ半に過ぐるものがあらう、さりとて不肖は獨り此の罪を避けんとするのではない、不肖も亦常に國家をかく定義して學生に示し來つたのであつて、十餘年間大學に憲法を講ずる不肖の罪は最も大なることを自認して、先輩の後を繼ぎ總がかりに我が日本人の國家に對する敬虔なる崇仰の心離るべからざる愛着の情を消滅せしむるに與かり一發らさりしをば今に至て切に悔ゆるのである。

(十一) 民族國家

縁もゆかりもなき人間が多數結合すればそれで國家を成ものではなく、結合して國家を來すべき自然的倫理的原因ありて結合して一となるのである、即ち國家は民族の結合せる民族國家である、民族國家とは一民族一國家を成すの謂ひである、固より純粹に一民族一國家なるはなきも大體に於て民族を基礎として國家を構成する、古代より今に至り東西皆同じである、民族國家の語近代に起りしも事質は獨り近代の特有ではない、何を民族と云ふか人種の同一に非ず言語の同一に非ず、宗教の同一に非ず、皆民族と離れざる關係あるも、民族の民族たるは所謂る民族確信又は民族感情の存在するに依る、各人相互に同胞兄弟なり同一民族なりとするの信念感情に基づくのである。

一民族一國家を成せばこそ國家を最高の道德と爲すことを得るのである、國家の形式を以て人群集するとも人の相關と連續と全きを得ぬ、萬人一齊相關し連續して各我其の本性を遂げて道德たきは民族國家たるが故である、數人集りて一人を家長として家を成すこと能はぬ、成すも家の本能を遂することは出來ぬ、國家を以て最高の道德と爲し他を以て之に代ゆべからずと爲すは、國家の基礎民族に在ることを根柢とするのである。

然れども一民族一國家の純粹なるは殆んど無い、唯だ大體に於て民族を基礎とすると云ふに止まる、現今世界の諸國に於て民族國家の最も純粹なるを我が日本とする、我れ日本人なるが故に誇りて之を云ふに非ず其の通りの事實である、日本國家は日本民族の結合である、我々は眞に同胞兄弟であると確信し離るべからざる愛着の感情を以て結合して居る、日本國家を建て金甌無缺之を無窮に傳へたるは我が血統の祖先である、我々は之を擁護して之を我が血統の子孫に傳へんとする、我々は考へずに一家の內に生存して居ると感じて居る、かくて相關連續人皆其の本性を遂げて克く忠克く孝億兆心を一にし世々厥の美を濟して不斷に最高の道德たる國家を創造して居る。

（十二）天皇

我が日本民族の日本國家は天皇を戴きて一體を成して居る、天皇は最高道德の具現者にまします、日本人は天皇を以て直ちに最高道德と爲し之を國家に一致して見る、天皇ありて日本民族あり日本國家あり、相關連續は天皇の下に完く不斷に最高道德を創造するを得る、日本國家は地上の高天原である、天祖建國の旨は樹德に在る、日本國家て理想の國家を實現せんとしたまふに在る、最高道德は祖宗の宏謨歷代の御精神である、天皇は之を具現するの現神である、之日本人の信念感情である。

天皇を權力者と見るが如きは日本人の頭には夢も浮ばざりしことである。分析解說すれば權力者たるの方面もまします、されども權力者にまします事は現神たるとに蘊蓄包含せられて天皇を權力者なりなどと觀じたることはない、西洋輸入の學問は天皇は主權者であると云た、而して其の權力は絕對無限なりと說いた、それに相違なく誤とは云へぬ、されども日本人の天皇を見るはかゝる末なる形式の一事ではなかつた、日本人は自ら服從者なりと感じたこともない、然るに天皇は絕對の力者なり臣民は絕對の服從者なりと說いて、其れで天皇を說き盡したりとして其の關係を全然情味なき機械的形式的なるものとした、日本人の頭にはまるで分らぬけれども其れで推しつけた、之れはどうしても日本人の血肉とはならぬ、無理にクツつけたる瘤である。日本人の國家觀を蔽ふるの瘤となつた。

（十三）國家の價値

國家の倫理上の意義は最高の道德たるに在る、然れども古今東西現實の國家は皆完全に最高の域には達して居らぬ、其程度は種々である、此に於て國家に價値の差等を生ずる、果して能く最高の道德たる所以に合ふことを得るや、諸種の原因は之を

促がし又之を妨ぐる、其原因たる一にして足らぬ、國土の大小山河の形勢氣候產物風俗宗教皆國家の價値に大小あらしむるの原因たらぬはない、然れども人の相關と蓄積とも完からしむるを目標として見れば、其の最も重要且つ根本的なるは民族國家たるの特殊なる習慣と立國の體制の如何とであろう、而して皆之建國の歷史の事實に本づくのである、國家に取りて建國の歷史の重き所以に茲に存する、凡そ國家は最高の道德なりと云ふも能く之に當るを得る國家もあるのである、立國の體制に實に國家が國家として不斷に最高の道德を創造するの基礎である、國家論は唯だ理論のみでは足らぬ、事實たる國家を見ざれば果して能く國家の國家たる所以を完くするかを論斷することは出來ぬ、國體及國體精華の論は國家論の根本であらねばならぬ。

(十四) 封建國家

西洋近代の國家の本は中世の封建國家である、封建國家が發達して專制君主國となり遂に革命に至つたのである、凡そ西洋封建國家又は專制君主國の原則は土地人民の私領と云ふことに在る、我は國家なりと言ふに在る、國家は大名又は君主の私の物質上の利益の爲めに存在するものである、人民は君主の利益を得るの手段たる奴隷とも牛馬とも等しい、假令人民の利益を圖ることあるも之を肥やして血を吸はんとするのである。

かゝる國家が最高の道德として甚だしく價値を缺けるは論ずるまでもあるまい、殆んど之を國家とすら名づくること能はぬのである、西洋の專制君主を我が天皇に比すべくもあらぬが、天皇の自ら利益を超越したまひ、民の富めるを朕が富めるたりとし、無私無利益、一切を人民と一致せらるると固より同日の論ではない、

(十五) 官房學と自由主義

君主一人の利益を以て國家結合の原力とする專制國家の國家學は所謂る官房學であつた、凡て政治の目的政治の根本動機を此に置いた、人民を保護するも亦財源を豐富にして自ら利せんとするに外ならぬ。

之に對して自由放任の國家說起りしも亦當然である、第十八世紀の國家學は國家の範圍を出來るだけ局限するを以て唯一の目的とした、之官房學に對する反抗にして遂に革命を導き致ますでに發展せるも、國家の人生の全部を包括するものたるを忘れ、國家を寧ろ止むを得ざる害惡と見て、之を狹めて出來得べくんば國家を撤し國家なき自然放任を理想とせるは後の無政府主義の先驅を成せるものである。

(十六) 近代國家

革命を經て改造せられたる第十九世紀の近代國家を民族國家と名づけて封建國家に對する、然れども尚ほ全國民を相關連續するの一體となるを得なかつたのである、矢張り舊時の國家を以て利益競爭團體とするを引き續けた、國會なるものを造りたるも、全國民を一にして相關連續せしめ不斷に最高道德を創造するの作用を爲さしむるには距ること甚だ遠いものであつたことは百年の立憲政治史國會史之を示して餘りあるのである。

革命の略ぼ前よりして機械工業起り所謂る產業革命が行はれた、勞働者又はプロレタリアを生じて革命をブルジョアの革命なり近代國家をブルジョアの國家なりとして反抗するの勢猛烈に第十九世紀半より起つた、西洋近代國家が利益競爭團體なることを端的に示すものである、元來西洋政治の變は常に經濟の變に伴ふ、牧畜時代に民主政治行はれ、農業土地の經濟起りて封建君主の政治となり、通商航海の時代となりてブルジョアは政權を取つた、皆其の時に經濟上富を有する者が政治上の權をも取つたのである、工業時代に移りては勞働者は經濟上有力なる地位を占むる、其の政權を取らんとするに至るのは古來の順序を逐ふに過ぎぬ。日本には無きことであるけれども西洋政權の推移はかくの如くである、社會主義は社會民主主義となり遂に今の政權爭奪戰となつた、ブルジョアの政權を取りしや其の有する金錢を以て君主貴族を脅かして之を取つたのである、プロレタリアの武器として有力なるものは同盟罷工である、進んで直接行動を執り、我が利益のみを眼中に置きて、資本家との一切の協調和を排し國家をも無視せんと考ふるに至つたのは、利益競爭團體たる國家の逢着すべき必至の運命であらう、西洋國家若し四變してプロレタリアが舊時の專制君主に代はり自家の利益のみを國家結合の原力とするに至るとも、國家の價値低きは舊の如く增しもせず減りもせぬ。

(十七) 物質主義の國家觀

社會主義の國家觀は國家を極度に有力ならしめんとするも又國家を絕滅せんとするも皆物質一點張りである、其の最高の道德として人生の全部に亘る國家を見るの狹きに失するの誤は前に述ぶるが如くなれども、物質に於て何ぞ人の相關と連續の道德を見ざるや、恰も物質は道德と沒交涉なるかに考ふるが如くなるは了解し兼ぬることである、人の物を生產する果して自己の爲めのみなるか、自己の利得を取り又は賃銀を獲るが爲なるるか其の決して然らざるは明かであらう、良き物を作り之を必

要に應じて世に供給せんとするは、人の相關の間に於ける我が本務を果たすものである、此の間一片道義の念なくんば生産も亦あることを得ぬ、他人の爲めに我を充實發展するの信念道義なくんば我が勞働は意義を有せぬ、資本と勞働と相爭ふは要するに相關の理論に徹せぬからである、何故に勞資協調せぬか、協調するは其の本來の性質である。

かく云はば西洋社會主義者は不肖を以て事實に盲目なるノンキ千萬なる夢を語るものなりとするであらう、然れども日本人としては此の外には考へられぬのである、資本家は國家を我が利益の爲めに存すと爲し、勞働者は之を奪て我が利益の爲めにせんとする西洋の實狀を見れば固より社會主義の深刻なる實際的要求に出づるを知るも、吾人の創造しつゝある最高の道德たる國家は何れに向ふも或る一部の階級の利益をのみ結合の原力たるに落ち付くことなく、必ずや人の相互協同相互扶助を完全に實現して全體の相關と連絡を完くし一齊に本性の充實と發展とあることを得せしむるに至るの、動かざる確信を懷きて、社會主義又は其の過激なる者の運動も國家創造の努力の一部又は一時期と見て、不肖は人類の將來に希望の光明を認むる者である、

(六) 國家と社會の合一

最高の道德たる國家が人生の全部に亙り之を一切包括するものたるは云ふまでもない、若し現實の國家にして人生の一部に及ばざる所あるならば其の國家は未だ完全ならざるものであつて、人類の國家創造の努力は國家の人生の全部を包括するに向つて精進すべきであらう、國家と社會は本來一なるべきものであつて、國家以外に社會なるものあるは國家の理想ではない、國家は人生の或る一部の目的を達するが爲めに人類の便宜上構成したる組合團體でなく人の本性に發して人類に取りて本質的なるものである以上は、國家と社會は合一せねばならぬ、國家を社會の一部に過ぎぬとする考は、國家を以て他の完全なる狀態に達する段階なりと見る思想と同一であつて、國家の倫理上の意義に徹せざるものである、國家は永久の創造であり一切人生に及ぶの存在である、かの社會主義及無政府主義の誤謬は主として此の社會と國家との分離に存する、然しながら西洋の國家を見れば其の價値甚だ低くして社會の全部に行き渡ることを得ぬ。初め教會を國家外に認めねばならず人の精神に關することは國家の領分ではないとせられた、此考が何時までも國家を主として物質的なるものと見ると云ふ感覺を傳へて居る、經濟

產業は國家以外に國家と無關係に行はるると考へたのだが自由放任の經濟的國家觀である、今のギルド、ソシアリズムと言ふが如き恰も中世教會を國家の外に置きたるが如くに經濟產業を國家の外に分離すべしとする考も出て來つた、社會と國家を分離するのみならず、社會は主にして國家は從なりと見るに至る、社會主義又は無政府主義は何處までも此の考である、之國家の倫理的意義を邈視するものであつて、人類の爲めに最も悲しむべき思想である、獨逸は國家と社會との杆格すること甚だしき國家であつた、其の結果は社會遂に國家を倒したのである、之も國家創造の道程と見るべく社會が國家を掩有して眞の國家を造り出すに至るも亦可なりである、國家と社會との不合一なる最も顯著なるは現在の支那であらう、殆んど社會ありて國家なき有様である、固より人の相關と連續とを完くすることを得ぬ、不肖は先年支那に遊びて其特徵の大なるものの一は社會と國家の不合一であると云たとがあつた、かくても固より弱き程度の人の相關と合一はある、國家なきも之あるのである、されども人の本性は國家あるに至らしめざれば止まぬ、國家と社會は必ず合一せざれば止まぬ、今の國家と社會との不合一を見て、社會を主なりとする考の起るのは矢張り國家創造の不斷の努力の表はれたるものであるけれども、それを自覺せぬのである。

日本人は未だ嘗て日本人の社會と日本國家とは別物なりと考へたことはない、日本と云ふは一の國家一の社會一の民族である、三者一致する、從て之を區別すべき話もない、日本と云へば民族一家たる相互協同の一社會を意味するのみ、政治も經濟も信仰も藝術も學問も皆日本の内に包括して行はるる、國家は一の精神的結合たること、日本人に取りては當然の信念感情であつて、國家は俗世界をのみを支配すると云ふが如き考は毫頭あるべき事情存ぜぬ 天皇と臣民とは唯だ物質的に相關係するのみと云ふが如きは日本人の耳に餘りに奇異に響くのである、我が事を云て居るとは感ぜられぬ。

(九) 體制意志

人存すれば玆に相關と連續あるが如く、體制意志存在する、體制意志とは各我を一體に規律組織するの意志である、相關連續は內容であり體制意志は形式である。各我を一體として相關と連續あらしむるが如くに、何を爲すべきや何を爲すべからざるやの體制意志が存在するのである、此の體制意志は各人一個の意志ではない、各人意志を集積總和して成るものでもない、全體に存するの意志である、而して之も亦人の本性に基づくのである、之を形容して有機的に存在すると云ても可い。

體制意志は其の性質上唯一である、而てし其の存在するは事實なるも、何が體制意志なるかを認識決定して之を唯一とするの組織が無ければならぬ、之國家に組織の存在する所以である、建國の體制ある所以である、之を認識決定するは又人の意志でなければならぬ、如何なる意志か、之建國の體制である、此意志をば從來主權又は國權統治權などと名づけた、一の權力である、權力は意志である、而して何が體制意志なるかを認識決定して國家に居る各我を之に依て行動せしむるのである、體制意志は各我の意志の外には無きも各我の意志共の者ではない、決定せられたる體制意志は各我の意志を之に從て行動せしむるものでなければならぬ、即ち強制の力を賦有するものでなければならぬ、即ち一の權力たる意志である。

主權は體制意志の認識決定實現の本分を有する意志である、故に其の內容は直ちに體制意志である、主權即ち體制意志なりと云て能く其の本質を示すを得る、何を主權たる意志なりとすれば誤りなく其の通りに體制意志を認識決定實現することを得るか、之が困難なる問題である、體制意志の認識決定を誤らば國家の存在する所以の本義を逆するとを得ぬ、人の相關と連續を完くすることを得ぬ、最高の道德を不斷に創造することを得ぬ、然らば如何なる組織を以て之を認識決定するとを得るか、如何なる意志の決定を以て誤りなき體制意志なりとするか。

(二) 專制君主

前に述べたるが如き西洋中世の封建君主又は專制君主を以て主權者として體制意志の誤りなき認識決定を得んとするは其の不可能なることは論を竢たぬ、封建君主は初めより體制意志を認識せざらんとする者である、我が利益を獲取するが爲めに君主たるのである、體制意志の如きは本來初より問せざる所である、故に西洋人はかくの如き者を主權者ではないとするのは當然と云ねばたらぬ、權力あるも體制意志を實現して國家存在の本義を逆せんとするの權力に非ずして、人民を抑壓して私慾を充たさんとするの努力である、かくの如き努力は寧ろ之を顛覆するを以て體制意志の實現であるとせねばならぬ、之中世の末期に放君伐論の起れる所以である、其論は偏して純正ならざるも亦國家創造の努力の表はれたるものと見るべきである。

西洋の封建君主が體制意志を具現するに足らざるは論なきも、假令賢明の人出て君主たるも一人專制を以ては到底體制意志を具現して誤なきを期するとを得ぬ、孔孟の儒教は道德と政治の一致を說き聖人其の位に居るを理想とせるも、堯舜の常に在るを期するを得ぬ、又假りに之あるも孔子の理想とせるが如

き堯舜は現實に之を見ることは全然あり得ぬとして可い、孔子の理想は實に高尚なるも到底實現不可能とせねばならぬ。然る以上は專制君主は常に體制意志の具現者たる資格なきものであるとせねばならぬ。

(二十一) 立憲主義

西洋人は封建專制君主を打ち倒して近代の立憲政治を樹てた、西洋立憲の主義は君主を廢立し又は之を廢立せざるも有名無實の木偶と爲し、人民の選擧せる國會を以て體制意志の具現者たらしむるを目的としたのである、國會が封建君主に比して體制意志を認識決定するに於て大に勝れるは云ふまでもない、然れども選擧投票と云ふ機械的の方法を以て此目的を完全に遂すべしと爲せるは初めより根本的の誤であつた、選擧權を擴張して普通選擧とするとか、比例代表の方法を採るとか云ふことは全く末で問題の根本ではない、賄賂強迫其の他選擧の眞正を害ふ原因の到底防止し難きも附隨の現象に止まる、代表と云ふが如き全然拵らへ事であつて事實ではない、體制意志はかゝる機械的方法を以て具現することは出來ぬ。

殊に國會をして此の資格を缺くものたらしめたるは政黨である、政黨も封建專制君主には勝る、國民が何が體制意志なりやの判斷を異にして練磨陶汰して唯一誤りなき體制意志を決定するの方法なりと云ふ理論を以て之を主張し得る、然れども事實は全然其の反對なることを百年間人目に明示して居る、政黨は鬪爭團體である、一黨勝を占めて國會を制したるを以て、國民全體の體制意志の具現なりと主張したる者は今日に於て一人もあるまい、國家に於て利益を以て相爭ひ甚だしきは政黨の爲めに國家を忘るるに至るのである、黨利を先きにして國家の利益を蹂躪するとは一般に政黨の弊害とする所である、さすれば封建君主と何の擇ぶ所ぞ、寧ろ其の害を大なりとせざるを得ぬ。

(二十二) デモクラシー

體制意志は人民全體自ら主權者たるに依りて誤りなく認識決定實現せらるるが、人民全體皆意志を發表して之を決定すれば最も正しきを得るとは誰しも考へ付くことであらう、然しながらそれだけ幼稚粗雜考も實際に當らぬ、體制意志は一人一人の意志ではない、又其の總和集合でもない。デモクラシイが最良の理想的なる國家組織なりとする考は此の根本に於て間違つて居る、然しながら假に一人一人の意志の總和なりとするも、又は之を體制意志に近きものなりとするも、如何にして之を實現するか、全體一致の意志と云ふことは到底あり得ない、社會契

約は結局空想である、されば全員合議して唯一の決定を見るは多數決に依るの外はない、而して多數決の全體の意志なるの合理的說明はどうしても出來ぬ、矢張り何處迄も一部の意志である、況んや之を以て體制意志の具現なりとするをや、殊に多數を得るに至るに實際伴ふ所の諸種の事情は寧ろ多數決を以て體制意志に反するものたらしむる場合多きことは人類の十分に經驗し拔いたことである。

(二十三) 機械的組織

元來機械的に多數の各人をして各々意志を發表せしむればそれで體制意志を得ると云ふが如き者は全然思ひ違ひである、皆の意志が全然一致するとしても體制意志ではない、況んや全然一致すると云ふことは無きに於てをや、選擧投票を行ふ者の人數を增せば體制意志に近きものを得るとすることも出來ぬ、譬へば私が一家に於て子供數人の意志を聽くより父たる私一人の者の方の一家の體制意志に當ることが多い、選擧權の論は其の國家の進步の過程に見て決すべく、普通選擧論者の云ふが如くに唯だ人數が多ければ必ず體制意志を發表し得るとするを得ぬ、婦人參政權の主張の如きは最も明白に機械的組織を以て體制意志を表はし得べしとする謬想を示して居るものである、婦人は良妻賢母として立派に體制意志に參與して居るのである、夫や子供を推しのけて自分で形式的に投票せされば氣が濟まぬとは、婦人自ら其の能力本性を疑ふものであらう、一票を投ずるも投ぜざるも何人も體制意志に參與せざるはなく、又同じく一票を投ずるも各人の體制意志に參與するは其質其の量無限の差等がある、かくて有機的に全體に體制意志が存在するのである。

西洋政治の發展の跡を見るに常に人々相疑ふを根柢とするが如くである、機械的組織を造りて自分が出て行かなければ承知し安心が出來ぬと云ふのは主として之に本づくかと思ふ、人の相關と連續の完きは人皆同胞、兄弟として相信ずることなれば之を望むことを得ぬ、相互協同でなければならぬ、然るに人々相疑ひ、君主は人民を敵とし、人民は君主を敵とし、政黨相爭ひ、勞資協調せず、他人に信賴して共同の目的を達することを得ぬとしては國家の本性を發揮することを得ぬは當然である、故にプロレタリア自ら政權を取らねば我が利益危ふしと感ずるに至り、それが出來ぬなら國家を壞はせと云ふに至る、誠に人類の文明の爲めに悲しむべきことである。

(二十四) 永久なる國家

今一つ體制意志の機械的に決定すべからざるを明かにするが爲めに說くべきは國家の永久なることとである、人は相關するのみならず連續する、靈魂は國家に於て眞に不滅である、西洋人は人の相關は見るも連續は餘り注意せぬ、個人主義は同時に生存する他人に對して個人主義なるのみならず、それ以上に祖先子孫に對して個人主義である、人の連續に道德の重點を置くは東洋思想の一特長である、孝は百行の本とする、博愛よりも祖先を崇敬するを第一義とする、國家と云へば直ちに先づ永久を思ふ、天壤無窮に國家を創造して無限ならんとするのである、此の國家の永久の信念なくんば體制意志の正しき概念も亦得られぬ、我々は祖先の御陰も被て居り其跡仕末もして居るのである、之を國家の必要なりとすれば借金を我が子孫に殘すも鐵道を敷きて子孫に傳ふる、されば體制意志は今現に共に生きて居る人のみの體制意志ではなく肇國の祖先より無窮の子孫に至るまでの體制意志でなければならぬ、如何に之を認識決定するかと云ふのである、今現に生存して居る人の全體に聽て之を定め得ると云ふが如き機械的の事ではいかぬ、我々は此の永久なる國家の極めて短じかい一部分である、其の意志を以て永久に連續する一體なる國民の體制意志なりとすることは出來ぬ。

（二十五）我が國體の精華

我が國體及國體の精華は不肖の年來絕えず說き居る所なれば今之を繰り返へさざるも、天皇が主權者にましまして、相關し連續する日本人の體制意志を誤りなく認識決定實現したまふを我が國體の精華とする、故に我が國を以て萬國無比とし國家たるの價値高く眞に最高の道德たるに於て世界に冠たるの理想國だとすべきは、以上說く所に照して之を認める日本人には十分に感得せられた所であらうと信ずる。

相關し連續する人の體制意志を誤りなく其の儘に認識決定するは全國民の多數決を以てするも到底完全なるを得ぬ、否一時の國民の一部が發表する意志は體制意志に比すれば極めて狹隘なる意志に過ぎぬ、體制意志を距ること遠きものである、一人の自己の利益を根本動機とする封建的專制君主が體制意志の具現者たる資格を全然缺くことも明かである、寡頭貴族の團體に於ても亦同樣である、聰明叡智なる堯舜の如き人君主たるも體制意志の完全なる具現者たるを期し難きのみならず其の常に存するを必する能はぬ、我が天皇は體制意志の具現者として比びなき理想的完全なる資格を有せらるること之を他の國體に比較して何人にも明瞭に認めらるるであらう、天皇は鏡の無色透明

何物をも映すに當へまつるべきである、一切萬民永久なる日本人の體制意志は誤りなく映じ出さるるは天皇の本質に存する。天皇の認識決定せらる所即ち體制意志なるは天皇の本質に於て然ることである、天皇即國家である、天皇がかゝる主權者たるが故に人の相關と連續全くして日本人は不斷に最高の道德を創造する、天皇の意志即ち體制意志なるが故に日本人の純粹なる民族國家に於て日本人は同胞兄弟として又祖先より子孫に完全に相關し連續し相互協同し相互扶助し能く其の本性を遂ぐることを得る、かゝる國體即建國の體制は人爲を以て强ひて造り出だすことを得ざる我が日本國に本然の事實である、之が我が國體の精華とする。

天皇の意志は即ち體制意志なるが故に天皇の意志に從ふは即ち相關と連續の間に居りて最も能く我を充實し發展する所以に合する、天皇に服從するは即ち自我の最高の實現である、我を天皇に沒入するは國家に於て各我一齊に其の本性を遂ぐる所以である、我は國家の一部として我なるは天皇に服從すると合一する、忠君即愛國なるは此の天皇の本質に基づくのである、之日本國家に特有なる性質であり國體の精華であり外國人には感得するを得ぬ。

（二六）我が立憲の意義

天皇の體制意志の完全なる具現者にましますは臣民の翼贊と相待つのである、億兆臣民が私利を去り私心を離れ唯だ天皇の御爲めに奉公するは又天皇の本質に存すると我が君民本來の關係である、臣民は一切の方法に依て天皇を翼贊して居る、納稅兵役の如き凡ての公務官職に就くが如き憲法の定むる三大義務の如きは寧ろ末であつて、臣民が其の本性を充實し發展するは根本的なる翼贊である、かくて一切各我億兆一齊に相關し連續して我を充實し發展する、之國家の最高の道德たる所以即ち天皇の大御心を成すのである、克く忠克く孝諸德を實行するより學を修め業を習ふまで皆天皇を翼贊する所以ならぬはない、肇國以降今に至て臣民の協力補翼と天皇の主權と合一して不斷に日本國家を創造し來つたのである、天皇の意志の體制意志に合して誤りなきは翼贊の誤りなく缺くるなきと相伴ふ、臣民奉公の志足らざれば皇道も亦衰ふ、之を臣民の側よりすれば我が責なりと爲さなければならぬ。

憲法の制定立憲制の採用は此の臣民翼贊の道を弘むると云ふに大なる意義を有する、帝國議會を設けて臣民の協贊に待ち、國務大臣を置きて臣民の直接に天皇を輔弼するを求めらる、臣

民に一定の自由主權を認めて其の活動の有效を期せらるゝも亦相關と連續を全くして天皇を翼贊するの遺憾なきを欲せらるゝに外ならぬ、かくても尚最高の道德を創造するに於て滯る所あり過つ所あるならば日本人の責や深し、立憲の意義を伸暢せざるものとしなければならぬ、輔弼の責任は大臣のみ之を有するのではない、一切臣民に翼贊の責あるを知らねばならぬ。

(二七) 主權と國家

主權が日本國家結合の原力ならぬは最早や說くまでもあるまい、我が天皇が權力を以て臣民を抑壓強制せらるゝが故に我が日本國家あるのではない、天皇を權力者たるの一資格に於てのみ認め、臣民は唯だ服從者である、權力支配の關係が日本國家であると考ふる日本人は一人もあるまい、之日本人に取りては餘りに突飛なる考である、固より權力はなければならぬ、されども其れに考へ及ぶまでもなく日本人は民族として皇德の下に結合してゐる、最高道德たる人の本性を結合の原力とする倫理的團體を成して居る、社會卽國家である、天皇と臣民との關係は權力關係のみではない、權力はあるも其は形式の方面であつて、本質的關係は人生の一切に及びて之を包括するのである。

權力に考へ及ぶまでもなく天皇と臣民との密接不離の有機的關係に對する信念の上に生きて來た日本人に取りて國家は權力關係なりとの西洋輸入の國家說は隣の噂を聞くが如く親子喧嘩の心持は能く分らぬ、其れでも遮二無二權力一點張りに說明したる結果は日本人の國家思想の墮落となつた、中央公論の新年號に吉野博士が詳細に之を論じて居らるゝが如くである、唯だ同博士は之を舊說と云はるるけれども實は西洋輸入の新說であつて、今でも明治の教育を受けて居らぬ我々の親父位の年輩の人に向て天皇と我々との關係は權力關係であると說いてもどうしても分らぬ。

元來西洋法學の輸入が我が國民の思想を毒したことは想像以上であると思ふ、民法を制定して之を以て日常民生の規律としたるは事の宜を得たものであつたこと云ふまでもないが、之に熟れざる我が一般良民は之を以て人生の全部なるかに考えたのは止むを得ぬことである、金錢を貸借したときは約束の期限に返濟すべく不履行なるときは此れ此れの方法を執れると云ふ規定を見て、貸借とは人間の鬪爭なるかに見た、實は有無相通ずる相互扶助である、殊に金錢の貸借を爲して民法の規定するが如き場合に立ち至るといふことは千に一回である、普通の場合は先刻は御立替え下され有り難うで濟んで居るのである、法律は惡るいとは云はぬ、必要缺くべからざるものである、されど

も法律は人生の始めより終りまでを支配するものではない、我々は法律に制してあるから人の物を取らぬのではない、そこまで考へる人は恐らくあるまい、法律を見ずとも人の物を取らぬ、法律に制せられて取りたき物を取らぬと云ふに至ては取りたるも亦同樣なる道德上の罪人であらう。

法律の形式論で人生を說き盡して人の信念感情を滿足せしむることは出來ぬ、其の顯著なる一例はかの國家法人說である、國家法人說なるものゝ西洋に起つたのは、君主も主權者ならず人民も主權者ならずと云ひたきが爲めに、實際主權の行動を爲す者の行動を統一して同一目的に出づる唯一主權の行動なりと云はんが爲めに、論理的に構制したる形式抽象である說明の方法である、而して國家を法人なりと云つた所で國家の實質は少しも分らぬ、天皇の行動を法人の機關としての行動なりと說きて後の我が日本國家の本質を明かにするに於て附け加ふる所あるか、かゝる形式論は全然日本人の日本國家を見るの信念感情と合はぬ。

(二十八) 政治の根本動機

國家結合の原力の人の本性に存し、國家の不斷の創造は人の相闘と連續との進步發達なることを知らば政治の根本動機が何なるべきやは固より明かであらう、政治とは國家の存在する所以を充實する強制意志の發現である、政治は誤りなく強制意志を認識決定して人の相闘と連續を完くするを目的とすべきは其の本來の性質である。

故に政治の根本動機は君主又は貴族と云ふが如き者の利益を圖るに在るべからざるは云ふまでもない、多數の利益を目的とするも尙ほ足らぬ、プロレタリアと云ふが如き人を階級に分ちて闘爭するを本義として其の支配を實現せんとするも亦固より不可である、元來政治は支配ではない、何者と雖も民衆を手段として他人を支配するを許さぬ、かゝる動機を以てする政治は國家の本義に適はぬものである、されども政治は保護なりと云ふも當らぬ、之れ西洋封建の遺想である、かの官房學の思想である、彼時の所謂る警察國は保護を以て政治の目的としたのである、民をして知らしめず依らしむるのみなるも保護の目的を達すれば可いとした、警察國に反して起れる法治國は法を政治の根本とせるも亦固より國家の存在する所以に合するとするを得ぬ、社會主義の如く國家を物質爭奪の階級闘爭の場裡となし政治の根本動機を鬪爭に置くに至ては國家無視の破壞論に至らざるを得ぬ、國家は不斷に創造せられつゝあるのである、幾多の段階を經進んで止まず無限に最高の道德に至るのである、社會

主義の唱へられ、極端に進みて無政府主義の現出せるも、決して人類の將來文明の前途を悲觀するに及ばぬ。人あれば必ず國家あり、人の本性を結合の原力とする國家は人類と共に永久でなければならぬ。

先達吉野博士を介して上杉博士から「國家思想に關する一論文」の掲載を囑せられた。上杉博士は從來國家思想に付ては獨自の見地に立たるゝ人として知られて居る。而して本誌は、元來一方の見に偏して他方の說を斥けると云ふ樣な主義を執るものではないが、近時聊か帝國新文化の發展に貢獻せんとの微衷より、所謂穩健なる進歩思想の味方として可なり勇敢に歩武を進めて來た。此點に於て或は上杉博士の立場と調和せぬ所が無いでもなからうと考へたが、又國家思想に關する別種の思想を公けにするも、讀者の研究の爲めに益するであらうと云ふ吉野博士の勸告により、此長篇を掲載することになつたのである。傳ふる所に依れば、上杉博士は先般の外遊により更に一段と知見を擴められ、且つ歸朝以來頻りに各方面に活躍せられて居る事も新聞に見へて居る。斯の人より今更めて國家思想に關する違つた御意見を承るを得るは極めて興味ある事と謂はねばならぬ。所論の内容に對しては本誌最近の立場と一致せざる點もあると思ふが、兎に角玆に所載の來歷を記して讀者に紹介し併せて上杉博士に其御厚意を謝して置く(編者しるす)

中流階級の社會運動

(中流階級の研究 其(一))

法學博士　森本厚吉

一　社會運動と中流階級

社會運動とは一つの社會階級が當然自己階級の有す可きものと認むる權利を享有するが爲めに利益ある樣に社會の組織及其秩序を變化せんとする凡ての努力を云ふのである。

從つて一定の社會に於て其現存して居る組織と秩序が一定の階級者に不當の壓迫を加へ居る事を自覺して、彼等が現在の社會的及經濟的地位に不滿を抱き、是を改善せんとする努力が社會に現出する時には社會運動が成立するのである。故に社會運動とは其本質に於ては破壞運動でもなければ又過激な運動でもない。けれども若し一定階級の合理的要求が不合理な社會組織や秩序の爲めに容れられない場合には最後の手段として一部の

破壊行動を採るに至る場合もないではない。それで若し社會運動に破壊行爲があつたとすればそれは破壊の爲めにする破壊ではなくして建設の爲にする破壊であるのは恰もキリストが「地に泰平を出さん爲に我來れりと意ふなかれ、泰平を出さんとするに非ず、刄を出さん爲に來れり」と說いたのと同意義である。此種の波瀾は凡て進化の行程にあるものが當然通過すべき階段と認めなければならぬ。而して今日社會運動によらずして健全な社會の進歩を望むのは現代に於ては木に緣りて魚を求むるが如きもので進化の法則に反したものと認められる。

乍去一定の社會階級が自己階級の有す可らざる權利を主張する事による運動や、又不正なる方法による運動は眞正の社會運動と云ふ可きものでなく、屢危險性を有するものである事を忘れてはならぬ。現在の行き詰つた所謂ブルジョア文化の缺陷を補正するに社會運動が各方面から起る事が必要なるは勿論であるが果して其運動の目的及手段が正當であるか否やが甚だ注意を要す可き問題である。故に社會運動を起す時には十分に考慮して先づ其目的に於て果して合理的であるか否かを確かめ一度運動を開始した時には正當なる手段を採りて正々堂々其進步をはかり以て其成功を期せなければならない。

中流階級の性質及現狀に就いて公正なる考察を行ふ時には前篇に於て詳述した樣に當然此階級者が社會運動を起す可き筈であるにも拘らず、我國に於ては未だ何等特に見る可きものがない。是全く中流階級が自己の權利と其責任を自覺して居ないが爲めで、我社會が夫れだけ文化的に十分覺醒して居ない事を證明して居るのである。併し是は時の問題で我國に於ても早晩此問題が重要視されて、其社會運動が開始さるる時の至るのは自明の理である。否今や既に其時機が到來したのである事を信ぜざるを得ない、吾等は心して是に備ふる必要を認むるのである。

二　舊中産階級の滅亡

（中流階級社會運動の起原　其一）

近世社會進步の趨勢を見るに一時絶大の勢力を有して居つた國家萬能主義が次第に力弱くなりて是に更りて個人主義が盛になり、更に社會主義の感化によりて個性の開展―そして社會に一般民衆の福利增進の必要を各自が自覺し始むる樣になつた。かゝる時代に應して中流階級は自然に自己の存在が社會的に不遇で經濟的に不安である事に覺醒して其改善策を講ずるの必要を個人的にも又社會的にも認むるに至つたのは當然の結果である。

是を産業發達史にあらはれた事實より考ふるに産業革命前に

は手工業其他小規模の産業や小中農が盛であつて彼等は皆中産階級者として立派な位置を社會及經濟的に占めて存在して居つたのである。併し産業革命が起つてからは人力以上に有力なる蒸汽電氣等の動力が盛に利用され、大仕掛の機械工業が行はるゝやうになつた。此結果資本主義の勢力が一層强大になり、自由競爭は極端に行はれ、産業の組織が變化を來たして生産に集中主義が重きをなす樣になつたのである。然して此主義を貫徹するには勿論大仕掛の事業經營法によらねばならぬのであるから資力に不自由たる中産産業者は到底競爭場裡に勝を占むる事が出來なくなり、彼等の位置は甚だしく不安なるものとなつた。勿論ベルンスタインの曰つて居る樣に中産階級の數は此時代に絕對的に減少したと云ふ事は出來ないとの反對說もないではないが、不完全な此當時の統計に餘りに信用を置く事も出來ないのであるから、私は矢張産業革命は中産階級に著しい打擊を加へ、彼等の數は次第に減少すると云ふマルクス一派の主張に贊意を表するのである。猶詳しく是を論ずれば資本を增加して大仕掛で事業を經營する場合には次の樣な利益が伴なふのであるから、僅かばかりの資本で小規模の經營を行つて居る中産生産者は到底永く獨立の地位を産業界に保つて行く事は六ケしく自然彼等は自滅の悲境に陷る者となるのは理論上から考へても當然の事である。

一、中産生産者が到底大規模の生産者に及ばない第一の點は、大企業に於ては固定資本の利用に利益が多い事である、即ち近來の發明にかゝる生産能力の偉大なる機械其他の設備は甚だ高價なものであるから到底中産階級は自由に之を利用する事は出來ない。又假りに出來るとしても彼等が同一種類の高價な設備を單獨に別々に設くるよりも大資本家が大規模のものを少數に用ゐた方が固定資本の利用上遙かに利益が多いのである。

二、大企業に於ては單に固定資本のみならず流動資本に於ても其利用に利益が多いのである。例せば二つの小工場に於て生産するよりも一つの大工場に於て同一の生産をした方が石炭油其他種々の流動資本の使用が甚だしく節約し得るのである。

三、更に日進月步の新らしき發明や發見を自由に實驗したり應用したりするには大資本によつてなる大仕掛の産業に於て始めて可能なるのであるから、其新發明又發見を利用する事の出來るのは大企業の方が小企業よりも遙かに有利である。

四、近來産業の發達は分業の結果による事は明白であるが分業を有效に行ふに必要なる一つの條件は事業の規模が大なる事である。故に分業の利益を種々の方面で十分に擧げんとすれば、なる可く大仕掛の大企業によらなければならないのである。

五、規模の大きな産業であると單に其主要の生産物に關する利益が多いばかりでなく、到底小企業に於て望む可らざる副業上の利益が自然に生ずるのである。

以上は單に其主なるもののみを擧げたのであるが如何に大企業が小企業に比して有利であるかは明かである、從つて近來事業に益々其規模を大にする樣に組織を變化しつゝあるのである。是を具體的事業に就て考ふるに株式會社は組合や又は合名又は合資會社に較べると其資本を増加して大規模の經營をなす點に於て遙かに有利であるから十九世紀に於て株式會社は全盛を極めたのであつた、二十世紀になると一層大規模の事業經營法が勃興して或はカーテール或はトラスト或はホールデングカンパニー等の如きものが産業界に於て最大の勢力を占める樣になつたのである。

斯くの如き時勢にありては中産階級者の地位は實に哀れたるもので從來の經營法では到底競爭を行ふ事が出來ず、去りとて獨立して大規模の事業經營をなす資力も有して居ない。だから、彼等の運命は次の兩者何れかを選ばねばならぬのである。

一、彼等は一層努力して熱心に事業を經營し進んで資本家階級に入りて大規模の事業を經營するか。

二、或は自然の成行きに任せ競爭場裡に失敗し無産階級者に下りて大企業經營者の傭人又は勞働者になるか。

右何れかの一を採るのでなければ現代資本主義の經濟界に於ては生存が許されないのである。斯くの如くにして經濟界から中産階級が滅亡して有産無産の二階級によつて産業界が成立される樣になつたのである。而して此の亡び去らんとして居る階級を今日特に舊中流階級と呼んで居る學者がある。

三　新中流階級の發生

（中産階級社會運動の起原　其二）

産業革命以前中流階級の主なるものであつた、中産々業者が次第に消滅し去らんとする時に唯だ殘るべき筈のものは知識階級に屬するものであつた。是が新中流階級と稱せられて今日中流階級の主なるものとなり彼等によつて社會運動は開始され、自己階級に關する重大なる職務と責任を全ふせんとして居るのである。産業革命後に於ける知識階級の有樣を見るに若し獨立して生活を營まんとすれば自由職業に從事しなければならぬのであるが、其當時の社會組織に於ては獨立した自由職業を除りに多數に必要としなかつたのである。故に彼等の多數は國家其他の公共團體や資本家階級によつて雇傭され、上流階級の缺乏を感じて居る知識才幹を提供して彼等と結合する事が相互の必

要であり又利益である事を見出したのである。

それで知識階級は國家や資本家を雇主として彼等の爲に力を盡し、自然彼等の爲に都合のよい法律制度の制定等に努力を惜まなかつたのである。勿論彼等は資本主義の上に樹立された經濟學説を遵奉してスミス殊にマルサス、リカードの學説を盛に謳歌し、現代資本主義の制度は自然的に發生したる最良のもので、是によつて始めて經濟社會は進歩し國民は幸福になるのであると謂ひ、或はマルサスと共に富の不平等なる事は人類に却て多くの利益を與ふるものである事を力說したのである、彼等の主張によると富の分配が不平等で貧富の懸隔が甚しいと云ふ事は人類が向上せんとする希望を大にするがために有力なる刺激である。故に不平等の社會は人類の能力を十分に發達させるのであり又正當なる働きに對して自然に報酬を大にすべきものに最も利益あるもので、是實に自然法則の働きによつて出來たる善良なるものであると論じて、資本主義の擁護に大いに努めたのである。更らに知識階級はリカードと共に次の如く論じて困る、卽ち有産者と無産の勞働者とは各々利害相反するものであるから、若し勞働者がより多くの富の分配を受けんとすれば當然夫だけ有産者の利潤を減少しなければならない、有產者の利潤を減少する事は結局經濟界の不振を來し社會を害するのであるから勞働者は永久に哀れなる地位にあつて唯、生存を續け得る位の賃銀を得て滿足するのが動かす可らざる經濟上の法則であると論じて無產階級者の福利增進の如きは殆ど問題としてなかつたのである。

斯くの如き學說を主張し又其學說に基づいて有產階級に利益の多い法律制度を作る事に知識階級は力を盡したのであるから、彼等は有產階級から少からぬ優遇を受け其一部分は進んで有產階級者となり、或は中流階級として存在して居つても其の地位は社會的に高く其報酬は經濟的に豐かであつたから中流階級の地位も亦安全であつたのである。斯くして有產階級と新中流階級は密接なる關係を結び而かも其關係は相互的に有利に調和されたのである。故にプロレタリヤ階級は如何に多數を占めて居つても到底有產階級者に匹敵す可き者でないのみたらず、無產階級者として永久に貧に苦み又は劣等なる社會的地位を占むるのは何も不思議なる事でなく彼等の持つて生れた運命であると諦めて居つたのである、斯くして上下相揭つて天下は泰平であつた。

(一)併半時勢の進步に伴ふて社會主義の勢力は次第に有力になり、一方人智が開發された結果として次第々々に知識階級自身が自己の立場を明かにする必要を認むると同時に現在社會制

度の弊害が次第に表はれる樣になるに至つて、知識階級が從來の如く資本主義を賞讃する事に疑問を有する樣になつた。

（二）加ふるに教育の普及により知識階級者の數が年々著しく增加したが爲めに上流階級者が從來の如く彼等の大多數を傭聘して優遇を與へる事が不可能になつた、即ち知識階級者の數が有產階級者の到底包含し得ざる程度に增加したのである。故に於て所謂高等遊民が多數に發生し彼等は經濟社會の眞相が甚だ不完全なもので、之が爲に社會に生活不安貧富の不當な懸隔等が有る事に覺醒し、大に現代制度の缺陷を非難し上流階級に反感を抱く樣になつたのである。

（三）更に一方物價は著しく騰貴し今日に於ては戰前に比して約三倍になり居る　併かも收入は僅かに五割乃至十割の增加に過ぎないから其結果は當然生活の安全を失ふ樣になつたのである。

（四）斯る事情に接しては知識階級の特權であつて從來非常に尊重されて居つた名譽とか位階等の精神的報酬の價値の評價が著しく減少して經濟的壓迫が益々加はり生活の不安の度を彌々高めたのである。

（五）單に自己階級に屬する不平不安のみならず勞働者階級即無產階級者の位置が現代制度の下にありては不法に低くして近來盛に勃興して居るプロレタリヤ社會運動に注意を拂ひ彼等に同情を表する樣になり、進んでは彼等の運動と中流階級の社會運動と少からず利害の共通せるものあるを認むる樣になつた。

斯くの如き理由によつて知識階級が新中流階級となつて茲に社會運動を起すに至つたのは自然の結果である。要するに中流階級社會運動の起原はゾンバルト等が論じて居る近世プロレタリヤの革命的運動の起る原因と類を同くして、先づ中流階級が最近に至りて其境遇が非常に悲慘なるものになつたに關らず少數の有產階級者が富裕なる奢侈生活を營み其對照が甚だしく顯著になり中流階級の生活の不安であり又不幸である事が益々明白になつた事に歸するのである。蓋し生活の安定と云ふ事は前に論じた樣に中流階級の三大特性の一であるにも拘らず今日此特性を失ふに至つたのであるから其結果は中流階級全體の滅亡に歸するか、或は彼等が一大社會運動を起して彼等の位地を安定にするか何れかでなければならない。

中流階級の有する重要なる社會的職務を考ふる時には中流階級の滅亡は社會全體の滅亡であるが故に茲に唯一の重要問題として彼等の社會問題を適當に解決して彼等を光明の域に導く事が自共の責任であると感ずるのである。斯くの如くにして中

流階級社會問題の解決に就いて議論を進める必要がある。

四　中流階級社會問題の解決

中流階級社會問題は甚だ複雜したものであるから此解決は容易の事でない。就中最も困難を感ずるのは此階級には或る點に於て利害の相反して居る生産者と消費者が存在して居るのであるから社會運動に於ても自づから同一歩調をとる事が出來ない場合も少くない、併し原則としては所謂舊中流階級である獨立した中産生産者は次第に勢力を失つて自滅せんとして居るに反して知識階級が新中流階級として重きをなすに至りつゝあるのであるから、結局消費者が中流階級の主なる者として社會問題の解決を計る事が最も適當と考へられる。

故内田博士の論文に於ても今日の中流問題解決に採る可き政策は主として俸給生活者に關するものである事を主張されて居る註( ) 曰く「中流問題解決の爲めに如何なる政策をとる可きか此政策は中流階級として一般的のものもあるが今日問題とす可きは主として特殊のもので(一)主として商工的中等階級に關する政策(二)主として農業的中等階級に關する政策(三)主として所謂勤め人の階級及自由職業者等に關する政策である、此の第三の階級は主として知識階級であるから上下階級の利害を調和して社會全體の幸福增進の爲に大いに努力す可き大任を有するのであるから中流問題の携はる可き先驅とならねばならぬのである」と。

中流階級社會運動の解決に關して第一に考へなければならぬのは、其運動の目的は何であるかと云ふ事である、が、一言にして是を云へば其目的の第一位に屬するは生活權の享有を合理的方法に依て計る事であると云ふ事が出來る。若し此目的が達せられて中流階級が悉く新時代に於て適當と認む可き生活權を自由に享樂し得る樣になつたならば、彼等は其運動の大半を成就したのである。故に彼等は決して餘りに多きを要求せんとして不法な破壞的運動を起すものではなくして、唯人として當然享有し得可き權利の獲得に努力するに過ぎない。而して前論に於て詳論した樣に此權利の行使に必要なる金額は一ケ年一家族僅かに三千圓内外の所得を得る事に過ぎないのである。而かも近年國民の努力によつて我經濟力は著しく增加し、最近の歐洲戰爭の結果だけでも三十餘億圓の正貨を外國から得たのであるから、今日我國に於て國民の生活に利用し得可き國富又は所得の資源は昔日の如く決して貧弱なものではない。唯富の分配が不公平であるが故に實際の勞務に從事した者が其正當の報酬を十分に受くる事が出來ず、其結果不正當な貧者が多數に存在する

に至つたのである。

かゝる時代に先づ中流階級が生活の保障を受くるに足る正當なる所得を受く可き權利を合理的に得んと欲して、社會運動を起すのは其目的に於て何等不穩當な事は無いのである。而して若し彼等が一階級として悉く生活の安定を得るに足る收入を受けた時には、第二期の運動として此生活權を勞働者階級、否廣き意義に於て無産階級全部に普及せん事を計る可きであるから、結局此運動の目的は社會全體の福利增加にあるのである。斯して此目的を達し得た場合に始めて社會運動の解決を見る事が出來るであらう。玆に於て先づ生活權の提唱を叫び、以て中流階級社會運動の目的を明かにせんとするのである。

五　生活權の提唱

生活權（"droit à la vie"—Right to decent living）とは人類一般が生れながらにして享有して居る自然權であり、又生活に關する權利の內で最も根本的で又一般的の性質を有して居る重要なる人權である。例へば財産權は如何に現經濟制度に於て重要なものでも單に財産を有する者に限られた部分的の權利である。又勞働全收權の如きは假令當然の主張としても單に勞働する者に限られて居るのである。然るに生活權は人類凡てが何等の制限なく唯人として享有して居るものであるから凡ての權利の根本となる可き筈のものである。此權利が十分に認められて初めて經濟生活は完全の域に達し得べく社會は眞正の發達を來し得るのである。

幼稚なる社會では人は單に生存しただけで事足りたであらう、然し社會は進化して止まないのであるから、今日の如く活動が盛になつた時代には單に生存し一露命を繋ぐのみでは、人としての目的は達せられない。故に各人は能率を大にして社會的にも亦個人的にも生産力を增進する事を必要とするのである。是が爲には單に生存するのみでなく、盛んに生活して活動する必要がある。從つて從來叫ばれて居つた生存權の提唱は今日では生活權の主張に變ぜねばならぬ。

然るに玆に重大なる事實がある、夫れは現今の法律や制度は知識階級が有産階級と協力して作り上げたものであつたから、ブルジョア階級に利益多くして中流階級やプロレタリヤ階級に不利が少くない缺陷を有して居る。是れ有産階級を主體として居つた文化が生んだ法律制度が現今の樣に一般民衆を主體とせんとして居る文化に對して生ずる矛盾であつて、止むを得ない事であるが、我等は宜しく時代に適するものに之を改む可き責任を有して居るのである。斯くの如き時代遲れの法律や制度は

人類の生存權を保障する事は出來るとしても到底民衆全體の生活權を保障するには不適當であるのは當然の事である。若し夫れ現代社會が生活權の如き基本的の人權を自由に行使する事を中流階級にすら許さないとすれば現代文化はかゝる社會を是認し得るもので無いから我等は其改造を要求す可きである。蓋し現在の經濟組織及法律制度は固定された完全無缺のものではなく單に歴史的の産物であつたのであるから將來是等が更に進歩改良されて時代に適するものとなされるのは何も不思議の事で無く進化の行程に過ぎないのである。而して現在生活權が十分に認められて居ない理由は結局有産階級者が不知不識の間に資本主義制度の弱點を利用して此權を蹂躙したからである、其結果萬人によつて作り上げられた現代の文化が少數特殊階級者によつて支配され、文化の恩惠を社會全體に及ぼす事が出來なくなつたのである。斯くの如き状態は確かに社會全體の不幸を持來すに至るのであるから私共は全力を盡して此問題の正當なる解決を求めねばならぬ。

然らば私共は如何にす可きや。先づ玆に二つの採る可き道がある、一は根本的に社會を改造して現在の制度文物を革正し新たなる文化を興す事である、二、は現在の制度文物を生ずるに至りし歴史的發達を重んじて急激に破壊するのではなく、現在の事實を十分に批判し次第に是を修正して漸次是を改善し、以て最後の目的を達せんとするのである。申すまでも無く私は第二の方法によつて社會運動の目的を達す可きである事を信じ、先づ第一に各人が夫々生活權を自覺して、自己が當然所有して居りながら、誤りたる社會の制度の爲に其自由行使を妨げられて居る事を覺醒せん事を欲するのである。玆に於て更らに詳しく生活權の原理を説かなければならぬ。

六　生活權の原理と最少生活賃銀

生活權に關する原理に就いてライアン教授は其根本的のものを三つ擧げて居る（註い）

一、地球は全人類の生活を支持する爲に創造されたのであるから、各人は生れながら自然の恩惠物に對して均等の要求權を有す可きである。決して特殊の人や階級のみが特に惠まれて夫等の恩惠物を專有す可き筈のものでない「各人は彼自身が目的である」「Every person is an end in himself」のであるから如何なる人でも亦階級でも他人の利益又は幸福の爲に道具視さる可きものではない。斯くしてこそ人は石や馬と異るのである。

二　地球に生活し得る人の生れつきの權利は唯有益な勞働の消費によりて支配され又堅實になり得るのである。是が爲に汝

の額に汗してパンを食す可し」とか「働かない者は食ふ可らず」と云ふが如き原理が生ずるのである。凡て人は働かねばならぬのであるが唯次の三者即ち(一)幼年者(二)虚弱者(三)財産を十分に有する者だけは働かずして生活が許されて居る。如何となれば前二者は慈善又は救恤から勞せずして生活權を要求し得可く、第三者は地代及利子の起因に正當なる要求を見出して以て勞せずして生活權を主張し得るのである。

三、前二項より起る當然の結果として發生す可き原理は次の如くである。即ち現在地球の與ふる機會を支配する人は凡て働かんとする人に對して勞働の機會を合理的に與ふる義務を有するものである。換言すれば天然の恩惠を專有する人は夫を所有しない人が利用せんとする時に容易に近づき得る樣にしなければならぬ。故に我等が地上に生活する權利は合理的の條件で働き得べき權利を意味するものである。故に若し働かんとする人でありながら此權利が無視されて生活出來ない程廉價な賃銀より受けない時には、人としての之等の權利が認められて居ないのである。即ち彼等の存在が資本家や上流階級の犠牲に供されて居るに過ぎないのである。

次に此生活權の要素に付て詳細に是を記述する事は出來ないのであるが大體次の三項を具備するものと認めなければならぬ(註5)

一、常態的健康、基本的快樂及道徳宗教的保護に適した境遇に於て其質及量共に勞働力を保持するに十分なる食物、被服及住宅を有する事。

二、基本的滿足を得るに必要なる未來の準備及病氣、不時の出來事虚弱に對する保障をなす事。

三、健康及精力を保持し得る爲に又より高き才能を相當に發達し得る爲に必要なる休養、社交、教育及宗教に關する欲望を滿足する事。

是等の要素が一定時代及一定の社會に於て必要なるものと認めらるゝ程度に完ふされる時に初めて生活權が認められたものと云へるのである。

國家は是等の根本的人權を國民全體に保障す可き義務を有して居る、而して國民は原則的には此權利を要求し得るもので此要求だけは決して何等差別のある可きものではない。其結果として玆に國家の力で最少生活賃銀法を制定する事が必要になつて來る。法定賃銀と最少賃銀法とか又は最少或は法定生活賃銀法として知られて居る問題の可否に關しては多くの議論もあるから詳論する事は出來ないけれども、特定の國又時代に於ては特殊の職業又國民に對して夫々適當の最少限度の勞働の報酬を

定める事は不合理でないのみならず必要なるものとして認めるのである。

ジョン、オグラーデー博士が法定最少賃銀の可否に關し千九百十五年に經濟學者百六十人に問ひ合はした結果を見るに、百六十人の中九十四人から答があつて、其中七十人は婦人及未成年者に對する法定最少賃銀を可とし、十三人は反對し、十一人は不明であつた。成年男子に對しては贊成者五十五人、反對者二十人であつた。此統計がとられてから今日に至る迄五年間に著しき變化が此方面に起つたのであるから現今斯くの如き法律の制定が特殊の職業に對して必要である事は大多數の識者の等しく認むる處である。

更に此問題に關しゴンパースが生活賃銀として擧げて居る說明を附記して一層此問題の觀念を明かにせん。「生活賃銀とは其收入が最も經濟的に消費された場合には其地方の文明で物質的及精神的に必要缺く可からざるものと認められ又人類の合理的自尊心を充ふし得るものと認むる程度で普通家族の生活を支へ得るに足る程度の賃銀を云ふ。」

七　結論

要之。現代資本主義制度の下にありて中流階級は甚だ悲慘な

る境遇に陷る可き傾向を有して居るから、彼等は社會運動を起し自己階級の爲のみならず進んでは一般無產階級の利益を增進する爲に社會組織及其秩序を改造する事が必要である。而して此社會運動の目的は根本義として生活權の享有である。即ち先づ中流階級者が此權利を獲得して、進んで是を人類全體に及ぼさんと努力しなければならぬ。而して此目的が具體化されると最少生活賃銀或は最少生活俸給の問題が起つて來る。平たく云へば增給又は增俸問題が中流階級社會問題として研究されなければならぬのである。一般的に概論すれば中流階級の受けて居る現在の俸給は戰後十割内外の增給を受けたとしても物價の騰貴率は二十乃至三十割であつた事を考へ、又生活標準が次第に世界化して近來著しく向上した事等を考へる時には彼等の所得は今猶不當に低いと云はなければならぬ。總て社會運動の目的を達するには先づ此等の根本問題の解決を計らねばならない。

此問題解決の手段として課稅法の改善、國富を增加させる爲に適當なる積極的國家手段が必要であると同時に、自己の因襲に囚れた生活法を改善して能率の大なる生活を營む事等の個人的手段を講ぜねばならぬ。而して更に個人生活の改造と共に種々の方面から個人が結合して組合を作り合力の勢力を十分に利

用する事が中流階級に於ても亦必要なのである。故に現代の急務として攻究す可き事は知識階級の大同盟を作る事である。此同盟が成立する事によりて始て中產階級が有產階級又は或意味に於て筋力的勞働者階級と同等の經濟的地位に立ち中流階級社會問題を有利に解決し得るに至るのである。夫で先私は當然中流階級に屬す可きものでありながら其所得は貧民階級に屬して居る我國十七萬の小學校教員の同盟の必要を認め、之を中心として知識階級全體の同盟を起し進んで筋力勞働者組合と提携して、故に無產階級が大同盟を結び以て有產階級と對立し、無產階級者の正當なる要求が人道の爲正義の爲に、十分に認められなければならぬと思ふ。而して斯くすることは社會全體――然り有產階級に屬する人々の爲にも――眞正の意味で福利を增大にし得るものなる事を信じて疑はないのである。斯くの如くにして中流階級社會問題の一として茲に中流階級同盟論を高唱せんとするのである。

註(一)馬太傳十章六―一六節

註(二)大藏省調査月報九年十月號に依る物價指數左の如し。

	大正二年	同七年	同八年	同九年一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月
東京	一〇〇	一九七	二四〇	三〇一	三二五	三二一	三〇〇	二七[illegible]	二四八	二三九	二三五	二二三	二[illegible]
パリ	一〇〇	三三八	三五五	四八七	五二二	五五四	五八四	五六〇	四九三	四九[illegible]	五〇二	—	—
ニューヨーク	一〇〇	一九七	二一五	二四八	二四八	二五四	二六五	二四三	二六八	二六三	二五〇		
ロンドン	一〇〇	二二六	二四二	二八八	三〇三	三〇七	三一三	三〇八	三〇〇	二九九	二九八	二九七	

註(三)金井教授紀念最近社會政策內田博士論文三〇五頁

註(四)Ryan: Distributive Justice, PP. 358-363.

註(五)ibid, P. 361.

註(六)O'Grady: A Legal Minimum Wage

註(七)Ryan: A Living Wage, P. 129.

今期議會の大觀

文學博士　三　宅　雪　嶺

（一）

議會開設以來幾變遷を經、政府側にて獨逸に則るところ多かつたけれど、何と云ふても議會に關し、英國を參考にし、之によつて考へるを免かれなんだ。特別に意識せずに、之を本場の如く看做し來つて居る。內閣更迭頗る頻繁、曾に聞えたグラッドストーン內閣が久しきに續かず、其の後を承けたローズベリー內閣は一年も續かず、議會に基礎を置く內閣は久しきに堪へぬやうに思はれたが、一八九五年、保守黨內閣が成り、ソールスベリ及びバルフォーアで十年間續き、次いで自由黨內閣が成り、バンナマン及びアスキーズで十年間續き、更にアスキーズが聯立內閣を組織し、一年後ロイド・ジョージが之に代り、以つて今日に及んで居り、近來英國は長期內閣を造るの風習になりつゝあると見える。

日本で內閣の平均壽命二年と稱し、最も長いのでも五年に達するのがないが、近頃漸く長期內閣に考へ及ぶ者がある。前にもいくらか此の邊の事を考へ、且つ試みたのがあれど、原內閣は豫め長期を念とし、現に百方努めて居る。首相自ら長期說であるか、伊藤西園寺等と同じく窮境に陷るに先んじて去るを得策とするか、機會主義の人とて一概に言ひ斷れぬが、閣員中熱心に長期を望むのがあり、政友會も大體其の傾向を示す。原氏は黨首たる以上、去つても再び就職の可能性あるも、閣員中さうでなく、唯永續きするを可いとするのがある。與黨の幹部は徒らに閣員を眺めて過ぐるを快しとせぬが、永續きして居る內に好い機會も來ようと待ち設けて居り、それでなくても政府黨の有難味を知り、何が何でも續き得る丈け續き得るに如くはないとする。從來の方針が自づと此の邊を指し、既に衆議院に過半數を制し、貴族院の要部にわたりをつけ、元老の諒解を得るに拔け目が無い。

（二）

內閣は長期を豫期して議會に臨み、國務の事、及び一切の事、悉く其の立場からして處置しようとする。議會に頭數を得るに於て心配なく、只院外に動搖を生じ、意外の事變の起りはせぬかと思ふ。院外の騷ぎは何でもないと多寡を括りつゝ、痛手を負ふた經驗があり、油斷のならぬと思はずに居れぬ。山本內閣が彼の如く仆れるとは、全く豫期しなかつた所に懸かる。非政友會熱は案外に昂まつた。大隈內閣が下手な事をしたが爲め恢復する事を得たが、餘り世間を侮つてならぬとも考ふ。原內閣成立以來隨分世間の動搖を防ぐに努めて居る。ありと

あらゆる機關を濫用し、御用紳士を各地方に動し、俠客と稱する者々まで使用し、亂暴者を取締るには仲間に限ると云ふたりする。既に院內で多數を制し、能く院外を平穩にし得れば、長期內閣を實現し得ると云ふので、成るべく院內と院外との連絡を謀たうとする。何れ反對黨より彈劾めきた事を爲るに違ひなく、不問したらば中に面倒な事あるかも知れぬとて、議論を切り上げる事にして居る。彈劾したとて何程の事あるかと嘯きながら、何か氣味惡く感ずるところがあり、多數で即決して終へとなつた。衆議院は吾が絕對勢力の及ぶところ、小賢しい事を云ふ者は片端から片付けて終へとの權幕である。若し三分二の多數を制して居らば、反對黨を片々から除名しようとするであらう。そこまで多數でないことを遺憾として居らうが、何でも多數決で壓倒しようといふのが先になり、議會が何の爲めに設けられて居るかを考へようとせぬ。議事を形式にし、贊否を決するのみならば、わざわざ議場に出席するに及ばぬのに、反對黨が理屈責めに來さうになれば、無暗と決議を急ぐ。之れと云ふも少數者の力、道理あり、院外に之に應ずるやうになりては、思はぬ端に火の手が擧がるも知れぬと察しての事であつて、今のやうでは、議會と稱する程の價値あるものを衆議院に開く事が出來ぬ。小さな問題ならば兎も角、重大問題ならば、洒り一週に論ずるか論ぜぬかで片が着いて終ふ。

(三)

そこで片着けるのが政友會側の計劃に屬する。何でも來い、此の手で抑へ付けるぞとの意氣込みを見せて居る。之に對して反對黨が如何にするかと云ふに、何事か爲さずに居れぬ。然し比較的大政黨なる憲政會は、反對黨として意氣の上らぬ狀態に成つて居る。政府黨がいろ〳〵便宜を得るに反し、反對黨が其の便宜を失ふの順序であつて、政友會も反對黨として頗る憐目なていたらくであつた。原總裁の意氣の揚らぬ事夥しく、唯變歎に堪へぬと云ひ、眞に勝甲斐ない限りであつた。之に較べて憲政會の加藤總裁は、倘ほ手應へあると云へるが、本來順境育ちで、逆境に處するに長じて居らぬ。黨員の多數も曾つて大隈から桂へ鞍替へした連中であり、長く反對黨たる事、さういふ筈でなかつたとの調子である。然し一寸の蟲にも五分の魂、意氣が揚らぬにしても、何とかして揚げずに措けぬ。得意ではなけれど一と戰さ戰はうとする意氣がある。唯順境を熱望するの悲しさ、出る智恵も出ず、いつそ立派に戰ひ得るに、下手な下手、餘程下手の戰をする。

國民黨は拗ね者の集りと見て可く、別扱ひにすべしとし、請政

會は政友會の位置を取つて代はるの意の旺んなるに拘らず、餘りに準備を缺つて居る。一、反對黨の諸派に氣脈を通ずる事。一、政府及び政府黨の行動の跡を調査する事。何れも頗る必要であるのに、之を缺る有樣驚くばかりである。種々の事情もあらうが、何とも話しにならぬ。國民黨及び無所屬との打合せは姑く措き、自黨の部内をも纏めるに苦しむ。苦しむの揚句、尾崎田川二氏除名といふやうな事を演ずる。時に取つての妙策であらう。斯くせねば騷ぎが大きくなるかも知れぬが、一尾崎を包容する事が出來ぬやうで、如何に黨勢を擴張し得るか。持つて生れた性分で仕方ないと云ふか、吳越同舟とさへ云ふに、除名を手柄顏するなど、淺間敷き限りである。逆境の爲めか、憲政會は相應の顏揃ひであるのに、顏程の働きの現はれぬのは何といふ事か。尾崎氏と共にした組は、其の除名を以つて單獨行爲の致すところとし、自ら與り關せずとするが、さういふ了簡故に働きがあつて働きが伸びぬのである。謂はゞ熱が無く、即ち意氣が無い事になる。形丈け整ふて魂の薄弱なものである。憲政會を擧げて今一奮發する事が出來ぬかと、惜しく思はれるが、さう行かぬものかしら。

（四）

團體の統率は別に手腕を要するとし、政務調査に於て何を爲て居つたか。議場で多數決を以つて抑へ付けられるにせよ、全く議論を許さぬのでなく、少くとも最初の說明を自由にする。豫め熟く調査して居れば、其處で政府の急所を衝き、何とも云へぬやうに爲し得べきである。急所に近づきながら、致命傷を與へぬのは、平素の調査の粗漏なのに由る。大體に分つて居つても、急所を衝くには、一方ならぬ努力を要する。種々の方面から調べ上げねばならぬ。新聞の上で知れた事、或る黨員が報告して來た位の事では、政府側に於て防禦するに困難を感ぜず、無根とか知らぬとか云つて通つて行ける。あり〳〵急所を衝くべき事のあるのに無效に終るのは、要するに骨惜しみに出て居る。檢事が取調べる程に行くまいけれど、進んで取調べるところ無くてはならぬ。滿鐵にしても、或る人が報告し來つた丈けでは足らぬ。それ位の事は當事者で早く片を附けて居る。いよいよ證據を抑へるに難しいにしても、出來る丈けの事をすれば、今位の事でなく、退引ならぬところを捉へる事が出來る。分り切つて居つて痛手を負はす事の出來ぬのは、政黨本部に官僚顏して控へて居るからの事であつて、眞劍に戰ふには、さういふ氣樂な事で行けるものでない。之れも逆境で智惠が出ぬとあらば仕方か無い。

(五)

藩閥時代の遺習で、何と云ふてもお上が强く、且つ力がある。お上に楯衝く者は餘り良い事がない。政府を離れて居る者は自らさう心得、叁政權の何の爲めなるかを顧みぬ。衆議院は形が整ひ居る程實を具へず、藩閥時代の遺習を示すを失はぬ。多數で政府案を鵜呑みにし、多數決の外に何の知るところが無い。それならば貴族院は何うであるか。以前から易しいやうで難しく、難しいやうで易しいと知れて居つたが、原首相は其の邊の機微に通じ、痒いところに手の屆く程の事をして居る。貴族院は[illegible]迎りであるかどうか、何と云ふてもお坊さんはお坊さん、[illegible]は因循[illegible]、有象無象を相手に鍛へた刄に觸る事が出來ぬ。理窟を捏ねるやうで埒も無い事が多い。

貴族院は政黨の色彩薄く、幹部とか陣笠とかいふものが無いやうで、自づと系統があり、之を辿つて行けば造作も無い。原首相は此の邊に口が肥えて居るが、大木法相は蛇の道は蛇で知つて居る。法相として何程の事をするかゞ疑問であつても、隨分院内の消息に通じて居る。事情を知るところもあり、特殊の洞察力をも具へて居る。大木が入閣したとて貴族院は何の痛痒を感ぜず、あゝいふ者を代表者と認めるなど不平の次第と云ふが、成程さう考へて居らう、代表者が入閣したなど思ひもよらぬ事である。然し蛇の道を蛇が知つて居る事を否定する事が出來ぬ。大木のみの力でなく、兼ねて原との關係者が手を着けてゐたのであるが、貴族院が何の趨勢であるか、讀め分つて居る。多少の反對あるに極つて居つても、結局如何になるか知れてゐる。論ずれば重大問題がいろ〳〵あり、貴族院の面目に掛けても之を提げて立たねばならぬのに、隨分お粗末な事を質問するのがある。學校に就いて、誰か材料を供給するか大體分つて居り、其儘に演說するなど、歯の浮くやうな思ひをするところがある。政府側で例の事と心得て居つても、お坊さんや隱居が何を仕出來かすかも知れぬと思ひ、相應に防禦するところがある。例の事かと苦笑ひして立ちつゝ、言葉を鄭重にし、如何にも眞面目らしく挨拶する。議場で口が滑つて反感を買ひさうならば、別に人を以つてそれ〳〵宥める。何處までも頑張る者は知れて居り、貴族院とて同じく多數決が口を利くところ、與り何うにか成るとする。

(六)

首相を始め閣員は隨分場馴れて居り、何とか處置し得るとの信念があつても、自分で分らぬ事が少くなく、外交で見當のつ

き難い事がいろ〱あり、內政でも解決に困まる事が二三のみでない。急所を衝かれる恐れがある。加藤憲政會總裁が珍らしくも質問演說するとあつて、政府側は多事を括りつゝ底氣味惡く感じ、ひよつとしたらばと思ふたところがある。ところが政府で急所とするところを逸れて居る。若し加藤總裁が平素一層注意を拂つて居つたならば、それが分らぬ筈がない。曾つて局に當り、近い頃まで外交上の權威と見られたのが、注意しさへすれば必ず氣が付くのであるのに、殿樣に成り上つてか、氣が着かなんだ。之を云ふ者が無かつたのであらう。今でも外交當局者と何程かの交際あらうが、機微を知る程の親しみがあるか何うか。直接に當局者から聞かなくても、何か其の邊の氣振りで諒解し得る事、豫ねて知つて居るでないか。貴族院で演說するに憚るならば、間接に言ひ及ぶ事、それ丈けで當局者を冷やりとさせる事が出來る。通り一遍の非出兵論では、一の議論となり、急所に觸れる事が出來ぬ。原首相は鄭重に挨拶したが、實は之れならばと思ふた所があらう。加藤も甘い男と見たところがあらう。原氏とて大隈內閣の下、加藤にも劣る狀態であつたが、地位を得ると共に目も利き、どんなもんだいといふ意氣込みになつて居らう。加藤があの狀態では、他は推して知るべしとして居らう。

(七)

ところで意外の出來事が起つたといふのは、皇太子殿下の御婚約の事である。前にも其の例があり、別段の事なからうと思ひ來つたが、何分にも世間に洩れ、人心が穩かでなく、遂に元老の位置に影響するに及んだ。原首相は自分に影響が及ぶと思はず、唯何とも困つたものといふ顏で元老等に挨拶するであらう。成るべく元老に傷かぬやうに計らうとするであらう。然し元老が世間非難の的になるのみならず、前の如く威權を維持し得ないやうになつては、貴族院に何等かの影響を及ぼさずに置かぬ。山縣公を奧の院に祀り、之で參詣人を取鎮め來つたのが、奧の院に變動があるとあつては、何とか模樣替へせねばならぬ。前には奧の院の靈驗あらたかであつて、憲政會の內にも頻りに參詣し、運の向くやうにと禱つた者があるが、之れ亦いくらか考へ直さねばならぬ。原首相は元老の威權の減ずるのを有利とするか、不利とするか。今は此の邊が考へ所になつて居る。政府案に何の反對あるか、何の修正あるか。無難に通過する方、難癖のつくに極るにしても、或る部分の痛痒を感ずるところであつて、首相自らの立場に何事も無く、政治はさういふものと心得て居る。然し之れまで元老の諒解を得る事が一仕事となつて居り、首尾好く之を成し遂げたのが、いくらか模樣替へせねばならなくなつた。成るべく踏み止まらうとして居るけれど、事の破綻は意外のところに起る。意外が意外を生む。そこで內閣が難なく切り拔け得るかゞ疑問になつて居る。

米價問題と一般國民及農民生活

米價下落と一般國民並に農民生活

法學博士 堀江歸一

米價の亂高下

米は我國民の重要消費品であり、又我國産業の主位に居る農業の重要なる産物であるに拘はらず、其價格が常に變動して、定着する所なく、然も其變動する幅の甚だ大であることは、我國の國民經濟に取つて、大なる病弊とせざるを得ない。現に最近數年間に起つた事實に徴すると、大隈内閣の時代には、一年の平作と一年の豐作との後を承けて、米價の暴落すること甚だしく、遂に政府をして違憲問題を惹起す危險を冒して、米價の調節を敢てするに至らしめたのである。然るに今の原内閣に至つては、如何であるか、寺内内閣の米騷動以來、米價は漸次下落の方嚮に向つて居つたが、原内閣に爲つてから、世間一般の景氣に促される一方には、米の收穫不足の爲めに、米價に暴騰を招いて、其調節を必要とするに至つた。然るに此問題が其一端すら解決されない内に、今度は米價が低落して殆ど底止する所なく、或は地方農民をして米の賣止をする手段に出させるとか、或は政府に迫つて、米價の騰貴を計畫させるとか、色々の點に於て、慘憺たる狀況を生じ來つて居るのである。

斯の如く主要食料品であり、主要産物たる米の價格の時に暴騰し、時に暴落することは、國民經濟上又農民經濟上に如何なる影響を及ぼすであらうかと云へば、要するに兩者の生活を動撼させ、産業を疲弊させる結果を生ずるの外ないのである。一國の經濟生活が或る程度まで進んで來れば、經濟の立て方は都會と農村との間に於て、自ら分岐せざるを得ない。都會に於て

は、住民は自ら天然に遠ざかり、商業とか、工藝とか、天然力を要することの最も少ない方面に於て、仕事に從事する一方に、地方農村は依然として地方に存する天然力に依賴して、生活の方便を求めることゝ爲るのであるから、前者は自ら都會住民の食料品に就て、其供給を後者に仰がなければならぬ。而して其食料品中の主位を占めるものは、米穀に外ならないのであるから、米價の騰落は米の消費地である都會と其生產地である農村との利害關係をして、相背馳するに至らしめなければ、已まないのである。

米價と國民經濟

現に近年米價の騰貴して居つた際には、如何なる事態が國民經濟上に現出しつゝあつたであらうか。固より我國今日の農村は米穀の產出ばかりに、其主力を注でい居る譯ではない、地方に依つては、農業よりも養蠶業の方に重きを置いて居るものがあり、隨つて近年の農村繁昌は生絲輸出貿易の旺盛、絲價の異常なる騰貴に基いて居る事實もあるが、同時に米價の騰貴が地方經濟に餘裕を與へ、又其繁榮に資したことの少なからざるは何人も疑を挾むを得ざる所である。然も此間都會の住民は生活上如何なる狀態に置かれたであらうか。本來個人の家計に就て觀察すると、家計が小であれば小であるに隨つて、米の如き必需品に對して投ぜられる收入の部分は莫大ならざるを得ないのである。果して然らば米價の騰貴は都會に於て、比較的收入の乏しい階級即ち小額の俸給に衣食して居る官公吏であるとか、些細の營業利得を得る中流以下の商工業者の生活に打擊を及ぼし、其甚だしきに至つては、彼等の生存の基礎を脅かさゞるを得ないのである。流石に今日は交通機關が發達したり、又民間經濟の實力の上進したりした結果、幾ら米穀の收穫が減少しても、饑饉と爲つて、所謂餓孚の道途に横はると云ふやうな慘狀は生ずるに至らないが、米價暴騰の爲めに、中流以下の社會階級が生活上に大なる壓迫を蒙り、其階級に屬する人々をして各自の力の伸びる所まで、之を伸ばしめないように至らせるは、甚だしき曲事と云はざるを得ない。過日獨逸の社會狀態を視察して、歸朝した人の談話に據ると、獨逸では紳士社會で、隨分懇意な友人などの訪問を受けても、殆ど其の姿を客に接見させないさうである。何故かと云へば、數年間の戰爭中食料品が甚だしく不足し、代價の暴騰で、其供給を受けることが困難と爲つた結果、中流階級の家庭に於ける主婦は其家の主人たり、又は小兒なりに出來る限り充分なる食物を給與した代りに、主婦自ら食物を節減しなければならぬことゝ爲り、斯くて各家庭の

主婦をして食物不足の爲めに、營養不良や、神經衰弱の症狀に陷らせ、自然客に接見することを回避せざるを得ざるに至つたのだと云ふことである。或は世人は之を以つて、日本と遙に隔つた獨逸に起つた出來事として、雲烟過眼に付せらるゝかも知れないが、何ぞ計らん、此兩三年我國中流階級に屬する家庭の主婦は諸物價殊に米價の暴騰する一方に、所得が之と均衡を得る程度に於て、上進しなかつた爲めに、獨逸婦人と同樣の苦境に沈淪して居るのであつて、彼等の間に神經衰弱者が多く爲つたとか、ヒステリー患者が殖へたとか云ふようなことを耳にするのも、敢て異とするに足らないのである。私は此頃來汽車や電車の內で、痩形で眼の釣上つたヒステリー性の婦人を多く見受けるが、其等の人達も要するに數年來の生活難から、心にも身體にも興味を失つて、斯く角々しい人に爲つたかと思つて、窃に同情を表して已まないのである。

米價と地方農民

然らば米價の騰貴は斯くまで都會の住民を苦しめるものであるとして、彼等を苦しめるだけ同じ程度に於て、地方農民に利益を與へるかと云へば、必ずしも其然るを得ないのである。地方農民中、農業勞働者の如きに爲れば、米價騰貴と賃銀騰貴と大體に於て、相殺される譯であるから、米價騰貴に依つて、何等の利益を受けないであらうし、小作農や、小規模の自作農に爲つたならば、高い價格で米を賣るが、矢張り價格の高い種々の消費品を購つて、生活を營まなければならぬとすれば、米價騰貴の爲めに、彼等の利益とする所は必ずしも其大なるを期し得られない。然らば米價の騰貴に依つて、眞實利益を占める者は地方の地主階級であつて、其所有する土地が廣く其收納する小作米が多く、隨つて世間に向つて、賣却する米の量が大であれば、大であるだけ、彼等の利益は增加するものと認めざるを得ない。固より米價の騰貴に伴つて、一般の物價が騰貴する以上は、米の生產費も增すであらう、地主自身の生活費も亦嵩むであらうが、是等費用の增加には一定の限度があつて、決して米價騰貴の勢の甚だしきに追隨するものではない。さうしたならば米價騰貴は結局地主階級殊に少數の大地主階級に利益を與へて、多數の消費者、農業勞働者、自作農民、小作農民等を苦しめる結果を生ぜざるを得ないのである。然らば米價の騰貴は都會に於ては中流以下の階級に屬する人々の生活を苦しめて、彼等の存在を脅かし、地方に於ては大地主に利益を與へ、小地主の利益と爲らず、前者の行はうとする土地兼併を助長するとすれば、此位ゐ反社會政策の甚だしきものは他にないのであ

る。

昔前の農民と云へば、專ら天然力に依頼して、物資を産出する、天の惠む所が多ければ、豐作で利するし、其惠が少なければ凶作で損をすると云ふような工合に、自家の運命を擧げて、天の意に任せて居つた、隨つて其思想は簡單であり、其行動は純朴であつたのである。然るに今日の農民殊に地主階級は知識の進んだ結果と云はうか、都會化した影響と見ようか、米の賣買に就て、決して簡單な態度を取つて居るものではない。米の收穫の状況に依つて、或は米を買占めたり、或は之を賣惜んだりして、資力の續く限り、價格を騰貴させ、其騰貴した絶頂に臨んで、持米を賣却して、奇利を博しようとする。農業が商業化し、農民が商業家の領域に這入り込んで、投機的精神を逞うして居ることは、爭う可からざる事實であつて、一方に投機家が斯る投機に失敗したならば、假令ひ米作は如何に平調を保つて居つたとしても、大なる損失を蒙らざるを得ない。本來平穩である可き農業經營に幾多の波瀾の續出することに就ては、農民自身に責任を負はなければならぬ事情があるのである。然し是れも最近二三年間原内閣の行つたように、殊更に金利歩合を低くし、又農民に低利資金などを融通して居れば、農民は投機を營むに就て、資金の供給を得た譯であつて、投機の間に投機的野心を生ずるに至らしめたことの如きも、原内閣の間違つた經濟政策の結果であるとしなければならぬ。

米價下落の影響如何

從來の事實に徴すると、我國の米價は或る年に騰貴したかと思へば、其騰貴の勢は決して三年なり、四年なり、相當の期間を通じて、繼續することはなく、何年かの後には必ず或る程度まで下落する、殊に一時騰貴した反動として下落するのであるから、下落の影響は餘程強からざるを得ない。米價が下落すれば、其騰貴して居つた時代と正反對で、地方農民が不利の地位に立つて、都會の住民が利益を受けることゝ爲るのは、自然の數であつて、之を大局より見るときは、嘗て損をした者が今度は得をし、以前利益を收めた者が之を吐き出す譯であつて、事の公平を得たものゝように考へられるかも知れないが、斯の如き局面の變化に寸効のなきことは、近年の我國經濟界に於て、米價騰貴の際にも、又其下落の時にも、共に社會に甚だしい動搖を生じた、否現に動搖を生じつゝあることに依つて、之を知るに難くない。思ふに經濟上の事相が絶對に平穩で、何等の變化すら、起らなかつたならば、當業者に毫末の刺戟を與へず、投資を沮喪した状態に陷らせる嫌なきを得ないが、されば と云

つて、急劇な變動は飽くまで之を避けなければならぬ。隨つて或る場合に一般物價なり、特殊の物價なりに、急劇過大の變動が現はれて來るような勢が現はれたならば、之に對して政府が適當なる調節策を講じるこそ、經濟政策の要訣とす可き所である。論より證據、今日我國に起りつゝある米價の下落は如何なる打擊を農村の經濟に及ぼして居るであらうか。數年間引續いた物價騰貴の勢に左右されて、地方の農業に於て生產費の增進したことは、明白の事實であるのに、米價に今日の下落を來しては、生產費すら償うに足らない、殊に米價騰貴の勢が尙ほ繼くであらうとか、又一旦下落しても、其れは一時の現象であつて、近き將來に於て跳ね返すであらうかと云ふような望を懷いて米を貯へて居つた者が段々加つて來る下落の勢に堪へずして之を處分した爲めに、一時に又反動的に米價下落の程度を大ならしめたのである、地方の大地主は前年來米價騰貴時代に、暴利を貪　たのであるから、今日此位の下落で損失を蒙るのは當然であると云つて、傍觀的態度に出るが如きは、農業其ものに對し、將た又國民產業其ものに對して、最も不忠實であり、又最も不親切を極めるものであつて、私の與するを得ない所である。

無策を極むる原內閣

唯私が此際に處して、奇怪に感ぜざるを得ないのは、原內閣の經濟政策である。原內閣は大正八年から九年に掛けて、米價が暴騰し、都會住民の生活が困難を極めて居つた時に、米價調節に就て何か工風した所があつたであらうか。內閣員等は工風を凝した積りであるかも知れないが、實際には毫末の效果すら奏しなかつたばかりでなく、米價の高きに乘じて、地方農民の歡心を結び、地方に政友會の權勢を張るの具に供したのである。左ればこそ大正九年下半季以來米價が下落し、地方農民殊に政友會の政治振りに共鳴して居る地方大地主連中が損失を蒙り、原內閣の米價政策に對する無爲無能に非難を加へるように爲ると、內閣員等は自家の權勢を維持する上に、一大事が起つたものゝように考へ、是が非でも米價の引上を試みようとして已まない。米價を引下げなければならぬ場合と、之を引上げなければならぬ場合とに於て、前者の態度は處女の如くであるとすれば、後者の態度は脫兎に類する。斯る豹變を來すに至る原因は何處に在るかと云へば、要するに原內閣が政友會の地盤である地方農民の歡心を繫がう、又彼等の感情を傷けまいと云ふ卑む可き黨派根性に胚胎するものに外ならない。原內閣の如く

露骨に露西亞の國民の反動を表示する者を目前に示されては、何人と雖も、政黨政治少なくとも我國現在の政黨政治に貢獻することに躊躇せざるを得ないであらう。兎に角原内閣は人爲的に米價を騰貴させた其反動として、自然の趨勢に支配された場合に於けるよりも、劇しい程度で之を下落させ、斯くて米價の暴落で、正反對の利害關係を持つ都會の住民と地方農村の人民とに其れ〲生活上に急劇の變動を惹起すに至らしめたのである。農村の人々は米價の騰貴時代には大に原内閣を德としたかも知れないが、今日に於ては怨嗟の念なきを得ないであらうと思はれる。

米價下落必ずしも有利ならず

斯く米價の下落に際して、地方農村が苦んで居る反對に都會は有利な影響を受けて居るであらうか。都會と農村と利害關係が正反對である以上は、米價下落が農村を苦しめつゝあるが如くに、都會を潤ほして居るものと見なければならぬ。如何にも私共の家計などに就て云つても、近頃米價下落の爲めに、生活費が節約され、生計上に餘裕を生じて來たことは、争ふ可からざる事實であるが、然らば、都會の人々は米價下落の爲めに、有利な影響を受けるばかりで、他に何等の不利益を感じて居らないかと云へば、吾人は決して其然るを信ずるを得ない、今日の如く都鄙の間に經濟上なり、交通上なりの關係の密接である場合には、都會の困窮は決して都會だけの困窮に止まらず、其餘波を地方農村に及ぼすが如く、地方農村が米價下落の爲めに、疲弊すれば、多數の農民は都會に就て物資を購入することの困難と爲るのは勿論都會見物に上京して、諸方面に金錢を費消することも出來なくなる道理であつて、地方の損失は自然都會の損失と爲るのである。近頃に爲つて、東京市の電車に存外空席があるとか、三越白木の如きデパートメント、ストーアの客が減つたとか、地方人相手の飲食店が閑散に爲つたとか云ふようなことは、何を語るであらうか、悉く地方農村の經濟が苦しく爲つた結果、都會に損失を及ぼしつゝある證據と見なければならぬ。さうして見れば、米價下落の爲めに利益をして居るのは都會に於ける俸給生活者位のものであつて、同じ都會に住居して居つても、直接に商工業を經營して居る當業者に爲れば、地方農村の疲弊したことに依つて、大なり、小なり、不利益の影響を蒙つた次第である。現に人造肥料は專ら地方の農業に於て、需要されるのであるから、昨今のように農村が疲弊しては、肥料の需要が減少して、其價格を低落せしめるに相違ない。處で人造肥料の製造に何人が當つて居るか、今日の如く人造肥料が

大規模で生産される場合には、化學製造業は大規模の會社組織で行はれるのを常とする、而して其會社の株式は誰れが所有するかと云へば、多くは都會の資本家に外ならない。さうして見れば、農業の不振である結果、人造肥料の製造會社が疲弊して、充分の利益なく、株主に對する利益配當を減少したとしたならば、農村の疲弊は廻り廻つて、都會の資本家を苦しめることゝ爲らざるを得ないであらう。

斯く論じ來れば、吾人の論旨とする所は略ぼ讀者の了解する所と爲るであらう。卑見を以つてすれば、米價の暴騰暴落共に國民經濟に大なる患害を齎すものである、固より需要供給の關係に變動の起る以上は、米價の絕對齊一を望むのは望む者の無理であるとしても、尙ほ米價の變動する幅を狹くすることに勉めなければならぬ。要するに此一事が一國米價政策の要訣であつて、之を閑却したならば、一國に米價政策なしとするの外はない。原內閣が時に米價を暴騰させ、時に其反動として、之を暴落させるが如きは、卽ち米價政策の求むる所に反するの甚だしきものであつて、私の攻撃を加へて、已まざる所以である。然らば一國の米價を確實にし、消費者にも、生産者にも意外の困難を感ぜしめないようにするには、國家として如何なる政策を施すことが至當であらうか。此點に就ては政策は開放的のものと、制限的のものとの二つに分れざるを得ない。

小麥市價の確實なる所以

日本人の食料品としての米は西洋人の食料品とする小麥と相匹敵す可きものである。而して平生私が最も不可思議に感ずるのは、小麥の價格が最も確實であるに對して、米價が高低常なきの一事に外ならぬ。歐洲國民は小麥の價格の實確であることを擧げて、其確實性は金の如くであると稱する。何故小麥の價格が斯くの如く確實であるかと云へば、其れは小麥が國際的商品であるからである。例へば英國の如き自國產の小麥で、自國民の需要に應じるのは、全體の一小部分であつて、他の大部分は悉く外國產を以て其用を充すのである。而して其外國產の小麥たる南米亞米利加は勿論加奈陀濠洲の遠きより來るのであつて、苟も內外國の小麥の市價に相違の存する限り、市價の低廉なる小麥は其高價なる市場に向つて、輸送され、內外市價の相違を滅するに至らしめなければ已まない。是れ卽ち小麥が國際的商品として、其市價の確實を保ち、國際間を通じて、均衡を持するを得る所以である。然らば日本は如何であるか、小麥の國際的商品であるに對して、米が孤立的商品であることは、何としても動かす可からざる事實である。詰り日本米なるものは、日本

人だけの持つて居る特殊の嗜好に適するように生産されるのであるから、内地米が收穫不足であつたとした所で、外國米を以つて、其缺を補はしめることが出來ないと同時に、内地米が豐作であつたとしても、其一部を輸出して、内地市場に山積せんとする米を處分するを得ない。是れが内地米に些細の減收が起つても、米價に暴騰を來すし、又些細の増收が生じても米價に暴落を招いて已まない根本の原因であるとしなければならぬ。

如何にして米を國際的商品たらしめる

然らば米價の確實を期する爲めには、先づ孤立的商品としての地位から米を脱しさせて、之を國際的商品とする工風に進まなければならない道理であるが、吾人は如何にして此目的を達し得るであらうか。私は此點に就ては先づ日本が米を自國内で自給しようとするが如き、小心の政策を一掃し、米は東洋の如何なる地域であつても、經濟に生産される場所から、輸入させる方針を取ることを以つて、最も必要の手段と考へる。從來でも外國米は内地の凶歉に際して、輸入され、内國米の供給不足を調節する用を爲した。然しながら其分量は日本で希望するが如き、適當のものでなく、我國が少し外國市場で買付けても始めれば、直に價格に騰貴を來して、輸入を不可能ならしめた趣がある。隨つて論者は斯る供給の不確實な外國米に依頼して、内地米の收穫を等閑に付するを得ないと論じるかも知れないが、是れは一知半解の說たるに過ぎない。從來外國米が時に我國に輸入されながら、其分量の豐富でなかつたのは、要するに我國米價政策の根本が甚しく曖昧であつて、内地の凶歉である際には、外國米を輸入するが、豐作である際には、其輸入を杜絶する、殊に之れを杜絶する方法として、相當に高率の輸入稅を賦課すると云ふ變則である爲めに、外國をして我國に供給する目的を以つて、安んじて米の産出に當らしめないからである。言葉を換へて云へば、我國の如きは外國の米產地に對しては、決して確實な需要者でなくて、不定の需要者である、時に多量の買付をするかも知れないか、時に少しの買付をもしないのである。さうすれば斯る不定の得意先に對して、外國の米産地方が不時の需要に應ずる用意をしないのは勿論である。其用意のない時に我國が内地の凶歉である故を以つて、遽に外國の米産地に就て米を需要した所で、徒に米價を騰貴せしむるに終るのであつて、是れが外國米でありながら、格外高價でなければ内地に輸入するを得ない所以と爲るのである。

之に反して我國が今、米を國内で自給すると云ふ從來の政策を一擲し、世界の何處の果であらうと、我國に米を供給する地

方があれば、之を受けると云ふ方針を取つたならば、如何であらうか。私は此場合には第一外國の米産地方では必ず日本に年々或る定まつた分量の米を供給する爲めに、換言すれば日本の需要に應ずる爲めに、米作の區域を擴張し、米の增收を謀ることと、第二是等の米産地方では必ず日本人の嗜好に適する米を産出するに勉めるに至る結果を生ずることを信じて疑はない。一方に斯く外國の米産地方が米の産出區域を擴張して、其生産費を節約する、年々定量の米が運搬されるので、運賃も低落することゝ爲つたならば、廉價な米が續々輸入されて、内地の農業が打擊を受けることは、免かれ難き勢であるが、一方から見れば、是れが米價を調節し、其確實を謀る道である。斯う爲つて内地農業で外國の米産地方と競爭し得られるものは、米作を續けて行くであらうし、國民經濟の全體から見て、米の收穫の豐凶如何に依つて、消費者なり、生産者なりに、不斷の變動を及ぼすことなきを得る道理である。現に我國經濟の發展する大勢は農業を棄てて、工業に向はんとして居るではないか。此大勢を助長するには、食料品を國内で自給すると云ふが如き計畫は之を斷念し、廣く之を供給する場所を我國の四邊到る所に求めるのが當然であつて、斯の如くして米價は自然の働きで確實性を得るに至るのである。

制限的米價政策

然し我國が古來農業を以つて、立國の基礎として居つた事實は今日農業其ものゝ自然に衰微す可き趨勢に逆行しながら、尚ほ之を自然の趨勢に任せることに就て、之を非なりとする議論を生ずるに至る有力の原因たらざるを得ない。斯くて米價の調節を計畫する場合に於ても、上記の如き開放的政策を行ふことは甚だ困難であり、隨つて事實問題としては、矢張り從來の通り豐作の際には、内地米で剩餘を告げる程の供給があり、凶作の際には、外國米を輸入して尚ほ不足を告げると云ふ需給の關係の極めて不調和である狀態を前提として、米價の調節を謀らなければならないことゝ爲るのである。需給の關係に於ける本來の不調和を矯制しようとするのでなく、即ち事の本體を正すのでなく、唯其末節に現はれる價格の變動を抑制すると云ふのは甚だ困難の事實としたければならぬ。近日政府が議會に提出すると云ふ所謂常平倉に關する制度の如き、此無理を敢てしようとするものである。單に政府が倉庫を設立管理し、豐作の爲めに、餘剩と爲つた米を貯へて、凶作の時に市場に出すと云ふことだけであつたならば、其仕事は極めて容易であるが、前者の場合に米が市場から引上げられゝば、其れだけ供給の過剩を制す

るであらうし、後者の場合に米が市場に出たならば、其れだけ供給を潤澤にする道理である。然るに今日所謂常平倉に對して世人の望んで居り、又之を管理する政府の期して居る所は何であるかと云へば、決して斯く豊作時と凶作時とに於ける需給を調節させるだけに止まるのでなく、今一歩を進めて、米價に常調を保たせよう、米に公正の價格を持たせようと云ふのである。如何にも米價を正常の點に維持する、經濟學に所謂公正價格なるものに落らせるのは、甚だ結構の事に相違ないが、常平倉の制度で、此目的を達し得るかどうか、又無理に達したとした所で、果して損得の關係は如何なるものであらうか、私共の考へなければならない點である。

常平倉制度如何

米の豊作に當つて、米價の下落するのは、當然であるが、常平倉制度が出來た場合に、政府は第一如何なる價を以つて、米の公正價格であるとするか、第二如何なる分量の米を市場で買上げたならば、此公正價格を米價に現はし得るとするか、此制度の運用上、必ず決定しなければならぬ問題である。第一の問題は米に種々の品質あり、品質の異なるに隨つて、價格の等差あり、而して生産費にも時に依り、又場所に依つて品級ある以上は、解決に最も困難を訴へる所であつて、政府は事實之を決定する煩に堪へないであらうし、又之を決定したとした所で、常に民間に苦情が起り、又之を訂正させようとする運動の生ずることは必然の數である。假に公正價格の決定宜しきを得るものと假定しよう。政府の案では一旦決定された價格を以つて今後幾月かに亙つて、米を買入れると云ふのではなく、時々政府なり又政府に附屬する或る機關で、時々公正と考へる程度に於て、價格を定め之を以つて米を買入れるものゝようである。果して然らば常業者殊に投機業者の如きは、政府が如何に買入價格を決定しようとするか、此機微を知ることに、在らん限りの力を盡し、個々之を知り得た者が投機市場に勝を制するに至る譯であつて、其間に起る弊害は今日より吾人をして顰蹙せしむるに餘りあるのである。

斯る困難を排して、常平倉で或る程度の買付をすることは、果して米價の引上を實現するに足りるであらうか。思ふに米價の下落した場合には、政府は今月或る程度の價格で、若干量を買入れ、斯くて幾分でも米價が騰貴して來たならば、次の月には、此幾分騰貴した價格で買入れを行うことゝするのであらう。さうすると全國の農民なり、米穀の引商なりは政府が米の買入れを始めたとすると、直に之に應じるよりも、益々政府の

標準とする最高値に達した時まで持堪へて、賣る方が利益であると考へて、自然賣惜をすることゝ爲る譯であるから、米價は一寸でも政府で買付を始めたと共に標準價格まで昂騰するであらうが、同時に政府は買入れた米を賣出せば、直に米價に崩落を來すことを免かれないから、市價より餘程高い標準價格で買入れた米を豐作の續く限り、何時まで常平倉內に貯藏して置かなければならぬ。是れが幾何の米の數量で又幾何の資金に相當するか、豐作の程度に依つて、定まるものであつて、財政は之が爲めに未知數の負擔を蒙らさるを得ないことゝ爲るのである。世間の噂に依れば、政府が常平倉の所要資金として、用意する所は僅に五千萬圓に過ぎないと云ふことである。假に米價が一石二十五圓に下落した場合に、右の資金で買入れ得る所は二百萬石であり、買入れと共に、少しでも價格に騰貴を來したならば、買入れ得る分量は二百萬石以下に止まる。米の收穫六千萬石にも上る場合に、其三分に當る二百萬石の買入れで、能く米價を支配し得るであらうか。固より米に對しては必然の需要の動かす可からざるものがあり、此需要を超過した若干の剩餘の爲めに、米價全體の下落を來すものには、相違ないが、其れにしても三分の供給を市場から引去つただけでは、價格に大なる影響を及ぼすものとは考へられない。更に反對に米價が騰貴した場合には、政府は貯藏米を賣出して、價格を支配する考であらうが、政府の賣却し得る貯藏米の高が明に民間に知れ渡つて居るとしたならば、恰も正體の判然して居る幽靈は誰れも之を恐れないと同樣に、米價を引上げるに、大なる効果ありと思はれない。米價を引上げようと思ふ者は政府の貯藏米に對抗するだけの買占めを行へば、優に其目的を達し得るの道理である。

米專賣制度

常平倉案に比較すれば、米の專賣計畫の方が價格の常調を保たさせると云ふ點から考へて、遙に筋道が立つて居るのである。然し米の生産費は一般物價の騰落に依つて高低せざるを得ない、一般物價が騰貴した爲めに、米の生産費が高く爲り、政府で米を買入れるのに高價を拂つたとして、一方に米價の常調を保つ必要から、之を買入價格と大差ない價格で賣る、次第に依つては、買入價格より低廉な價格で賣ると云ふようなことは財政上の關係に於て、到底政府の忍ぶ能はざる所であらう、又米が意外の豐作で、收穫高に異狀を來したとして、際限なく政府が之を收納して、他日の用に供すれば何等の問題も起らないが、斯る狀態が兩三年も續いたならば、政府は如何するであら

うか、必ず收穫高を制限する爲めに、米作の段別にまで干渉を加へるやうな手段に出ることを必要としないであらうか。然らば米價の調節される犠牲として、吾人は國民產業が政府の干渉で、其發展する機會を挫折せしめられると云ふ損失を忍ばなければならぬ。

以上の論點から考へて、私は米價に常調を保たせる必要は飽くまでも之を認めるが、此目的を達するに就て常平倉とか專賣法とか云ふやうな官權の加へらるゝ制度は先づ他日の問題とし、今少しく經濟上の働きに適した方法で此必要に應じさせるのが當今の急務であると信ずる。即ち常平倉や專賣法は國民給養の點に就て、國民をして內地に跼蹐せしめようとするものであるが、私は國民をして國際間に馳翔させて、此問題を解決する餘地があり、又是れが最も我國に適した解決法であると認めるのである。

米價の歸趨如何

諸井四郎

一

我國民生活に對し最も重要なる問題は、食糧品就中米の問題である。之が解決は如何に產額を增加し豐凶の差を遞減して常に過不足なからしむるべきか。其價額の變動を著しからしめず適當に之を調節し以て國民生活を動搖なからしむるかの二點にある。前者の場合は土地の開墾、地目變換、湖海の埋立及干拓等の方法、殊に開墾助成法の發布に依り益々增加の趨勢を現はすべく、現に農商務省の調査に依るに明治三十八年より大正六年迄十三箇年間の耕地增加の割合は田に於て五分八厘、畑に於て一割八分六厘、合計一割一分八厘に當り平均一年田に於て一萬二千町步、畑に於て三萬六千町步合計四萬八千町步の增加と稱へて居るが、米のみに就て見る時は其栽培總面積三百萬町步を超え、平年作五千六百萬石を數へる。近年施肥の增量、品種の改良其他一般栽培技術の進步に伴ひ、栽培面積の割合に比して產額漸增し、大正八年度に於ては六千八百萬石、大正九年度

六千三百萬石を唱ふるに至つた。隨て之に臺灣及び朝鮮の産米を加へ、平年六千萬石以上の産額を見るに至らば、略ぼ供給問題は解決すべき筈なるも、年々増加する人口の割合に對し、年の豐凶に依る數量の増減により此の變動を甚しくするは洵に將來に對して寒心に堪えないものがある。之れ隨て一面には數量の増加を圖り、一面には價額の調節を爲す必要生じ、政府が現に立案中の常平倉制度の施設研究の如き畢竟之が爲めに外ならぬ。米價問題が漸く沸騰したるは歐洲戰亂の開始と共に、我外國貿易過に旺盛となり、國內生産業の活潑となりて正貨の激増と物價の騰貴と相俟て昂騰し、終に大正八年末空前の價額に勃發するに至つた。然るに大正九年三月財界の恐慌襲來し、漸く下落の道程を辿り、九月收穫豫想發表せらるるに及び、俄然暴落して十二月上旬には春初に於ける高値の半額以下となつた。茲に於て帝國農會を中心とする不買同盟を形成するに至て再び米價問題が世上の注意を喚起するに至つたのである。隨て米價問題の歸趨は適當なる政策確立し、制度整備するに至る迄常に云爲せらるべきものと思ふ。

二

抑も此問題は之を消費者側より見ると生産者側より見るとに

依り議論の歸結が自ら相違する。隨て上述の如く其相場が極度に下落した際に在ては生産者側より起る苦情の聲は或點まで之を認容しなければならない。併し今日の米は生産費の極度に膨脹した當時高價なる勞銀、肥料及び農具を以て生産したものであるから、現在の價額を以てしては引合はないが、其前年に於て物價の低き折に生産したるものは相當の收益を擧げ其一部は現に貯蓄し一部は投機其他に濫用したるものと見ねばならぬ。隨て一般の物資が多大の損失を受けたに拘らず、農家のみが既往の利益を無視して現在の損失を訴ふるは謂れないものと思ふ。左程一般の生産業者に比して農民は自己の農産物に對する思惑も僅少であるか、近年農家の投機思惑が著しくなり商人的となつたのは事實である。尤も如何に米價が高値で賣買されるからと云つて、耕地の限界を自然に受けて居るから作付反別の増加も自ら限りがある。又耕法の改良、施肥の増加等に依つて、反當りの收穫を增大する事も亦同じである。隨て他の物資と同じ割合に當然低落すべきものと斷定するのは酷ではあるが、實際上米價の變動が農村の經濟を危機に瀕せしむると云ふも、中小農たる農民に對して影響するよりは寧ろ夫れ以上の大中農、換言すれば小作米を收納する大地主が商人化して半ば投機思惑に對する關係が著しいのである。固より自由職業時代の今日に在

ては獨り農民側の結束を妨げる理由もなければ、自衛上の權利として當然の歸結ではあるが、其運動の主體が眞正の農民でなく、所謂農民を僭稱する農業資本家たるに於ては果して一般の農民の爲めと云ひ得べきか。今農商務省の發表に係る所有耕地の廣狹に依つて區別した地主の數は、大正二年以降大正六年に至る五箇年平均に依るに十町歩以上の地主四萬一千四百三十四人五十町歩以上三千三百二十九人農家戸數の割合は自作農三割一分弱小作農二割九分弱、自作兼小作農四割弱、而して純然たる小作農家の數は僅か百五十五萬戸である。隨て不賣同盟を唱ふる多くの者は十町歩以上を所有する地主側である。彼等は生産者にあらず所有者である。自ら耕作して收得するに非ず多量の小作米を所有し商品として販賣する商化農民である。商品米を持たない農民は之に參加しても獲る所の利益全く無いのである。或は消費者側と共に反對すべき素質の者である。況んや不賣同盟の如き自然に逆行したる行爲が到底成功すべきものでない。殊に消費者側より見るも昔時の如く自給自足の時代に非ず社會共存の理法の下に生活する今日に於ては此種の脅威が著しきだけ、相俱に一致して之に反抗すべき當然の理由がある。之が相互の利害を一致せしむるは爲政者が政策に讓り此場合に於て米價は如何なる程度の相場を以て相當とすべきか、財界對需の大勢より觀察して之が標準を立つる爲め、先づ既往の推移を一瞥して前途を豫想するも興味ある問題なりと信ずる。

三

大正三年以來歐洲大戰の影響を受け財界は活躍し物價頗りに昂騰したるも米價は大正四年度に於て最低十一圓四十二錢最高十三圓九十二錢を唱へ農家は却て暴落に苦しんだ。當時大隈内閣は米價引上策採用の爲め極力盡瘁したるに拘らず、依然暴落を重ね、大正五年中には安値十三圓四十錢を見たのであるが大正六年に至り物價の昂騰と移米の減少とは、遂に二十圓を突破して最高三十八圓七十錢を見るに至つた。爾來漸騰し大正七年寺内内閣は極力之が低下策を試みたるも及ばず、原内閣に及大正八年末空前の價額たる五十二圓六十九錢となり、大正九年三月の恐慌襲來と共に低落して現今二十五圓を唱ふる半額以下に暴落した。之を既往に顧るに明治二十二年は凶作の關係上前年の最高値五圓九十七錢の約倍額たる十圓八十五錢となり、同三十年は日清戰役後の好景氣と不作の爲め前年の高値たる十二圓十六錢に對し、十六圓八十七錢と昂騰した。明治四十四年は前年度の凶作と急激なる財界の膨脹により二十二圓二十六錢の高價を見せ、豐作なりし四十二年の高値十三圓六十五錢を放

くこと略十圓であつた。固より米價の騰落は年の豐凶に依ること勿論なるも經濟界の反響亦著しく全く靜止の狀態には至り得ないのである。

更に翻て一言すべきは明治元年より大正六年に至る五十年間の米價平均變動率である。其最高最低の差少きは七分三厘、多きは九割〇九厘であつて、平均は三割一分見當の移動である。即ち此の變動率は最高と最低との比較率であるから、中値即ち適當の米價より見れば其半數の一割五分に過ぎない。然るに歐米に於ける主要食糧品たる小麥の市價變動率を見るに、米に比較して著しく少なく平均一割内外であるが、斯くの如く相違を生ずる原因を研究するに、第一に主要生産地の分布狀態が相違する點である。即ち生産地の主なるものは北米合衆國、加奈陀、亞爾然丁、及濠洲等であつて、南北の兩半球に對し、偏く分散されて居る。隨て天候其他自然の脅威に對して調節の便宜を有するに反し、米の主要產地は印度より日本に到る東洋方面に殆ど局限され、自然に對して抵抗する調節の便宜に缺けて居る。第二は農耕從事者の農業的知識の相違であつて、耕法、治水、施肥、灌漑等、小麥に比し米作の方が遙かに劣つて居る。殊に印度地方の如きは大部分自然の支配の下に人力が之に隨伴して耕作を行つてゐるに過ぎない。第三に稻と麥とは其植物的性質に於て豐凶の差を著しく受け易い傾向を有つて居る。即ち是等の諸點が米價と小麥價額との變動を多からしむる原因となてつゐる。然るに日本米は更に印度、西貢、暹羅米と異り、其生産と消費は日本と云ふ局部的地方に限られ、耕法も亦集約的なるが爲め、風水害或は旱害等に依る減收の影響も可なり多大である。是等の理由に依り我米價が常に騰落の變動率に於て小麥乃至他の產米よりも激しいのは當然の歸趨であると云はねばならぬ。戰時中米國の如き小麥に對して一弗二十六仙と云ふ公定價額を附し、當初は時價以上と唱へられたが、其後諸物價の騰貴に伴ひ更に昂騰し、殊に歐洲方面輸送に依つて五六十仙の打歩を附して賣買された。元來米國の公定價額は最低標準を規定したものであつて、該政策の撤廢された千九百二十年の六月以前に在ては、米國の財界も相當に好況を持續して居つたが爲め、可なり成績の見るべきものもあつたが、其後不況の浸潤と共に、小麥の價額も漸次低落し今日に於ては一弗四五十仙見當とまで暴落した。之に依て見るも小麥の低落率は米價に比し割合に僅少であると云ふ事を事實に證してゐる。然し農民は生産費以下の價額なりと稱して不賣同盟を結び、或は農業資金の低利融通を要請する等、財界不況の影響は世界的に其揆を一にしてゐる。

四

嘗て「インベストメント、ウイークリー」誌は斯ふ云ふ事を云つた。世界に於ける戰爭は大約五十年を劃して勃發し、戰爭後平均二箇年目に食料品殊に小麥の價額が騰貴すると。那破翁戰爭は千八百十五年であつたが其後二年を經た千八百十七年から騰貴し、更に五十年を經過した千八百六十五年に南北戰爭が終了するや、其後又た二年を經た千八百六十七年から騰貴し初めたと傳へて居る。千八百五十五年のクリミヤ戰爭及び千八百九十八年の米西戰爭の際も約二箇年を經過して同一の狀態を示した。必しも然りとは斷定し得ないが、這般の歐洲大戰が終了したのは、千九百十八年十一月であるから、若し二箇年後に騰貴する傾向があるならば、我國に於ても本年以後に於て正に騰貴すべき譯である。即ち之を我國の例に見るに、慶應三年改元して明治元年となり伏見鳥羽の戰亂收つた時は凶年であつて、明治二年には米穀不足の爲めに一圓十錢を安値として十圓以上に暴騰し、南京米を輸入して緩和を圖つた事がある。明治十年の西南戰爭後二年を經、前年の凶作を受けて騰貴し、深川の在米僅かに四萬俵に減じた事がある。明治二十七八年の戰役後財界好況の爲め明治三十年には肉作の影響と共に頻りに奔騰し、十三圓臺に突破したが、反動は翌三十一年に至りて現はれ、更に二年を經たる三十三年より漸次恢復の氣運に向つた。明治三十七八年の日露戰爭に於ては四十年に財界の恐慌を來し、四十一年迄持續したが、四十年の爆發値十七圓七十錢を見たる後、二箇年間沈靜し四十三年から再び昂騰するに至つた。固より今日の狀態を取つて既往と同一なりと速斷するのではないが、唯だ過去に於ては斯の如き傾向が洋の東西を問はず現はれたと云ふ事は時に注目すべき事實である。

五

玆に於て米價の適當なる價額に果して幾何なりやと云ふ問題に逢着する。固より適確に算定し得べき性質のものではないが、今日の國民生活を基本にし、同時に財界の狀況に順應し一般物價と比例し得べき米價の大體を豫想する必要がある。昨年勸業銀行が全國農家七千八百餘名の報告を基礎として調査した耕地に對する利廻計算は上田七分四厘二毛、中田七分九厘二毛、下田九分〇二毛、上畑六分八厘一毛、中畑七分一厘、下畑七分七厘七毛であつて割合に好利廻を示してゐる。同時に農業勞銀も統計に依つて見るに一六〇・四の指數を數へ他の職業別たる建築業十二種一六七・七器具製造業十一種一六一・二服裝業九種

一五一・九飲食物製造業五種一五二・七雜業八種一六六・五總平均一六〇・八に對し決して著しい徑庭を示して居らぬ。隨つて指數上より見る時は農村經濟が著しく疲弊して居るとは思へぬが若し米價以外の下落より受けた損失、例へば各種投機より蒙つたものを加算して米價の引上げ理由とする者あらば之は斷然排斥せねばならぬ。今金利方面より觀察した勸業銀行の宅地及び田畑に對する年利の推移を見るに大正九年上半期は宅地・〇七七厘、田畑・〇七三厘同年下半期は宅地・〇八〇厘、田畑・〇七六厘を現はし、何れも宅地の方が上である。固より田畑等に對しては特に低利資金融通の點もあるが、概して都市に於て資金需要は多く、農村は割合に財界反動の影響が少ないとも見られるのである。最近稻垣博士は米の適當價を三十六圓九十三錢と發表せられたが、或る論者は生産費より見たる一石當りの實價を次の如く計算してゐる。卽ち生産費十七圓六十二錢土地資本に對する利子七圓、其他の利子七十三錢九厘、農業者を勞働者と見て之より生活費を控除したる收益、五圓二十五錢、計三十圓六十錢九厘と數へ、之に屑米其他の雜收入として一圓九十錢を差引き二十八圓七十錢九厘を以て一石の適相場としてゐる。そして運賃其他の經費として一圓七十錢を計上してゐるから三十圓四十錢九厘を以て市場に於ける生産費より見たる適當なる米價としてゐるが、之を至當なりとするも畢竟物價の昂騰した當時に於ける算當である。隨て世間傳ふるが如く農家の延相場が石三十五圓以上の高價でないことは信ずるに足る。假りに生産費が其主張の如く多額なりとするも其多寡は決して實價の決定に對して絕對の標準とはならない。何となれば物價の高低、需給の狀態、若くは金融の關係等經濟界の事情に依つて專ら決定されねばならない。日本銀行調査の一般物價指數は大正九年三月に於て四二〇を示し、同年十一月は二七三に低下してゐるが、米の指數は戰爭前一三五にして戰後最高値四六二となり、本年一月は二四四に低落した。卽ち最高騰貴率は二十六割であるが、現在の騰貴率は八割一分である。隨て消滅率は十八割三分となり、此點より見れば戰後物價の安定が戰前の二倍乃至二倍五分とすれば現今の八割一分が一般の物價に比して安値に在ると思はれる。併し大體に於て物價下落の大勢に順應し、豐作を受けた供給過剩の事實、若くは外米の在高並に外米の引合價額より見れば、尙下落の機勢を思はせるのであるが、併し財界活躍の餘波を受けたる農家資金の猶ほ潤澤なると、最近金融界の緩慢なるとは、暴落を呼號して、一般人氣を煽動する帝國農會の活動若くは政府の豫定計畫たる常平倉其他の施設と相俟て益々農家を賣惜しみの態度に出でしめ、意外に米價の下落

を防止する事なきか。固より米價引上の人爲策が奏效して賣出を抑制するも、同時に消費を減じて貯米量を多大ならしめ、却て反動を招來するに止まるが、要は數量上の調節を行ふのが歸結であるから、若し常平倉の確定成案を見る事早ければ輸移出入の鹽梅を以ても或る程度迄は調節を行ひ得る事となる。以上の理由に依り米價の下落を更に多大なるべしと考ふるが如きは財界各種の事情を綜合するも不可能なりと信ずる。尙米穀の配給に對して將來社會化を必要とする專賣法案若くは現に論議せらるゝ常平倉問題は之を後日に讓り、今は唯だ米價の趨勢を論ずるに止むる。



勞働者道確立の提唱

勞働者道の確立

法學博士　堀江歸一

武士道と云ふことは、昔から人々に依つて傳唱され、其何ものであるかも、略ぼ理解されて居る。近頃紳士道とか、商人道とか云ふ言葉も出來て、色々の解釋が下されるようである。詰り人々が職業なり、生活なりの關係から、一つの特殊的階級を形ち作つた場合に、此階級に屬する者の歩む可き道が自ら定まらなければならぬ。此道のことを世間で何々道と云ひ、自分等も何々道と呼ぶのである。武士が農工商の諸業に從事する者に比較して、社會の上位に立つ者であると云ふ自信の下に、武士道を立て、文武の教を勵くと共に、忠孝仁義を道の正しくし斯くて武士と云ふ階級の風儀を維持し得たのは、著明の事實であつて、武士道を守つたとか、武士道に外れたとか云ふことが武士の間に於ける道德を律する標準と爲り、文共行動を定める規矩と爲つたのである。

資本と勞働との關係が次第に緊張して來る一方に、勞働者が社會に於て一つの階級と爲り、其成立に於て、其所業に於て、將た又其思想感情に於て、他の諸階級と異なるものが出來、勞働者階級に列する者の多くが勞働者を父とし、母とする關係から來て、所謂世襲的階級を形ち作りつゝあることの著しき場合には、吾人が勞働者道なるものを明にし、勞働者をして其日常の行動に於て、準繩とする所を知らしめなければならぬ。

何を以つて、吾々は勞働者道とす可きであらうか。私は其要領を個條書きにして、示さうと思ふ。

一、勞働者は社會の一員であることを記憶し、其行動をして、社會全體の利害に調和させなければならぬこと。

今日諸外國には「若しも勞働者が天下を支配したならば」と云ふような標語を掲げて、勞働者專制の恐る可き結果を生ずることを暗示して已まない趣きがある。勞働者は決して全智全能でなく勞働者の生活亦必ずしも社會生活の全部ではない、然ら

ば、勞働者が勞働力の賣る可きこととのみを知つて、他の總ての事物を度外視したならば、如何なる結果を生じるであらうか。他の事物の枯れると共に、勞働者も亦衰へざるを得ないのは當然の成行であるとしなければならぬ。社會に存在する各種の生業にはそれぞれ存在す可き理由があるのであるから、特に勞働のみの專制を作り出さうとするが如き、思ひ及ばざる所である。

又斯る極端の所まで行かず、唯勞働者の爲めに、利益を偏獨するに就ても、四方の事情を參酌しなければならないのは勿論であつて、此點は彼の勞働組合論者に當つて、其解決を勞働者に有利ならしめようとするには、輿論の勞働者側に對する援助の大切なことを以つても、其一斑を窺ひ知るに難くない。勞働者階級が努めて社會各階級の利害と調和し、又之を維持することに勞働者道の第一歩として、吾人の重きを置く所である。

二、勞働者は資本家に對して、飽くまでも對等獨立の地歩を占めなければならぬこと。

勞働者は他の人々と同じく、社會に存在する義務を負はなければならぬが、資本家に對しては何等不當服從と云ふような關係を持たない、純乎たる獨立の地位に居るのである。即ち一定の勞働報酬に對して、一定の勞働力を賣ると云ふのが、現代に於ける資本勞働關係の根柢に立てられるのであつて、或は此關係は惡いとしても、私有財産制を基礎とする經濟組織の下に於ては、已むを得ざる所である。既に然る以上は勞働者は資本家に對して、對等の地位に居り、此地位に據つて、自己の勞働力に對して、自己の認めて適當と信ずる勞働報酬を資本家に要求し、彼をして之を支拂はしめるのが當然であつて、從來の如く資本家の獨裁で、賃銀を決定させ、勞働者が唯々諾々之に服して居るが如きは、勞働者道の斷じて許さゞる所とす可きである。

三、勞働者は資本家に對して、契約上の義務を履行しなければならぬこと。

從來の勞働協約には資本家が勢威を挿つて、殊更に勞働者に不利益と極まつた條件を定め、其履行を勞働者に强要するの傾きなきを得なかつた。左ればこそ勞働者が何等の豫告を與へないで、殆ど不意討ち同樣に同盟罷業を企て、資本家に一驚を喫させるのも、痛快事と考へられて居つたのであるが、既に勞働者が前條の通り、資本家と對等の地位に進み得るものである以上は、勞働者道の一條件として、資本家に對し、當初契約しただけの事は契約の期限内を通じて、固く守る信義に服しなければならぬ。日本の資本家などの間には時々「我國の勞働者は權利ばかり知つて居つて、義務を知らない」と云ふ苦情を述べる人もあるが私をして云はしめれば、實は權利も義務も共に知らな

いのであつて、之を知らしめることが即ち勞働者道の要訣であると思はれる。

四、勞働者は社會上の地位を上進させることに、不斷の努力を爲す可きこと。

勞働者が社會上の地位を上進させることは、社會階級に判然たる差別の出來た今日に於ては、甚だ困難であるが、如何なる人と雖も、一つの階級から他の階級に移ることは兎に角としても、常に向上の精神を持たなければならぬ。勞働者の向上は貯蓄を通じて、資本を得ることに依つて行はれるか、知識を收めて企業に參與することに依つて行はれるか、其れとも勞働者團體として、產業を管理することに依つて行はれるか、手段方法に就ては、兎角の議論はあるであらうが、向上の一道に就くことは、勞働者をして自覺させ、修養させ、訓練させる所以であつて、吾人が勞働者道の一つとして、重きを置く所である。

五、勞働者も亦一個の人間であると云ふことを忘れてはならぬこと。

之を要するに勞働者も亦一個の人間である。然る以上は勞働者道と云つた所で、人間道の一部分に過ぎない。人間道として何が重きを置かれ可きものであるかと云へば、人に依つて多少解釋に異なる點もあらうが、詮ずる所、愛であり信であり、義である。勞働者が人間として働く場合に吾々は彼は何を要求するであらうか。又彼は人間として何を社會に望むであらうか。勞働時間の短縮にしろ、其他の勞働條件の改善にしろ、要するに現代の文明社會が勞働者を人間と認めた結果として、彼に許すことゝ爲つたのである。社會が勞働者を人間と認めることが甚だ遲かつた、否今日に於ても未だ認めない點がある。是れが勞働運動をして過激な調を帶びさせる原因と爲る所以でもあらう。社會は勞働者に人間的待遇を與へることゝ爲つて來た。勞働者も亦信、愛、義と云ふような人間道を歩んで、勞働者道を切磋して行くことに心掛けなければならないのである。

生活としての勞働

長谷川如是閑

一 行動としての勞働

「勞働」といふ言葉は、いろ／＼の意義に使はれてゐるが、それを倫理的に考察する場合には、最も廣義に解釋する必要がある。啻に經濟的の價値を產む動作に限らず、政治的の役目、設

判官の仕事、職工の制作、俳優の演技、詩人の作詩……それらは皆勞働でなければならない。で私は、生活は勞働であるといふ解釋をさへ取るのである。

生活には將へることもあり、哀しむこともあり、歩くこともあり、眠ることもあり、唱ふこともある。そのすべてが悉く勞働とはいはないのであるから、生活が勞働であるといふのは意義を爲さないやうであるが、然し、それは一方で『勞働』といふ用語を經濟的に局限し、他方で『生活』といふ用語を餘りに擴たせしめた爲めである。無論普通は『勞働』といふ言葉も『生活』といふ言葉もさう解するのは決して間違つてはゐないのであるが、更らに『勞働』をもつと廣義に、『生活』を今少し狹義に解すれば、勞働即ち生活といふことの妥當であることを直ちに發見し得るのである。

手取り早くいへば、人間的生活の意義は、社會的生活に於て見出され、社會的生活は、社會的價値を持つた個人的生活に於てのみ充たされる。個人的生活が社會的價値を持つといふことは、個人の行動が隣人にとつて何等かの價値を持つことで、純個人的行動の場合にもそれが隣人の生活價値を增する時には、社會的價値を持つのである。さういふ行動を『勞働』といふのは餘りに廣義に失するやうであるが、生物の集團生活に於ける勞働は、殆んどその意義なのである。さうしてそれは生活そのものなのである。此價値は決して悉く經濟的に換算される譯ではないが今日では殆んど皆經濟的に換算されてゐるのである。――無論正確に、此の行爲の眞價値を評價してゐるものではないが、然し、その行爲の他人に對する反映だけは、大凡のところで評價されてゐるのである――例へば詩人の作詩は、普通所謂勞働とは、云はれてゐないにしても、それは立派な社會的效果を持つた行爲であつて、他人の生活價値を增すのである。そこで他人（社會）は、その行爲を或る度合で要求すること、冬になれば各戸が石炭を要求するのと異るところはない。そこで、さういふ詩は、私の所謂廣義の勞働の範疇に入るのである。さうなると、その作詩行爲は、やゝもすれば普通の勞働と同じやうに、經濟的價値に換算されることになる。平らたくいへば、詩が賣られ、又買はれるのである。然し勞働を生活行爲と見れば、賣られるとか買はれるといふことは重大なことではないので、社會が買はざるを得ないやうな勞働價値がその作詩行爲に內在することが重要の點なのである。社會的價値は、必ずしも經濟的價値のみではないのだから、勞働は本來經濟的價値を唯一の準據としてその價値を計算すべきものではないのである。生活の價値は、場合によつては、全く經濟的價値と沒交渉な方

向を採ることもあるので、又假令、その大部分は、經濟的價値と一致したにしても、それは、結果であつて、原因ではない。言ひ換れば、經濟的價値があるから生活價値があるのではなくて、生活價値があるから經濟價値があるのである。詩人の詩は高く賣れるから社會が尊重するのではなく、社會が尊重するから高く賣れるのである。商品はこれに反して、高く賣れるから——需要が多いから——社會がそれを珍重するのである。で勞働が商品化すると、矢張り、本末を轉倒して、勞働價を本にして經濟價を量らずに、經濟價を本にして勞働價を量ることになる。それは生活の破壊である。

されば勞働は社會的に生存する人間の生活そのものである。それは經濟價の計算から生れないで、生活そのもの丶力から產れる。それを普通『衝動』といふ言葉で言ひ現はしてゐるが、その言ひ方を採用すると、勞働は、社會的價値を持つ生活の衝動が動作に現はれたものに過ぎない。それは殆んど意識目的を持たないほどの、深い根柢から發動してゐるのである。

社會的動物である人間は、自己の完成せしめつ丶ある生活について、意識目的を持つてゐない。何故なればその完成せしめつ丶ある生活は、自分だけの個人的生活ではなく、隣人との協同生活であつて、その全的進展は、自分一人の意識目的では、それを如何ともすべからざるものだからである。言ひ換れば、自分の意識目的と隣人の意識目的との何方が勝つかは誰れにもわからない。のみならず、自分一人の生活目的そのものも、決して常に自分の意識に判然と映じてゐるものではない。何故に自分は、かく／＼の行動を採るか、といふことについて、自分の意識で思惟してゐることは大抵間違つてゐる。このことはフロイド派の心理學者が殊に高調してゐる點であるが、新しい心理學では、すべて多少とも『意識』の不完全を承認してゐないものはない。例へば或る人が、失戀の爲めに故郷を去つて遠方に旅行を思ひ立つたとすると、其人は、何處を歩いても決して面白ろくなく、甲地から乙地へと轉々するに違ひない。その時に、其人は、甲地を去つて乙地に行くに至つた原因を乾度甲地の景色が好くない爲めだとか、人間が氣に喰はぬ爲めだとか、いろ／＼のことを自から意識するに違ひないが、然し彼は彼れ自身をそんな風に不愉快にさせた眞の原因については却つて意識しないことが多い。然し斯様な意識の錯誤は、決してヒステリーの男女のみに限ることではない。生活を支配する衝動は、決してその衝動を持つ人の意識に上つて來ない。そこで、生活の衝動の現はれであるところの勞働は、眞の人間的勞働であればあるほど、それは無意識的發動である。

二　社會的必要と個人的衝動の交互作用

勞働が無意識的發動であるといふやうな事は、文明的勞働に於ては、決して當てはまらないことである。今日の勞働は、全く資本の利潤を作り出す機械的動作であつて、何等衝動的のものではない。がこれは、決して人間の生活に於ける勞働の眞の狀態ではないのである。生活としての勞働は、資本によつて躊はれて、その生産の果實を更らに資本に繰り入れるといふやうな仕事ではなく、全く個人が、社會價を持つた生活をする場合の動作なのであるから、それは、社會的生活の必然性に支配される外、他人の制肘を受ける性質のものではない。即ち勞働は社會的必要と個人的衝動との交互作用なのである。

その意味は社會的生物である人間は、一方に於ては、その個人的衝動に於て、當然社會的衝動に於て當然必要を充たすと同時に、他方に於ては、その社會的然個人的衝動を感ずるのである。例へば、電燈電話等の發明は、或る科學的天才の創造的の衝動によつて產れたのであるが、然しそれは同時に强い社會的必要に應じてゐるのである。食料として魚類の必要の多ければ多いほど、海邊の人民は、海洋に於ける冒險により多くの衝動を感ずるのである。社會的必要が個人的衝動に反映し、個人的衝動が自づと社會的必要を充たすといふ精妙な關係は、人間が社會的生物であることの必然の現象なのである。尤も此の精妙の關係は、文明の社會制度が不自然の狀態――殊に資本制度の建設――に陷つた爲めに、一方に於て、個人的衝動が社會的必要に微妙に反映する働きを失つたと共に、他方に於て、社會的必要が、個人的衝動に反映する働きも、極めて不整確になつてしまつた。尤もさういふ整確は、人間の社會よりも動物の生活に於て、動物の生活よりも昆蟲の生活に於て、一層確實に保たれてゐるのである。人間の社會に於ても、原始社會に於て、此の關係は、昆蟲的に確實であつたに違ひない。社會の進化と共に、この關係が曖昧になつたのは、全く意識的生活が無意識的生活を蠶食した結果に外ならない。人間の意識の發達は、一定の發生理由を以て起つた社會現象を、持續せしめやうとする意識目的を持つに至り、それが爲めに、制度の固定を生じ所謂社會的『骨化』が生ずる。そこで衝動的生活の餘地が減じて、意識的調節が盛になる。これは衝動的生活からいへば減退であるやうだが、更らに考察すれば、さういふことにはならない事情の存することを知るのである。人間の社會的生活の發展は、此の意識的進步の結果に外ならない。人間の意識の生活は、更らに無意識の生活に反映して、その無意識の潜存力（ポーテンシヤリテー）を充實せしめ

るのである。即ち無意識と意識とを包括した意識內容は、意識的生活を持つてゐるところの人間に於て、如何なる生物よりも發達してゐる。これが人間のあらゆる生物を飛び込して、今日の人類と進化した所以である。意識生活を持つた人間の「無意識」は殆んど量り知れない力となつてゐる。蜜蜂の生活は、何處まで行つても、蜂窩を作り、蜜を貯へることの外に出でないので、その生活力は計量が出來る筈である。人間の思惟と動作の發展は、その質と量とに於て、何處まで進むか――人間は何を仕出かすか――誰れも知らない。創造的衝動とは、この誰れも知らない質と量とに名づけた名稱に過ぎない。

三　文明の產業と勞働の變質

質と量とに於て無限的であるところの創造的衝動を着々具體化させて行く人間の動作が勞働なのであるから、勞働は、本質的には、純個人的である。言ひ換へれば、人格的に特徵づけられた動作でなければならない。それは藝術的動作と同じ性質のものである。生活の極致を藝術的生活に於て見出す、といふのは、勞働の極致を藝術的勞働に於て見出す、といふのと同意義なのである。

然しながら、勞働は全部藝術ではない。それは、勞働の衝動を制限する社會的必要は、その勞働を藝術的動作に局限させることが出來ないからである。詩人をして唱はしめるのも社會的必要であるが、然し社會的必要は、個人に詩を要求すると同時に、石炭を掘ることをも要求する。原始時代に於ては、石炭を掘るやうな必要勞働も、苟も社會的必要がそれを刺戟する以上は、個人をして衝動的にその仕事を採らしめ得たのであるが、――言ひ換へれば、生產といふことが、社會的必要から個人に起る勞働の衝動の結果であり得たのであるが――今日の社會では、『所有』が『財產』の制度を發展し、それが爲め、所有者の所有慾が、殆んど生產の原動力の全部であるが如き不自然な狀態に陷つた爲め、あらゆる生產は、所有者の所有の擴大の目的によつてのみ動機づけられることになつてしまつた。石炭を掘ることも、これを掘らしめるもの――企業家――は、社會が石炭を必要とするその社會的動機に刺戟されてゐるのではなく、社會の必要に應ずることによつて自己の所有の擴大することが彼れを動機づけてゐるのである。即ち彼れの欲しいのは石炭ではなく、それを賣つて獲るところの利潤なのである。言ひ換へれば、生產は、社會的必要を動機として營まれてゐるのではなく個人的所有衝動を動機として營まれてゐるのである。これが今日資本經濟の特徵である。生產過剩による恐慌が資本經濟に睨る

ゝことの出來ない現象になつてゐるものも、その生產が社會的必要の反映でなく、個人的所有欲の計算に出てゐるからである。

此の組織の下では、勞働は、資本の利潤を得る爲めの、原料加工の一手續きに過ぎない。だから、それがもし全く機械で間に合つたら、今日の生產には勞働者は要らないといふことになる。まだそこまで機械が發達しないので、勞働者が用ゐられてゐるが、現狀では、それは機械に於ける一つの槓杆のやうな役をする爲めに、機械に取り付けられた、人間の形をした柔かい器械に過ぎない。誰でも造船所へ行つて見ると、一方の木工場では人間が鋸で木を挽いてゐるかと思へば、他方の鐵工場では、機械の鋸が、獨りで鐵を挽き割つてゐるのを見るであらう。企業者にとつては、木工の鋸（人間）と鐵工の鋸（機械）とは、全く同性質の勞働である。文明國では人間が勞働を失つた代りに、物が勞働を獲たのである。

勞働が此狀態に達した時には、それは全く本來の意義を失つてしまつてゐる。勞働は人間生活の過程であらねばならないのだから、機械の生活と全く同じ過程では意義を爲さない。本來の勞働に於て、木を挽くといふことは、勞働の全過程の一つの手續で、そのこと自體、勞働の衝動を滿足させる人間的動作なのである。然るに今日の勞働に於ては、その動作に生活の衝動がなく、たゞ機械的に、丁度他方の鐵を挽いてゐる機械と全く同樣の意識でその動作をやつてゐるに過ぎない。それは生活の過程ではなく機械の過程なのである。

勞働が生活過程でなくなつてしまつたことを、勞働者のみの不幸と思つてはならない。それは社會的の不幸である。或は此事を、人間の社會的生活の進化の必然として受け容れてゐれば好いやうに考へてゐるものもある。無論さう出來れば、それで好いのであるが、人間は、それが生活の必然であるや否やを、自然と判定して、或は建設的に或は破壞的に進むものである。もし右のやうな現象が、生活の必然であるならば、社會は、それに對して、破壞的には働かない筈である。然るに、今日の社會は、確かに右のやうな、勞働の變態的進化を破壞すべく進んでゐるのである。

所謂勞働運動の歷史を觀ると、それは、結局は、勞働をその本來の性質に返さうとする運動であることは明かである。勿論勞働者の期待してゐる社會組織については、彼等の各はそれぞれ自己の天國を有つてゐて、必ずしも一致はしないが、然しその組織の下に於て、勞働が、人間の本質的の生活を構成するものであるとする點では全く一致してゐる。

然らば、人間の本質的生活としての勞働は、如何なる條件を有

つたものでなければならないかといふに、それは生活が本質的である爲めに必要とする條件に一致してゐる譯であるが、私は特に勞働の倫理的要件として少しくそれを考察して見たい。

四　勞働の偶發性と規則正しさ

勞働が道德的である爲めには、前にもいつたやうに、その個人的價値と社會的價値との兩面を充たさなければならない。勞働をヨリ道德的たらしめんことを主張する人のうちには、やゝもすると、非個人的方面を偏重して、社會的方面を閑却する傾がある。例へば、勞働の藝術化を主張するものゝ多くはそれである。それは勞働を、全く個人的衝動に一致せしめ様とするのである。然し個人の衝動は、必ずしも個人的にのみ働くものではなく、社會的——例へば少しく極端ではあるが、蜜蜂や蟻の勞働の衝動のやうに——に働くのである。原始時代の勞働は、全くさうであつたのであるが、今日に於ても集合的の勞働に於ては、多くさうなのである。そこで勞働は個人的の場合と社會的の場合とで、その道德的約束を異にすることを思はなければならない。

勞働の衝動が個人的である時には、その條件は、偶發的（スポンテーニアス）である。それは天才の藝術的衝動と共通のものであつて、一切の發明は、此の衝動から來る。然し屢々云ふ通り、本來社會的である人間にとつては、個人的であることは即ち社會的であることである。天才的發明は、個人的偶發性を持つてゐるとはいへ、その發明の效果は、個人的よりも寧ろ純社會的に働くのである。故に見地を代へて云へば、發明は、社會的必要の個人に對する反映に外ならない。發明のみでなく一切の天才的勞働も亦さうである。日本の建封時代、歐洲の中世記に於ける手工勞働は、藝術的衝動に支配された度合が非常に強く、その生產品は、何れも高級の藝術品と認められてゐるのであるが、さういふ時代には、必らず、それに應ずる藝術的好尙が、強く社會的要求となつて、その天才的藝術を產ませたのである。

近代の工業は、全く機械化して、かういふ勞働は極端に衰退してしまつた。又社會的需要の增加の爲めに、機械化しない工業でも、實際に於ては人間が機械に代つてゐるといふまでゞ、手工業の生產までも、機械の生產と同じく、非藝術的に機械化されてしまつた。例へば漆器の如き、陶磁器の如きは、その著しい例である。社會の一部は此の機械化を遺憾として、天才的工藝品の生產に苦心してゐないではないが、一方では大量生產によつて、優良な製品は、惡貨が良貨を驅逐する如くに驅逐されると同時に、他方に於ては、機械的製品の普及の爲め、天才的工作品を鑑賞する好尙が荒んで、社會は天才的優良品に對する

解を缺くに至り、從つてその要求が弱められる結果となり、優良品の出づべき社會的理由に乏しくなつてしまつたのである。社會の一部の希望してゐる天才的工藝の保護は、そんな工合で到底實效を奏し難いのである。

次ぎに、社會的衝動による勞働は、個人的のそれが偶發的であるに對し、『規則正しいこと』を以て條件としてゐるのである。それは、一定の社會的集團の必要が、その集團の人間に、それに應ずる勞働の衝動を起さしめるのであるから、たゞ偶發的に働くのでは、それを滿足に充たし得る筈はない。社會が必要とする一定食料を生産する爲めの勞働の如きは、偶發的の事情に支配されては居らない。で個人の間に極めて規則正しい勞働の衝動を發生せしめた譯であるが、此の規則正しさを保つことが、勞働を、純藝術的動作から引離す所以になるのである。勞働の藝術化を唱へる人は、あらゆる人間の勞働は、鳥が唄ふやうに、藝術的氣分を持つやうにならなければならないといふが、勞働が、たゞに偶發性が持つものばかりでなく、此の規則正しさを持つたものを必要とする事情のある爲めに、所謂勞働の藝術化は空想に過ぎないことになるのである。

社會が一定の米を必要し、一定の石炭を必要とする以上は、その社會に於ける個人は、適當な度合で、米なり石炭なりを生產する衝動を感じれば甚だ好都合であるが、さういふことは、昆蟲の生活でなければあり得ない。原始人はさうであつたと思はれるが、意識的に發達した人間は、その必要を意識しても、他の意識に妨げられて、單純に社會的衝動に支配されないのである。それは極めて間接的である、即ち今日の社會は、各人が所有慾から生産を營んでゐるのであるが、社會的必要が經濟價に換算されて出て來るので、その經濟價に調節されて、生產が、所謂需要供給の原則で必要に順應してゐることになつてゐるのである。然し今日に於ては、それをしてゐるものは所謂企業者であつて生産者ではない。生産者は、純勞働の供給者で、たゞ生產企業者に、その勞働を賣りつけてゐるのである。即ち社會的必要は、個人に反映することが、極めて間接になつて、各個人は、企業者としては、生產品の經濟價に支配され、勞働者として自己の勞働の經濟價に支配されてゐる。だから社會的必要は、勞働とは全く無關係になつて、兩者の間に、殆んど何の聯絡もない。

尤も此勞働の規則正しさは、今日の大量生產に於て、外形上維持されてゐる。あらゆる大工業は、皆機械的正確を持つた勞働によつて行はれてゐる。さうしてそれは矢張り社會的の必要を充たしてゐるのである。然らば今日の勞働も、此の勞働の道德的性質は充たしてゐるのだらうか。

さうではない。今日の勞働の規則正しさは、前云つたやうに勞働の機械化の形態なのである。卽ち人間が機械となつた爲めに、機械的正確さで働いてゐるのである。從つて此の勞働には全く勞働の衝動はない。人間は、馬車に繋がれた馬のやうに、一定動作を機械的に繰り返さなければならない生活狀態に置かれた爲めに、その通りに動いてゐるに止まる。これは勞働が生活の道德として行はれてゐるのではなく、生活の壓迫として行はれてゐるのである。それは勞働の破滅である。

五　生活としての勞働の維持

然らば、勞働の偶發性と規則正しさとを、人間的生活過程として維持するには何うしたら好いのであらうか。

今日の勞働が、偶發性を失つて、創造的價値の皆無なものになつたのは、勞働者の生活が、その人間的性能を必要としない器具に墮落した結果に外ならない。今日の勞働者は、自己の性能を適當に發育せしめる方法を與へられてゐない。又假令それを與へられても、その性能に從つて勞働する適當の地位を獲ることは不可能である。彼等の生活は、生存だけを見出すのが全部の目的である。その生存が、自己の人間的性能に適した生活か何うかは考慮する餘地はない。考慮しても、選擇する餘裕はない。で此の狀態を改めるより外はないが、然し今日の產業は、社會的動機が働いてゐる社會全體の協同ではなく、全く資本家といふ別の階級の個人的所有慾の發動である故に、勞働が、此狀態に墮落しても、企業家自身は少しも迷惑しない。從つてそれを改める必要を感じない。その必要を感じてゐるものは、企業家にそれをさせる力を持つてゐない。

さういふ實情は暫く措いて、單に理論的にいふならば、勞働の偶發性は、勞働を特殊化することによつて發達せしめられる。元來勞働は、それが特殊化されない限り、動物的勞働の區域を脫しないのである。昆蟲界の勞働の如きは殊に然るのであるが、人間的勞働に至つて此の特殊化が發達したのである。然かも勞働の特殊化は、一方に於て機械的分業となつて、勞働の全的性質を失はしめて、勞働を生活そのものから分離するのであるが、然し、かういふ機械的分業も畢竟、勞働のその部分に對する熟達を誘ふもので、科學的意識の發達に缺くべからざる過程なのである。この意識が、人類に內在して勞働の偶發性を產む力となるべきものであることは前云つた通りである。然かも、此の特殊化は、個人の性能の特殊と一致しなければ、その目的は達しられない。卽ち勞働者の性能に從ふ生活を可能ならしめる事が先決問題である。さうしてそれが爲めには一方で特殊の能

力を發揮せしめる教育を施すと共に、その性能に依ふ生活を把握する道を與へなければならない。

次ぎに、規則正しさを要求する勞働は、個人的勞働に比して寧ろ生動に乏しいものであるから、それを、勞働の傾向に一致せしめる爲めには、その勞働の效果が、直ちに自己に反映する生活を勞働者に與へなければならない。元來階級運動を好む人間が、規則正しい勞働を好んで採ることはないので、これをするのはその勞働の效果が、自己の生活に何等かの形で反映するからである。今日の勞働には全くこの反映がない。それによつて生活はしてゐても、その生活は、自己の生產の效果とは沒交渉な慘めなものである。道徳上には、自己の工作が、たゞ自己に生活の根底を充たすだけの資料を與ふるだけで、製作品たる價値や内容は、自己の生活に對しては、創造的衝動の滿足としても反映して來ないし、所有衝動の滿足としても現はれて來ないし、享樂の目的物としても現はれて來ない。紡績女工の製作した綿布も彼女の生活には縁遠いものであり、その創造的衝動の滿足も今日の大量生產に於ては、寧ろ感じられない。つまり彼等は自分の生活と沒交渉な生產をしてゐる。此の狀態を改めるには、今日の生產組織の心理的構成と機械的組織とを共に變化せしめなければならない。即ち、前者は、生產が、自己の生活でもあることを意識せしめる事で、これは、企業を資本に於ける現制度を改めて、勞働に共かしめることである。後者は產業の管理を、勞働する者の支配に歸せしめることである。その事について私は他の雜誌（我等、三月號）で説いて居るので、こゝには略すが、今日の制度の下に於ては、此等のことは、到底企圖にも成すべからざることである。然し時計の針の進むやうに、拒否すべからざる度合に於て、大勢がその方へ動きつゝあることは事實である。それは極めて徐々たる傾向であり、極めて徐々たる建設である。

勞働者道の確立を望む

早大教授　安部磯雄

元來道德と云ふものは總ての人々に共通のものであつて、或特殊の階級に特別の道德があると云ふ事は變態であると思ふ。譬へば學生は學生として恥からぬ品性を有たねばならぬと云ふ事はよく云はれる事であるが、是は甚だをかしな事であつて、

道德の問題は學生に特有のものではない。道德は學生でも缺くことの出來ないものがあると同時に、他の總ての人々にとつても同樣のものでなければならない。今勞働者の道德を說く事は、或意味に於てをかしな事であつて、勞働者階級に特別の道德があると云ふ事は考へられぬし、又さう云ふ風に說く事は面白い事ではない。併しながら次の意味に於ては、勞働者階級の道德を說く理由も生ずると思ふ。それは單に勞働者に限らず、總て或階級の者が特別の勢力を得るやうになると、兎角其力を濫用するやうになり勝ちで、此場合に社會は彼等に對して特別の道德を要求するに至り、或特殊の道德を力說するやうになる。つまり總ての人間が同等の地位に立つて居るとしたならば、道德は誰にも一樣であるべき筈であるが、特に或階級の權力が強くなると社會は彼等に對して一種の道德を要求するやうになり、彼等も亦自己の利益のために特別の道德を修養するやうになる。武士道は特別の道德と考へられ、それに憧憬する人々も少くないが、私は考へるに、武士道は武士が封建時代に社會の權力者となり、其結果權力を濫用して、甚しきに至つては武士に反抗する者は斬り捨て御免などゝ云ふやうな弊風をさへ生じたので、武士自ら權力濫用に對する危險を自覺して、自己の階級の利益のために特別の道德を養ひ、權力の濫用を制限する意味に於て生れた一種の道德である。兎角或階級が權力を得るやうになると我儘になり易く、そのために社會全體が禍を被る場合が多いから、武士道が興つたと同じ意味に於て、今勞働者道を說く必要があると考へるのである。

今日、日本に於ては勞働者の勢力は昔に比すると非常に盛になつて來た。歐米諸國に於ては勞働者の權力は既に早くより認められ、實際に於て今日は資本家の方が受太刀であつて、資本家の側から反つて勞働者の專制に對する不平を聞く位である。此形勢は我國に於ても早くも現はれて居るのであつて、これから勞働者は次第に權力を得、其勢力も盛になつて來るに違ひないが、此際勞働者は昔の武士が刀を生命としたやうに、ストライキと云ふ一つの武器を有つて居るのであるから、此武器が刀と同じく濫用される時は其恐るべき威力は啻に敵を傷けるに止まらず、遂には自己をも傷けるに至り延いては周圍の第三者にも禍を及ぼす結果となり易いから、丁度武士が權力の濫用を制限し、刀を漫に使はぬ事に一種の道德を築き上げたと同じ意味に於て、今日勞働者は勞働道を確立する必要があると思ふ。私は勞働者に對して十分の同情を有つて居る者であるが、今日の勞働者の狀態は少しく極端に走り過ぎはしまいかと思はれる。それは全體から云ふと獨り勞働者許りではなく今日の婦人の問題

に就いても同じ事が云へるのであつて、何故さうなるかと云ふに、久しく壓迫されて居た者が自由を得るやうになると自由を濫用する傾向に陥入り易いのであつて、近頃は教養ある婦人達が只自分達を支配して居る權力者に反抗すれば婦人の地位が進むと考へ、必要も無くして反抗のための反抗的精神を抱いて居ると丁度同じやうに、勞働者が今日譯無しに資本家に反向はうとするのは考へねばならぬ事であると思ふ。此傾向は實に一歩を誤ると勞働者が社會の同情を失ひ、彼等自身の損失を招く結果となるのであつて、私は勞働者の味方であるが故に今日勞働者道の確立を提唱し、斯くあらねばならぬ勞働者の道徳を擧げて懐ふ所を述べて見ようと思ふ。

第一に能率を十分に發揮すると云ふ事であつて、それは勞働者が昔よりも亦今日よりも餘計に働くと云ふ事を意味するのである。勞働者も時勢の進歩に連れて賃金の增加を要求するやうになるが、資本家が儲け過ぎて居ると云ふ場合には勞働者の此要求は正當である。併しながら賃金の增加は常に能率の增進と伴はねばならぬ。然らざる場合には勞働者の此要求は單に圖々しいと云ふ計でなく、結局勞働者自身の損失とならざるを得ない。何故ならば資本家も自らの資本に對して相當の利子を得ねばならぬし、經營者であるならば相當の報酬を貰はねばならぬのであつて、今勞働者が怠けて居て賃金の增加をのみ要求するならば、資本家は徒に生産費が嵩む計りであつて仕事が出來なくなるから、勞働者は結局資本家に依つて賃銀の增加を圖る事が不可能になるからである。で勞働は飽く迄も餘計に働いて餘計に賃金を得るやうに心掛けることを眼目としなければならない。然るに今日の社會に於ては、勞働者が働かないと云ふ事に多くの不平があるやうに思はれる。私は總ての勞働者が皆さうであるとは云はぬ。殊に機械を廻轉する勞働者は彼等が怠けやうとしても、機械の方でかまはず運轉するのであるから仲々怠ける事が出來ぬ。然し他の勞働者は怠ける機會があるので、實際に多くの勞働者はサボルなどゝ云つて隨分、怠けて居るやうである。就中植木職などの怠け方は目立つもので、暇さへあれば煙草を吹かし、甚だしきは夏などは晝寢をする者もあると云ふ有様である。大工などでも請負でないと大に怠ける。米國などに於ては大工は仕事中に決して鉋を研いだり、鑿を研いだりするやうな事はしない。鉋や鑿などの商賣道具は皆家から研いで持つて來て、仕事中には一生懸命に仕事をする。私が近頃自分で經驗したことに斯う云ふ事實がある。屋根の瓦を修繕するために職人を頼むと一日四人の手間を要すると稱し、四人の職人が朝の九時頃から仕事を始めたが、十二時頃になると雪が降り出

したので慌てゝ仕事をなし一時頃になると、仕事は終つたと云つた。一日四人の手間を要すると云つて、さてやつて見れば仕事は三時間で出來上つて了つたのである。總て斯う云ふ風な遣り方は決して勞働者の幸福を增す所以でない事は勿論であつて、これは勞働者自身にとつて考へねばならぬ大きな問題であると思ふ。斯くの如く仕事を怠ける勞働者に高い賃金を拂はねばならぬとすると、日本の勞働者には世界中で一番高い賃金を拂はねばならぬ事になるのであつて、製造業者の場合であるならば、徒に生產費が嵩む計りであつて到底外國との競爭は不可能である。若し今日の如く勞働者が折角社會的に勢力を得るやうになつた時に、自ら進んで從來の惡い習慣を打破し、一層心を引締めて社會の同情を失はないやうに心掛けないと、勞働者は今日築きつゝある地位を失つて、結局困難な立場に陷入らざるを得なくなると思ふ。要するに勞働者としては彼等が有つて居る丈の能力を十分に發揮して、賃金の增加を計ると同時に、彼等の生活の向上をも圖らねばならぬ。

第二は武士道に於る場合と同じ意味に於て、勞働者の利器であるストライキを濫用せぬと云ふ事である。昔の武士は刀は佩したが武士道としては絕體絕命の場合に非れば之を拔かなかつた。勝安房の刀は父親が糸で括つて容易に拔けぬやうにしてあつたと云ふことであるが、これは武士道として非常に面白い所であると思ふ。私はストライキは勞働者の武器であるから絕對に之を使用してはならぬとは云はぬ。否、寧ろ日本に於て勞働者のストライキが認められて居ない事は非常に遺憾に思ふものである。歐米に於ては既にストライキは勞働者の權利として認められて居る所であるが、日本に於てはストライキの主唱者は直ちに治安警察法に問はれて三ケ月なり四ケ月なり禁錮に處せられると云ふ有樣である。私は勞働者のストライキは絕對に不可なりとして排斥しなければならぬものとは思はぬ。若し勞働者が亂暴を働くと云ふ事が不可ないなら、普通の法律に依つても處分する事が出來るのであつて、勞働者に正當なる理由の存する限り絕對にストライキを排斥する事は出來ぬのである。事實、勞働者の側に正當なる理由があれば、彼等が働かぬと云ふものを誰も働くやうに强ひる事は出來ないのであつて、ストライキが勞働者の正當の權利と認められるのも斯くの如き場合に於てである。若し勞働者のストライキが惡いと云ふならば、資本家が自分の都合に依つて無暗に勞働者を解雇する事も怪しからぬ事であると思ふ。勞働者の方で仕事をしたくないから仕事をしないと云ふのも、資本家が不用になつたから勞働者を解雇すると云ふのも結局同じ事であつて、資本家が自分の都合で

解雇をするなら、勞働者も自分の都合で仕事をしないと云ふ事になるのである。若し資本家が勞働者を解雇すると云ふ事をしないで、一旦雇ふた勞働者には永久に勞働する權利を與へると云ふなら、勞働者のみが自分の都合で勝手に仕事をしないと云ふ事は不都合であるかも知れない。然るに實際に於ては資本家には斷り捨御免の權利があつて、勞働者にはそれと同じやうな權利がないと云ふのは不合理と云はなければならない。私は此ストライキの利器は勞働者に正當なる理由の存する限り、與へられても差支ないものと考へる者であるが、然し勞働者の側から云へば此利器を濫用する事は惡い事であつて、勞働者がストライキの武器を用ふる時は丁度昔の武士が最後の場合に臨まなければ刀を拔かなかつたと同じでなければならぬ。外國に於ては勞働者は輕々しくストライキはやらぬ。先づ勞働者はストライキをやる前に他の方法を擇び、其代表者を資本家に遣つて資本家と折衝を重ね、此方法に依つて資本家と談判をして爭ひを解決をする。而て最後に愈々折合がつかぬ時に及んで初めて武器を利用するのである。私は勞働者に或場合にはストライキと云ふ武器を許さぬと、他に大なる弊害を生ずへ虞があると云ふ事を我當局者に考へて貰ひたい。それはサボタージュの弊害であつて、今勞働者が第一のストライキの武器を捨てゝ、第二のサボタージュの武器を用ふるとなると、これはストライキ以上にもつと酷い弊害を生む事になる。ストライキは爲已むを得ない場合には之を許す事が出來るが、サボタージュは其性質の陰險にして卑怯なる點に於て如何にしても許す事が出來ぬ。ストライキは刀を以て刀と戰ふのであるが、サボタージュは闇打ちであり、闇鐵砲である。サボタージュは一般に怠業と譯すのは當つて居ない。成程業を怠る事はサボタージュの一つの手段たる事に相違はないが、實際の意味に於ては害業と譯するのが正しい。例へばサボタージュは業を怠る許りではなく、或場合には豫定よりも早く仕事を仕上げて資本家に迷惑をかけ困らせる事を目的とする事もある。またサボタージュは何時も惡い事をする計りではなく、資本家を苦めたり困らせたりする事の目的のためには、表面正しいやうな遣り方を以て其目的を達する。譬へば外國などに於て、旅館や料理店の料理番などが客に食物を出すのに、材料の一番上等なもの計りを擇んで料理をして出すと云ふやうな事がある。これは食物衛生の上から云つても、客自身のためから云つても非常に結構な事には違ひないが、其意味は明に雇主にとつてサボタージュである。又伊太利などによくある例であつて、汽車の發車時間を故意に遲らせると云ふやうな事もある。それは必しも從業員が職務を怠るがためではなく

て、鐵道の法律に汽車の發車前に、汽車の車や機關や車臺などを檢査すると云ふ規則がある。併し此鐵道規則は非常に細密なものであつて、平常は到底其規則通りには實行出來ぬものであるが、此規則を利用して汽車の發車前に故意に細密な試驗をして汽車を遲らせる。そしてそれを責められた時には規則を盾にとつて逆襲する。其他機械中に砂を入れて機械を破壞し、織物に藥品をかけて品物を不用に歸せしめると云ふやうな方法もある。以上の例に依つてもサボタージュは明かに怠業と云はなければならぬのであつて、それは確に陰險にして卑劣なる手段であり、不道德なる武器である。元來勞働者は人に雇はれて居るのであるから、道德上是認の出來ない、單に雇主を害すると云ふやうな方法を執る事は避けなければならない。然らざれば寧ろ斷然雇主と關係を絕つて、公明なるストライキの擧に出た方が、大に恕すべき點があるではないかと思ふ。日本の當局者も此點に留意して、サボタージュの陰險なる武器を勞働者をして振はしむる事なく、寧ろ或場合には——勞働者に正當なる理由の存する限り——公明なるストライキの權利を勞働者に與へる事の當を得たるものなるを悟つて貰ひたいと同時に、勞働者も亦サボタージュの卑怯なる武器なる事を悟り、ストライキと云ふ事に對しても嚴重なる態度を以て自覺するに至る事を望むで止ま

ないのである。第二には一切暴力を用ひぬと云ふ事である。今日我國の勞働運動は油斷をすると往々にして暴力に陷入る危險がある。勞働運動に於ける暴力の餘波は資本家から警察官にまで及ぶ事さへある。實際日本に於ては暴力を用ふる機會が多いのであつて、これは封建時代の惡い習慣が今日も猶殘つて居るものと見られるのである。議會などに於ても言論の代りに腕力が振はれるのであつて、これには云ふまでもなく愼まねばならぬ事である。尤も歐米に於ても日本に於ても暴力を主張する者があり、彼等の云ふ事にも理屈がないではない。何故ならば資本家も暴力を用ふる場合があるのであつて、即ち自ら手を下さないでも彼等は警察權を自己の利益のために利用する事があるからである。之を主張する者は、だから勞働者も[illegible]へないとしての[illegible]であつて、つまり暴に報ゆるに暴を以てするのである。然し、私はそれが宜いか惡いかは政策としての議論であると思ふ。將來時勢が一變し、世の中が益々行詰つて革命など起つた場合を想像するのは論外であるが、目下の政策としては暴力を用ふる事は飽く迄も愼まなければならない。若し暴力を用ひるとなると、日本に於ては警察權が強いからさうした暴力を伴ふ勞働運動は成功する事は不可能である。我國に於ても普通選擧の運動にデモンストレーションを行ふが、外國などに於ては[illegible]は屢々行は

れる事であつて、主義のプロパガンダとして大に有效である。我國に於てはデモンストレーションは屢々差止められる所であるが、英國に於てはデモンストレーションは普通の事であつて、反つて警察が行列を保護すると云ふ位である。日本でも勞働者の方で全然暴力を用ひないと云ふ事になれば警察も之を許すに至るであらうが、兎に角、將來勞働運動の場合にも、デモンストレーションのために暴力を用ひないやうにする事が必要である。

第四には勞働者對資本家の問題に於て日本計りでなく何處に於ても社會には第三者と云ふ者があるのであつて、勞働者が資本家と對立してデモンストレーションなどを行ふ場合に、社會の第三者に迷惑を及すと云ふ事を考へないと、結局勞働者の損失になると云ふ事である。デモンストレーションを行ふ場合には、常に勞働者は社會全體を考慮に入れて置かなければならぬ。國際戰爭の場合に於ても中立國の信用と、同情を得る事が必要であるやうに、勞働者もデモンストレーションの場合に社會の第三者の同情と信用を得る事が肝心である。交通機關のストライキなどは絕對に惡いとは云はないが、社會の同情を無視して迄も、社會一般の人々に迷惑をかけると云ふ事は考へねばならぬ。で、勞働運動は原則として社會全體の同情を得ると云ふ事が必要である。

最後に勞働者對資本家の關係は階級の關係であつて、個人的の關係ではないと云ふ事を考へなければならぬ。だから個人的に敵意を持つと云ふ事は不合理であつて、勞働者は資本制度に對しては敵意を抱く事はあるが、資本家と云ふ個人に對してはさう云ふものは持つてはならぬ筈である。然らざれば勞働者と資本家の爭は汚いものとなり、公明正大を缺くに至る。國と國との戰爭に於ても、國を敵とするが、個人を敵として之を虐殺すると云ふやうな事は今日の道德が許さない。勞働者も勞働者道のために、制度に對して資本家と戰ふ事があるけれども、一個の資本家として爭ふ必要はない。個人としての資本家に對しては或場合には厚い度量を示さなければならぬ。私は以上述べた點に就いて勞働者が自覺してくれたならば、勞働階級のためにも幸福であると信ずる。勿論私の云つた事が全部勞働階級の滿足を買ひ得ないかも知れないが、私一個としては飽く迄も勞働階級の或弊害を豫防するために、武士道の發生にかけると同じ意味に於て勞働者道の確立を望む次第である。

勞働者の責任觀念を薰育するの機運

法學博士　吉野作造

（一）

伊太利では去年以來勞働者自らが工場を管理せんとする運動に熱中して居る。獨逸でも先般一度炭坑の國有の問題が議會に上つた事がある。英國の所謂炭坑國有問題は、從來のやうに政府が管理經營の任に當るといふ意味の國有ではなくして、勞働者が其衝に當るのだといふ意味に於て、やはり一種の勞働者管理運動の一つの現はれに過ぎない。斯くして賃銀値上げや時間短縮に初まつた勞働運動は、勞働者の全産業管理の要求として發展するやうになつた。

斯ういふ形勢が起ると資本家並に共一味は直ちに云ふ、勞働者に眞に工業を經營管理するの能力があるかと。茲に能力とは技術上の智識と道徳上の責任觀念とを併せて云ふのであるが、

兎に角吾々は勞働者の管理經營に委して安心する事が出來るか何うかと云ふのが一つの問題である。尤も勞働問題に對する予等の立場からすれば、斯ういふ云ひ分を以つて資本家階級は勞働者の要求に抗辯するといふ事は許されない。人の物を盜んで置きながら、原所有者に之を適當に處置するの能力が無いからとて何時までも返さずに横領を續けるといふ事は許されないと同一である。

併し乍ら資本家階級が這の分疏については吾々は亦退いて一面の眞理がある事を認めない譯には行かない。何となれば今日例へば特に我國に於て勞働者の能力はまだ〳〵低い。企業家に代つて産業を經營するの任務に堪ゆるや否や甚だ疑はしい。尤も之は從來經營管理の仕事に全然關係せしめられなかつた結果であるとも云へないではないが、其原因が何れにあるにしろ、兎に角能力欠缺といふ非難に對しては、之を打消す丈けの事實上の證明が出來ない。それでも勞働者の直接管理といふ事が當然の道理であり、又自然の傾向であるとすれば、差當り能力の乏しい勞働者に此大任を委して、而かも大過なからしむる爲めには何うすればよいか。それは勞働者自身も能く考へねばならぬのであるが、苟くも勞働運動を論ずる者は、是非共此問題に十二分の注意を拂つて貰ひたい。

勞働運動發達の順序から云ふと、其初めは資本家階級の之に對する反抗が可也強いから、勞働者は自ら他日成功の場合に於ける自己の能力如何を顧るに暇あらず、多數を結束してひた押しに資本家を攻め仆さんとする。やがて多年の運動功を奏して自分達がだん／＼優勢の地位を占むるやうになると、今更ら乍らいろ／＼の意味に於ての能力の缺乏を感ずるやうになる。露西亞でも革命の當初は勞兵會一點張りであらゆる障害物を討仆したが、やがて自ら社會經營の實務を執る事になると、いろ／＼外の資本家階級の人々の持つて居つた專門的智識を借らねばならぬ必要に迫まられたやうだ。之は事實の示す有りの儘を述べたのであるが、單に理屈から云つても對資本家的反抗の力の非常に強い間は只多數を結束して傍目もふらず突進しても可い。けれども破壞の功は半ば積んで、いよ／＼建設時代に入らうといふ時代に進めば、少くとも心ある勞働者は自ら反省して能力の涵養を念とする態度を取らなければならない。殊に其内でも勞働者の責任觀念は隨分大きな問題になる。經營管理の積極的事業は嚴正なる責任觀念を有するものにして、初めて之に當る事が許さるべきものであるからである。

(二)

併し斯ういふ事を漠然と聞くと、前に擧げた資本家階級の分疏(いひわけ)と同じやうに響く。彼等も亦勞働者の能力が疑はしいと云つた。吾々も亦勞働者がもつと反省して能力を涵養する事が必要だと。即ち吾々の勞働者反省論は利己的動機に基く資本家階級の勞働者不信論を裏書きするかに見える。少くとも反省論が盛んに唱へ出されると、今まで閉息して居つた資本家階級は得たり賢しと之を利用して、勞働運動の侵略に對する障壁建造に利用せんとする。それが旨く圖に當ると、少くとも一時は勞働運動の鼻先がへし折られる。斯くして勞働者の爲めにする反省論は、偶々逆用されて勞働運動の氣勢を殺ぐ結果を喚び來たす事が屢々ある。さういふ所から性急な思慮の遠くない勞働運動家は、遂にかの反省論の如きを、勞働運動の爲めにならないといふ風に考へるようになる。口に苦きの故を以つて良藥を斥くると同樣であるが、斯ういふ勢になるのも亦致方が無い。

併し一時氣勢を殺がるゝからと云つて其親切な忠告を斥くるのは間違だ。尤も實際問題としては、親切な忠告と思つた事が意外にも資本家階級の廻し者であつたといふやうな事もないではない。現に兩方の云ひ分は殆ど同じやうなものであるから、資本家階級の間諜(いぬ)が勞働運動の良友たる顔付きを以つて、來つて陰謀を企らむ餘地は大いにある。であるから本當の忠告か或

は陰謀の結果かには餘程愼重に之を探索するの必要あるが、併し一概に之を排斥するのは誤りである。其反對に亦忠告を與へんとする程の者が、資本家の代辯者と間違はれん事を恐れて、言ふべき事を云はないで濟ますといふ事も親切の行動ではない。言はずに置けば勞働者はます／＼反省の機會を失ひ、向上發展の道を踏み過まる。さうすれば產業の管理に於て、やはり資本家階級の方は上手だといふ事實上の根據を提供する事になる。產業の管理經營は之を勞働者の手に渡さなければならぬといふ理窟で敗けても、資本家は實際能力が優れて居るといふ事實に於ては疑ふべからざる勝利者だ。故に吾々は勞働問題の完全なる成功を克ち得んが爲めには、資本家階級の據つて以つて立つ所の根據を、理論の上から許りでなく、事實の上からも粉碎しなければならないと思ふ。之が爲めには勞働者をして對資本家の爭鬪に熱中せしめる許りでなく、退いて自ら自己能力の涵養に努めしむる必要がある。

（三）

我國今日の勞働者が、資本家階級に取つて代つて產業を管理經營するの能力を缺く事は明白疑を容れない。多くの資本家が考へるやうに、勞働者は現在も將來も自分と同じやうな能力を

持ち得ないものと極めるのは固より誤りだ。勞働者が重役と肩を比べて產業の經營に當るなどといふ事は、まるで空想のやうに看做して居るけれども、百姓町人をまるで蟲けら同然に考へて居つた封建時代から、廣く天下の萬民に參政權を與へるといふ當今の憲政時代に移つた事を考へれば、左程困難の事でもあるまい。勞働者に直接管理權を與ふる事は、百姓町人に參政權を認むると同じ趣意に出づる。昨今の勞働運動の眼目は謂はゞ百年前に政治界に成功した立憲主義を新たに經濟界に確立しようと云ふに外ならない。故に結局の歸着點として吾々は勞働者の能力の開展を疑はないけれども、唯差當りの所は何うしても十分の力を彼等に認める事は出來ない。

先づ例を女中に取つて考へて見る。假りに彼等を一個の勞働者と見て、當今の勞働運動の要求通り八時間制を適用して見る。左うすれば何うしても朝仕事を始める時間と、夜之を終る時間とを嚴格に定め、其間に可なり長い休養の時間を與へなければならぬ。六時に起きて飯の用意やらお掃除をする。九時に終ると午前は三時間の勞働だ。二時間休んで十一時から午の仕事にかゝり、二時間働かして一時になる。さうすると夕方の仕事に使ふ時間は三時間しかない。斯ういふ時間割りで今日普通女中に頼んでやつて貰ふ丈けの仕事を滯りなくやつて貰ふには、餘程

明敏な頭のものでなければ出來ない。八時間ではとても間に合はないとして、もつと長くしたとする。それでも午前午後と更に夜を通じて三度も自由の休養時間を與へては、今の女中の頭では之を何ういふ風に利用するかは大體見當がつく。烏渡活動に入る、入つたら最後歸るべき時間に歸つて來ない。烏渡の外出が數時間になつたり、數時間の暇で夕方出掛ければ、宿つて來る、だらしのない事夥しい。尤も我國今日の家庭は餘りに女中に頼り過ぎるといふ弊はあらう。使ふ方も相當にだらしがない。だらしのない同志で多年だらしがなくやつて來た結果として、双方共急に改め難いのであるから、偶々吾々が合理的に對女中關係を建て直さうたつて、事實出來るものでない。せめて解傭の場合丈けでも愼重にやらうと思つて豫め之を豫告すると、嫌はれたとでも思つて、直ぐ逃げ出す。又向ふが逃げ出しさうな素振りがあるから、出たいなら出たいと云つて與れ、相當の用意もあるからと云へば、決して御暇に頂きませんと斷言して置きながら、都合がつくと無斷で逃げ出す。お互の迷惑は更に顧ない。であるから急に出られて非常な迷惑する事を避けようとするには、いよ〳〵解雇するまで豫告しないのに限る。向ふで出さうなら此方が先手を打つて、代りを探して藪から棒に向ふに解傭を申し渡すに限るといふやうになる。局外から觀れば傭主横暴の甚だしきものであるが、此横暴を愼んでは雇主が堪らない。之れ皆女中の地位が概して甚だ低級で、其間に殆ど責任觀念の認むべきが無いからである。雇主も惡いが雇はれ人もなつて居ない。斯ういふ事實が勞働運動の要求を實現する上に何よりも雄辯な事實上の障害である。

海外留學を命ぜられて獨逸に行つた許りの頃、暫く同然貧窮な一老未亡人の二階に下宿して居つた。年若い女中がサン〴〵酷き使はれ、朝は夙く夜は晩く、隨分困り抜いて居つた。日本の女中ならとても居堪まるまいと思はるる程であつたが、彼女は三ケ月の約束だから期限中は我慢すると云つて泣きながら辛抱して居つた。當時の獨逸の風習では市役所が職業紹介の勞を取り、三ケ月乃至半年の契約で雇ひ雇はれるのであつた。やがて三ケ月の期限が來た。すると彼女は主婦の切なる懇願ありしにも拘らず、斷然契約の更新を拒んで出て行つた。契約の期限中は何處までも辛抱する。期限が來れば對等だから、頼まれても厭やな所には居ないといふハッキリした態度に吾々はつく〴〵感心した事があつた。斯う話がハッキリして居れば主人の方でも遙にやりよい。其他約束のしようによつては仕事の範圍を極めるが、責任外の事は斷じてやらないが、責任内の事は十二分にやつて與れる。見樣によつて御し難い點もあるが、極りが

ついて甚だ氣持ちが好い。

維納に居た時宮廷劇場にワグネルの「トリスタンとイゾルデ」を觀た事がある。イゾルデ役の女優が急病の爲め、已むを得ず遙かに腕の劣つた他の女優が代つて勤めたが、トリスタンと比較して餘りに見劣りせらるゝので觀客が承知しない。初めは我慢をして居たが、やがて口笛を吹いたり床を踏み鳴したりして盛んに不滿の情を洩し、果てには主任を呼び出せなど呶鳴る者もあつた。第一幕目の終りに主任が幕外に出て、代役の理由を叮嚀に述べて觀客に詫びた。やがて二幕目が開いた。事情が諒として初め穩和しかつた觀客も、餘りに拙いので勘忍袋の緒を切つたのであらう、復た騷ぎ出した。繊弱い女優に對して可なり激しい罵倒の聲を浴びせる者もあつた。終りの幕も亦同樣に其女優の出る度毎に侮蔑嘲罵の意志表示が猛烈であつた。けれども兎も角も終りまで無事にやり終せて、不滿ながら見物は散じた。所が翌日の夕刊新聞を見ると、女優の卒倒と題してこんな話が出て居つた。昨夜イゾルデを代り勤めた女優は盛んに見物人の叱咤を受け非常に亢奮したが、兎も角も劇場に對する責任を重んじて終りまでやり通し、最後の幕が閉ぢるや否や卒倒して人事不省に陥つたと。此記事を讀んで吾々は成程西洋の婦人はエライと感嘆せざるを得なかつた。日本の婦人ならあれ程の侮蔑を受けて、それでも次の幕に甘んじて顔を出し得たであらうか。極度の亢奮に堪しても最後まで舞臺に出た其責任感の鋭敏なるには、吾々男子も及び難い所がある。責任を果してやつと安心すると同時に仆れたのは、所謂倒れて後已むものであつて、勇健な武士的態度にも比すべきものである。責任を重んずるのも此處まで行けば文句は無い。斯ういふ人々にして初めて十二分に權利の主張を敢てし得べく、又彼等に一切を委しても安心が出來る。

右はほんの一二の例に過ぎないが、兎に角西洋の勞働運動は斯かる鋭敏な責任感を背景として居るといふ事は、吾々の最も能く注意すべき要點であると思ふ。

（四）

日本の勞働者には今の所未だ十分に能力ありと許す事は出來ない。さればと云つて彼等の要求を全然斥けんとする資本家階級の態度には斷じて贊成は出來ぬ。彼等の云ふ通りにして置けば、勞働者は到底自ら訓練し自ら開發するの機會を奪はれるから、勞働者には其能力を開展してやらなければならぬ。自ら訓練するの機會を潤澤に與へてやらなければならない。唯此趣意による勞働者の解放は、一時の混亂を社會に與ふるといふ弊

害はある。それでも闘はぬといふ急進論者もあれば、其間に多少斟酌の餘地を認むるといふ所謂穩健派もある。唯穩健派の說は資本家階級の爲めにする所ある分蹟と混同され易いといふ事は、自他共に贊成せねばならぬ點である、英國が海洋の自由を認めない限り、吾々は飽くまで海軍の擴張を圖る、が併し英國が之を認めさへするなら、其瞬間に擴張計劃を棄てるといふ米國海軍卿ダニエルの說が、英國の海洋自由の否認を口實とする米國海軍擴張の野心の表示であると誤解さるゝ如く、現實と理想との調和は人に誤まられ易いものだ。けれども昨今勞働運動を說く者の中、勞働者の反省と能力の涵養とを說く者の多數は恐らく米國海軍卿ダニエルの流儀と見るべきではあるまいか。之を資本家的利己論の變裝せるものとするのは偏見であらう。

我國の勞働運動は今後ます／＼盛んにならなければならない。もつと／＼聲を張るを必要とする。昨今までの運動は實に覺醒た勞働階級をして自分達の地位と其正當なる權利の主張とに目醒めしめた。けれども之と同時に吾々は彼等をして其義務と責任とを重んずる觀念を疎ろにせしめてはならない。而して義務責任の觀念を說くことは、權利の主張に疎ならしむる所以ではない。權利の主張を誤らしむる目的を以つて責任論を說き廻る者もあるが、之れは斷然排斥する。けれども斯かる不正の目的を以つて說かるゝ事あるの故を以つて、一切の責任論と勞働者とを遠ざけんとするのが、取りも直さず角を矯めんして牛を殺すものに外ならない。

新ノブレス・オブリージの創造

杉森孝次郎

勞働運動自身が、階級掃滅を目的の内に入れてをるのだから、勞働者道といふが如き、すでに一種の階級主義を暗示しもしくは明示する現象を、勞働者は否定すべき立ち場にある。人格的個性主義の社會的價値のほかに、それの千萬特殊の目的價値のほかに、われらは、武士道をも、勞働者道をも、僧侶道をも、浪人道をも、俠徒任俠道をも、男性道をも女性道をも、商人道をも、民族道をも、認むべきでない。現代の社會的大病乃至不節は、實に、われらが、あまりに淫蕩なしかたに於いて、且つあまりに容易に、國粹主義や擁護主義の信奉者となることにある、國粹主義と擁護主義とを彼等は一掃したのだ。目

的はその背景にある。われらをして、いにしへの釋迦や耶蘇が、もろ〳〵の惡魔の誘惑をはねつけたやうに、變裝せる黨派主義、階級主義の誘惑を猛烈に調伏せしめよ。或る形の愛國主義も、或る形の社會主義も、實は階級主義だ。末梢價が中心價よりも高聲に唄ふ形だ。世界の價値の中心は個性にある。社會の價値の中心は人格的個性にあるといふ公理第一條に、われらは、各經驗を通じて忠誠であるべきだ。われらの社會的理想と實行とは、恐く大地から生えた樹、枝から咲いた花のやうであるべきだ。挿花や造花であつてはならん。その大地、その根幹枝に相當する實在は、幾たびも繰り返して主張するが、實に人格的個性の自覺以外のなにものでもありえない。人格的個性の自覺、そしてそれの社會的實現及び徹底、われらは、しばらくはこの一聯の文字を救生、救世の福音とも、讃歌とも、神のことばとも解すべきだ。この一聯の文字の意義に通達しない限り、われらは、人間の事についての發言權はないのだ。人類の教科書が書かれなくてはいけない。そしてその書名は、上記の一聯の文字であるべきだ。

　これだけの前置きをして、勞働者道確立の案件を再說する。われらは、勞働運動をば、今の時代に於ける、社會的正義の一象徴として扱ひたい。不正はどの時代になつても社會には多少ある。人間は進步力ある動物だからだ。勞働運動は、現代の社會に存する不正の一個のイピトミ(epitome)であり、一ピヴット(pivot)であると見て、始めて研究解決の方法に光明が與へられる。勞働運動は、不正義に對する正義の一噴火口と見るべきだ。地底の火山脈そのものと見てはならんのだ。この事理がわれらに告ぐる勞働者の責任がある。それは、勞働者は、或ひは勞働運動者は、現代に於ける道理と正義の全體の一要求者であり、一主張者であるといふ自覺だ。勞働者は、社會內容のすべての特殊方面にわたつて、出來るだけ聰明なる理解と同情とを自身持ち、そして純粹に正義と道理の意思に於いて、興味に於いて現存の不正と不合理との矯正者たる責任を自覺すべきた。「口利」きといふがある。「名判官」といふがあつた。一點の私情や黨情や階級情を挿けずに、事物と問題を、それの本質的客觀的價値に從つて取り扱ふ人々の制限ある現はれであつた。勞働者道は、今の社會に於ける口利き、名判官であるべきだ。その自覺を完全にすべきだ。勞働者でありながら、對資策や、對政府利策について、かなり鮮やかな批判と主張とが發表されないやうでは、その勞働者には修養の餘地が明白に存する。英國あたりでは、勞働者といへば、院內に於いても、院外に於いても、各種の社會問題にむかつて比較的に公正と自由と進步と

改良とを意識した意見を表明する。かれらは、國際經濟問題については自由貿易の主張者だ。自由兵役制の恢復を主張した。愛蘭の自治或ひは獨立を主張した。埃及や印度の解放を主張した。土地の國有を主張した。鐵道や石炭業の國營を主張した。歐露からの即時撤兵を主張した。かやうに、無定形ながらも、勞働者道とも呼べば呼ばれないでない一種の原則と方法とが發生したのだ。われらは、英國の勞働者道にも、すくなくともそれの過去及び現在の發現については、幾多の批判を有する。反對或ひは不滿足といふ形の批判をも有する。最近の英國の社會に於いて、勞働黨や勞働運動者の思想、意思、行動は、理想主義であり、合理であつて、それの反對に立つたロイド・ジョージ及びかれの與黨の思想と意思と行動とは、全然不正義であり、不合理であつたとは判斷しない。いはゆる在野は常に是にして、いはゆる在朝は常に非だとは、歴史と合理の兩方面から考察して到達しないわれらの結論だ。英國の勞働黨にしても、最も缺乏してゐるものは人物だ。品性智識の偉大なる人だ。合理的傾向はあつても、淺い。品性も十分に卓越明確でない諸概あらう。ロイド・ジョージとボーナー・ローでは、純真の理想主義が機會を見なさ過ぎる事は明らかだ。けれども、アイ・エル・ピーすなはち獨立勞働黨や、組合勞働主義者に天下を明け渡しても、純真の現實主義が機會を見なさ過ぎる危險も、不鮮明ではない。然るに、純真の理想主義と純真の現實主義とは、社會に取つて、自轉車のペダルスとブレークの關係よりも親密な協力關係を保つべきだ。一目的を達するための兩作用だ。一作用を完成するための兩要素だ。

社會政策家らしい顔をして、現存の諸要素の上に、本質的原則的批判の光りを投げずに、現存の諸要素だからといふだけの理由で、そのおの〱の存在權を信じ、ひとへに按配と組織とに腐心するのは愚だが、われらは、社會進歩の要件として、保守的興味のみに機會を與へず、改新的興味にも十分の機會を與へる事は、眞の社會的良心の必然的命令であると思ふ。勞働者道の確立と發達とは、社會體の健康を保持するための一對症藥、一防腐劑としても歡迎すべきだ。勿論、對症とか防腐とかいふ事は、勞働者道の最低副作用の一に屬すべきだ。勞働者ともあらふものが、枯れた言動は出來ないといふ、二十世紀の社會の三三〇〇〇三〇を創造する事が肝要だ。新時代の眞善美の旗持ちだ、勞働者道の標識であるべきだ。

懸賞長編小說募集

大阪朝日新聞の現代文藝に對する要求

隱れたる天才を發見すため＝勃興せる我が文壇に更に力強い生命を與へて見覺しい新生面を拓くため＝本社は左の賞を懸けて長編小說を募集します。

一等賞金 三千圓　二等賞金 二千圓

創作　に限る、飜案、飜譯はこれを採らず。時代は現代、新聞小說として連載に適するもの

回數　百二十回以上　一回十五字詰百二十行内外　全文に振假名を附すること

審査　は大阪朝日社に於て之を行ふ

締切　來る七月三十一日限り

一、應募者の氏名は原稿に記入せず、原稿には必ず變名（平生慣用の雅號をも用ひぬこと）を用ひ別に住所氏名を記して厳封し原稿と同時に本社學藝部宛送られたし。一、全編の梗概（百行内外）を別に附せられたし。一、入選せざる分の原稿は審査發表後返却す。一、應募に關する質問に對しては應答致さずと御承知ありたし。一、入選小說の著作權は本社の所有とす。



幼き時の思ひ出を尋ねて

佐々木指月

そもそもの思ひ出

そもそもの思ひ出は、虚空のなかから始まつてゐる。目をとざして眸と内に思ひをひそめると、そもそもの記憶は虚無のかなたへ續いてゐる。

私の心から、この世界が生れたのは、いや、私の目にこの世界が映つたのは、それは私が生れ落ちてからしばらくあとのことである。

赤い人力車

赤い人力車に、葭簀の茶屋に、田舎道。

これが私にとつてのそもそもの記憶である、私の世界は赤い人力車の上からはじまる。

母は田舎道の立場の茶屋に休んで、帯をしめかへた。天氣はよかつた。

この道中は、父と母とに伴はれて、東京から平へ歸る旅中、たしか高松在の道であつたと云ふことは、今の年齢になつた[illegible]ちの想像で、或はさうかと思ひめぐらすことができるのであるが、それもたしかにさうとはわからない。何しろ、私が、父母とともに、東京から平へ歸つたのは、たしか五つの時であつた。

金比羅宮

嬰年の記憶は、おぼろげながらたしかである。高い石段に石燈籠。櫻の花の雪が降る櫻の馬場と云ふところに、父の邸があつたことゝを覺えてゐる。

金比羅宮の巫女たちが、櫻んぼをひろつてくれたり、小さい備前徳利をくれたりしたことを覺えてゐる。

信助と云ふ下男の背に負はれて、石の段々を登りつめて、よく金比羅宮の境内へ行つて遊んだ。緋の袴に白綸子、髪を丈長で結んだ巫女たちが、私の遊びともだちだつた。

お風呂

父の邸の隣には、堀秀成と云ふ人の邸があつて、その人のお婆が私を可愛がつてゐてくれた。

秋の紅葉の散るころに、お婆さんは私を抱いて、赤い紅葉の下をくぐつて、その下にあつた据風呂に、よく私を入れてくれた。

お湯が熱いと云つて泣く私をお婆さんは、しつかりとその胸にだきしめて、紅葉をとつて湯にうかべて、金たとが泳いでゐると云ひながら、白い湯氣の立つなかに、私をだきしめ沈ませた。

お灸

堀秀成と云ふ人は、私の父の先生だつた。白い長い髯を胸にたれて、私には誰よりも恐ろしい人だつた。

或日、私は何かの咎によつて、父母からお灸をすえらるることになつた。然し私がちたばたするものだから、艾は背中にとどまらなかつた。

ふり向いて見ると、いつの間にか、堀先生が、私の足を膝に敷いて、火のついた線香を持つてゐる。兩手は父親にとられてゐたし、艾にはもう火がついてゐたと見えて、背中のほうから、その燒ける臭ひがした。

母の冷たい目の光と、父の燃え立つ目の光と、堀先生の燿く瞳のその下に、私は聲を泣きからして、艾の火がだんだん熱く燒けてくるのを待たなければならなかつた。

すると、その時に、玄關の障子が明いて、お婆さんがはひつて來た。

「あやまつて頂戴よう!。」と、泣かうとする私の口は、父の手でふさがれた。今は、たよりとする父母すらこの通り。とりつく瀬のない悲みを目にみなぎらした私は、お婆さんの顏を仰ぎ

見るより外にすべはなかつた。
お婆さんは立つてゐた。お婆さんの兩の目に湧き出る涙を私に見た。わつと泣き入つた私の聲は、おさへてゐる父の大きな手のひらのあひだから、お婆さんの耳へはひつた。父は、もう私の背に、恐ろしい咎の焔を焼きつける。私は子供ながらにも力いつぱい身を悶えて、どうかしてその苦みをさけやうとするとたんに、誰か私の背を打つたと思つたが、焔をたてゝ燃えてゐる大きな父のかたまりは、疊の上へころがつた。
お婆さんは私の胸にひつたくつて、さうして外へ驅け出した。堀先生は、追ひかけてきた。お婆さんは私を抱いて、倉の白壁のうしろへ逃げた。
「御免なさいよう！」と、聲を上げて泣いた私の襟もとには、お婆さんの落した熱い涙が感じられた。

高松

その後の記憶を、たどり返して考へると、堀秀成のお婆は、たしかに二つ頃、十八か九ぐらゐであつたらうと思はれる。
夏は螢のぬけがらをさがして遊んでくれた。冬は雪釣りをして遊んでくれたが、私は、二つの次の年の、六つの春の末頃に、また兩親にともなはれて、東京へ上らなければならなくなつた。

お婆さんは、高松まで、私たちを送つて來た。私が船へのる時に、青い波底を見入るのがあぶないと云つて、うしろから私をおさへてくれたことを覺えてゐる。船が岸をはなれてからもお婆さんの赤い日傘が、いつ迄もそこに見えてゐたことを覺えてゐる。
高松は、私の實の故郷とは聞いてゐるが、高松のことはいま何んにも覺えてゐない。
先祖代々の墓は、紅葉山と云ふところにあると聞いてゐるが、私はまだ一度も詣でたことはない。
八島も小豆島も私の記憶には殘つてゐない。たゞ屋根のある橋の灯が、夜るの水にうつつてゐたのを夢のやうに覺えてゐる。

ほりぬき井戸

さて、東京の思ひ出は、ほりぬきの井戸からはじまる。
地の底に穴をあけて、そこから水が湧いて出ると云ふことは、私には、まことに不思議なことであつた。いや、目に見るものはことごとくこの井戸の水のやうに、不思議なものとして私の世界に湧いて出た。
父と母とに伴はれて、再び東京へ上つて來た私は、父と母と

が立ち並ぶ間を通つて、不思議な家の前へ立つた。

赤く錆びた鐵扉を、父はいくども明けなやんだ。私は其の鐵にすがつて、話に聞いた、ばけもののゐる家と云ふのは、かう云ふ家かと思ひながら、戸を明けて這入つて行く父の身を、どんなに、子供心に、氣づかつたか知れなかつた。

傍には、青い蔦が生えてゐた。臺所の方は暗かつた。引窓から光りくさす光に、鋼鐵の鋏が、三つ目小僧の口のやうなまはるい影をかけてゐた。

今、考へて見ると、それは丁度、夏の初めであつたと思はれる。

その頃はまだ東海道に汽車もなく、四日市から横濱通ひの汽船にのりかへて來たのだと云ふ話は、その後、父から聞いたところである。して見ると、船をあがつた近くの町に、赤い人形や白い人形の畫を描いた芝居の看板の出てゐた街は、あれは或は四日市であつたらうか。

私たちは、大阪から紀州灘を越えて、また四日市から遠州灘を越えて、小さい蒸氣船にのつて來た旅人であつたのだ。

船の窓から眺めた灘は、私の目には、船付に見えたそれが無限の世界であつた。「鳥もかよはぬ八丈ケ島。」と云ふ唄は、そのとき既に知つてゐた。

私たちは、一年のあひだ戸をとざして置いたと云ふ、小石川の水道町の、とある家へと歸つて來たのであつた。家の外の空地は、夏の日に光つてゐた。その空地のまんなかに、今の話しのほりぬき井戸があつて、井戸の水は、圓い井戸側にあいてゐた小さい孔から井戸流しへと流れてゐた。

その水は川へ落ちた。川は深く水の流れは青かつた。青大將と云ふ蛇の背中のやうに、滑かな青さを湛へて、その川は油のやうに流れてゐた。

川には橋がかかつてゐた。それは今の江戸川の掃部橋である。石切橋と、江戸川橋との間には、この掃部橋があつたばかりで、古川橋も、華水橋も、その頃はなかつたやうに覺えてゐる。

井戸の高さほどしかなかつた私は、井戸側にぶらさがつては日に何度、井戸のなかをのぞいて見たか知れなかつた。

その井の底は淺かつた。然しその底の一方に圓い小さい穴があつた、そこから水は不斷に湧いた。湧いて來る水は、すき通つたお供餅を水の面にさし上げた。私は擦ちぎれを持つて來ては、そのお供餅をかきまはしたが、いくらかきまはしても、お供餅は、もとの通りだつた。

私は自分の力ではどうすることも出來ないこのお供餅が、湧

いてくるその小さい穴を透して、かつては謎で見たやうな廣い世界を、ここでは深いものとして、その盡きざる力の底の底の暗さを、はるかにも夢のやうな不思議なものと思つた。

　井戸側の外には赤い苔が生えてゐた。それは、山かがちと云ふ蛇のとさかのやうに、小さい石垣のやうなまだらを重ねてゐた。夏の日は、日増に、そのうへに強くあたつた。

鞘形の柱

　小日向の大日尊の鞘形の柱を思ふと、にぎやかだつた緣日が思ひ出される。

『ちよいちよい買ひな、やたらに買ひな、一錢五厘だ何んでも買ひな。』と、緣日商人が呼びあげるその呼び聲にまさつて、赤い、まはるい、やはらかい、ゴム風船の笛の音が、『ピイ、ピイツ』と、きこえたものだ。

かるめら燒に、ぼつたら燒、しんこ細工に、飴細工。母に貰つた二錢銅貨は、五厘づゝ四たびに使へた。

然し、私はその緣日の賑ひよりも、大日尊の御堂の、鞘形の柱が何よりもすきだつた。

　殘暑の日も過ぎて行つて、秋の風が朝夕に私の小さい爪の根にしみる日が來た。私はその頃、うちに手傳ひに來てゐた、おていさんと云ふ身内の人に連れられて、大日尊の御堂へ、日なたぼつこに行つたものだ。鰐口からさがつてゐた紅白の綱をひいて、おていさんはそれをならした。ちりちりんと御鈴をなげる音がして、本堂の護摩壇にはお燈明がともつてゐた。おていさんは、そこにあつたお賓頭盧さまをなぜた。柔ちよろのお賓頭盧さまは、私のいいお友達ではなかつた。

　それよりも私は、そこに立つてた鞘形の柱をなぜた。鞘形のぎざぎざを刻んだ柱のおもてをなぜて、その手を頬にあてがふと、手はつめたくすべすべと頬の上にさはつた。それは丁度、堀秀成のお婆さんが、蛇のぬけがらを拾つて來て、その光つてゐるお腹のところを、私の頬にあてがふと、心もちのいい滑かさが、私の顔のおもてを這つて、衿くびから背中の方へ、すべつて行つたその心もちに似てゐた。私は、幾度も幾度も、鞘形の柱で自分の手をこすつては、頬の上にあてゝ見た。

　蛇のぬけがらにも似てゐる鞘形を、刻んだ柱。私は、その柱をなでては、遠くお婆さんの事を思つた。

　私はその後、大きくなつて、彫物の稽古をしてゐる時、この鞘形の模様を刻むたびごとに、大日尊の御堂の柱と、蛇のぬけがらを拾つて遊んだ翠平の、邸の裏の笹籔を、思ひ出した。

　小日向の大日尊の御堂は、今もなほ昔のまゝに殘つてゐる。

鞘形の柱はその後、幾たりの子供の手で撫でられたか知らないが、こすれて低くなりながらも、いまだになほ殘つてゐる。おていさんは年をとつて、いまは横濱に住んでゐる。

私をあんなに可愛がつてくれた、堀秀成のお妾は、もし活きてゐるとしたならば、まだ活きて居るべきはずの人である。高松の濱で別れた、赤い日傘のお妾さん。私に蛇の美しさと、その優しさとを教えてくれたお妾さん。この間、大日尊の前を通りすがつたとき、過ぎた昔のなつかしさに立ち寄つて、その柱に手を觸れて見たが、もうあの蛇の衣の感じはこの手には傳はらなかつた。柱は私の大きな手のひらに、幅さへせまく蔽はれた。

丸屋

その日私は、大日尊の横丁を出て、水道町をまつすぐに、掃部橋まで歩いて出た。

丸屋呉服店の手前までくると、一人の子供が泣きながら、うしろから馳けて來る。

その時に限つて、私の目に映つた丸屋は、このごろの和洋折衷の店ではなかつた。

大勢の番頭が、見世にづらりと居ならんで、『いらつしやあい。あり難うございやあおかいやあす。』と、景氣よく商賣をしてゐる昔のまゝの丸屋だつた。

馳けて來た、子供の泣き聲は、私の耳をつらぬいた。子供の裾からは烟か立つて、馳けて來るあとに白くたなびいた

見ると、その裾には、火がついて燃えてゐた。綿入の裾に火がついたのを夢中になつて馳けるから、火は風にあふられて、ますます燃えるばかりである。往來の人は驚いて、あれ！あれ！と云つて見てゐる。

子供は今は死にもの狂ひ。火を消してやらうと思つて追ひついてくる人も目に入らばこそ。自分の胸にくすぶる烟にむせびながらまろぶやうに馳けてゐる。

すると、丸屋の店から、一人の番頭が、馳け出した。その子供を抱きとめやうとするはずみに、子供は何かに躓いてころんだ。番頭は、ころんだ子供に飛びかゝつて、燃えてゐる着物の火を、いちはやく揉み消した。

水道町の往來は、時ならぬ人の黑山をきづいた。

『何しろあぶない事だ、もう少しであの子供は、燒け死ぬところだつた。』と、人々は語り合つた。

子供のからだには、別に怪我はなかつたと見えて、かれにしくしく泣きながら、その燃えちぎれた裾から、焦げた綿を出

して、歩いて行つた。

私も、その子と一緒に歩いたが、その子は掃部橋の方へ曲つて、橋の袂のたりの路地をはひると見えたが、姿は消えた。

これは、そろそろ、夕方だつた。私は、掃部橋の欄干にもたれて、私の家のあつたあたりを、うす明りのなかに見やつた。

以前、平屋造りの、父の家のあつたところには、二階屋が立つてゐて、板塀が川に添ふてめぐらしてある。井戸のあつた空地にも、同じく家が立つてゐる。長崎屋と云ふ烟草屋の、土藏だつたと思はれる倉は、殘つてはゐるものゝ、もう崩れかゝつてゐる。

これは昔、西風の強く吹いた夜るだつた。寢入りばなに響き出した早半鐘に、驚いた私の父は、飛び起きて雨戸をあけると空はもう火の粉で一ぱいだつた。

火元は近くはないが、風下だからと云ふので、父は家財を前の空地へ運び出した。私は母に、よそ行きの着物を着せられていつでも逃げる用意をした。母の兄にあたる、一條の伯父さんは、小石川の訪諏町から、火事見舞にやつて來た。何しろ風は強し、一時は火の粉も盛に降つて、水道町はまる燒けになるかとばかり、なかなかの騷ぎだつたが、火事は大日坂の横丁の所まで來て止つた。

翌日になると、近所の子供たちは、皆んな火事場へ見に行つた。私もそのなかにまざつて燒跡へ行つて見た。燃え殘つてゐる火のまはりで、子供のことだから、火いたづらをしてゐたが一人の子供が、『おや、お前の着物から烟が出るよ。』と云はれたので、消さうとしたが、どこに火がついてゐるのかわからない。はやく家へ歸つて、母親に消して貰はうと思つて、私は水道町の往來を驅け出したが、火は風にあふられて大きくなつた。

その時、もしも丸屋の番頭が、飛び出して來て、それを消してくれなからうものならば、私は、もう少しであぶない怪我をするところだつた。

何んでもこれは、七つの春のまだ初めかと覺えてゐる。私はその後も、水道町を思ひ出すたびに、きつと丸屋を思つた。丸屋の店を思ふたびに、名も知らず顏も知らないその番頭を思ひ出した。

掃部橋の夕暮に、立ちつくしてゐた私は、橋を渡つて向ふ側の電車道へとかかつて來たが、そのあとから先き程の子供がまた現はれて、『前にはこゝに、こんな通りはなかつたね。』と話しかけた。

江戸川の、停留所に、續く兩側の街燈は、私のかげをぼん

（い）のと石とがりに倒した。

武島町

その年に、私は、武島町の子供となつた。

今こゝにある、その頃の父の日記をしらべて見ると、父は、小石川の武島町十一番地へ新しい家を普請して、廿一年の六月の一日に、そこへ移転したと書いてある。さうしてその日、私には、一枝八銭の竹の水出しを買つてくれたことが書いてある。水いたづらで怒りた私は、それからは、水いたづらが専門になつたものと見える。

私はよく笊を持ち出して、武島町の下水の溝で、めだかやいゝだぼはぜを、とつて遊んだものだ。その時分は、あの溝も、今よりも大きくつて、水が沢山流れてゐた。

武島町の溝の水は、高田橋のところへ来て水道端から流れてくる溝に合した。今では高田橋の名も寂しく、たゞの石が往来に渡してあるが、昔は、あすこに欄干のある木の橋がかかつてゐた。

下流は今でもある。[illegible]から、江戸川の仲の橋へ出やうとする道の右側はにある下水がそれである。いゝだぼはぜは、この下水に沢山ゐた。

しかし、この下水も、私には、怖いものゝ一つであつた。

水道端の通りと云へば、今はたひらになつてゐるが、昔は、道の片側が、こんもりと高くなつて、その道の下を水道が流れてゐた。小溝の水は、この水道からあふれて来たものである。大溝が、水道端につき當るところには、まつくらな、石の穴があつて、水は、その穴から落ちて来た。溝の両側は高い石垣になつてゐた。私の膝は水に浸して、私の耳には、くら闇の地の下で、流れる水の響がした。いゝだぼはぜは、その鰭をふくらまして、くら闇の中から泳いで出て来た。

私は笊を手にもつて、一歩一歩、くら闇の通りの下の洞穴へと歩いて行つた。目にはもう何にも見えない。私の手のひらは石垣をしつかりとおさへてゐる。足の指は、水底をさぐりさぐり、物凄い音のする水が流れてゐるなかをのぞいた。

私は、もうそれよりは奥深く進めなかつた。未知のくらやみをさしのぞいた私は、話にきいた三途の川も、かう云ふところかと思つた。無間の闇の洞穴に立つた私は、今までに、沢山のいゝだぼはぜの命を奪つたその咎を感じこんだ。若し一と足、ふみすべらしたら、この水の流れとともに、地の下を遠く遠く、溺れながら流れて行つて、父も母も、私をもうさがすことは出来ないのだとをのゝいた。

牛天神の井戸

江戸川の大曲りから、伝通院前へ行く、電車通りの坂を上ると、右かはに、牛天神の女坂が見える。

この間、私は、この牛天神の女坂を上つて見た。椎欅と竹の藪が、急な石の段々の左右にあつて、その根には小笹が生えてゐた。長い段々を上りつめると、そこには石の鳥居があつて、どら猫がひなたぼこりをしてゐた。荒りはてた東京に、ここばかりは、まだ昔のまゝだつたのを、なつかしいと思つた。

かうべをめぐらすと、灰色がかつた二月の空の下には江戸川の水が見える。電線と屋根との間に、仲の橋が見えた。

昔は、よくこゝへ遊びに来たものだと思ひながら、神社の前の、石の牛のわきに立つてその拝殿を見上げた。拝殿は、白壁に包まれて、昔の神々しさはどこへやら、それでも石の玉垣だけは、彫りつけた字に、さした朱の色とともに残つてゐた。参詣人もない境内はさすがにひつそりとしてゐた。

私がこゝへ来たのは、こゝにある一つの井戸を見やうと思つたためである。

凡そ、私が、深いものを、現在に、見たはじまりと云ふものは、恐らくは、ここの井戸が、その最初であつたらう。

井戸には石の井戸側があつて、釣瓶の繩は長く長く、地の底へ垂れてゐた。

これは、ほりぬきの井戸ではない。井戸の底は、日影もさゝない奈落にあつて、汲み上げた水は、夏のさなかでも氷のやうに冷たかつた。

私は、よく、釣瓶の繩につかまつて、その水をのまして貰つたが、繩につかまつてゐる私の指は、そのしばらくの間にも、冷えて切れさうになつた。私は、地の底の冷たさを、怖ろしいものに思つた。

誰かに帯をうしろからおさへて貰つて、井戸側にかじりついて、恐る恐る、井戸の底をさしのぞくと、卸ろした釣瓶が小さくなつて見えなくなるそのあたりに、小さい御神鏡のやうなまはるい水が、ごく幽かに、どうかすると見えてゐた。

釣瓶の底が水についたその音は、忘れるほどたたなければ聞こえてはこなかつた。大きな聲をたてゝ呼ぶと、そのいらへはしばらくして私の耳にはひつた。これが、木魂と云ふものであると聞いた私は、人の聲にいらへする不思議な魂か、地の底にもゐると思つた。

その頃私は、深い暗闇と云ふものは、恐ろしいと、今迄

ら聞いてゐた。目に見えない惡魔が、空中を飛びまはつて、人に災を持ち來すと聞いてゐた。それは、晝の日がはひつたあとのことで、夕暮を、昔から逢ふ魔が時と云ふのであると教はつた。だから私は、日の暮れには、家の椽に腰をかけて、軒に立つ蚊柱をながめながら、葡萄棚の下陰に、忍びよるたそがれを恐れた。

それからまた、天狗と云ふものがあつて、夕方、そとへ出る子供を、神かくしにすると云ふことを兩親からきかされた。象頭山の金比羅宮の裏山には、何千年と云ふ古い杉の森があつて、そこには天狗が住んでゐて、大勢の子供を神かくしにしたと教へられた。

それやこれやを思ひ出して、私は、やはり木魂と云ふものもさういふ魔もののたぐひででもあらうかと思つた。

木魂は私が呼ぶたびに返事した。木魂の返事をきくたびに、私はうしろに立つてゐた誰かの袂に、とりすがつた。

見れば、思ひ出の千尺井戸は今でもある。然し前とは變つてゐる。その石の井戸側もかはきはてゝ、木の蓋には大きな錠が卸りてゐた。上には屋根が出來てゐて釣瓶車のおもかげも殘らず、乏しい水道へ張つてあつた。

昔よく、お神樂のあつた神樂堂も、今では傾きかゝつてゐる。私は、下の水道端の、屋根や立ち木の頂きを見おろしながら、今度は男坂を下つた。

歸 屋 臺

これは、私の父が仙臺へ行つてゐる留守中のことであつた。

父は、その頃は、皇典講究所の講師をしてゐたので、何んでも、その方の勤めで、仙臺へ派遣されたのであつた。

留守宅は淋しかつた。母と私と二人ぎりだつた。一條の伯父さんは時々來た。菊池の純ちやんと云ふ父方のいとこも來たし小島の久さんと云ふ母方のいとこも來たが、その頃から私のうちへしじゆう泊りに來てゐた、一人の、私から見れば、大きな姉さんがあつた。姉さんの名は、およんちやんと云つて、私はどう云ふものだか、このおよんちやんにひどくなづいてゐた。恐らくは、牛天神の井戸のふちで、私をおさへてゐてくれた人も、或はこのおよんちやんであつたかもしれない。

この人の顏かたちについては、私は今なんにも覺えてゐない。何んでも色は白かつた。たしか島田に結つてゐたやうに思ふ。私とさし向ひになつて御膳をたべた。朝まだ家のなかゞ暗いのに、雨戸のすき間から曉の光がもれると、その隙間を黒いものが上つたりさがつたりした。私はそれを床のなかで見てゐた

が、何かの手が雨戸の外をなぜてゐるのではないかと思つて、怖ろしさに、およんちやんをゆり起した。枕をならべて寢てゐたおよんちやんは起き上つて、私のゆびさす戸の隙間を見て、『怖くはないよ！　あれは南天の葉が雨戸の外で風にゆれてゐるのだよ。』と、云つて、私を夜具の襟のなかにかくしてくれたことを覺えてゐる。

夜るのまた、寒い秋のなかばの事、牛天神のお祭りがあつて水道端の家並みには、注連繩がはりまはされて、町内には神輿がまはり、牛がひく踊屋台の五人囃は、私たち子供の心をそゝつた。

私は、屋台のあとについて、金剛寺坂を上つて行つた。

屋臺の上には、綺麗な衣裳を着た、踊りつ子が四五人ゐて、それが組んでは、かはるがはるに、幾番かの踊りを繰り返した。

踊りが終ると、お囃しの太鼓の音に、赤い手綱の牛はまた歩き出して、牛がとまると、屋臺の上の踊りはまたはじまつた。

一緒に歸らうと約束をした友達は、いつの間にか一人殘らず歸つてしまつて、とり殘された私だけは、見ず知らずの子供のなかに、まざつてやつぱり屋臺のあとについてゐた。

さうと氣がついた頃には、屋臺は私が一度も來たことのない町のなかにゐて、私はもう歸るにも方角がたゝなかつた。

何が私を、そんなにまで有頂天にしたのかと云ふことはいまだに覺えてゐる。

今思へばそれは常盤津の、瀧夜叉姫の踊りだつた。

光圀と云ふ眉の濃い、さむらひが、切つてかかると、瀧夜叉は、兒雷也のするやうに印をきつて、光圀の刄の上に、紙で切つた蜘蛛の巣を、たなごころから網のやうに、ぱつとばかりになげつける。妖術になやまされる光圀の苦悶のさまと、美しい瀧夜叉姫が魔法をつかふその顏が、私を神秘の世界へとつれこんで行つたのである。

知らない町に佇んで、途方に暮れてゐるあひだに、夜るはだんだんと迫つて來た。折から雨は降つて來て、神鳴りさまはごろごろと鳴つて來た。閃めく稻妻に私は逃げるところもなく、踊屋臺の下へ驅け込んで、泣くにも泣かれず小さくなつてふるへてゐた。

何んでも、この踊屋臺に、ついてゐさへすれば、もと來たところへ出られると、子供心にも思つたので。私はその屋臺の下に、あたりが眞暗になるまでもはひつてゐた。

その後、踊り屋臺は、茗荷谷の、高い笹藪の下を通つて、またもとの水道端の町へ出たので、私はぐつしより濡れながら、驅けて、自分のうちへ歸つて來た。

叱られると思つたから、こつそりと坐敷へ上ると、怒つてゐると思つた母親は見えないで、およんちやんがたゞ一人坐つたまゝ、私の顔をしげしげと見てゐる。

「おつかさんは？」と、私はきいて見た。

「おつかさんは。さつき牛天神へ行きましたよ。」と、およんちやんが云ふ。

「何しに？」と、私はきゝ返した。

「お前さんが、若しやあすこの井戸へでも落ちやしないかと云つて、さがしに行きましたよ。」と、およんちやんは答へた。

そのとたんに、おもての戸が明いて、母親は歸つて來た。

母親は、ちよくねんとそこに小さくすはつてゐる私の顔を、ぼんやりと眺めた。母親の目からは涙が湧いて、はらはらとその膝の上に落ちた。

およんちやんも涙をこぼした。私も泣いた。

そのうちに、また外の戸があいた。

「えゝおい、ほんとに困つたことになつたなあ！　何しろあれの父親が留守だから。」と、云つてはひつて來たのは、一條の伯父さんだつた。

一條の伯父さんは、障子をあけて、そこに座つてゐる三人を見た。

私たち四人は、無言のうちに、しばらく顔を見合せた。

あとで、およんちやんのはなした話を、私は今でも思ひ出す。

其晩、私が、うちへ歸つて來たのは、何でも九時頃であつたさうだ。母親は私の歸りの遲いのを心配して、これはたゞの遲さではないと云つて、諏訪町の兄のところへ驅けて行つて、之れから二人で手分けして江戸川のふちや、牛天神の境内を雨の降るのもかまはずに、探して歩いたのださうだ。母親は牛天神の井戸のなかをのぞいて、私の名を何度も何度も、呼んださうだ。

仙臺行き

父の日記を見ると、九月四日に私が小學校へ入學したと書いてある。さうしてこの日記は、その月の十二日までで終りになつてゐる。そのあとの日記はもう無い。

父が仙臺へ行つたのは、その後、間もなくの事であるとすると、「踊屋臺」のその話は、私がもう學校へ通ひはじめてからの出來ごとであつたかと思はれる。

私は、小石川の服部坂の黑田小學校で、最初の一年を卒へた。だから私が、母とともに父のゐる仙臺へ行つたのは、たしか八つの夏頃であつたであらう。

朝、武島町から車に乘つて、一條の伯父さんに送られて、上

野の停車場へ行つた。私は子供心にも、父に逢はれると云ふ喜びと、未知の國へ行かれると云ふ悦びと、汽車に乘れると云ふ悦びにみたされて、三臺の車の響きに勇みながら、上野の停車場へ着いた。

私は、それ迄にも長い旅はしてゐた。琴平から東京迄の旅を往復三度も繰り返してゐたのであるが、それはまだこの世界と云ふものが、私にははつきりしなかつた夢の間のことである。

今考へると、この仙臺へ立つ旅は、私としての記憶に殘つたはじめての旅である。私たちは仙臺に三年ゐて、また東京に歸つて來たが、父は其のち皇典講究所の講師をよして、千葉縣の五井町と云ふところに閑居して、私が十五の年に、そこの土になつてしまつた。

しかし、土になつたのは、それは父親の肉體である。靈魂はいまどこへ行つたらう？

死んだ父の墓石は、五井町の養老川のほとりにあるが、私はその靈魂までが、墓土のなかに眠つてゐるとは思はない。

或は、今頃、仙臺の、町のどこかをさまよつてゐはしないかしら？ 私は、父の亡魂を追ふために、無に仙臺へ行きたくなつて來た。

私は遂に、忘れてしまつた父の俤を、ぼんやりと書齋の壁のおもてにゑがき出しながら、萬年筆のインキがたれるまで、筆をとゞめて考へたが、どうしても仙臺を見て來たくなつた。

私は、一つのスウツケースを携へて、今早稻田の自宅から、上野停車場へ向ふのである。三十幾年の昔、仙臺へ立つ時には母と二人連れだつた。然しその母も、私が亞米利加で放浪してゐるうちに、私を待ち焦れながら死んでしまつた。

今日は、たゞ一人である。私は家の格子戸を靜かにしめて、鶴卷町の電車停留所へといそいだ。

菊平旅館にて

仙臺へ着いたのは午后の九時十七分だつた。昔、仙臺へ着いた時にもやつぱり夜るだつたが、私は一日汽車の窓から顏を出して、刻々に變つて行く知らぬ田舍の景色ばかり見てゐたので汽車の煤烟が目にはひつて、仙臺へ着いた頃には、私の目はもう明かなくなつてゐた。憐れな子供の私は、停車場に迎ひに來てゐたなつかしい父の顏さへ見ることが出來なかつた。仙臺の町の灯だけが、私の目にぼんやりと並んで見えた。

だがこの度は、停車場から出るとすぐ、私は一臺の車を雇つて、その名だけは小さい時から覺えてゐた菊平と云ふ、旅館へ

とさして行つた。仙臺の夜るは凍りついてゐた。

昔は、父に伴はれて、花京院通りと云ふところにあつた、父の借家へと着いたが、今夜は、國分町の旅館の一室に、旅のスウツケイスを開くのである。

昔は、いとさんと云ふ人が手傳ひに來てゐて、私たちにその晩の御膳をたべさしてくれたが、今日は旅館の女中に、一服の茶を入れて貰つてゐる。

『あなたの名は何んと云ひますか?』ときくと、女中は、『つねと申します。』と、答へたおつねさんは私に『お風呂をおつかひなさいます。』と、云つた。

北一番丁

旅館の一夜は明けて、私は三十年ぶりで仙臺の土を踏む身となつた。

私は國分町を右に曲つて、縣廳の前へ出て來た。縣廳の前の溝には滑らかな水が流れてゐる。こんな滑らかな水が下水を流れてゐると云ふことは東京にはないことだ。

私はその頃、東二番丁の小學校にあがつてゐたが、毎日こゝを通つて、その後、父が住んでゐた、北一番丁の三好と云ふ人の邸内の家へと歸つた。

貧乏人の子が笊に米を貰つて通るのと道づれになつて、この溝のふちを通りながら、なにか話しをしたことをいまだに覺えてゐる。

溝が往來を横切つて左りへ曲るところへ來た。私は昔、この溝が、人の邸の池から流れてくると云ふことを聞かされて、若しや金魚でも逃げて來はしないかしらと思つて、よくその水をのぞいたものだ。

右側の土塀は昔のまゝである。石垣を築いた上に、白壁の塀があつて、その塀は黒い板でかこまれて、上には瓦がのつてゐる。石垣の角と、塀の裾との間には芝が生えてゐて、人の歩いた跡がある。私もよくこの上を歩いたものである。

私は昔の有様をとどめてゐる師範學校の前を通つて、上杉山通りと、同心町のあひだにあたる左りがはの、もと住んでゐた家の前に立つて見た。雪は、ちらちらと降りかゝつて、私がさしてゐる蝙蝠傘の上に、さらさらと幽かな音をたてゝゐる。

三好家の邸の門はあるけれども、違つた名札がかかつてゐた。私が住んでゐた家は、もう跡方もなく、そこには一軒の雜貨店があつて、通りに向いて、さゝやかな店をひらいてゐた。

私の家の庭に植ゑてあつた木だと思はれる木ばかりは殘つてゐたが、然し、もうそこには私を知つてゐる誰も住んでゐやう

とは思はれなかつた。

私は數歩行き過ぎては、立ちどまり、立ち止つてはかへり見て、同心町を横切つた。

すると、その角に、有路と云ふ標札をかけた邸がある。邸は大きな杉の樹の下にあつて、私の記憶に殘つてゐた昔のそれと今の現在に立つてゐるその姿とは、別な物になつてしまつてはゐなかつた。

私は門をはひつて、其の家の玄關に立つて案内を請ふた。なかゝら出て來たのは四十ばかりの女であつた。こゝの家の妻女らしく二人の子供が左右からとりついてゐた。

『昔、この先に住んでゐました、三好と云ふ方は、只今、どこに住んでゐられるでしやうか。』と、私はきいた。私はかうは尋ねたものゝ、心のうちでは、それを尋ねたくはなかつた。私の尋ねたかつたのは、その昔、よく、繪なぞを畫いて、一緒に遊んだ、この家の、ふさのと云ふ女の子が、今はもう成人はしたらうが、もしや、まだこの家にゐはしなからうかと、それを知りたいためであつた。

『三好さんは、只今、東京さ、お出でになりますた。』と、かの女は答へた。これより先は、もう聞くには及ばない。聞いたとて何にしやうもないと私は思ひながら、その人の顔を見ると、氣のせいかその人が、その、ふさのと云ふ女の子であつたやうに思はれた。まる顔な、色の白い、どこかに幼な顔も殘つてゐるやうであつた。

『まことに失禮ですが、あなたはもしや、ふさのさんと、おつしやりは、しませんでしたか？』と、私はきいて見た。

向ふは、はつと驚いた。二人の子どもさんたちは、恐ろしいものが來たと云ふやうな顔をして私の顔を見てゐる。

『あんたは、どなたでござんすか？』と、きかれた。

『あたしは、昔し三好さんの邸内に住んでゐました佐々木と云ふものでございますが、何しろ長年前のことでございますから多分お忘れになつたでございましやう。』と、私は云つた。

『さやうでござんすか、忘れやんすた。まづこつちへおへれんせ。』と云はれた。

邸も、杉も、玄關も、昔のまゝであるけれども、人の姿はかはつてゐる。かはつたのはこの人ばかりではない。私もかはりはてゝゐるのだから、見忘れるのが當然と私は思つた。

昔の話しはどんなにか私もしたかつたが、わきにゐる子供さんたちを、驚かすのも氣の毒だし、ことに御主人の留守に、知らぬ他人が、そこの御妻女と話すのも、日本のならはしでないと思つたから、私は、何げなくかう云つた。

「いいえ、さうしてはゐられません。私は東京のものですが、一寸仙臺へ參りましたから、昔、住んでゐましたところを見に參つたのでございます。左樣ならば。」と、そこを出た。

昔、見馴れた家の窓には、丁度、その頃の其の人と同じぐらゐな、その人の子供が、不思議さうに私のあとを見送つてゐた。

萱の原

私に、その頃よく通つた上杉川通りの杉の樹の下を通つて、昔、よく、父の使ひに、酒をあつらへによこされた伊澤と云ふ酒屋の前を通つて、またここでも雜魚とりをして遊んだ北六番丁の小川の橋を渡つて、右には、竹の垣根を見、左に近く木立ちを見、遠くなみうつ丘陵をのぞみながら、雪の一と筋道をたどつて、萱の原へとちかづいた。

萱の原の手前には、また小川があつて、その上には土橋がかかつてゐた。小川の水は澄んでゐて、底の砂が波形の模樣の綾をこしらへてゐた。私は昔、こゝで鮒を釣らうとしたことを思ひ出した。底が淺くて鮒の姿が見えたから、つりばりを下したが、鮒はさつぱり私の針にかからなかつた。しかし私は、釣り針も、魚の形も見えすいてゐるが、これを見るのがたのしみで、そこに一日座つてゐた。

萱の原の叢には、澤山の杉苗が植はつてゐて、寒さに枯れて赤くなつて、雪のなかにつらなつてゐた。

ひろびろとした萱の原の頂きへ出た。以前はそこになかつた陸軍の射的場の、小屋のわきには若木の松の並木があつて、私はその下を通り越して、原の向ふの高みへと上つて見た。あたりは雪に深閑として、仙臺の町の遠どよみが、はるかにうしろの方に當つて、ごくひくく、ひくく、聞こえてゐるばかりである。

ぜんたい、私には、なぜそんなに、萱の原がなつかしいのか？それには、深いわけがある。

昔、私は、鈴虫を取りにこの原へ來た。空の曇つた暗い日にこの丘の上に立つて、耳を澄すと、どこかに鈴虫が鳴いてゐた。私はその鳴いてゐるところを聞きさだめて、靜かに草の根をひらくと、鈴虫は長いひげを、たがひちがひに動かしながら鳴いてゐる。

小さい硝子のコップのなかに銀紙をはりつけたのを、そつと鈴虫の前へ出して、うしろの艸を手の先で、かさかさと動かすと、鈴虫は驚いて、明るいところと思つてか、コップのなかへ飛び込んだ。

私は、かうして鈴虫をとつて歸るのが面白く、よくこゝへ來たものだ。

ある日のこと、やつぱり空のどんよりとした日に、鈴虫をとりに私はこゝへ來たが、いくら耳をすまして聞いてゐても鈴虫は、遂に鳴かなかつた。

私はぼんやりと、この野つかさの上から、遙かに、いくつもつらなつてゐる低い丘なみをながめたが、私は丘の彼方から立ちのぼる白い煙を目撃した。

私はなんとなく、そこへ行つて見たくなつた。私は手に小さい虫籠と、銀紙を貼つたコップを持つたまゝ、丘を一つ驅け下り、また一つ驅け上り、驅け下つては、驅け上り、いくつも丘を越えて見たが、煙は、やつぱり、遠くの遠くの、丘なみの、はてしの方になびいてゐた。

私はいま、こゝに立つて、またこゝに立つことによつて、新たにした昔の思ひをこの胸に抱いたまゝ、かさなる丘の限りをつくして眺めてゐる。子供の時に見た白い煙は、今は彼方に立つてはゐない。けれども私は、私の心は、やつぱり昔の子供の時と同じやうに、このはてのない丘なみを、驅け下り、驅け上りしてゐる。

廣瀬川に沿ひて

仙臺へ來ての二日目はいい天氣だつた。オーヴァシューズをぬぎすてた私は、足も輕く、廣瀬川へ來て見た。

その昔、偕楽に通ふ廣瀬川の板橋は、鐵の吊橋にかはつてゐる。招魂祭の時に見世物小屋のかかつた砂原には、二師團の建物が立つてゐる。水は昔のまゝに澄みきつて流れてゐるが、河原の兩側は變りはてゝゐた。私は昔、父親から泳ぎを習つた源兵衛淵が、どこにあるかと見まはしたが、それらしいところは見當らなかつた。

私は河原に下り立つて、石ころの上をつたはりながら、水のふちへ來て見た。川底の石は淺くつらなつて、水の上には、晴れ渡つた北國の冬空が、ぎらぎらしながら映つてゐる。山には日があたつて、消え殘つた雪が樹の梢や、崖の下に、白くつゞいてゐた。山腹のお城の跡が、淡く白さを殘つてゐる。

私は若しや、思ひちがひをしてゐるのではなからうかと思つたから、河原で砂を掘つてゐた一人の男に、源兵衛淵のありかを聞いて見た。その男は、近頃こゝへ來たものであるからと云つて、向ふにゐる婆さんに聞いて見ろと云ふ。

私はその婆さんのところへ行つた。婆さんは、腕をかゞめて

砂を掘りおこしてゐた。

「少しものをお尋ね申しますが、昔、源兵衛淵と云ひましたのは、どの邊でございましたかしら？」と、私は問ひかけた。

お婆さんは、顔一つぱいに日をうけながらまぶしさうに私を見上げて答へた。

「源兵衛淵ちゆうはなつし、この川の曲るあすこにあつたつけなつし、今はもうねいもなつし。」

私は、それを見たいと思つて來たのであるが、今はもうなくなつてしまつたと云ふ。私は、かうべをさげて去つた。

然し私は、その川の曲るところへ出て、昔のさまをしのばうと思つて、河原につたはつて上へのぼつた。川の水は、崖をめぐつて、河原はそこで断えてゐたので、私は、丈なす小笹原の中を踏み分けながら、やつと目ざすところへ來た。

川は大きく彎つて、對岸に、絶壁になつてゐる。前にはその上に、常盤町の遊廓があつたのであるけれども、今はもうない。遊女屋の庭に生えてゐたらしい松の木ばかりが殘つてゐる。川は淺く埋つてゐた。昔はこゝは、斷崖が川のなかばに突き出してゐて、水勢はそれに塞かれて、大きな渦を卷いてゐた。

昔から何人の人が、その渦に卷きこまれて溺れたか知れなかつたと云ふ源兵衛淵の、そのそこには主が棲んでゐたと云ふことを、子供の耳にきいてゐた。

私は夏は、父につれられて、水泳を知らなければ一生に、どのくらゐ不幸があるか知れないと云はれて、このすぐ下で、泳ぎの稽古をさせられたものである。私は今でも父親が丁度いま私が立つてゐるこの砂原の上に立つて、私の泳ぐところを見張つてゐてくれたその姿を思ひ出す。たつた一人しかなかつた子に、泳ぎを教へた父親は、いかばかり熱心に私を見張つてゐてくれたものであらうと思ふと、涙がこぼれる。

渦を卷いてた源兵衛淵はもう埋つてゐる。不思議なものゝ一つとして私が日ねもす眺めくらした、その渦卷きも消えてゐる。たゞきこえるのは瀬にそゝぐ水の音ばかりである。私はその時の父が戀しさに、聲を立てゝ父の名を呼んで見た。父の靈魂が、もしこの水の響のなかにさまよつてゐるならば、私に返事をしてくれるであらうと思つた。

望洋館

九つばかりになる一人の子供が、仙臺の八幡前の、長い長い街道を歩いて行く。

仙臺へはひつてくる馬子馬は、背に色々なものを積んでゐる。仙臺からこの街道を出てゆく馬子馬は、みんな空荷になつ

て、その荷鞍には、霽さがりの冬の日が、冷たくも、さしてゐる。子供はその空馬のあとをついて歩いて行く。子供は、南京豆を、手に持つてゐる袋から出して、それを剝いてはたべ、剝いてはたべしながら歩いて行く。

道には砂利と云ふよりも、大きな石ころがしいてあつて、子供はそれをふみはづしてはよろよろとよろけてゐた。

やがてのことに、この子は八幡樣の高い石段の下まで來たが、その高い高い杉の森を見上げて、ぼんやりと佇んだ。八幡樣の石の鳥居の前には、石の狛狗が二つ、左の方のは口を閉じ、右の方のは口をあいて、いづれも、しがみつらをしてゐる。すると一人の洋服姿の男が、石段の上から下りて來て、子供に話しかけた。

『ここの神主さんの沼田仲さんと云ふ人は昔し、お前のおとつさんを知つてゐる人だつたよ。今は御病氣なさうな。』と、云つた。

『あゝ、あたいも知つてるよ。』と云ひすてゝ、子供はまた、すたすたと出かけた。

もう、八幡前の家並みがたへて、赤土の山が右側からのぞいてゐるところまでくると、街道は、左り側に廣瀬川の緣を見る。川はここでも大曲りに曲つてゐる。街道も川に添うて曲の手にまがつてゐる。街道は絕壁にのぞんで、絕壁の下には川水が眞青に淀んでゐる。子供はここまで來て、またぴつたりと立ち止つた。さうしてその深淵を、ものも云はずにのぞいて見てゐる。

『この淵は何んと云ふ淵だい？』と、子供はうしろをふり返つて、そこに立つてゐる洋服の男に聞いた。

『これは、畏淵と云ふ淵なさうな。何んでもよく月の夜に、馬子が月にうかされて、馬もろともにこゝから落ちて死んださうな。』と、男は話した。

『あゝ、その話しは私も、をとつさんから聞いたよ。』と、子供は、なほも、そこにある低い柵につかまつて、その淵の水底に沈んでゐる大きなまるい石を見てゐる。そのありさまは、その子も丁度、石にでもなつてしまつたやうである。子供が石に魅入られたか、石が子供に魅入られたか、眞青な澄潭をなかにして、双方ともに身じろぎもしないでゐる。

男は、あきれかへつて、子供を置いて先へ歩いた。子供はやがて追ひついて來た。

廣瀬川に注ぐ谷川に掛け渡した橋があつてその橋を渡ると、子供は谷について右に曲つた。谷の水は、あたりの松風に和して、ひびいてゐた。廣瀬川の向ふの岸は低くなだらかになつて、山畑に

の透明な空氣のなかに、一望の蒼嶺をかゝげてゐる。
　子供は、その眺望をうしろにして、一歩一歩谷あひの細道を、登つて行く。子供の目には大きな樋が、山腹の洞穴の半ば崩れた暗いなかに、父からきいた八俣の大蛇のやうな形をして、その腹のところどころから水をこぼして、うねつてゐるのが見えた。
　洋服の男の目にはそんなものは見えなかつた。短かい樋は谷を横切つてかゝつてゐたが、洞穴は見えなかつた。
　谷にはまた、橋がかゝつてゐた。その橋はせまい粗朶の橋だつた。子供は、それを渡つて、また山へ登つて行く。
　登るにしたがつて大氣はいよいよ澄み、あたりはますます靜かに、松の風と、瀧の瀬鳴りがきこえるばかり。すると、子供は向き直つて、小さな手をかざして、はるか遠くの方を眺めた。子供の眺めてゐる先は、空のはてである。
「海が見えるよ。」と子供が云ふ。
「あの海は、金華山沖で、私が亞米利加から歸つて來る時にあすこを船で通つた。」と、洋服の男が云つた。
　子供は、また登つて行く。さうすると、その山の頂上に、平地があつて、そこに幾棟かの家がたつてゐた。子供はそこのとりつきにある小屋をのぞいた。

　小屋のなかは湯殿になつてゐて、湯殿の戸は雨風にさらされてゐた。浴槽はもうこはれて、一滴の湯もなくかはきつてゐた。浴槽のわきの窓には、赤や、黄や、青の、色々な硝子が張つてあつた。
「おとつさんと、おつかさんと、あたいが一度こゝへ來て、このお風呂にはいつたよ。その時にも、あの色硝子の窓があつたよ。おとつさんは、あすこで、あたいの背中を流してくれたよ。」と、子供は、窓からさす色硝子の光線が、色々な影のモザイクを現してゐる風呂場の流しを指さした。
　子供のうしろに立つてゐた男の目には、そこで親子三人が、湯を使つてゐる有様が、ありありと見えた。と思つたが、今迄そこにゐた子供の姿は、かき消すやうに消えてしまつた。
　男は、身をめぐらして、また、海のある方を眺めた。さうして、軈て、彼れの父親が、あの海の彼方には、亞米利加と云ふ國があると、彼れに敎へたことを思ひ出した。
　限りない海の向ふに亞米利加と云ふ國があるときいたその亞米利加へも、彼れは既に行つて來た。然し、再びここにたつて遠き海とながめやるかれの目には、父親が、指さした遙かの國と云ふものは、その亞米利加よりもまだ遠い、絶無の國であつたと云ふことを思はなければならなかつた。

かれは獨り、淋しげに佇んで、その襟巻を山風になぶらせてゐたが、家の障子に人聲のする緣の方へと歩いて行つた。（完）

談話賣買業者

村松梢風

處は遠州地方の、或る農村の片端れに一軒の居酒屋がありました。居酒屋と申しましても、あながち酒だけを商ふわけではなく、田舍の事で駄菓子も賣れば豆腐も賣り、其の他一寸した荒物位は並べたり、草鞋までもぶら下げてあると云つた體裁。菓子箱の蓋の硝子は雨夜の月の如くに曇り、煮〆めを盛つた大皿の金網の上では年中蠅の舞踏が行はれて居ります。此の家は縣道に對つて建てられてありました。縣道には玩具のやうなレールが敷設れ、其の上を痩せ馬が馬車を曳つぱつて行くかと思ふと、偶には乘合自動車が砂塵を捲いて通り過ぎます。それらの客には滅多に用は無いのですが、流行唄をうたひながらやつて來る馬力の馭者、冬でも鉢卷きの下から汗を流して來る荷車曳き、野良歸りの農夫、行商人、道者、村の子供――と云つたやうな人々が此の居酒屋の上華客なのでございます。表から裏迄筒拔けの土間があつて、其の土間の壁寄りの方には、酒樽、燒酎瓶、食器戸棚などが陳んでゐて、煤の香とも酒の香とも貨物の匂ひとも付かぬ甘酸つぱいやうな複雜な下等な香りが、壁と云はず疊と云はず柱と云はず浸み込んでゐて、爰へ立ち寄る飢ゑたる人や渴ゑたる人々の咽喉を快く刺戟せずには置きませんでした。此の家の主婦といふのは五十を越した寡婦でありました。其の體は豚のやうに肥つて、髮は赤く縮れて居りました。けれども、其の顏よりも低い鼻と、笑ふ度びに消えてしまふやうな細い眼とは、あらゆる場合に人に好感を持たせることができるのでした。彼女は、元來は村内の農家の者ですが、悴と其の嫁とに對して折り合ひが良くないところから、夫と二人で爰へ別家して居酒屋を始めたのでした。彼女の夫といふのは村でも名うての呑んだくれの喧嘩買ひでありました。客に商ふ

酒の小賣位は亭主が呑んでしまふだらうと申しました。ですから夫の在世中は生活も困難で彼女の苦勞も人並ではなかつたのが、一二年前に夫が流行性感冒でコロリとやられてしまつたために、爾來彼女は比較的多くの利得を商ひから收めることになり、些少な打擲だの足蹴を蒙る恐れも無く、偶に亡夫の事を思ひ出して淋しいやうな氣持を覺える時のほかは、概して幸福な生涯にたり得たのでした。彼女は、今年十四歳になる孫娘を相手に、其酒樽のやうな腰に細帯と煮しめたやうな前掛けとを卷き付けて、朝から陽氣な元氣よく眼を無くして笑ひながら、子供に一錢二錢の菓子を賣つたり、コップ酒を量つたりしてゐるので御座いました。

今日も今日とて此の居酒屋には三人の客が這入り込んで居りました。其の中の一人は町の商人で其の名をば山德と申します。彼れ山德は毎朝早く大きな風呂敷を背つて、結び付けて我家を出て、村々在方を廻つて繭茶棉花などを買ひ集めて、それを町の問屋へ卸すのが商賣であります。處が今日はまだ少しの商ひも出來ないと見え、白い木綿糸で德といふ印を縫ひ込んである濃紺の大風呂敷が頸ッ玉から外された儘の形で傍らに轉がつてゐるのでした。一人は町の手前の處で水車業を營んでゐる[illegible]といふ男です。彼は三個の臼を据ゑ付けた水車小屋の亭主でありました。けれども、其の三個の臼の中のどれか一つは常に故障が來勝ちでありましたから、實際は二個の臼を持つてゐるのと變りはありませんでした。自身で車を曳いて一俵か二俵の玄米を農家から買つて來て、それを成る可く減らぬやうに搗き上げ、再び車で町へ運んで白米の小賣商だの溫泉場の旅宿などへ賣り込むのが彼の日常繰り返してゐる仕事でありました。

今一人は村の農夫で久七といふのでありました。農夫の久七の處では此のほど牝牛が子を產みました。其の牝牛の乳が半年間の契約で町の牛乳屋へ高價に賣れたのですから、彼の女房が七人目の子を産んだ時には腹を立てて産婦の尻をピシャピシャ打擲したといふ評判の久七が、此の家畜の出産によつて欣喜雀躍したのも無理からぬ次第で御座います。今日は其の家畜の親子を牛乳屋へ連れて行くところでありました。道理で此の家の表にある大きな榎には一頭の牝牛が繋がれ、其の腹の下には牝鹿のやうな愛らしい子牛が仰向きに首を伸ばして、長く垂れてゐる白い乳房をチュー〳〵吸つてゐるのでありました。以上の三人は、何れも此の居酒屋にとつては不斷の顧客でありました。と同時に彼等三名も、それぞれ相應に懇意な間柄でもありましたから、めい〳〵のコップを前に置いて、成る可くそれを長く惜しもうとするかのやうに、時々小鳥が水をのむ時のやうな恰

喉をしめこコップを口に當てがひながら、心置きの無い談話に耽り續けてゐるのでした。彼等の談話と云ふのは概して各自己れの職業に對する不平或ひは嘆きと云つたやうた性質の事柄でしたさうかと思ふと、自慢話も出るのです。人は誰れでもめいく自分の職業が世の中で一等わりの悪いものだと思ひながらもまた、一方では他人の職業をば輕蔑したいやうな氣持を有つてゐるので御座います。

商人の山徳は恁う申しました。

「恁う世間が不景氣になつて金融が引き締つて來ちやあ俺(おら)のやうな資本の無い者あ商賣が出來ない。おまけに近頃あ在(ざい)の衆だ狡猾になつて直接(じか)に問屋を引き合ふといふ遣り方だから益々商賣はしにくゝなるばかりだ。そこへ持つて來て問屋あ足許を見て無理を言やあがるしさ。さうかと云つて思惑をして去年のやうな暴落(ガツ)を食つちや大變だと思ふから、見す見す問屋の腹あ肥してやるやうなもんだが、考へて見れあ馬鹿々々しい譯だ。」

すると水車業者が負けない氣になつて申しました。

「精米工場が方々へ出來て來たから俺(おら)の稼業(しやうばい)もはあ長い事あないさ、それも石炭の間はまだよかつたが、電力發動機(モーター)と來ちやあ、丁度自動車の後を躄車で追つ掛けるやうなもんでとても競爭にならない。と云つて發動機(モーター)を買ふだけでもちよくい千兩、それに小屋から道具の修繕費を見積るとどうしても二千兩だとこ要るからとてもこちとらに手は出せない。おまけに近頃警察で搗き砂の檢査まで始めるし、恁う取り締りばか嚴重しくなつて來ちやあ愈々お仕舞ひだ」

最後に農夫の久七が、お前達のそればかりの事が何んだと云ふやうな顏をして申しました。

「世の中に百姓位コケなものは無いだ。一反作るに三十人手間も掛つて、五俵け收穫(あげ)たうちから二俵半の散田(さんだ)を當ると、今度は肥料代の二十兩もふん奪(だく)られるだ。米が二十兩して漸とこさ一兩の日歩(ひぶ)になるかならないかだ。それが今年のやうに米が十兩近く下落(さが)つて御覽(ごろう)じ、肥料屋へ年一割五步の利息を拂ふと、あらかた一年只で働いた勘定になる。養蠶をやつて猶のこと俺(おら)あえらい目を見ただ。兩に二貫五百目の桑を買つたら、繭の値はどうだ三圓五十錢だらう。俺がところぢやあ家内中で一と月半睡ずに働いたお蔭で桑代の半分借金が出來た。」

彼等の談話と申しますのは概して恁う云つた範圍をば出ないのでして、まことに面白くも紆折もない事ばかりでした。それにも係はらず彼等が眼の色を變へて話し合ふ所以のものは、他に面白い話題が無いからばかりではなく、恁うした問題から彼等の心の底を暗々裡に流れてゐる不平と悲哀とを相互に訴へ合

ふ點に於て共鳴するところがあるからです。商人は問屋の主人を、水車業者は精米工場の持主或ひは株主を、農夫は地主を、めい／＼共通の心理を以て羨望し、怨嗟し、果ては及び難なき自身の境涯を嘆じて益々將來の不安を大にする事に至つて全く彼等は一致するのでした。「此の儘にして置くと、幾年かの將來には資本家ばかりが此の世に殘つて、吾れ吾れ貧乏人は骨と皮ばかりに痩せた體を地上に支へる事すらも不可能になるかもしれない」と或る煽動思想家が勞動者の群衆の前で叫んだ言葉に似寄つた心持を、此の居酒屋に於ける三名の無資産階級者は無意識のうちに感じてゐるのでした。けれども斯様な考へは、誇張された感情の世界に於てのみの眞理でありまして、實際に於ては誤つた考へ方で、愚かなる想像に屬する事は申すまでもありません。動物界でも植物界でも、大なる勢力を有するものが小なる勢力を有するものをば壓倒し征服してしまうといふのが原則の如くに見られて居りますが、事實は其の反對を行つてゐるのです。大なるものが小なるものを壓倒し征服する例は事實に於て存在するには違ひありませんが、それは局部的一時的の現象に過ぎなくて、時間と空間を通した大觀から觀る時には、却つて小なるものが大なるものを征服し、毀滅して、最後には衰滅に到らしめるのが自然の法則になつて居ります。微弱なものが強大なものに比べて如何に強き生存力を有するかといふ一番手近い例證として、庭に植ゑられてゐる樹木は早魃に遇へば往々枯死しますけれども、其の根方に生へてゐる雜草は焼け切つた土の上にも猶執拗に生を持續するのを見るでありませう。

閑話休題。前述の三名の者が盛んに談話を交換して居る處へ、表から此の居酒屋へ這入つて來た一名の紳士がありました。紳士は、打ち見たるところ五十恰好の年配で、半白になつた頭へ焦茶色の中折帽子を冠り、身には厚い霜降りの外套を纏ひ、手に太い杖を携へて居りました。居酒屋の主婦と三名の客とは一様に眼を瞠つて此の新來の紳士の容子を見守りました。紳士は靜かな足取りで奧へ進んで來ると、三名の先客の方へ會釋れた默禮を施してから、汚れた板敷きの上へ無造作に腰を卸ろして鞣皮の手袋を脱ぎながら「主婦さん酒を貰ひませう」と言ひました。それまでアツケラカンとして土間に突つ立つてゐた主婦は、此の時漸く氣が付いて慌てふためきながら「ハイ、ハイ」と續け樣に幾つもお辭儀をして、それから別口の上等の酒をコツプへ波々といふよりは山盛りに盛り、恐る恐る紳士の前へそれを運びました。紳士は無造作にこれを受け取つて一と口飲んで下へ置きました。三名の先客は全身の興味を擧げてこれ丈に此の紳士の體を觀察してゐるのでした。紳士の胸の邊には、き

た眼付は犀の如くに瞪いてゐました。かの杖の頭は精巧な象牙彫りの細工で出來てゐて、其の下の處には分厚な金無垢の金具が卷かれてありました。顏の中では大きな眼と險しく高い鼻とが眼を惹きました。けれども其の顏はよくよく觀ると、誰れでも直ぐに親しむことが出來るやうな不思議に人懷つこい感じが力強く現はれて居るのでした。一番親切にそれに惹き付けられたのが直ぐ隣席に腰掛けてゐた水車業者の龜でありました。彼は何んとなく此の紳士と口を利いて見たくなりました。

「失禮で御座いますが、旦那樣はどちら樣で？」と龜は出來るだけ懇懃な調子で紳士に對つて伺ひ尋ねました。

「ハア、私は東京の者です」と紳士は答へました。

「東京――左樣で御座いますか。では何か御用向きで御出張で御座いませうな？」

「いや何、格別用事といふ程の事もありませんが、チト自分の商賣物を仕入れ度いと思ひましてな」

「へえー。旦那樣は御商法の方で……？　では矢つ張り生絲か茶のお取り引きで？」

「さういふ物ではありませんです」

「それでは椎茸か材木……あゝ判明りました、鑛山の方へ御關係で？」

「いや違いますな」と紳士は益々笑つて答へました。

「ハテナ……それぢやあ旦那樣は一體何御商賣で御座いますか？」水車業者の龜は何時しか紳士に對する禮儀も打ち忘れて不思議さうに尋ねました。それは彼獨りのみならず、傍に居る他の人々に取つても知り度くて堪らない事柄でありました。

すると紳士は極く靜かな明晰な言葉で斯う言ひました。

「私は話を商ふ者です」

「ヒエッ！」と一同の者は腦天から發する聲をあげました。そして此の不可解な紳士の言葉に對する沈默が暫時續いた後で、今度は商人の山德が口を切りました。

「話を商ふと申しますると、全體何ういふ事を致しますので？」

「何んでもない事です。面白い話を澤山仕入れて置いて、それを店で賣るだけの事です」と紳士は至極無造作に答へました。

「初めて承はりましたが、そんな商賣があるもんで御座いますか？」山德は劇しく頭を前方へ突き出し好奇心の眼を輝やかして申しました。

「ありますとも。是れは昔から澤山ある商賣でちつとも珍らしくありません。都會にはまだ／＼種々不思議な商賣がありますよ。時に如何です皆さん、私も御當地へ參つてから實はまだ一

つも酒を仕入れないのですが、然うしてお目に掛つたのを幸ひ爰でお取引を願ひませうか？」

紳士は急に眞面目になつて然う申しました。これを聞いて一同に吃驚致しました。そして輿夫の久七が叫びました。

「これあ驚きで御座いますだ。私共あみんな無學で、ことに私らあ今から丁度三十二年前にたつた一遍伊勢詣りに行つたほかに世間へ出たこともありませんだ。どうしてどうして東京の人に賣るやうな話がある筈あ御座いませんだよ」

「それが宜ろしいのです。實を言ひますと、學者の話だの都會人の利いた話だのは當節品が多過ぎて困つてゐるやうな譯で、自然賣ゆきも良くないといふ譯でな、それでわざわざ御當地迄やつて來て、先刻だがあなた方のやうな田舍の人の話を仕入れやうといふ次第です。所でな、御相談は速いがよい、然うしませう、話にもいろいろあつて仕入れ相場も區々ですが、初取引きの事ですから、何に拘はずあなた方の話一つに對して爰で酒を一升宛買ひませう、それぢやあ安いとおつしやれば少し位は奮發しない事もありませんが、如何でせう？」

談話賣買業者と名乘る紳士は、商人口調になつて、而も熱心に然う云ふのでありました。其の言葉に嘘があらうかなどといふ事は今更疑ふだに出來ないのでありました。三名の者は、此の不思議なる營業者の言葉に驚嘆致しましたと同時に、自分達の淺はかなる談話が酒一升に相當することになつたといふ事實に對して、異常なる感激に打たれずには居られませんでした。

「何は兎もあれ此の得難い鴨を逃してはならない——」と然ういふ氣持が、以心傳心的に三名の胸の中を往來致しました。

そこで商人の山德が問屋へ掛け合ふ時のやうな氣持で無氣味さうに申しました。

「ぢやあ一つさう願つて見る事に致しませうが、しかしお話はどんな種類が宜ろしいので？」

「では、私が話題を出す事にしませう。コーツト——皆さん大分御酒家のやうですから、飲酒家のことはお詳しいでせう、そこで、飲酒家に關する興味ある話を一つ宛話して頂きませう」

三名の者はそれを聞いて非常に安心致しました。で、早速談話に取り掛る事になり、先登第一番に水車業者の繁が口を開きました。

「私は醉ツ拂ひの劍術家のお話を申し上げます。これは私と同業の彌吉と申す人物から聞きました話で、この彌吉は七十歳以上の高齢でつい近年沒しましたが、彼がまだ壯年の頃親しく目擊した事實談だと申しますから、今を距る事餘程古いお話であらうと存じます」

水車業者は是れ丈の前提を述べた後で、倚次ぎのやうに語り出しました。

水車業者の話

當地から餘り遠くない町に平手門左といふ弓術家が御坐いました。元來其の宅は飲食店を營んで居たのでありましたが、彼は極く若年の頃から弓が好きで、師匠に就いて修業して後には印可を取り立派な弓の先生になりました。御承知で御坐いませうが、當國は昔から非常に弓道の盛んな國でして、舊幕時代に當國一箇國を限り町人百姓が裸弓を擔いで歩く事を許されてゐたといふくらゐ、俗に駿遠參を弓取りの國と申しますが、就中當國は盛大であつたとの事。其の遺風が未だに衰へませんで、町でも在方でも大概の家に弓の二三挺位無いといふことはなく、從つて矢場も至る處にありまして、鎭守の祭禮は申すに及ばず、日曜祭日等には所所方々で弓の會が開かれるといふ有樣。で、自然弓の師匠も澤山にありますが、皆それぞれ斯の道で生活してゐるので御坐います。偖この平手門左で御坐いますが、弓の方の腕前はなか〳〵確りしてゐたにも係はらず、兎角人から餘り好かれなかつたといふ理由は、此の人平常餘り高慢が過ぎる事と、今一つは非常な大酒家であるためでありました。飲むのも宜ろしいが、彼は飲んで醉ふに從つて益々日ごろの高慢が募つて來て、はたの者をば蔑ろにして自分一人が偉がり度いといふのでしたから、嫌はれるのも無理はありませんでした。其處で、彼と交際してゐる人達は、何かで彼の弱點を捉まへて其の高慢の鼻を折つて遣り度いものだと考へて居りました。

或る時門左は弓の會があつて町から二里許り離れた村へ出掛けました。其所は、堀越の藤左衛門といふ博奕打ちの親分の家でありました。この藤左衛門といふ人物は、若い時分に其の頃の江戸相撲で幕の内にゐた某といふ者を東海道の袋井宿で斬り殺した事から賣り出して、後には清水の次郎長と對抗した程の此の界隈きつての顏役でありました。で、其の日の會も無事に了へましたので、藤左衛門は中でも主立つた者だけを留まらせて慰勞の意味で酒肴を出して饗應しました。其の中には平手門左も加はつてゐた事は勿論で御坐います。藤左衛門も門左が飲み手である事は豫て知つて居りますので特に彼には盃を勸めました。門左は十二分に酩酊致しました。が、彼は醉ふにつれて平常の酒癖がムラ〳〵と胸先き迄込み上げて參りますのを、何しろ名代の親分の宅の事ではあるし我慢して飲んで居りました。で、愈々暇を告げて歸るといふ時になりましたが、門左が非常に醉つて居る樣子を見て藤左衛門は心配致しまして「獨り

では危ないから若い者に送らせませう」と親切に申しました。すると門左は是れをどう取り違へましたものか、非常に立腹して、今迄押へに押へてゐた腹の蟲が一度に皮を破つて飛び出してしまひました。

「ナニ、獨りぢやあ危ないから送らせる？ おい親分、イヤせ藤左衛門さん、成る程お前さんは立派な貸し元だ、が、俺も恁う見えても弓士の平手門左と云つて町人でこそあれ處士同様の人間だ、是れしきの酒に喰らひ醉つて二里や三里の道が歩けないと云ふのかへ。え？ 親分々々つてれあ増長しやがつて、あんまり人を馬鹿にするな」

と門左は眼を据ゑ口の周りをペロペロ舐めずりながら管を卷き始めました。藤左衛門も莽蝿くなりましたので當らず障らず當人の云ひ成りにして、提燈だけ持たせて獨りで歸してやりました。門左は片手に提燈を持ち、片方には弓と矢筒を一緒に結へたのを擔ぎながら、彼方へヨロヨロ此方へヨロヨロと、折柄春さきでまだ風は冷たう御坐いますが、醉うた御機嫌で我が家をさして戻つて參りました。二里の道を無事に町の手前迄行き着いた時には最早夜半近くでありました。其處には可成り大きな河が御坐います。當今では立派な橋が架かつて居りますが、其の時分迄はまだほんの假橋みたいなわけで、幅の狹い板が一枚宛つなぎ合せてあるだけでありました。其の橋へ差し掛りましたので門左は俄かに困却してしまひました。今迄の道は兎も角も平地の事ですから何うやら恁うやら辿つて來たやうなものの、此の醉つてゐる足許で一枚板の橋を渡るといふ事は甚だ覺束無い事だと、そこは生醉ひ本性違はずで心配になりました。おまけに雨後の水嵩增して、激流滔々と流れて居るのを見ますと、滿身の醉ひも一時に醒めてしまふかと思ふばかりで御坐いました。けれども、此の橋を渡らぬことには我家へ歸る事は出來ませぬ。門左は散々躊躇した後漸く決心して恐々(こわごわ)橋を渡り始めました。それは約十二三間の長さでありましたが、案じるよりは生むが易く無事に橋を渡り盡して向うの磧に達する事が出來ました。門左は磧の石に足が附くと同時にホッとして初めて千貫の重荷を背中から卸ろしたやうに感じました。と同時に彼は何んとも云へない勇者の氣分を感じました。此の危ない橋を難無く渡り得た事は、戰場ならば敵の大將を仕留めた如く、是れを自家の職業に例へる時には大矢場で金的を射落したやうな、偉大な功名手柄に匹敵するのでありました。何んなもんだといふ氣持になりました。と、彼は先刻藤左衛門が「獨りでは道が危ないから若い者に送らせよう」と言つた言葉を思ひ出して、又もや無性に腹が立つてまゐりました。

「藤左衛門が何んだ、親分だなんて大きな面あしやあがつて、高が博奕打ちぢやあないか。俺は恁う見えても武士の平手門左と云つちやあ町人ながら處士同様の人間だぞ。人を馬鹿にしやあがつて、危いから逃らせるだ？ 何な嘘言を吐かしやあがるんだ、醉つてたつて足あ確かなんだ、馬鹿野郎、恁んた橋が何が危ないんだ」と、門左は破で獨りで大聲をあげて呶罵りました。一度

彼は、此の橋をもう一遍渡り返して見たくなりました。一度ならず二度迄も此の橋を渡り了せるならば、それこそ自分は日本一の勇者だといふ氣持になりました。で、彼は折角向うへ渡つた橋を又もやこちらへ逆戻りをし始めました。そして今度も首尾よく渡り着くことが出來ました。玆に於きましてか門左の得意は絶頂に達してしまひました。愈以て自分ほど偉い者は無くなつてしまひました。彼は又もや前と同じやうな事を破で呶罵り續けました。

話替つて、此の河から引いた用水の口に水車小屋を持つてゐる彌吾といふ男がありました。彌吾は毎晩夜半近くに自身の水車小屋を一遍見廻るのが例でありました。で、今夜もいつもの時間に水車小屋へ行つて内の具合を檢めた上で、堤防の上に出て參りますと、何やら破で呶罵つてゐる聲が聞こえます。今時分何事が始まつたのだらうと彌吾は怪しく思ひながら破の方へ下りて行つて見ると、提灯を持つた一人の男が「藤左衛門が何んだ……俺は處士同様の平手門左だ……」と頻りに他の人影も見えないのにさも側に喧嘩の相手でも居るかのやうに叫んで居りました。彌吾は平素懇意な間でありましたので直ぐ「ハハア、門左が醉つ拂つて歸つて來たのだな」と悟りましたが、出て行くと面倒だと思ひましたのでコソソリ物陰に隱れて樣子を覗つて居りました。

とも存じませぬ平手門左は、愈々三回目を渡り始めました。併し此の時は、前二回の成功で十分心に奢りを生じてゐる處へもつて來て、餘り大聲を發して呶鳴つたものですから、今迄内部に潜んでゐた醉ひが一時に全身に發して來たから堪りません。橋を三分の一も渡らぬうちに忽ち足を踏み外して、眞逆樣に激流の中へ陥ち込んでしまひました。

其の翌日の事で御坐いました。水車業者の彌吾は町中の懇意な者の間をば廻つて歩きまして「實は自分は非常に面白いものをば見たのだが、是れは是非一同にも話して聞かせ度い事だから今から早速何處そこへ集まつて貰ひ度い」と言ひました。其處で一體彌吾の話といふのは何んな事だらうといふわけで多勢の仲間がゾロ〱集まつて參りました。平手門左も其の中の一

人で御座いました。

皆、一同殘らず集まりました處で、備吉はやをら起ち上りまして、昨夜自身の目撃した顛末をば詳細に、而も何等の粉飾(かざり)を交へることもなしに物語りました。爾來巧術家平田門左は、其の高慢の鼻を餘程低くしなければなりませんでした。

* * * * * *

水車業者の翁は斯く語り終つてコップの酒を一と息に呑み乾しました。紳士は終始黙然として眼を閉ぢて聞いて居りましたが、かの醉つ拂ひの巧術家が橋を渡戻りする段に到りますと、思はず破顔大笑したのでありました。第二番目の話し手は商人の山德でありました。

「私の話は唯今の話と極く似寄つた話で御座います。が、唯一箇所正反對である點は、醉つ拂ひの主人公が却つて水車業者である事で御座います」と前置きをして山德は語り始めました。

商人の話

是れはつい近年の事で御座います。唯今のお話と同じ土地に備吉と申します水車屋がありました。此の備吉は、體格は寧ろ小男に屬する方で御座いましたが、體に似せぬ大酒家で、而も年中間斷なく酒の香を欲しいといふ、まことに厄介な性分で御座いました。が、彼の財産と申しますものは、小さな水車小屋が唯一つだけでしたから、それから上る收益だけでは自身の慾望を十分に滿足させるに足り無い事は勿論なわけで御座いました。だから彼は年中酒に飢ゑて居りました。

水車業と申します稼業は、晝の間は米の賣買も致さねばならず忙がしう御座いますが、夕方臼の入れ替へをしてしまふと、十二時頃に一度臼を檢べに參るほかは閑な體になります。そこで備吉は毎晩此の時間を利用して町の居酒屋へ行くのでした。彼に取つて此の時ほど樂しい時間は無いので御座います。彼は、彼の女房が毎日極めて出して呉れる極めて少額の錢をむき出しの儘固く掌の中に握り締め、眞逆驅け出す事もなりませんから、其の短い脚を出來るだけ長く伸ばして、天國を夢想してゐる人か、または戀人に逢ひに行く若者のやうな眼つきをしながら、行きつけの居酒屋をさして急ぐのでありました。けれども、それほど強く彼を眩惑させてゐる愉快な氣分も、たつた居酒屋へ行き着いて德利の酒を半分近く呑む迄しか保たないのでありました。最初の盃へ四五杯を呑む間はまるでうつつで音樂を聽いてゐる時のやうな陶醉の氣分に浸ることが出來るのですが、それからすこし經つて、德利の中味がほゞ半分位になつ

たと思ふ時分から、彼はきまつた一種の不安を感じ出すのでした。それは生命(いのち)の蠟燭がダラダラと燃えて行くやうな感じでした。最後の、徳利を逆樣に立てても一滴も垂れて來る物が無くなつた時の悲哀を、一分でも一秒間でも先きへ送り度い氣持になります。で、其處からは出來るだけ速力を緩めて、甜めてるのか嗅いでるのか分らない位に少(すこし)宛、味はひ樂しむのでありました。處が恁うして長く飲んでゐるお蔭に、時々思はぬ果報にあり付くことがあるといふのは、同じ居酒屋へ飲みに來る客の中には懇意な者が居たり見知り越しの者もあつたりといふわけで、どうかすると「淸さ一ついかう」などと盃を貰ふ事があります。貰へば返さねばならぬから同じ事でありさうなものですが、それは世間普通の事で、此の淸吉に盃を差すほどの人は勿論自分が損する了簡で居りますから其の心配には及びません。で、彼は常に心私かに恁ういふ機會の到來を豫期しながら、益根氣よく盃の緣(ふち)ばかりを甜めて居るので御座いました。

或る日の事、淸吉は例に依つて居酒屋の客になつて居りました。丁度其の頃は、久しく振舞ひ酒にもあり付かないで居るのでした。「今夜あたりは誰れか來さうなものだ」といふ未練な氣持があつて、最早徳利は大概空虛(から)になつてゐるにも關はらず愚圖々々して腰掛けから尻をもちやげずに居りました。すると、其の時新たに此の居酒屋へ這入つて來た二人連れの職人がありました。そして淸吉の腰掛けからすこし離れた處へ向き合つて陣取ると、直ぐ樣威勢よく飲み始めました。其の飲み振りは實に速くて、まるで淸吉の眼から見ると盃が宙を飛んで往來してゐるとしか見えません。二本三本徳利は瞬く間に空虛(から)になります。淸吉は羨望に堪へませんでした。自分もたつた一遍あのやうに惜しげもなく浴びるやうな飲み方をして見たいものだと考へながらこちらを眺めて居りました。職人は二人とも此の町の者で淸吉とも顏だけは見知り越しの仲でした。淸吉は彼等が自分の方を見たならば隙かさずお世辭の一つも云つて近付き度いものだと心組んで居りましたが、今日に限つて彼等は側に淸吉が居る事にも氣が付かずにゐるかのやうな樣子で、面白さうに話しながら盃の献酬(やりとり)をしてゐるのでした。淸吉は堪まらなくなりました。この上は自分の方から押し掛けるよりほかに仕方はありませんでした。が、眞逆に手ぶらでは行けませんから、空虛(から)つぽの徳利と盃を右の手に持ち、それから一切れも手を附けてない澤庵漬の小皿を左の手に持ちまして、非常に謙つてゐるやうな容子を作つて職人達の側へやつて參りまして、

「やあ、大將今晩は、」と呼び掛けました。

職人達は不意を喰らつて一寸面喰つたやうに淸吉の顏を見上

げましたが、甚だ無愛想な調子で
「やあ」と答へました。
清吉はぐたりとして其の側へ腰を掛けると、先づ持参の濁酒を両人の前へ押し遣り、それから中の一名の鼻さきへ盃を突き付けるやうに差し出しまして、
「大将、恐ろしく景気が宜えぢあないか。しかし、僕の盃も一つ受けて呉れ玉へ、交際ひのしるしにだネ、へへへへ、君は然んなもんで、仕様はあるまいが、さ」と態と職人の調子を真似で申しました。
職人は迷惑さうに其の盃を受けました。清吉は自分が持つて来た徳利で酌をして遣りました。けれども、それは岩間の清水が涸れるにも似て、盃の底に僅かばかり溜まつたばかりで直きにお仕舞になりました。職人は詰らない物に目を觸れるやうに顰め顔をして其の盃をあけると「どうも有難う」と云つて直ぐ様返盃に及びました。向う側にゐた男がそれに酌をしました。すると、職人達の方の徳利も矢張りおつもりになつたところで。逆ひにしても漸く盃へ半分位にしかなりませんでした。清吉は此等が直ぐに後を命じるに違ひないと思つて居りました。處が意外にも、それを機會に二人の者は勘定を拂つてサツサと出て行つてしまつたのでありました。

清吉は何んとも云へない侮辱を感じました。そして腹が立つて腹が立つて堪まりませんでした。自身の行為の卑劣な事をば考へて見る餘裕はありませんでした。
「何んたる交際ひを知らない奴だ」
彼は憤り心頭に發して參りました。どうにも恁うにもならない此のムシヤクシヤ腹を抱えて我家へ歸る氣にはなれませんでした。彼は不圖頭に掛けてゐる世帯の中の事をば考へ付きました。それは昼間白米一俵を米屋に買つて受け取つて来た金で、夕方女房に渡す筈であつたのを、忙がしさに紛れてつい失念してゐたのでした。けれども、其の金に手を付けた日には後で女房にどれほどヒドク我鳴り出されるか分りません、夫婦喧嘩をしても未だ嘗て一遍も勝利を得た事のない清吉は、常に女房をば鬼神の如くに畏れてゐるので御座いました。が、結局彼れの自制力は、猛烈な此の渇の欲望に打ち勝つことは出來ませんでした。
「おい、もう一本つけてお呉れ」と、清吉は帳場の方へ向つて大きな聲で呼びました。
清吉の前には徳利が何本となく並んでしまひました。さすがの彼も最早酒の漸く廻つて居りました。彼は自分の側へ來た小

女に向つて「今何時だ」と云つて聞きました。小女は時計を見て來て「十二時にすこし前です」と答へました。「十二時」といふ言葉を聞くと、淸吉は水車小屋を見廻りに行く事を考へました、醉つてはゐてもそれだけは忘れなかつたのでありました。彼は居酒屋を出て、川の向うにある自身の水車小屋を差して出掛けました。其の橋は可成り廣い橋ですが、それでも彼は幾度びか足を踏み外しさうになつて漸うのことで向うへ達しました。それからは樂でありました。堤防の上を一丁ばかり川に溯つて進むと、其處に用水の口があつて、其の流れに彼の水車は掛けられてあるのでした。折柄良い月の晩で、向ふの山の上の松の木の枝まで一つ一つ數へられさうに見えました。水車に映る月影がテラ〳〵と鏡のやうに光つて居りました。それを見ると淸吉はすつかり安心したせいか俄かに足が利かなくなつてぶつ倒れた儘、其の場へ寢込んでしまひました。

　淸吉の水車小屋から餘り離れてゐない處で矢張り同じ業に從事してゐる太平といふ人物がありました。太平は其の朝山の上へ朝日が昇りかけた時分に我が水車小屋へ遣つて參りました。彼が堤防の下をスタスタ參りますと、だしぬけに頭の上から罵り合ふ人の聲が聞こえて來ました。「朝ツぱらから何處の奴が喧嘩をしてゐのだらう？」と思つて急いで堤防へ驅け上つて見ましたところが、不思議な事には誰れも人は居りません。ハテナ妙だぞ」と太平が考へて居りました時、又もや次ぎのやうな叫び罵る聲がいたしました。

「たとひ澤庵にもしろ、こちとらお肴を持つて行つたんだぞ、べらぼうめ、交際(つきあひ)を知りやがらんにも程があらあ、大淸郎――」

　其の聲は、つい太平が足許の叢の中から聞こえて來ました。吃驚して見ますと、小笹や荊棘(いばら)が一面に繁つてゐる叢の中へ、一人の男が猿股褌一つの素ツ裸で大胡座を掻いて、あたりの物を手で薙ぎ拂ひながら、大威張りに威張つてゐるのでありました。其の全身の皮膚は酷たらしく傷つき破れて血しほがタラタラと流れて居りました。よく〳〵見るとそれは同業者の淸吉でありましたので太平は猶更仰天致しました。

「たとひ澤庵にもしろ、こちとらお肴を持つてつてるんだ、べらぼうめ……」と、淸吉は同じ事を續けて怒鳴りました。

　太平は直ぐ樣此の醉ツ拂ひの同業者を宅へ連れ戾さうと致しましたが、何分にも人の見境ひがなく暴れて手が付けられませんので、態々淸吉の家迄行つて此の事を家族の者に告げ知らせた上、再び多勢で其の場へ遣つて來て、暴れ狂ふ淸吉を漸うの事で家に送り届ける事が出來たのでありました。

　此の話が直きに有名になりましたところから、哀れな水車業

若は當分のうち町へ顔が出せないのでありました。

・　・　・　・　・　・　・　・　・

山窩の巧妙なる諧謔の描寫は、聞き入る人々を十分に笑はせる事が出來ました。偖、最後に農夫の久七は語り出したのでありました。

農夫の話

吾れ吾れすべての人間が是非とも慎まなければならないことは、色と酒との二つで御座います。わけても青年時代には、色情のために身を滅す者は數限り無く御座います。私の話も矢張り色情に關係した事で御座いますが、是れはまた奇體なことには、色情のために間違ひを起こした若い男女が、圖らずも酒のために危うい命を取り留めたといふ不思議な話で御座います。

偖――今から丁度二十年ほど以前の事、私共の村に平作といふ百姓が御座いました。此の平作は、小前仲間でも特に貧乏人の部に入れられて居るのでありました。譬へて申さば、彼の家は農家でありながら御年貢さき迄しか食ふ米が續きません、それから先きは秋の收穫の時が來る迄、自家の農業の傍ら主に日傭取りなどして家族を養はせなければなりませんでした。何故彼の家は斯様に貧乏であつたかといふと、それは地主様から借りてゐる親譲りの借金の根が未だに切れないからでありました。彼の死んだ親も永らく此の借金のために苦しんで來たのでしたが、彼の代になつてからも早や二十年、前後を通じてざつと三四十年間、年々一割二歩の利拂ひをして來たのですから、既に實際に於ては元金の十倍以上にも相當する金額を地主の財産の中へ繰り入れた勘定になりながら、今以て其の借金が減らないばかりか、五年に一度位内作に出すと、稍ともすればそれが太りさうになるのでした。村でも古い物と云へば、鎭守様の太鼓の胴と、平作の借金といふ事になつて居りました。

平作には、夫婦の仲にたつた獨りのお花といふ娘がありました。いろんな意味で神佛の加護に預ることの薄かつた平作でありますが、彼は唯此の點に於てだけ天に感謝しなければなりませんでした。お花は性質も素直で親孝行でありましたが、其の上大の縹緻好しで御座いました。彼女は年頃になりますと、それは〱美しい娘になりました。色白で、圓顔で、冴え冴えした眼と、ちんまり整つた鼻とを有つてゐて、おまけに愛嬌があるのです。彼女が古びた手拭でもそれを姉さん冠りにして、紅い襷を掛けて、山から草を刈つて戻るところなどへ行き遇ふと、誰れでもが暫時恍惚として、低う何んとなく田園の生活と

いふものが非常に赤誠なものであるといふやうな氣持にさせられるのでした。だから村の若者などは一人としてお花に心を寄せぬ者は無いといふ有樣で御座いましたが、何を云ふにも彼女の家が前申す通りの貧乏です、うつかりお花に手を出したが最後、先きが獨り娘のことだから其の家の婿に行き、評判の借金の三代目の繼承者とならなければなりません。お花は可愛いが借金は怖いと誰れでも申すことで御座いました。それにお花が人並み優れて心の堅い娘でも御座いましたから、戀い噂など嘗て人から立てられた事もなく、今年十八の歲を迎へたのでありました。すると爰に、同じ村內の背介で德松と申す者がありました。德松の家は、田地三町步に畠が五反步ほどと、其のほか多少の山林などもあつて、財產家とは云へないが、村では先づ中流以上に生活して居るのでありました。德松はそこの次男でありました。此の德松が、非常に熱心にお花に心を寄せて居るのでありました。德松の家では養蠶や製茶をも盛んに行ひましたので、毎年其の時期にはお花は傭はれて働きに來るのでありました。蠶に桑をふりながら、或ひは山の畠で茶を摘みながら、お花は美しい聲で歌をうたふのでありました。德松はお花が摘んで來た茶の目方を量りに掛ける時には、人知れず其の目方を實際以上に多く勘定して遣るのでした。お花が宅で機を織つてゐる側へ出掛けて行つて白粉や簪など密り與へたりしてゐるうちに、何時しか二人は野良の歸りに稻むらの蔭でコソコソばなしを交すほどの仲になりました。

さうかうするうち二人の關係はパッと世間へ擴がつてしまひました。おまけにお花は姙娠三箇月といふ體でありました。それと知つた彼女の兩親の驚きは一方ならず、直ぐ樣人を以て德松の親へ掛け合ひに及びました。

「恁うなつてしまつたからは何ちらを咎めても仕方がないから、お宅の息子さんをお花の婿に貰ひ度い」と云つて申し込みました。

德松の親達も非常に吃驚しましたが、一應本人から事の實否を問ひ糺さうと思ひまして、直ぐ樣德松を側へ寄んで覺えがあるかどうだと訊ねますと、德松が申すには「お花の腹へ出來た子は確かに自分の子に相違無い、就いては先方の希望通り自分をお花の養子に遣つて貰ひ度い、それが何より自分に取つても有難い事だ」といふ答へです。

「馬鹿野郎、牝狐にばかされやがつて、睨りしろ。あんな貧乏人の水呑み百姓の婿になつてどうする了簡だ、家は村會議員だぞ、幾らでも身上のある立派な處と緣組みが出來るのだ」と、父親は大層な立腹で申しました。

父親の考へでは、是れは手切れ金で話を付けるより外はないと思ひました。で、先方へ其の向きに交渉したところが、今度は平作が頑として聞き入れません。

「たつた一人の娘をきず物にされて金で事を内済にするわけにはまゐりません、何んでも徳松さんを養子に貰ひ度い」と平作は云ひ張りました。

けれども、徳松の親も飽く迄息子を養子に遣る事は不承知致しません。両方の家庭の間にはすつたもんだと悶着が縺れて居りました。可哀相なのは當人同志でありました。或る晩徳松に約りお花が戸外へ呼び出して、胡瓜の苗床の蔭へ踏み込んで、どうしたら宜からうと云つて相談致しました。けれども良い分別など出やう訳にはありません。結局二人は、此の世で添はれぬくらゐならイツソあの世へ行つて夫婦にならうと、飛んでもない相談が成立つてしまひました。二人は死ぬ覚悟で、其の場から手に手を取つて村を駈け落ち致しました。二人が這入つて参りました處は町の怪しげな小料理屋で御座いました。どうせ死ぬなら縦ひ一夜でもふたりで愉しく明かしてからといふので、足を差して来たのでありました。料理屋の方ではそんな事とは知りません、気を利かしたつもりで二人を奥の離れへ通しました。

其の晩に其所へ泊り込んでしまひました。が、翌朝になつて二人が眼を醒ました時には既に陽が高く昇つて居りましたので、何處へも行く事は叶ひません。死ぬのは夜に入つてからといふことに決め、酒を注文して二人は侘しく酌み交しました。徳松は齢は若いがなかなかの酒好きで、若者連の仲間でも大の飲み手でありました。根が斯様に好きな酒ではあるし、是れが此の世の飲み納めだと思ふと、今日こそ存分飲んで置かうといふ気に徳松はなりました。お花も、女ながら決して酒は嫌ひではありませんでした。で、ふたりは互ひに差しつ押さへつ、泣いたり笑つたりしながら飲んでゐるうちに徳利の数は無数に重なつて来て、軈て其の日も暮れて夜になつた時分には二人共非常に酔つぱらつて居りました。しかし、そんなに酔つてゐても二人はまだ死ぬ事だけは忘れませんでした。二人は、どうせ死ぬなればも一度村の土を踏んでそして死なうと相談が決まり、夜更けてから其處を立ち出でて我が村へ戻つて参りました。が、何分非常に酔つて居る事とてどうにもかうにも道が歩けません。それでも二人は転んだり起したりして、互ひに助け合ひながら、折柄の闇夜で人目にも掛らず首尾よく村迄辿つて参りました。二人が目差して来た處は松ケ谷といふ處にある用水池でありました。段々になつた水田が山間深く入り込んでゐて其のどん詰りの處にある古い池を此土地では松ケ谷の池と呼な

まして、往々此處で身投げなどが行はれるのでありました。德松お花の兩名は、漸とのことで池の畔まで辿り着くことが出來ました。「まづ是れで安心だ」と思つたせいか醉ひが益々發して來て、もう起つてゐることも大儀になりましたので、「此の世の名殘りは盡きないけれど、愚圖々々してゐて若し人でも來ると大變だから片時も早く死ぬことにしよう」と、ふたりは死んでも離れまいと、女のしごきで互ひの體を眈りと結び付け、鼻を抓まれて判らない眞暗闇の中を足で探り探り、池の緣まで進むと、南無阿彌陀佛の聲諸共、ザンブとばかりに池の中へ飛び込みました。

話替つて、二人の者が家出をした後の村中の騷動は容易な事ではありませんでした。心當りといふ心當りへは殘らず人が走りましたが、皆目行衛が知れません。警察へ訴へるやら、金比羅樣で足止めの法を修めて貰ふやら、騷ぎの中に其の日も暮れてしまひました。是れほど尋ねても知れないところを見ると最早適切死んだものに違ひないと想像されました。平作夫婦の嘆きもさる事ながら、德松の家でもそれに劣らぬ愁傷を重ねて居りました。「こんな事になるくらゐなら田地の五反歩も持たせて婿に與れて遣るのだつけ」と、德松の父は後悔しても追ひ付きませんでした。

愈心中したものに違ないといふ事になつて、其の翌日は村中總出で死骸の捜索に取り掛りました。其の中の一組は、駐在所の巡査を先登に立てゝ松ケ谷の池へ遣つて參りました。もう陽が高く昇つて、あたりの山では小鳥が愉しさうに啼いて居りました。靜かな池の水面には水虫がツイ、ツイと走つて居りました。人々は手に手に鈎を持つて池の中を搜索りました。けれども、いくらやつても藻草の根が掛かつて來るばかりで一向手應へがありません。と、其時土手の上にゐた一人の男は、不圖何處からか妙な音が聞えて來ることに氣が附きました。其の音はグウグウと何うやら人間の鼾のやうにも聞こえるのでした。「ハテ變だぞ、誰れも此處らで寢てゐる奴は無い筈だ」それとも自分の耳のせいかとも思つて見ましたが、確かにグウグウといふ音が聞こえます。「おい、みんな來て呉れ、變な事がある」と彼は一同に向つて叫びました。

池の底を根氣よく搜索つてゐた連中は鈎を捨ててドカドカと土手の上に登つて參りました。「みんな聞いて見ろ、何處かで鼾のやうな聲が聞こえるから」と彼の男は云ひました。

一同は揃つて耳を澄ましました。すると「グウ、グウ」とい

ふ聲が何處からか耳に這入りました。

「成る程聞こえる。是れは怪妖だぞ」

一同の者は其の聲のありかを探しに掛かりました。此の池と土手一つ隔てて、葭が一面に生ひ繁つてゐる荒蕪地がありました。田にもならぬので捨ててあるのでしたが、此の頃の日照り續きで葭はカラ／＼に乾上つて、一間以上もある葭が其の上を青々と覆うて居りました。處が、不思議な所のやうな聲は、其の葭の中から聞こえて來るのでありました。一同が恐々其の中へ分け入つて見ますると、其處には若い男女が抱き合つた儘正體もなく睡つて居るのでありました。

徳松とお花は、醉つぱらつて池と荒蕪地と方角を取り違へて飛び込んだお蔭に、慾らして危うい一命を取り留めたので御座いました。彼等ふたりが極まりが惡かつたぐらゐの事は何んでもないのでありました。彼等は間もなくよい月日に惠まれることになりました。といふ譯は、此の事があつたために徳松の父親の角が折れて、多分の持參金を付けて倅を平作の養子に遣はしたので御座いました。お花は月滿ちて玉のやうな男の兒を擧げ、夫婦の仲は水も漏らさぬばかりで、勿論借金は徳松の持參金を以て殘らず返濟した上、現在では可成りの財産も出來て、何不足の無い幸福な月日を送つてゐるので御座います。

農夫久七の話は一同の喝采を博したのでありました。わけても相愛の男女が、奇蹟的に神の救ひに會つて、而も現在幸福な生活を送つてゐるといふ事が、聽き手の胸に非常によい印象を殘したのでありました。談話賣買業の紳士は、滿足の色を其の面に現はしました。そして紳士は約束通り酒三升の代と、自身の勘定に多分の茶代まで拂つて、折りから通りかゝつた乘合自動車を呼び止めて打ち乘り、町の方へと立ち去りました。

□作者曰く、今後此の老紳士は、何時何處の土地に現はれて諸君と商談を開始するかも分りません、其の節は何卒好意を以てお取引下さるよう、紳士に代つてお願ひ致して置きます。

詩眼に映じた日蓮

高須梅渓

(一)清澄山上の夜と日蓮の幻影

光りある偉人を追慕することは、ロマンチツクな傾向を有する凡人に取つて、止み難い内心の要求である。すべての凡人の一生にも、勿論、光りはある。だが偉人の光りは、一層明かに一層、明るい。それによつて、私のやうな弱いものは、勵まされ、強められ、喚められ、清められる。

今年は、日蓮聖人の七百年誕辰に當るので、此の七八年來、聖人を敬仰しつゝある私には追慕の感じが殊に深い。私は曾て此の宗教界の偉人を描かうと思つて、其の遺跡をめぐつたことがあつた。ある冬には、北國に赴いて、寺泊と云ふ小さい町から、荒い波が、人生を咀ふやうに吼へて居た灰色の日本海の遙か彼方に佐渡の島影を望んで、流竄の苦みを重ねた日蓮聖人を思つたことがあつた。ある夏には、伊豆伊東を訪うて、海中に突出して居る俎岩が絶え間なく波に洗はれて居たのを見て、聖人の法難當時を、さながらに胸に思ひ浮べたことがあつた。それから鎌倉や、片瀬邊を幾度も往來して、若い時代の聖人を懐ひ、房總地方に旅して、小湊、小松原、清澄山などを巡歴して劇詩そのものを見るやうな聖人の多難な半生、悲壮な行路を考へたこともあつた。

其の巡歴のうちで、私の頭腦に一番深い印象を殘したのは、清澄山上に於て、太平洋上から靜かに雲を破つて現はれた大日輪の姿を見やりながら、靜かに聖人の一生を思つたことであつた。

私が清澄に上つたのは、春が未だ淺い頃であつた。途中、小湊の誕生寺を訪うて、聖人が生れた當時、産湯に用ゐた井戸の水の清く澄んで居るのを見て、誕生の日に於ける幸福の光りに滿ちた一家の光景を想像したり、小松原の鏡忍寺に立寄つて、法難當時の聖人の袈裟や、折れた數珠などを見て、どんなに烈しい迫害が聖人の一身に加はつたかを推想したりした爲め、大

分、手間取つて、清澄寺の下にある小さな、古びた旅宿に着いたのは、日がとつぷり暮れた時分であつた。

其の夜、私は何となく、朝の山上の眺望に憧憬れて居た。それは未だ戀を知らぬ純潔な少女が、始めて両親から許された愛人に逢ふ前のやうな心持ちに似て居た。どうも、そわそわしてすこしも落付かなかつた。其のうち、宿の小娘が汲んで來た晩餐の膳に向つて、二合ばかりの酒をちびりちびり飲みながら、清澄に居た頃の聖人の俤をいろいろに胸に描いて見た。

其の時、不圖、薄暗いランプの光りの　ちに現はれた幻影がちらと眼に入つた。一文字に秀でた眉、大きく澄んだ力ある眼、屹と結んだ決斷力を表示する唇、稍痩せて赤く輝いた頬を持つた十六七歳の僧が仄かに見える。私は何だか、一度、何處かで見たやうな面影であつた。左様だ、それは、清澄寺で佛學を修めた結果、深い疑問を抱いて、毎夜、山上の虚空藏菩薩の祠に参籠して、日本第一の智者となれるよう、懸命に祈つた頃の聖人の俤ではないか。

清澄は、聖人に取つて、最も思ひ出の多い場所であつた。十二歳の時、父に伴はれて、道善法印の許へ來て、藥王麿の名を與へられて以來、十七歳まで、約五年間、清澄に居て、日夜、一心不亂に唯一乘の妙法を求めて止まなかつた。それがために聖人は、長い間、苦んだ、悶えた、斷食もした、病人のやうになつて血を吐いたことさへもあつた。それから、遊學のため、清澄を去つて、十五年目に清澄へまた歸つて來て、四月二十八日、旭の森で開宗を宣して、人々に説教したのが、最初の迫害を受けた時代であつた。清澄と聖人との關係は、このやうに密接である。私が、ランプの光りのうちに、聖人の十六七歳頃の俤を幻のやうに見たのは偶然でないと思はれた。

私は、晩餐を終ると、間もなく、ごつごつした蒲團の中へもぐり込んで寝た。だが、中々、寝られなかつた。明日の天氣を心配したり、どんな風光が眼の前に展開されるであらうかを考へて見たりした。其のうち、疲れが出て來て、午後十一時頃、やつと眠りに就いた。

(二)詩眼に映じた日蓮の溫情的方面

私が目さめたのは、午前四時半頃であつた。他にも、客があると見えて、旅宿では、もう朝餐の支度をするために、誰か起きて、臺所でごとごと立ち働く音がして居た。私は、直ぐ床を飛び出して、廊下へ出て、冷たい水で顏を洗ひ、口を漱いで、そつと戸を開けて見た。拂曉の寒い風が、颯と吹き込んだので私は思はず、ぶるぶると顫えた。空は未だ暗かつたが、青い星

お一杯にちらばつて、きらきらして居た。

好晴だ！ 私は、非常に元氣付いて室へ歸つた。而して五時頃に旅宿を出て、石段を辿りながら、靜かに山上に向つた。夜は、ほのぼの明け離れようとして、四邊は薄白くなりかゝつて居た。石段を登り切つて了ふと、清澄寺の大きな本堂が左方に見えた。私が、其の前を通る頃、鳥が朗かに鳴いて通る聲を聞いた。それから、雜草のある道を分けて、次第に山上の旭の森に近付いた頃は、もう朝の色が、一面に動いて居た。

間もなく、私は、旭の森に起つた。何と云ふ廣々とした眺めであらう。眼の前には、渺茫として、はてもわからぬ太平洋が一面にひろがつて居る。其 海の色は、うす青くて、波が大きく起伏して居る。手近なところには、小さい山が、此處彼處につらなつて居て、優しい風姿を見せて居る。私は、唯ぢつと海の上を眺めて居た。

遙か水平線上の鼠色の雲の中から、太陽が徐々に姿を見せ始めて、幾度か、雲の色を變化させた後、壯麗な女王のやうに悠然と海から離れて、黄金の光線を惜し氣もなく、四方に放つた時は、うす青かつた波の色が、すつかり濃い藍青色となつて、私に目ざめるやうな感じを起させた。

其の時、私は、日蓮聖人が建長五年四月二十二日、清澄へ皈つて來て、旭の森に道場を構へて、身を潔めて三昧に入り、一七日の滿願に達した二十八日の朝、新しい希望の光りに輝いて躍然として海から現はれた大日輪の方に向つて、朗かな聲で『南無妙法蓮華經』と三度唱題した時分のいきいきとした俤を鮮かに思ひ浮べた。其の時の空の色は、青く澄んで、咽び返る浪の音は、開教の前途を祝福する讃歌のやうに日蓮の耳に聞えたであらう。旭の森の樹々は、はらりと銀色の露を落して、感動の色を現はしたやうに日蓮の眼に見えたであらう。嫋々と囀りわたる群棲の鳥は、妙法の宣傳を歡ぶやうに、樹から樹へ移つて飛び廻つたであらう。此の時以來、聖人が唯一乘の妙法を人々に傳へるための戰ひが始められたのである。本化上行菩薩の再來として、法華經を色讀する豫言者として——

私は、旭の森の樹の根に、ぢつと腰を据ゑながら、聖人の一生について、靜かに考へて見た。それは、戰ひから戰ひへの連續である、迫害を以て包圍された歷史である。ゲーテが『運命は勇者の內性である』と云つたやうに、聖人は、絕え間なく、悲壯な運命と闘爭して到頭、最期の勝利を得た。高山樗牛氏の『視後錄』は、左樣した聖人の面目を、聖人自らの告白のやうにして書いた散文詩編であつた。そこには、太い、強い線で、聖人の強大な、沈痛な、悲壯な一面が鮮明に出て居る。思ふに、

今まで、聖人の一生を書かうとした人々は、大抵、松平氏と同じやうに、聖人の強大な美しさに力點を置いて、力めて、超人的な聖人を表現しようとした傾向が多かつたやうである。私も曾て「日蓮聖人辻説法」に於て、左様した方面のみを、主として描かうとしたことであつた。

だが、其の後、私は聖人の一生のうちに於て、今一つ、別な方面を見出した。それは、太い、強い線で描かれるのではなくて、細い、柔い線で描かるべき優しい、デリケートな寧ろ凡人的な一面である。聖人の一生は、最も變化が多いと共に、聖人の性格の現はれも亦複雑である。其の表面を概觀して、唯強大な偉人として描くのは、聖人の全面容を知らないものである。聖人にも亦別の人間的な方面がある。

私は、聖人の遺跡や、傳記について、昔より深く通じて居ない。また専門家として、聖人を研究するだけの素養を持つて居ない。私は今まで、主として、詩人としての立脚地から、聖人を觀察して來た。而して聖人が、一面に於て、普通人と同じやうに優れた、デリケートな心情の働きを示した點に向つて、暖かい親みを感じた。それは、聖人の超人的な側ではなくて、詩人的、人間的な側だ。強大な意志を動かした側ではなくて、普通の凡人が一般に有して居る人情味の發露した側だ。山のやうな怒濤が猛い北海の岸を嚙んで居るやうな悲壯なシーンではなくて、野の花が清い細流に可憐な俤を浮べて居るやうな優美なシーンだ。日蓮を眞に理解しない人々は、偏へに迫害に打勝つた強い方面を見て、剛情我慢な人、若くは偏執的な人物とのみ思つたり、或は英雄の典型で、不絶、平凡人を超越して了つた偉大な意志の權化のやうにのみ思つたりして居るが、若し私が詩眼に映じたデリケートな人情味を有した詩的日蓮を紹介したら以上のやうに何れかに偏した見方は、自然、改められるであらうと思ふのである。

私は、暖かい山上の日光を背に一杯浴びながら、左様したことを考へた。而して高く光が海を照して、更らに聖人についての考へを進めていつた。

私は、また聖人が始終、戰ひを續けて、法華經の行者としての頑強な意志と力とを表現した背後に沈思、冥想の人としての努力が人知れず續いて居たことを見逃したくはない。聖人の傳記を見るものは、故鄕に於ける最初の妙宗宣傳に對する迫害や、鎌倉の街頭に起つて、民衆の一部から瓦礫を投げ付けられながら唯一乘の眞理を說いた壯烈な場面や、伊豆配流、小松原法難に於ける危險な出來事に屈しなかつた聖人の勇ましい俤や、龍口で首を刎ねられようとする前、八幡社前で獅子吼した聖人の沈

痛な言葉や、寺泊、佐渡時代に於ける忍苦の生活などに氣を取られて、經藏のうちに、靜かに佛典を研究したり、岩窟のうちに隠れて、深く冥想、執筆したりした哲人的な一面があつたことを遺却して居るやうだ。思ふに、聖人とても、最初から、生れながらに强大な意志、猛烈な戰鬪力を具へて居たのではあるまい。其の少年時代に於ける生活は、主として、沈思と冥想と研究とに費されて居た。烈しい戰ひの人ではなくて、寧ろ平和な人であつた。超人的に煩悶もなければ、懷疑も持たなかつた人ではなくて、大きく煩悶し、深く懷疑した人であつた。

聖人は、左様した煩悶と懷疑と焦燥とを根柢から一掃して、釋尊の本懷とせらるゝ道を見出さうとして、清澄を出てから、十五年間、諸方に遊學した。或は京都に留まり、或は叡山に上り、或は奈良の古寺に籠り、或は高野山に分け登つて、幽寂な境地に冥想三昧に入つた。而してあらゆる佛典を渉獵しつくしたのみならず、儒學や、神道の要領をも會得した。斯うして、長い間、沈黙の人として、佛道を研究した結果、釋尊の本懷は『法華經』一部のうちにあることを確かめ得たのである。聖人の冥想生活は、ひとり開宗前のみならず、開宗後も長く續いて居た。鎌倉に於て、駿州岩本に於て、伊東に於て、佐渡に於て、身延に於て——

思ふに、聖人の强い意志、强い戰ひの力は主として、其の冥想と沈思との結果から生れたのではなかつたか。故郷の人々に向つて『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊』の叫びを發する前にも、聖人は、旭の森に於て、沈思し、冥想して、勇猛心を蓄積したのではなかつたらうか。私の詩眼に映じた日蓮は、何となく、左様思はれる。

それで、私は今、强い美しさに對する優しい美しさを持つた聖人、超人的よりは人間的な弱味もまた强味もある聖人を描いて見たい。それと共に、戰ひを續けた聖人、迫害を打破つた聖人よりは、岩窟のうちで靜思した聖人を描いて見たい。

（三）弟子に對する愛と漁夫への感謝

聖人が、一生のうちに受けた主要な迫害のうちで、其の序幕とも見るべきは、伊東配流である。此の迫害の直接原因は、『立正安國論』を北條時頼に献じたことから起つた。それに於て、日本を擧げて、一佛乘の妙法に歸依しない時は、佛說にある通り、三災七難一時に到つて、日本國は、當に火難、水難、風難旱魃饑饉に逢ふばかりでなく、自界叛逆難、他國侵逼難に苦められて、國内には同志討ちが始まり、外國から强敵が攻め寄せてくるだらうと云ふことを聖人が明かに豫言したのが時頼らを

怒らせた。

日蓮の『安國論』は、可なりに長い準備を盡して出來たのであつた。聖人は、そのために、駿州岩本の實相寺に赴いて、そこで一切經を讀んで、ぢつと沈思した。正嘉元年に於ける大旱魃大地震、康元元年に於ける大暴風雨、大洪水などが打續くのは何のためか、畢竟、日本の人々が、法華の正法に背いて、邪宗を妄信して居るがために、諸天善神が一時に憤りを發して、惡鬼羅刹が、其の隙に附け込んだ爲めではなからうか。『仁王經』に說かれてあるのが、正にそれだ。『金剛妙經』に戒められてある一節が恰度それだ。この大きな禍が來るを知つて、其の儘に打捨てゝ置くことが出來ない。先づ時の爲政者に向つて正直に警告せねばならぬ。其の結果、どんな迫害がくるか、それは、わからぬけれども、妙法は重い、一身は輕い。聖人は、斯う考へて『安國論』を書き始めたのであらう。

それに對する鎌倉幕府は、何の理解も持つて居なかつた。日蓮が鎌倉の岩窟の中で、心血を注いで書いた『安國論』を傲慢な狂僧の放言だと誤解して、聖人を伊豆に流すことにした。聖人は斯うした迫害こそ法華經の行者が、末法の世に當然受けねばならぬ運命だと考へて、由比ヶ濱から、小さな舟に乘つて、伊豆伊東に赴かうとした。

其の時、聖人の弟子たちは、どんなに師の悲壯な運命を嘆いたか知れなかつた。殊に日朗は、聖人の袖に縋り付いて、伊東まで從つてゆかうとした。聖人は日朗の至情に深く感動した。迫害の前には、一滴の涙さへこぼさない聖人も、其の弟子の純な熱い心に對しては、强い共鳴を起さないわけに行かなつた。暗涙は、幽かに聖人の双眸に浮かんだ。

『日朗よ、お前が泣いてくれるのは 心から嬉しく思ふ。だが、法華經の眞理を信ずるものは、斯うした悲しい場合に最も勇猛でなければならぬ。一佛乘の法を弘通することに專念して、身命を抛つ覺悟を有しなければならぬ。自分は法華經を身に讀むために、伊東へ流されるのだ。それは、少しも悲むべきことではない。日朗よ、さあ快く別れよう、たとひ、お前らと東西に別れても、心のうちには、互ひに一脈相通ずる微妙な作用がある。これから、自分は、月の出る方を見て、お前らが健かに暮して居ると思はう。お前らは、月の入る方を見て、自分が伊東で無事に生活して居ると思ふが宜い。』

聖人が、日朗に向つて云つた言葉は、どうしても、暖かい人情味から流れ出たものだ。月の入る方を眺めて、師の俤を偲ぶ弟子、月の出る方をぢつと見つめて、鎌倉に居る弟子を思ふ聖

人、そこにはデリケートな詩的情味が、脈々として漂うつて居るではないか。

聖人が、伊東に赴いて、俎岩の上に配流の身として殘された時、大きな浪は、聖人の足元を洗つて、將に海底の藻屑とならうとした。此の危難を救ふたのは、船守彌三郎であつた。聖人は、それを衷心から感謝した。而して彌三郎の案内で、一時、川奈の濱にある岩窟のうちに潜んで、淋しい日を送つた。それから伊東朝高を敎化して、其の歸信を得てからは、和田山の麓に草庵を作つて、そこに妙法の種を蒔いた。

其の後、弘安三年、日蓮が流罪を許されて、鎌倉へ歸つてからも、彌三郎の誠實な、淸い心を愛して、眞情に滿ちた手紙を與へた。それには『日蓮去る五月十二日流罪の時、その津につきて候ひしに、いまだ名をも聞き及びまいらせず候處、船よりあがり苦み候ひきところに、懇ろにあたらせ給ひ候ひし事いかなる宿習なるらん。過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが、今末法に船守の彌三郎と生れかはりて日蓮をあはれみ給ふ歟。』と眞摯な感謝の言葉を述べ、彌三郎の妻が、聖人につくした親切に對しては、『縱ひ男はさもあるべきに、女房の身として食を與へ洗足手水、其の外さも事懇ろなる事、日蓮は知らず不思議とも申すばかりなし。』と述べて、優しい女人の心づかひを身に沁みて嬉しく感じた旨を記してある。而して貧しい彌三郎の供養について『五月の比なれば米も乏しからんに、日蓮を内々にて育み給ひし事は、日蓮が父母の伊豆の伊東川奈と云ふ所に生れかはり給ふ歟。』と喜び、次ぎに『法華經』を信ずるものゝ功德に及んで、最後に『後のために書まいらせ候ぞ。人に語らずして心得させ給へ。少しも人知るならば御爲あしかりぬべし、胸の中にをきて語り給ふ事なかれ。』と彌三郎夫婦のために、細心な注意を與へてある。斯うしたデリケートな優し味が、聖人の心の一面であつた。

(四)龍口法難前後の日蓮

聖人が鎌倉へ皈つてから、著しい迫害も、法難もなくて、一年半ほどは、比較的に穩かな日が續いた。ところが、聖人は、少年の時から親思ひの性質で、何處へ至つても、父母の安否を氣づかつて、遙かに故郷の空を眺めない日はなかつた。それで文永元年の秋、四十三歲の時に、故郷へ歸つて、絕えて逢はなかつた兩親を慰問しようと考へて、日朗、日澄の二人を從へて小湊を訪うた。其の際、有名な小松原法難が起つたのである。其の事蹟は、坪内博士の『法難』が、最も能く委曲をつくして居る。暑中に於ける東條景信の不意討ち、百餘人の法敵に對する

工藤吉隆の奮闘、危機は一髪の間に救はれたけれども、聖人は額に三寸ばかりの傷を受けて、鮮血は眞赤に袈裟や、法衣を染めた。

此の時、聖人は、自己の不幸を悲むよりは、法難の前に潔く殉じた工藤吉隆や、鏡忍、乘觀らの痛ましい最期を悲んだ。殊に吉隆の妻が臨終の身を抱へながら、夫の死に逝つた心のうちを思ひやつて、深い哀憐を寄せた。而して額の傷に痛みながら、天津へ赴いて、吉隆の父や、妻を訪うて、彼等に法華經のために身を捧げたものゝ意義ある死が、ひとり殉死者の上のみならず、其の一家に法悦をもたらすであらうことを懇ろに說いた。

それから、吉隆の嫡孩が産まれた時は、聖人が、主として、其の事を營つて、佛弟子の格式の下に、妙隆院日玉の法名を與へて、其の成佛を祈念した。吉隆の父も、妻も、聖人の暖かい敎へと慈愛とに感激して、其の後、生れた男子を聖人の法弟とすべき許しを得た。それは、後に小松原の鏡忍寺を開いた日玉である。

小松原法難以後、凡そ三年の間は、聖人も稍疲勞の氣味で比較的に平和な時を送つた。聖人は、那須温泉に赴いて病を養つたり、總武地方を巡錫して、富木胤繼や、宇都宮景綱の姉に說敎したり、故郷にある病母を見舞うて、其の臨終の床に親しく子としての介抱をつくしたり、母の葬儀を濟ませてから百ケ日の間、其の墳墓に向つて、法華經を讀誦したりした。

斯うした平和時代の次ぎに起つたのは、龍口法難であつた。此の法難の直接原因は、先年、日蓮が『安國論』に於て、明確に豫言して置いた他國侵逼難の兆候が、文永五年正月、蒙古から來た使者によつて證據立てられたので、聖人が再應、幕府その他に警告した事にあつた。今に及んで、尙ほ日蓮の言葉を用ゐなければ、國はやがて西戎の俗となり、人はやがて蒙古の民となるであらう。嗚呼、亡國の機は、間一髮のところに迫つた。

法華經の行者としての自分は、寸時も、それを打捨てゝ置けないと聖人は痛感して、十一通の書狀を認めて、鎌倉幕府や、當時の執事を始め、建長寺、極樂寺其の他を驚かしたのだ。

此の十一通の書狀は、猛烈な宣戰狀にひとしかつた。多年努力して築きあげた信仰と自信との前に、一切を捧げつくさうと決心した日蓮は、最早何ものをも恐れなかつた。鎌倉幕府も、諸大寺も、すべてを舉げて、法敵とするとも、恐れないと云ふ意力を持つて起ち上つた。聖人は、時宗に對して『今日本國既に蒙古國に奪はれんとす、豈嘆かさらんや。豈驚かさらんや。日蓮が申す事、御用ゐなくんば、定めて後悔之れあるべし。』と戒

め『所詮は政府を捨つて諸宗を御前に召し合せ、佛法の邪正を決し給へ。』と正面から、法論を開くべきことを迫つた。
　聖人は、また當時の二大碩徳と云はれて居た建長寺の道隆や極樂寺の良觀に向つても、一歩も假借しない難詰を加へ『上下萬人、道隆聖人は佛陀の如く之を仰ぎ、良觀聖人は羅漢の如く之を尊むけれども、其の實際は增上慢の大惡人で、今眼の前に逼つた日本の禍を拂ひ去ることが出來ではないか。』と叱咤した。
　既に鎌倉幕府に宣戰し、諸宗の高僧に戰ひを挑んだ上は、日蓮の生命は、素より助かるべくもない。聖人は、豫め其の事を覺悟して、弟子、檀越の人々に向つて『大蒙古國の牒狀到來に就いて十一通の書狀を以て、方々へ申せし所候。定めて日蓮が弟子、檀那、流罪死罪一定ならん耳。』と注意して『少しも妻子眷族を憶ふこと莫れ、權威を恐るゝこと莫れ、今度生死の縛を切つて、佛果を遂げしめ給へ。』と嚴かに說き諭した。其の心事は、實に悲壯を極めて居る。其の悲壯な決心は、法華經の行者としての務を全うしよう、唯一乘の妙法を以て、國と人とを救はうと云ふ自信と熱愛とから迸り出たのであるが、其處に又他から偏執とも、傲慢とも思はれ易い點が幾分かあつた。
　日蓮の心事は、容易く諒解されなかつた。幕府は、それに對する強い報復として、日蓮の草庵を蹂躙して、聖人を龍口に於て、死刑に處することにした。それは、文永八年の秋九月のことだつた。此の間の消息は、聖人の自傳とも云ふべき『種々御振舞御書』に出て居る。其の鶴ケ岡八幡社頭に於ける壯語、四條賴基に對する訓諭、賴綱に對する威嚇、強風、猛雨、雷霹電光のすさまじい夜に於ける沈毅な態度、それ等は、聖人の筆に依つて力強く、表現されて居る。
　龍口法難は、聖人自ら信じたやうに、諸天善神の加護があつて、果然、死の座から解放された。けれども一難漸く去ると、また一難が來つた。聖人は、依智の里で、靜かに休息する暇もなく、佐渡が島へ配流さるゝことになつた。流石の聖人も此の時は稍感傷的になつた。
　さらぬだに物思はしい秋である。木の葉が力なく散るのを見ても、かすかに鳴く虫の聲を聞いても、心を動かさずには居られない、殊に夜に入つて、うすら寒い風が吹いて、月が皎々と中天に冴えて、水銀の雫のやうな露が、黄ばみかけた草の上にほろほろと結ぶ頃には、いろいろのことが思はれたらう。日蓮は依智の里の明月に向つて、引續いて起つた悲壯な運命を思ひ、後に殘した忠實な法弟や、信心深い檀越の人々を想つたであらう。
　十月十日、聖人が依智を出て、佐渡に向ふ前夜に、殊にうす

ら寒かつた。一種の淡い哀感が、ひしひしと胸のうちに湧いた
其の時、聖人の心頭に浮かんだのは、龍口法難の折に逃げ遅れて、鎌倉幕府に捕へられて、うす暗い死の家のやうな土牢に呻吟して居る日朗の身の上であつた。聖人は、悄然として、筆を執つて、日朗の許へ斯う書き送つた。

日蓮は明日、佐渡國へ罷るなり。今夜の寒きにつけても、牢の内の有様思ひやられていたはしくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部色心二法共にあそばしたる御身なれば、父母六親一切衆生を助け給ふべき御身也。法華經を餘人のよみ候は口ばかり言葉ばかりは讀めども心に讀まず。心は讀めども身に讀まず。色心二法共にあそばされたるこそ貴く候へ。天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害と說かれて候へば別の事はあるべからず。籠を出でさせ給ひ候はば疾々來り給へ、見たてまつり見えたてまつらん。

此の手紙は、極めて短かいけれども、聖人が如何に日朗を愛し、親が其の子に對するやうな濃厚な愛を以て、抱擁し、慰めようとしたかがわかるのである。八幡社頭で壯烈した人とは思へないほどのデリケートな情味が一字一句に籠つて居る。「疾々來り給へ、見たてまつり、見えたてまつらん。」とある所は殊に暖かい親みが溢れて居る。

(五)佐渡の風雪中における生活

聖人は、信山越水を越えて、十月二十一日、越後寺泊に着いた。暗い北國の海は、初冬の風に吼えて、重苦しい、どんよりした雲の色や、灰色に濁つた波の色は、悽いやうな、淋しいやうな、感じを旅の人に與へた。聖人が其處から船で、佐渡へ渡らうとすると、風が烈しく荒れて、怒濤が大きな獸のやうな勢でくづれかゝるので、一時、出船を見合せて後、海の靜まるのを待つて佐渡に向つた。

佐渡の生活は、聖人に取つて、悲惨な、難儀な、暗い、淋しいものだつた。富木胤繼に與へた書に『十一月は寒風吹いて積雪更に降らざる時あれども、日の光りをば見ることなし。八寒を現身に感ず。』とあるのを見ても、其の寒さがわかる。殊に聖人の住家は塚原と云ふ墓地にある丘上の小さな廢屋で、風は吹き通しであり、雨は漏り次第であつた。それに空腹を滿たす食料もなかつた、手足を暖める薪も炭もなかつた。『種々御振舞御書』のうちに「塚原と申す山野の中に、洛陽の蓮臺野のやうに死人を捨る所に、一間四面なる堂の佛もなし、上は板間合はず、四壁はあばらに雪ふり積りて消ゆる事なし。かゝる所に所持し奉る釋迦佛を立てまいらせ、敷物なければ敷皮打ちしき、蓑うち

きて夜を明かし日を暮す。夜は雪雹ひまもなし。』と述べてあるのを見て、略ぼ困苦の烈しかつたことを想像される。

けれども聖人は、見事に此の困苦に打克つて、『開目抄』『觀心本尊抄』を書いて、略ぼ其の宗教に於ける一生の結收をした。

蓋し佐渡に於ける日蓮の思想的、人格的飛躍は、正に其の絕頂に達した趣があつた。其の強大な意志と自信とは、圓成の極致に入つた觀があつた。自分が本化上行菩薩の再誕であることの自信は『開目抄』の上に表現されて『詮ずる所は、天もすて給へ、諸難にもあへ、身命を期せん。善につけ、惡につけ、法華經をすつるは、地獄の業なるべし。大願を立てん。日本國の位を讓らん。法華經をすてゝ、觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねて念佛申さずば、なんど種々の大難出來すとも、智者にわが義破られずば、用ひじとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。』と云ふ強大な叫びとなつた。

更らに『觀心本尊抄』に於ては、法華經の眞理を體得することに說き及んで、一念三千の法を明白に述べて、人々の皈嚮するところを示した。『天晴れぬれば地明かなり、法華を知る者は世法を得可き歟。一念三千を識らざる者に佛大慈悲を起し、五字の內に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめ給ふ。四大菩薩の此の人を守護し給はんこと、大公周公の成王を攝扶し、四皓が惠帝に侍奉せしに異らざる者也。』とは、聖人獨自の創見であつた。

佐渡に於ける聖人は、斯うして、二つの大切な著を著はすと共に、十界曼荼羅の本尊を顯現して、開宗以來の結收をした。

それから文永十一年、五十三歲の時、赦されて、鎌倉に歸り、その年五月、北條時宗が、良田一千町を聖人に寄附して、愛染堂へ迎へようとしたのを斥けて、身延山上の人となつた。

聖人の身延入山のことについては、いろいろの說があるけれども、畢竟、煩はしい鎌倉の地を去つて、其の晚年を幽寂な清境に送つて、悠々沈思冥想の天地を樂む傍ら其の弟子や、檀越の人々に敎へを傳へようとした爲めではなかつたか。

（六）身延山上の日蓮

聖人が暖かい人情味に溢れた手紙は、主として、此の身延で書かれた。四方の檀越の人々が、心をこめた供養の品を聖人に送ると、必ず優しい、美しい言葉、率直な飾りのない心持を手紙に現はして、感謝の意を寄せた。其のうちで、弘安五年正月上野時光に與へた手紙は、殊に優れて居る。先づ最初に深山の春の景色を叙して『春の初めの御悅び、木に花の咲くが如く、山に艸の生ひ出づるが如しと、我れも人も悅び入て候。さて御

送物の日記、八木一俵、白鹽一俵、十字三十枚、芋一俵、給び候ひ畢んぬ。深山の中に白雪三日の間に庭は一丈につもり、谷は峯となり、峯は天に梯かけたり、鳥鹿は庵室に入り、樵牧は山にさしいらず。衣はうすし、食はたえたり。夜は寒苦鳥にことならず、晝は里へ出でんと思ふ心ひまなし。既に讀經の聲もたえ觀念の心もうすし。今生退轉して未來三五を經ん事を嘆き候ひつる處に、此御とぶらひに命活きて、又もや見參に入り候はんずらんと嬉しく候。』と深悼の情を述べ、『過去の佛は凡夫にておはしまし候ひし時、五濁亂漫の世にかゝる飢へたる法華經の行者をやしなひて佛にはならせ給ふとぞ見えて候へば、法華經まことならば此功德によりて過去の慈父は成佛疑ひなし。故五郎殿も今は靈山淨土にまいりあはせ給ひて、故殿に御頭をなでられさせ給ふべしと心おもひやり候へば涙かきあへられず。』と結んである。

また或檀越（四條頼基とも、上野時光とも傳へられてある）の男子命名の依頼を受けたのに答へて『女子は門をひらく、男子は家をつぐ。日本國を知ても子なくば誰にかつがすべき。財は大千界にみちても子なくば誰にかゆづるべき。されば外典三千餘卷には子ある人を長者と云ひ、內典五千餘卷には子なき人を貧人と云ふ。女子一人男子一人。譬へば天には日月の如く、地には西東にかたどれり、鳥の二つの羽、車の二つの輪なり。されば此の男子を日若御前と申させ給へ。』と懇ろに兒女に對する暖かい情想を披瀝してある。

斯うしたデリケートな趣味ある手紙は、數十篇に上つて居る、それに建治元年八月に書かれた『身延山御書』の一篇は、無限の叙情詩で、聖人の詩人的な一面が、さながらに流露して居る。要するに、身延に於ける聖人の生活は、物質的には貧しく、淋しかつたけれども、情味の上に於ては、最も充實して居た。凡人の心にも、理解し易い人間的な暖かさに滿ちて居た。それが更らにひろめられると、其の愛が、動物の上にも及んだ。

（七）入滅前に於ける愛の光

聖人の愛が、動物の上に注がれた手紙は、入滅前一ケ月に、武藏池上に於て認められたのである。當時、聖人は病を養ふため久しく住んで居た身延の草庵を出て、常陸の溫泉に浴するつもりで、馬に跨つて、池上へ赴いた。其の馬は、檀越の一人、南部實長が秘藏して居た逸物だつた。それで、池上に事なく、着くと、實長に一書を寄せて、餘りに馬を愛する心持を述べた。

（前略）栗鹿毛の御馬は餘り面白く覺え候程に、いつまでも失ふまじく候。常陸の湯へひかせ候はんと思ひ候が、若し人に

もとられ候はん。又其外いたはしく覺えば、湯よりかへり候はん程、上總の藻原の殿のもとにあづけ置きたてまつるべく候に、知らぬ舍人を付け候ては覺束なく覺え候。まかり皈り候はんまで此舍人を付け置き候はんと存じ候。（下略）

病める聖人は、此の馬に乘つて、常陸へ赴きたかつたのであるが、田舍の險はしい道を歩かせるのは可哀さうだと思つて、馬に乘らないで行く決心をしたのだ。また馬を世話するものは矢張、身延から跆いて來た別當が馴れて居て宜いと思つて、其の別當を留めて置くことにしたのだ。强大な人、勇猛な人とのみ思れた聖人の心琴には、斯うした微妙な作用があつた。美しい溫情が閃めいて居た。

最後に述べたいのは、聖人が、老境に入つても、尙ほ其の故郷の父母に對する愛慕の情を抱いた事である。身延に居た時には、毎日、五十餘町の險山を攀ぢ登つて、なつかし氣に故郷の方を望んで、遙拜することを忘れなかつた。それは、九年間、雨の日も、風の日も、雪の降る日も、一度も怠つたことがなかつた。今其のあとには、思親閣と云ふ紀念の建物が作られてある。

* * * * *

私が清澄での聖人についての感想は、略ぼこれで盡きた。私が表現しようと企てた聖人の一面は、たとひ、僅かにもせよ、何等かの印象を人々に與へ得たと信ずる。

私は斯う考へて、旭の森を離れて、靜かに清澄寺の方へ向つた。太陽は、中天に輝いて、波は歡喜の歌を合唱するやうに咽び返つて居た。私は、太い聲を出して『南無妙法蓮華經』と三度唱題した。而して一種の充實した力が、胸に溢つるのを感じた。（大正十年二月十五日）

桃の花と仙人

田中貢太郎

一

空には、ところどころに灰色の重い雲が流れてゐるが、雨後の空氣は澄みきつて、赤味の強い朝陽の光が、目醒めたやうに四邊を照らしてゐる。田圃の間を縱横に流れてゐる小溝の水はごぼごぼと云ふ音をさしてゐる。雨に洗はれた麥は、綠が濃く菜種の花は、黄金の色が鮮やかになつて見えた。何時も埃を浴びて白ぼけてゐる蠶豆の莖葉を、その朝ばかりは生々として見えた。その田圃を地にして、純白の雲と、淡紅の霧とが點在して見える。その淡紅の霧が平野の間に見る桃畑の景趣だ。

尖つた黒い遠山を背景にして、つくね髪の形をした丘の麓から頂へかけて、段だらに開いた畑に紅霞の棚引いてゐるやうに見えてるのは、山村に見る桃の光景だ。

入江の岸には、そこここに帆船の造船所があつて、槌の音と手斧の音とが、終日湖に響いてゐる。その入江の岸へ、屋根船

がやつて來て、中から酒に醉ふた男や、綺羅に着飾つた若い女を陸へとあげた。その一行は、木履や鉋ばの混つた黒い砂を踏んで、人家の方へと行つた。土用竹や船板を用ひて造らへた人家の垣根には、桃の花が亂雜に咲いてゐた。その桃の枝には洗濯物を懸けた竹竿をもたせてあつた。桃の枝の伸びはびこるのを煩さがつたやうに、繩でからげ附けてある處もあつた。人家と人家の間の畑には、麥畑と並んで桃畑なども見えた。午さがりの陽が緋絹のやうな雲に包まれて燃えてゐる。黒どろんだやうな浪の音が南の方から聞へて來る。この光景は何時も私の頭にある光景だ。

桃は桃畑などに群がり咲く花にも趣がないではないが、どつちかと云へば野や垣根の間に捨てられたやうになつて咲いてゐる、ごつごつした寂しい姿に趣がある。郊外を散歩して、丘の間を通つてゐる時など、一本のいぢけた桃の木が畑の崖下などにあつて、その禿びた半枯れの枝に、二つ三つの花の霜を見出

しでもすると、非常な喜を感じるものだ。桃は矢張り野趣の眼を以つて見るべき花である。

古寺の桃に米踏む男かな　（芭蕉）
鑄かけやのふいごに散りぬ桃の花　（蘭更）
商人を吼ゆる犬あり桃の花　（蕪村）
うちそむき木を割る桃の主かな　（白雄）

木の端のやうな米搗男の黙々と米を搗く傍には一本の桃の木があつて、せめてもの色彩であるとでも云ふやうに咲いてゐる繪畫も面白い。桃は宮廷詩人の筆よりも、平民詩人の筆に乘る方がふさはしい。

喰ふて寝て牛にならばや桃の花　（蕪村）
桃咲くや牛の涎も大和うた　（蓼太）
飯喰はす小店もなくて桃の村　（子規）
税輕き十戸の村や桃の花　（鳴雪）

牛のやうな呑氣な生活、それは葛天氏の民であらう。田の畦では辨當をすますと、亭主は草の上に寝轉びになつて、煙草を吹かしてゐる間にとろとろとし始める。畦には自然生の野桃が一本あつて、それには牛を繋いである。辨當を運んで來た子供は、そのあたりにて飛んでゐる翅の黄いろな蝶を追駈けてゐる。

○

桃の原産地は支那であると云ふが、成程さう云へば、花の情趣から花の持つ香品までが、どうも支那式である。日本でも、二十四番の花信風の中に、一つの香品となつて咲くには咲くが、的礫たる櫻の姿に次いで、爛熳の春を飾る程の花とは較べ物にならない。それに櫻はその香品まで國民性と離れない物とせられ、花と云へば直ちに櫻を連想さするやうに、一切の花を代表してゐる傍で、桃は見るかげもない物になつてゐるが、支那へ行くと、牡丹には及ばないが、併しその牡丹を除けば、梨花、杏花、海棠などと共に、大陸の春を飾る錚々たる花とせられてゐる。

桃の夭夭たる、灼灼たるその華、之の子于に歸ぐ、其の室家に宜し　（詩經）

桃の花の盛は、春風駘蕩、青春男女の情緒を唆つて、結婚を思はしめ、又それを行はしめる季節だ。

草色青々柳色黄なり。桃花歴亂として李花香ばし、春風爲めに愁を吹き去らず、春日偏に能く恨を惹て長し（賈至）

艶麗な春の景色を叙して、それに己れの感傷を託したものが、支那詩人の慣用手段である。

雨は歇む楊林東渡の頭、永和三日輕舟を蕩かす。故人家は桃花の岸に在り。直ちに門前に到れば溪水流る。（常建）

三月上巳の節句に、知人を訪ねた時の叙景だ。永和は年號

上巳に王右軍の遊んだ故事を交へたものだ。

紫陌紅塵面を拂ふて來る。人の花を看て回ると道はざる無し。玄都觀裏桃千樹、盡く之れ劉郎去つて後ち栽う。（劉禹錫）

劉禹錫と云ふ男が宰相に罪を得、朗州に流謫せられてゐて、許されて京師へ歸つた時に作つた詩である。紅塵を世の俗塵に喩へ、花を看ることを富貴に移るに喩へ、玄都觀を朝廷に喩へ、桃を小人に喩へて時事を嘲けつたもので、近頃そこらあたりによくある書生教授の生白い憤激に似た憤激だ。これがために、劉禹錫は、又宰相に惡まれて、貶謫せられたと云ふ有名な詩だ。

百畝の庭中半ば是れ苔、桃花淨盡して菜花開く。桃を種うる道士何れの處にか歸る、前度の劉郎今又來る。（劉禹錫）

劉禹錫が再び召し歸されて、京師に歸つた時には、玄都觀の桃はもう無くなり、自分を貶謫した宰相も、もう朝廷にはゐなかつた。道士は宰相を指したのである。これは榮枯盛衰を慨した句であるが、しかし奴さんの得意思ふべしと云つたやうな意味も籠つた句だ。

竹外桃花三兩枝、春江水暖かに鴨先づ知る。蔞蒿滿地蘆芽短し、正に是れ河豚上らんと欲するの時。（蘇東坡）

建陽の僧惠崇の畫いた春江晩景の圖に題したものである。春の水鄕の景物を叙して餘蘊がない。

野店桃花紅粉の姿、陌頭楊柳綠煙の絲、客を送りて東城に去るに因らずんば、春光を過却して總て知らず。（趙子昂）

客を見送つて東城の方へ出て桃花と楊柳とに飾られた春光に接して作つた詩で、野外の駘蕩たる景色が短句の間ににじみ出てゐる。

桃花灼々水潺湲、隔斷す千山と萬山と。生怕す漁郎消息を漏らし、一片を流して人間に到らしめず。（金澄中）

武陵桃源の圖に題したものである。武陵桃源は、桃の花と仙人とを結びつけた有名な傳說だ。

○

桃は薔薇科の落葉喬木である。支那北部の山地で見掛ける『さんたう』（山桃）は野生種であると云はれてゐる。桃にも澤山の種類がある『すいみつたう』（水蜜桃）、『いちねんもも』（壽桃）、『しだれもも』（敵條桃）、『げんぺいもも』（日月桃）、『かんもも』（冬桃、崑崙桃）、『げんじぐるま』（菊桃）、『ずばいもも』（李桃、油桃）、『あめんどう』（扁桃、カラモモ、ゑどもも、せいわうぼ）などは、世間に知られてゐるものである。

その中でも、水蜜桃は花も大きい上に、その實はわけて味が

好いので、桃の中でも一番賞美せられてゐる。それには上海水蜜桃、天津水蜜桃、蟠桃の三品がある。桃は主に春三四月の頃花が開いて、その實は夏になつて喰はれるものであるが、寒桃はその名の示してゐるやうに、成熟期が遅くて、秋の末から冬にかけて熟するものである。私の故郷の友人の家の庭には、その桃が一本生へてゐた。熟すると黄色になる、小さな毛の生へた桃で、虫が綴つて白い樹脂のやうなものの噴きでてゐるのも構はず、晩秋の夕陽の中で、猿のやうにそれをかじつたのを覺へてゐる。

　浦戸港の入口になつた私の村は、昔から縣下の桃の名所と知られてゐる土地で、家毎に桃を植ゑてある。花時になると、歌妓を積んだ屋根船が高知市の方からやつて來た。花桃と云つて緋の色をした八重櫻のやうに一面に花を着ける桃を庭木に植ゑてある處もあつた。それには實がならなかつた。桃栗三年と云つて、桃は實蒔(みまき)にしても接木(つぎき)にしても、三年目には花が咲いて實がなるが、その內、一年桃は實蒔きにした年に花が咲いて、二年目から實になると云はれてゐるが、その桃には私は經驗を持つてゐない。私が自分の故郷で知つてゐる桃は、毛桃と云つて果實に毛の多い桃で、村の者はその桃を臺木にして、水蜜桃をはじめ色々の桃を接いだ。今思ふと、『すばいもも』に當るらしいが、私達は『つばもも』と呼んでゐた桃があつて、その枝も好く接木になつた。それは李の實のやうに滑かで、熟すると赤くなつた。その桃はすこしも皮を剝く必要がなかつた。和漢三才圖會によると、李の樹に桃を接木すると、この『すばいもも』の『つばもも』が出來るらしい。『すばいもも』は又『つばいもも』とも云はれてゐる。

○

韓非子には彌子瑕の話がある。彌子瑕は衛君に可愛がられた美少年だ。或る時衛君と一緒に果園に遊んでゐた。果園には桃が熟してゐた。彌子瑕はその一つを取つて喫つてみたところが非常に旨いので、その喫いさしを『おあがりなさい』と云つて衛君に喫はした。彌子瑕に眼のない衛君は、それを喫つて、『忠をその口に忘れずして寡人に喫はす。』などとやに下つてゐたが、後に彌子瑕が美少年でなくなり、從つて寵愛もなくなつてしまふと、衛君は『曾て我に喫はすに餘桃を以つてす。』と云つて、喫いさしの桃を喫はしたのを重罪の一つとして數へたものだ。韓非子に非ずとも、人間の愛情の變れには慨歎せざるを得ない。

○

晏子春秋によると、齊の景公に公孫接、田開彊、古冶子と云ふ三人の家臣があつたが、三人とも功を頼んで我儘で手が

られない。或る時、晏子がその傍を通つたけれども、三人は威張つてゐて、立ち上つて禮をしない。そこで晏子は景公へ『彼んなものを置いては、國のためになりません。』と云つた。景公もとうに三人の我儘に困つてゐたから『それでは、三人を除くには、どうしたら好いだらう。』と云つて、晏子に相談をした。晏子は『二つの桃をやつて、功のあるものが喰へと云はして見たらどうでせう。』と云つた。そこで景公は晏子の言葉に從つて、二つの桃を三人の處へ送つて、『功のあるものが喰つてくれ。』と云はした。すると公孫接が、『俺は一度、猏を搏ち、二度乳虎を搏つてゐる、この一つは俺が喰ふ。』と云つて、一つの桃を取つた。田開疆は、『俺は兵を伏せて、二度敵の軍を退けてゐる、その一つは俺が喰ふ。』と云つて、後の桃を取つた。古冶子は立ち上つて二人を睨み附け、『俺は君に從ふて河を渡つた時に、黿が來て左驂を啣んだので、それを搏ち殺した。その功はお前達二人よりも上だ。桃を渡せ。』と云つて劍を拔いた。劍にかけては公孫接も田開疆も古冶子の敵ではなかつた。功も古冶子の方が上であることは、二人にも分つてゐた。そこで二人が云つた。『なるほど、俺達は、どつちから云つてもお前には及ばない、桃をお前に讓らなかつたのは惡かつた。しかし、桃をお前に返した上で生きてをると云ふことは、武士として出來ないことだ。』二人は桃を元へ返した後に、てんでに刀を拔いて自分の首をかき切つて死んでしまつた。古冶子はこれを見ると、『二人を殺して自分一人生きてゐるのは人の道でない。』と云つて、これも自分の刀で死んでしまつた。智慧者にはかなはない。

○

『桃花源記』は陶淵明の書いた有名な雜文だ。晉の太元年中のこと、武陵の人で魚を捕ふるのを商賣としてゐる男があつた。名前は黃道眞と云ふらしいが、そんなことはどうでもよい。その漁師がある日、平生のやうに漁に出かけて、魚を捕りながら溪川を舟で上へ上へと登つてゐた。ところで、その漁師は漁に氣をとられてゐたので、方角のことも里程のことも忘れてゐた。そして、四邊が何となしに薄赤い色彩に包まれたやうな氣がするので、不思議に思ふて頭をあげた。兩岸が狹まつた溪川の左右の岸には桃の林があつて、それに花を一面に着けてゐた。左右の土手には、萠黃の色をした草がビロードを敷いたやうに生へてゐるのに、淡紅色の落花が思ひ出したやうにその上に散つてゐた。そこには夢の世界のやうにすこしの風も無かつた。

漁師は網を入れることも忘れて、その容をうつとりと見てゐた。桃の林は長く續いてゐるらしかつた。漁師は魚を捕ることも忘れたやうに、舟を漕いで行つた。ゆるやかなどろんだやうな

流れで、川の上下がちよつと判斷がつき兼ねるやうに見へた。舟はその流れを遡つて行つた。

桃の林がやがて盡きてしまつた。桃の林と一緒に溪川の流れも無くなつてしまつた。そこには小山が控へてゐた。漁師は舟を繫いでから陸へあがつた。小山の裾の方を見ると穴があつた。漁師はその穴の口の方へと歩いて行つた。人が小腰を屈めて這入つて行くやうな岩穴の奧には微白い光があつた。漁師は物好にその穴の中へと這入つた。穴の向ふには、明るい世界があるやうに白い明るい光があつた。漁師は狹いその穴を潜つて行つた。すこし行くと直ぐ穴が廣くなつて來て、立つて歩けるやうになつた。ふと見ると、夜が明けたやうになつて、そこには田や畑があつた。桑のやうな茂りも竹のやうな茂りも見えた。人家の家根もその間に見えた。

漁師は穴を出てしまつた。廣い平坦な村落には、大小の道が縱橫に通じてゐた。犬の吠へる聲が聞えて來た。鷄ののんびりと時を作る聲もする。田の中では鍬を入れて耕してゐる者がある。その鍬が陽の光りを受けて光つた。漁師は人家の方へと歩いて行つた。村の人が一人二人と向ふの方からやつて來た。その村の人は衣裳の造らへ方から、着方の具合まで漁師がこれまで見てゐた物とすつかり違つてゐた。

（おかしいぞ、着物の造らへ方まで違つてをる、）

漁師は眼を見張つて驚いた。その漁師を見た村の人の眼にも驚きの色が浮んでゐた。

『お前さんは何處から來た。』

村の人は、漁師のふうを見おろしながら云つた。

『わしは、この川下に住む者じや、魚を捕りながらやつて來ると、桃の林が見附かつたので、それに見惚れて來てみると、山の裾の穴が見附かつたので、不思議に思うてやつて來たところぢや、』

漁師が斯う云ふと、村の人はすつかり安心してしまつた。

『それは大變であつた。まあ、兎に角、私の家へ行かう、家へ行つて、ゆるゆる話をしやうじやないか、』

村の人は漁師を連れて自分の家へ歸つて、鷄を肴にして酒を拵へた。漁師の來たことを聞くと、村の人は物珍らしさうに澤山やつて來た。漁師は酒の御馳走になりながら訊いた。

『一體、こゝは、何と云ふ處でございますかね、』

『ここの村の者は、秦の時の亂を避けて、ここへ這入つて來た者で、それから一度も外へ出たことが無いから、世間と隔つてしまふて、世の中のことは何もわかりません、が、一體今の天子は何姓の天子でございます。』

そこの主人はこんなことを訊いた。

『今は晉の天下ぢや、それまでに漢の天下になつたこともあれば、魏の天下になつたこともある、今は晉の太元年間ぢや、』

漁師は知つてをるだけのことを皆に話してやつた。皆は驚いて漁師の言葉を聞いてゐた。

村の人はこの珍らしい客人を非常に歓待した。皆爭うてその客人を自分の家へ迎へて行つて、酒を出しながら世の中の有様を聞いて楽しんだ。漁師はそこに數日間滯在した後に、村の人に見送られて其所を出た。

穴を出て水源の處に行くと、繋いだ舟が主人の歸りを待つてゐた。漁師はその舟に乗つて歸りかけたが、不思議な村に心を引かれるので、川の岐れた處へ行くと、舟を止めて陸へあがつて、木や草に目標をした。そして家へ歸ると、不思議な村のことを太守の館にまで申し出た。太守は人を遣り、その漁師に道案内をさして、その村へ行かせやうとしたが、目標がしてあつたにも拘はらず、道が分らなくなつたので とうとう行けなかつた。

南陽の劉子驥と云ふ男がこのことを聞いて、自分でも出掛けやうとしたが、行かない内に病気で死んでしまつた。それが爲に、もう二度とその村へ尋ねて行かうとする者も無くなつた。

○

上虞の令劉綱と、その妻の樊夫人とは、二人とも道術を知つてをり、二人で平生もその術の較べあひをしてゐた。そこの庭には二株の桃の樹があつた。ある時、二人はその桃の樹を分けて道術を施し、それを戰はした。桃の樹は左右から寄つて來て枝を撃ちあはして組んづほぐれつ戰つたが、夫の劉綱の方の桃の樹は、時々垣根の外へ逃げ出して行つた。神仙傳の話。

○

周の成王の時、葛由と云ふ男があつた。その男は、木で羊を刻んで賣つてをつた。ところで、ある日のこと、その男は、自分の刻んだ羊に乗つて、村を出て蜀の方へ行つてしまつた。蜀中の王侯貴人は、葛由の唯者でない事を知つて、人を遣つて追つ駈けさした。葛由は綏山へ登つて行つた。その山は高い嶮しい山で、普通の人の行ける所でなかつた。それでも葛由を追つて行つた者は、皆仙道を授かつた。その綏山には桃があつた。で、そのあたりでは、『山桃の一つを得れば、仙を得ずと雖も、又以つて豪なり。』と云ふやうなことを云つた。これは列仙傳の話。

○

桃のことを云ふと、直ぐ連想せられるが西王母の話だ。山海

經に倚ると、西王母とは土地の名であるが、ここでは美人の仙人と云ふことになつてゐる。周の穆王が八匹の駿馬を手に入れて天下を遊行した際、瑤池と云ふ所で西王母に會つて、酒を飲んで歸ることを忘れてゐた爲に、徐の偃王が亂を起したと歷史には書いてある。その西王母が、後に漢の武帝の處へやつた來た。武帝內傳には、『帝跪拜して寒暄を問ふ、畢りて立つ。因つて帝を呼び共に坐す。帝南に面す。王母自ら天廚を設く。眞妙非常、豐珍上果、芳華百味、紫芝萎蕤、芬芳塡樏。淸香の酒、地上の有る所に非ず。香氣殊絕、帝名づくるあたはず。又侍女に命じて更に桃果を索む。須臾にして、玉盤を以て、僊桃七顆を盛る。』とある。桃の大きさは、鴨の卵ぐらゐであつた。すると、西王母はその四つを武帝に進め、後の三つを自分で喫つてしまつた。武帝はその桃が、ただの桃でないことを知つてゐるので、核を傷めないやうに實を喫つてから、それを蒔かうとすると、西王母が、『この桃は三千年に一度實がなりますが、この中夏の地は薄いから蒔いても生へません。』と云つて蒔かさなかつた。

○

漢の武帝の時、東郡から短人(いつすんぼうし)を献上して來た。武帝はお氣に入りの東方朔に見せてやらうと思うて呼びにやつた。やがて東方朔がやつて來ると、この短人は、東方朔へ指をさして、『王母が三千年に一度實のなる桃を植ゑてあつたところが、この男がもう三度盜みました。』と云つた。これが東方朔の年が九千歲であつたと云ふ傳說の起原だ。これは漢武古事の話。

二

桃は日本や支那では、共に靈木とせられてゐる。荊楚歲時記にも『桃は五行の精、邪氣を厭伏して百鬼を制するなり』などとある。東雅の文を借りると、『伊弉諾神、黃泉軍のために追はれ、黃泉平坂の坂本に至りませし時、その坂本にある桃樹に立ち隱れて、桃子三個をとりて待ち擊ち給ひしかば、追ふもの悉く逃げ退れり、之の助けまゐらせしことを褒め給ひ、名を賜ひて意富加牟豆美命と名づけられき、これ桃をもて鬼を避くる緣也と舊事古事等の記にも見えたり。』四季物語には、『古代禁中にて十二月晦日追儺を行はるゝ也。追儺はおにやらひ也、大舍人といふ官人、四目あるおそろしき假面をかけ、戈と楯と持ちて鬼のかたちとなる、是れを方相氏と名づく、殿上の人々桃の弓、葦の矢を以つて鬼を追ふて射るなり。是れ疫鬼を追ふのまじない也。疫鬼とは疫病神の事也。葦の矢種は弱き物也。それに應じて桃の枝の細く弱きを以つて、弓を作りて射るなるべし。强

き弓にては方相氏矩をふるふべし。たゞきじない事なる故、強き弓矢を用ゆるに及ばざるなり」とある。桃は悪木なると共に、不老不死の神仙と結び付けられてゐる。日本ではさうでもないが、支那では桃と仙人とは二にして一である。

一體神仙思想の基調をなしてゐるものは、不老不死、陰德圓滿の思想である。この頃問題になつてゐるスタイナハの若返り法も、メチニコフの不老長壽法も、科學的に研究はしてあつても、要するに不老不死の神仙の道を別途の方面から研究したに過ぎない。支那では不老不死の藥を求めさした秦の始皇の傳説が非常に有名である。張良が漢の創業の臣としての榮務を擲つて、穀を辟け、赤松子に從うて遊ばんと云つたのも亦有名な話である。易姓革命の支那では、時代の移り變りの烈しい犧牲から逃れる爲に、神仙に托して役を晦ます必要があつた。老莊の思想は皆そこから胚胎してゐる。そして、この老莊思想の影響は、道教となつて現われてゐる。道教は不老不死の神仙教で、上下四千歳の間に、支那國民の血肉の間に喰ひ込んで離れないものとなつてゐる。支那の國民性を知らうとする者が、道教を度外視して出來る筈のものでない。しかし、老子を道教の創設者と思つてはいけない。老子は單に道教の理想神である。

神仙の道を吟味するには、老子、莊子、抱朴子、淮南子、眞誥、參同契などの記録を初めとして、佛典にも亘り、それから實際的の修練法に接して、其目鍼心眞を求め道に入るの幽玄微妙な作用もあるが、これはトンカツを喫つてゐる衆生に知らしたとて、益にもならなければ、又筆にした所で會得の出來るものでない。

神仙のことを記述した物に、劉向の『列仙傳』がある。それには、赤松子、甯封子、馬師皇、赤將子輿、黄帝、偓佺、容成公、方回、老子、關令尹、涓子、呂尚、嘯父、師門、務光、仇生、彭祖、邛疏、介子推、馬丹、平常生、陸通、葛由、江妃二女、范蠡、琴高、寇先、王子喬、幼伯子、安期生、桂父、瑕丘仲、酒客、任光、蕭史、祝雞翁、朱仲、修羊公、稷丘君、崔文子、赤須子、東方朔、鉤翼夫人、犢子、騎龍鳴、主柱、園客、鹿皮公、昌容、谿父、山圖、谷春、陰生、毛女、子英、服閭、文賓、商丘子胥、子主、陶安公、赤斧、呼子先、負局先生、朱璜、黄阮丘、女丸、陵陽子明、邗子、木羽、玄俗の七十人の仙人の名を擧げてある。又『列仙全傳』には、四百四十七人の名が載つてゐる。流石に支那は神仙教の國である。

今も云つたやうに、玄妙な修練法は、筆にすることは出來ないが、神仙の道を修得するには、修練法と一緒に食物の工風も必要であつて、その食物のみは、外面的にその一端を擧げることが

出來る。先づ列仙傳にある各神仙の攝取した食物を擧げて見やう。赤松子は『水玉を服す』、赤將子輿は『五穀を食はずして百草の花を啖ふ』、偓佺は『松實を食ふ』、方回は『雲母を練食す』、關令尹は『常に精華を服す、又苣勝實を服す、涓子は『木を餌してその精を煉食す』、呂尚は『澤芝地髓を服す』、師門は『桃李の葩を食ふ』、務光は『蒲韭根を服す』、仇生は『松脂を食す』、彭祖は『桂芝を食ふ』、邛疏は『石髓を煮て服す』、陸通は『橐盧木實及び蕪菁を食す』、范蠡は『好んで桂を服し水を飲む』、冦先は『好んで荔枝を種へてその葩實を食ふ』、桂父は『桂及び葵を食し龜腦を以つて之に和す』、脩羊公は『略ぼ食せず時に黄精を取つて之を食ふ』、赤須子は『好んで松實、天門冬、石脂を食ふ』、犢子は『松子、茯苓を採つて餌して之を服す』、園客は『常に五色の香草を食ふ』、鹿皮公は『芝草を食ひ神泉を飲む』、昌容は『蓬虆根を食ふ』、谿父は『瓜子を錬つて桂附子芷實と共に食ふ』、山圖は『地黄、當歸、羌活、獨活、苦參散を服す』、毛女は『松葉を食ふ』、文賓は『菊花、地膚、桑上、寄生、松子を服するを教ゆ』、商丘子胥は『木菖蒲根を食ひ水を飲む』、赤斧は『須を以つて丹と消石とを錬つて之を服し、又禹餘糧を取つて餌す』、陵陽子明は『五石脂を採つて水を沸かして之を服す』、その他にも人間の爲めに藥をとしらへたり、仙化の食物を敎えたりする仙人もあるが、それは面倒だからあげないことにする。私の知つた道家は、茯苓と松脂の錬つた物を服してゐる。メチニコフの研究も、ブラウン、セカールの研究も、スタイナハの研究も、靜座法も、カシウも、カルピスも、ピーターも、皆神仙の不老不死を希ふ脆い人間の欲望から生れたものである。

人が修眞の道を得て、人間界を去るには、三種別があると云ふことだ。これには近年物故した宮中掌典宮地嚴夫翁の研究を借りやう。

『人が修身の道を行ひて道を得、仙人となつて此世を去るに三通りの別があります。それは第一を飛昇とも昇天とも上昇とも登天とも申しまして、正しく身を擧げて天に昇るのであります。漢土では許遜、柴庭、彭枝、陰長生の如きがそれであります。我國にても、倭姬命は伊勢の尾上山にて上昇せられ、武內宿禰も因幡國龜金山にて雙の履を遺して飛昇し、度會常昌神主は高宮の坂中より昇天しました。その外にも猶は昇天した人は多くあります。第二を名山に入ると申します。これは漢土にては鬼谷子の雲夢山に入り、茅濛の華山に入り、史通平の峨嵋山に入れるの類、また我國にては在原業平朝臣は芳野山に隱れ、都良香は金峰山に入つて隱れ、白幽は城州の白河の奧に隱れ、近く隣藩の平瀬掬兵衛の雲島山に隱れたるの類、これは數へも盡さ

れぬほど多くあります。第三には即ち尸解であります。尸解とは尸を解くと訓む文字通りでありまして、これは仙去することを世間に知らせず、普通の人と同じやうに死んで、世間並に葬面は葬儀なども行ひますが、その實は仙去して居まして、時としては世間の人にも面會することなどあるを尸解仙と申すのであります。この尸解仙もなかなか澤山ありまして、漢土にては李少君の如き、病死して葬りし後、武帝その棺を發きてこれを見るに、唯だ衣冠のみ殘りて其の屍は無かつたと申すこと、また王方平の如きは、死後三日を經て衣帶を解かず、蛇の脱の如くしてその所在を失ひしと申し、また張伯端の如きは、死して火葬にしたるに、七年の後、王屋山にて劉奉眞に遇つて物語りもし詩も作つたとのことであります。これ皆な尸解せるものであります。然るにこの尸解にも異同がありまして、水に入つて形を隠すを水解と申し、兵難に罹りて世を去るを兵解と申し、唯だ病んで死を示すを尸解と申します。これは得道して仙人になつて居ますけれど、その仙去の相を奇異に現はさず、尋常の狀に見せて去るの法と見えます。此れらの尸解仙は他よりは只の病死の如く、溺死の如く、焚死の如く、殘死の如く思ひますけれど、實は死んでをりませぬ。所謂仙去してをりますので、前にも後にも擧げる如く、時あつては世間にも出て來て人にも遇ふのであります。我國にては先づ日本武尊が尸解せられたと申すことであります。この尊は崩御になりまして、伊勢の能褒野と申す處に御葬りになりました。然るに其の墓より白鳥となつて飛び去られました故、御墓を堀つて拜見しましたれば、御棺の中には只だ御衣のみ遺つて御屍は無かつたと申すことであります。また菅公も筑紫にて崩御になりましたが、その後、比叡山の尊意僧正の許に御出になり、御問答せられ、また日藏行者が頓死して十三日目に蘇生して冥界にて菅公に謁し、また菅公の幽宮を拜見して來たことのあるを始め、菅公の神仙界に在らせらるゝ證は澤山にあります。また彼の白箸翁なども、京都で死んで葬られたに違ひないのに、後ち或僧と大峰山の岩窟で面會したことがあります。この外なほ數へ盡されぬほどありますが、此れらは皆尸解して仙境に入つた人々であります。」

三

神仙の話は澤山あつて、說話としては非常に面白いものもあるが、それは、ここでは避けることにする。神仙の實在を信じて『神仙記傳』と云ふ書物を編輯してゐたと云ふ彼の宮地翁の記錄の中には、この目的にかなふやうな材料も澤山あるだらうが、不幸にして、それを手に入れる機會が無いから、明治四十

三年、宮地翁が華族會館で講演した講演筆記の寫しの中から得た材料によつて話すことにする。私が知つてゐる範圍で、この宮地翁の記錄の他に、仙界の消息をもらした價値のある物としては、平田篤胤の『仙境異聞』であらうと思ふ。仙境異聞は、寅吉といふ七才になる下谷の少年が、上野黒門前の五條天神の傍で神仙に會つて、それに連れて行かれ、十數年を仙界に送つて歸つて來て、當時下谷長者町の藥種商山崎美成の所に來てゐたのを、文政三年十月の朔日、屋代弘賢から聞いて、弘賢と一緒に湯島天神の男坂下の寓居から出かけて行つて、その少年に會ふて記錄したものである。仙境異聞は又『寅吉物語』とも云ふのである。

仙境異聞の話はこれ位に止めておいて、宮地翁が講演筆記の中にある神仙の話に移らう。この話の主人公の河野と云ふのは宮地翁の門下の一人であつた。河野の名は久、通稱は虎五郎、後に俊八とも云ふた。道術を修めるやうになつてから、至道と云ふ號を用ひてゐた。もと豐後の杵築の藩士で、大坂中の島にあつた藩の藏屋敷の定詰であつたが、御一新後大阪府の貫屬となつて江戸堀に住んでゐた。非常な敬神家で、神道の本を讀み宮地翁の講義などへも出席してゐた。

明治七年の四月になつて、河野は大阪から泉州の貝塚へ移り住んだ。その時分から彼の敬神の考は非常に突き詰めたものになつてゐた。宮地翁の言葉によると、『始終私共の講義を聞いて茲に始めて神の正しく儼存し玉ふ上には、至誠を以つて之を信じ、その道を謹し、その法を修めんには、神にも拜謁の出來ぬものにはあらざるべしと決心し、これより種々の苦行を志し、捨身決心して犬鳴山に籠り大行を始め』たのであつた。犬鳴山の行場へ籠つたのは、翌年の三月一日のことであるが、その山へ籠るやうになつたのは、前年の十月に靈夢を感じて、仙術の修練に志した爲めであつた。犬鳴山では毎日瀧にうたれて荒行をした。荒行を始めた初めの一週間には、種々な不思議なことがあつた。

八月の六日になつて、河野は大和の葛城山へ登つて、その頂上で修練を始めた。草の上に安坐趺跏して、已れの精神を幽玄微妙の境に遊ばしてゐる白衣を着た河野の姿は、夜になつても動かなかつた。空には星が光つてゐた。鹿の聲が近く傍から聞えて來た。鹿の聲は二三匹の鳴く聲であつた。鳴き聲が止まると、がさがさと云ふ落葉を踏む足音が聞えた。そして河野が氣の附いた時には、五匹ばかりの鹿が傍へ來て立つてゐた。鹿は馴れ馴れしさうに寢たり起きたりした。

河野は行ひ澄して動かなかつた。七日の明け方になつたところ

ろで、今まで傍にゐた鹿は、何處へ行くともなしに急にゐなくなつてしまつた。河野はそのまゝ行を續けて、その日の夕方になつたが、用意の水が飲みたくなつたので、溪へおりやうと思つておりかけた。二三丁ばかり行つた處で、向ふから不思議な風體をした男がやつて來た。黑い紋のある着物を着、袴をはいた三十二三に見える色の白い眼の鋭い男が、髮を紐で結んで後へ垂らし、二尺くらゐある短い刀を一本差してゐた。

『その方は、斯うした深山の中で獨り何をしてをらるる、』

刀を差した男は聲を掛けた。

『私は昨日からこの山へ登つて、修行を始めた者でございますが、水が欲しいので、探ねて行くところでございます。』

河野がありのまゝに答へると、

『水なら、わしが知つてをるから教へてあげやう、』

刀を差した男は斯う云つて、引返して山をおりかけたので、河野もその後から隨いて行つた。樫や白樺などがいぢけた枝を張つてぽつぽつ生えてゐる間を通つて行つて、山のうねになつた處を廻ると、大きな岩の聳えてゐる下へと出た。其處には苔の生えた清水の溜つてゐる岩穴があつた。

『これだ、』

刀を差した男は之れに指をさした。河野は腰にさしてゐた竹筒へ、その水を汲んだ。

うつすりと雲を染めてゐた夕陽の光が消へてしまつた。二人は今おりて來た道を歸つてゐた。

『昨夜、山の上で徹夜した時に、何か變つた事はなかつたか、』

刀を差した男が云ひ出した。

『別に變つたことはありませんが、夜遲くなつて、五六匹の鹿が傍へやつて來て、明け方まで遊んでをりまして、明け方に何處へか行つてしまひました。』

河野が返事をすると、刀を差した男は、振り返つてにつと笑つた。

『その鹿は五匹ぢや、二匹は親鹿で、三匹は子鹿ぢや、』

河野は驚いた。この人はたゞの者ではない、若しかすると自分が求めてをる神仙であるかもわからないと思つた。河野はそのまゝ土の上につくばうやうにした。

『何も知らない者でございますから、無禮ばかり致しました。どうか、その罪をお許し下されて、道の數へをお授け下さいますやうに、』

『その方の志は好くわかつてをる、しかし、わしは、今晩の内に自分の住家へ歸らねばならぬ、その方も仙道を修めたいと思ふなら、これから、わしと一緒に行かう、』

刀を差した男は暗い中にその光のある兩眼を見せてゐた。

『有難うございます、では、お供を仕ります。』

『では、わしに隨いて來るが好からう、』

刀を差した男は走るやうに歩き出した。河野は遲れてはならんと思つて、一生懸命になつて隨いて行つた。

道は草の峯になり、岩の聳えた溪川の畔になり、大木の生ひ茂つた眞暗な林になるなど、眼まぐるしく行く道が變化した。刀を寒い風が吹き、雲霧が飛び、星が見えたり隱れたりした。刀を差した男の身體は、鳥のやうであつた。河野は何時の間にか人事不省に陷つてしまつた。そして氣が附いた時には、刀を差した男が後ろへ廻つて、背を擦つてゐた。

『氣が附いたか、』

河野の口の中には何時の間にか藥が含まされてあつた。藥は身體一面に浸み渡るやうな心好い感じを與へた。河野は夢から醒めたやうに身體の疲勞がとれてしまつた。

『もう。これから餘り遠くない、もう一息じや、』

河野は起きあがつた。刀を差した人は又歩き出した。何時の間にか夜が明けかけてゐた。

道は大木の生ひ茂つた林の中へと這入つた。朝の光が梢から白白とさしてゐた。大きな岩があつて岩屋らしい入口が眼に附いた。刀を差した人はその中へ這入つて行つた。

『ここぢや、ここへ這入るがよからう、』

河野はその後から這入つた。刀を差した人は、岩屋の中にゆつたりと坐つた。河野もその前に坐つた。

『不肖は河野久と申す者でございますが、これからお弟子になされて下さいませ、一體こゝは何と云ふ處でございませう、』

『こゝは、吉野山の奥で、昔から人跡の至らない處であるから仙道修業には又と無い處ぢや、わしはもと大和の國の神官で山中と云ふ者であつたが、わしが人間界にをつた時は、足利義滿や、義持が將軍になつて、言語道斷な振舞をするから、慷慨の餘りに山へ這入つたのぢや、わしは應永の初年の生れであるから山へ這入つた時は四十餘りであつた。初めは富士山へ登つて、富士山の神仙に從いて、數百年の間、道を學び眞を修めたから其の功が滿ち行が足つて、照道大寂眞と呼ばれるやうになつてゐるが近々の内に、地仙の籍を脱して、天仙になることになつてをる。この岩窟は、それまで住んでをる假りの住家ぢや、こゝへその方を連れて來たのは、その方の精神に感じてのことぢやから、氣を置かずに休息するが好からう、』

話の内に日が出て明るい朝日の光が岩屋の中にさした。瑠璃色の羽をした鳥や、孔雀のやうに羽を擴げた鳥などが、岩

前を折々呟いて居つた。河野はふと自分が氣絶した時に飲まされた不思議な藥のことを思ひ出した。
『今日私が戴きました藥は、どうした藥でございましやうか、』
『草木を見ればよくわかる、』
照道爺頁は輕く答へた。河野にはその意味がわからない。
『草木を見よと仰せられますと、草木を……、』
照道爺頁はにつと笑つた。
『樹木の下には草生ぜず、陰地の草には花咲かず、これに準じて、注意しながら山を廻つてをると、自然に藥が知れてくる。』
照道爺頁はそれを結論として、玄妙な修道の秘訣を教へはじめた。河野はその教へを心に刻みつけた。午後四時頃になつて爺頁の話は終つた。河野はその時になつて、未熟の身でさうした神境にをることが勿體ないやうに思はれだした。
『未熟の身が、何時までもこの靈場にをりますのは勿體なうございますから、お別れ致したいと思ひますが、この上とも御指教を願ひます。』
『それでは、今日は歸るが好からう、そこへまで見送つてやらう、』
爺頁は河野を連れて岩屋を出た。そして二人で山を下つて行つた。一町あまり行つて、深林を出放れると、溪川が來た。左右には高い山が天空を支へて聳えてゐた。溪には夏の夕陽があつた。爺頁は片手を出して溪下の方に指をさした。
『この溪川に沿ふて、下へ下へと行つて、彼の山のはづれを――』
と云つて、溪の下の方に見へてゐる左側の尖んがつた峰に指をさした。その指が大きく光つて見えた。
『彼の山のはづれを、西へ西へと行けば、人の通る路が來る、』
河野は頷付いた。
『これから、わしが所へ來たくなつたなら、ここへまで來て待つてゐるが好い、わしが迎ひに來てやる、』
河野は爺頁の方を折々振り返りながら山をおりて行つた。最後に振り返つた時には、一沫の雲が爺頁を覆ふやうに見えてゐた。
河野は、その晩、溪の落ち口で野宿をした。翌日は吉野路を通つて、五條橋本など云ふ處を經て、その夜は龍の島と云ふ山の辻堂で一泊し、十日になつて紀州路から泉州の牛瀧と云ふ處へ越へ、それから葛城山へ歸つた。葛城山では又二日間修業して、十二日の午後三時頃、貝塚の寓居へ歸つた。
河野はそれを初めにして、その後も度々葛城山へ登り、吉野へも行つて照道爺頁に面會した。照道爺頁も亦時々河野の家へやつて來た。

河野は照道翁眞から修眞の法を授かつた顚末を書いて、それに『眞誥』と云ふ題を附け、それを宮地翁の許へ送つて來た。河野は後に、堺から大阪へ歸つて、西區紀伊國橋西北詰粕谷治助と云ふ人の許にゐた。

宮地翁が河野が神仙に會ふたことを知つたのは、明治九年の夏のことであつた。宮地翁は、その時、教部省の命で大阪に在勤して神道の講義をしてゐた。河野が宮地翁の講義を聞いたのは、その前であつたが、その時は一聽講生として宮地翁の前に出てをつただけで、個人としては知らなかつた。河野はその時、長澤在仲と云ふ醫者を紹介者として、書状を持つて面會を求めた。

『私は先生の講義を拜聽致してをつた者でございます。』

宮地翁はこの言葉によつて河野が聽講生であつたことを知つた。河野はそれを緣にして、時折り宮地翁の許へやつて來て、二三日逗留してゆくこともあつた。河野の食事は何時も葛湯でそれをコップに一杯づつ飲んでゐた。

『手の懸らない好いお客さんだ、』

宮地翁は斯んなことを云つて知合の人に話して笑つた。河野には細君があつて、お米と云ふ女の子があつた。細君は同藩の木村知義と云ふ人の妹であつた。河野は時とすると、その木村と一所にやつて來た。木村は河野と往復した書簡及びその道話を筆記して、『至道物語』と云ふ一篇の書を作つて之れを宮地翁に送つて來た。至道は河野の道號であるのは云ふまでもない。

明治二十年四月下旬になつてから、河野は百日間の斷食の行を始めた。そして七月の末になつて、もう二三日すると滿行になると云ふ日になつて、河野は寓所の主人を呼んだ。河野はその時、机に倚り懸つて俯向いてゐた。主人は急いで河野の室へ這入つて行つた。庭には午後の暑い陽がぎらぎらと光つてゐた。河野はすこし顏をあげて主人の方を見た。

『氣の毒ぢやが、氷水を二杯とつて下さらんか、』

從來河野が斷食をすることがあつても、水だけはすこしづつ用ゐてゐたが、その時の斷食に限つて、すこしも水をとらなかつたから、それに同情してゐた主人は、早速氷をとつて來て盆へ載せて持つて來た。

『これは有難い、私も今兩三日すると、滿行になるが、急に行かればならぬことになつたから、手数をかけた。』

主人は行くと云つたのを、平生の通り貝塚へ行くことだと思つた。

『長い間の行でございましたから、後の養ひが大事でございますよ、』

「有難う、」

河野は斯う云つてそのまゝ机の上に俯向いた。主人は室を出て行つて、しかけてあつたちよとした用事を済ますと、何かまだ他に用事はあるまいかと思つて、河野の室へ又顔を出した。河野は机の上に俯向いたまゝぢつとしてゐた。氷はと見ると、一つの氷のコツプは空になつて、もう一つの方は、一口ぐらい飲んだやうに、ちよつと上の方が隙いてゐた。

（疲つてをられる、永い間の行で體が疲れてゐるだらう、）

主人は足音をして驚かしてはならんと思つて、そつと室を出て行つた。しかし、河野のことが気に掛るので、又暫らくして來て見たが、河野は初めのやうに俯向いてゐた。若しあれから氷を飲んだのではないかと思つてコツプに眼をやつたが、コツプは元のまゝであつた。

（矢張り疲れてをるから、うとうとなされてをるだらう、）

主人は又外へ出て行つたが、何だか河野の様子が平常と違つてをるやうに思はれるので、又引つ返して來て、

「先生、先生、」

と聲を掛けた。返事もなければ、身體も動かさない。主人は思ひきつて、その傍へ寄つて行つて、片手を掛けて揺り動かした。

「先生、先生、先生、」

河野の體はもう硬くこわばつてゐた。

河野が死んでから二十日ばかりしてのことであつた。何かの用事で東京から大阪へ行つてゐた宮地翁は、中の島の知合、家で、河野の寄寓してゐた鵜谷治助に會つて、河野の亡くなつた話を聞かされた。

明治三十四年五月、東京麹町區飯田町の皇典講究所では、神職の講習會があつた。宮地翁はその時『神仙記傳』と云ふ物を編輯してゐた。神職講習會へ來てゐた備前の國磐梨郡安仁神社の禰宜太美萬彦と云ふ者が、ある日、一人の伴とゝもにやつて來た。萬彦は宮地翁の机の傍にあつた神仙記傳の原稿に眼を注けた。

「あなたは、神仙のあることをお信じになつて、これを編輯なされてをりますか、それとも、ただ面白い記録として編輯なされてをりますか、」

「實在を信じてをりますから、斯うして數年にわたつて編輯してをります。」

「さうでございますか、」

萬彦は神仙記傳の話はそのまゝにして、他の話をして歸つて行つたが、翌日になると萬彦は一人で又やつて來た。

『昨日は他に人がをりましたから、何も申し上げませんでしたが、私も神仙の實在を信じてをる者でございます。』

萬彦は自分の知つてゐる神仙のことに就いて話した。備前の國赤磐郡太田村大字萬富小字梅といふ處に、山形峰と云ふ盲人があつた。その盲人はその時三十歳であつた。その盲人の峰は、少年の時、音樂を習はふとしたが、記憶力が弱くて、何を教はつても覺えられなかつた。或人が『安藝の嚴島の辨財天へ火の物を絶つて祈願を籠めると、必ず覺が好くなる』と云つて教へた。峰は十二三であつた。彼はその言葉を信じて、七日間火の物を絶つて遙かに祈願をしたが、すこしも驗がなかつた。峰は失望して死なうと思ひ、同國和氣郡大字佐根といふ處へ行つてそこの橋の上から身を投げやうとした。ところが、和氣郡の熊山といふ山に住む神仙が來て、峰を伴れて行つて、色々のことを教へてくれた。神仙は銀製の長さ三寸ばかりあるトツコンと云ふ樂器、水晶で造らへた龜の甲の形をした一寸五分ばかりの物、羽扇、劍の四種の品をくれた。神仙は峰に向つて『十年間このことを他言してはならん』と云つた。峰はその命を守つて十年過ぎても誰にも云はなかつたところで、明治二十八年になつて、矢張り同國御野郡金山の人に『神の告げがあつた』と云つて、三人の者が連れだつて訪ねて來たから、峰も始めて神仙の話をして聞かせた。峰はその時分、神仙から授かつた秘法や禁厭で附近の人々の病氣などを癒してゐた。峰の噂が高まつて來るとともに、その門人となる者も出來て來た。太美の萬彦もその弟子の一人であつた。峰は時々その門人を伴れて熊山へ行つた。火の物を絶つて峰に隨いて行つた門人達は、熊山の山頂で神仙達の奏する音樂を聞くことが出來た。神仙の形は見えなかつたが、音樂は近々と聞えた。峰は門人達に、『熊山、吉野山、伯耆の大山などには仙境があつて、吉野山の神仙と、熊山の神仙とは常に往來してゐる』と、話したこともあつた。萬彦はある夜峰に伴れられて平生のやうに熊山へ行つて音樂を聞いた。ところで、その晩の音樂の中に、一つ拙い音樂があつた。萬彦は不審に思うて峰に訊いた。峰も不思議に思つてゐたから神仙に伺ふた。神仙は峰の間に答へて、『近頃人間から來た新仙があつて、未だ音樂に熟してゐないのが混つてゐるからである』と云つた。峰は、『それは何といふ人で、何時頃仙界へ來られたか』と訊いた。『河野久と云ふ者で、十四五年前に這入つて來た』と神仙は答へた。

萬彦の話に耳を傾けてゐた宮地翁は、河野久の名を聞くと、若し萬彦が自分と河野とのことを知つてをつて、自分を喜ばす爲めに作りごとを云ふのではないかと思つたので、そのまゝに

聞き流して、その日は何も云はなかつた。しかし、その後數回萬彦がやつて來るので、氣を付けて見たが、別に自分と河野との關係を知つてゐさうにもないので、ある日、宮地翁は萬彦に向つて河野の話をして聞かした。

『あなたは、この間、河野久のことを話してをられたが、河野のことを御存じですか、』

萬彦は無論河野のことは知らなかつた。宮地翁は河野の書いた『[illegible]』と木村知發の書いた『[illegible]物語』とを出して見せた。萬彦は驚いて、峠へ送る手紙の端にそのことを書いてやつたが、神[illegible]台が終つて歸郷すると、峠に會つて河野のことを詳しく話した。峠は神界へ伺を立てゝ、その後の河野のことを訊いた。河野は吉野山の仙境に住んでゐて、時々熊山の仙境に往來してゐるとのことであつた。宮地翁はこれに對して斯う云ふことを云つた。

『茲に於て私の考へてをりました通り、至道の死去は、その實普通の死去でありませんので、前に申しました漢の李少君や、我國の白箸翁の類で、全く尸解の仙去であつたことが明白になりました。これにて神仙の存在は甚だ確實なることが證せらると思ひます。實は私の本朝神仙記傳に載せました事蹟の中には此傳よりも餘程面白き奇談もありますけれど、この河野は第

一私の直接面會したのでありまして、またこれを證明いたしました太秦萬彦氏も、今日にては安仁神社の宮司に進みて、現職の人でもあります故、最も慥かなる話ですから、特にこの河野の蹟をお話いたしたのであります、』

杉浦重剛論

杉浦天台道士

文學博士　三宅雪嶺

□

强ひて系統を立てれば、吉田松陰に次いで品川余佛庵、次いで杉浦天台道士と云へる。松陰が存命せば本年九十二、余佛庵が存命せば七十九、而して天台は正に六十七、各約一廻りを隔てゝ居る。品川は明かに吉田の門人であり、生涯之を師とし敬ひ、其の爲めに盡くした。杉浦氏は品川の門人と云ふ譯でなく、品川も之を門　と稱せず、子弟の關係無いとしても、先進後進の關係がある。各性格及び能力を異にし、品川が吉田と違ふことは猶ほ杉浦が品川と違ふやうであるが、共通の點の蔽ふ可からさるものがある。堅苦しいやうで才子であり、新知識を採入れるに努めて、何時までも日本を本位にして立たうとする。何れも氣節を重んじ、名分を嚴にするやうで、風流氣に富んで居る。

詩か歌か、何か藝術關係の事を好み、其の能に富む。皆なかなか筆健めであつて、書く事が速い。松陰の短生涯で忽がしい中で、書いた所が随分多い。余佛庵も達者であり、天台も筆を走らせれば立ち所に詩となるといふところがある。必ずしも巧を求めず、即興を以て成る。漢學を修めても漢學者にならず、洋學を修めても洋學者と趣を異にする。

□

杉浦は始め貢進生として南校に入り、開成學校より留學生として英國で化學を修めた。眞面目に化學を學んだけれども、科學者が化學を修めるのと違ひ、國家の爲めに必要と心得たのである。其の頃他にも科學を以つて治國平天下の爲めと考へたのがある。延いてロスコーに就いて學び、深く其の人を敬慕しながら、化學研究に從事せず、教育に向ふ事になつた。普通の教育と違ひ、國家を念とする所が多い。其の國家は獨逸流の制度的なのでなく、民族に重を置いて居る。それで科學を輕んずるかと云ふに、さうでなく、頗る之を重んじ、之れで新宗

教を打樹てようとも試みた。一時理學宗と名の付いた事がある。敬神に於て品川と違ふまいが、念佛に於て此と違ひ、何處までも科學的理路を以つて進まうとする所がある。若し化學に專心從事したならば、何等か見る可き業績があつたらう。

二十六歳で東京大學豫備門長、即ち今の高等學校長になつたのは、其の頃珍らしい事とせぬけれど、兎も角も才能を認められたに由る。留學以前才子として知られ、何處にでも即興の詩を書きつけ、厠にまで書いた。確かに才の閃きの露はれる所である。然し漢學者であつて漢學者でなく、洋學者であつて洋學者でなく、特殊の意見を抱き、大學教授連と合はぬ所があり、何や彼や豫備門を罷め、後に文部省へ出たけれど、之れ亦永續させず、東京英語學校、即ち後の日本中學校に身を入れる事になつた。傍ら稱好塾を設け、書生を養ふた。一度貴族院議員となつたけれども、間も無く罷めた。二十六で豫備門長に成つたに較べ、後の經路は順境でなく、不遇と名付くべき跡がある。一つは身體の弱い所もあらう。或は實に弱いよりも、自ら弱いと思ふ所もあらう。一時もはや死期の迫るやうに云はれた。極度の神經衰弱と云はうか、餘程の重態であつた。で、もはや危篤しいと云はれて居つたのが、次第に恢復し、年一年丈夫になり、前に氏と對照し強いと知られて居つた方が、續々死ぬやうになつた。中に殺しても死なぬと云はれた強いのまで死んで居る。隨分氏の友人で過去帳に入つたのがある。然し弱くて仕方無いと云はれ、又自らも思つて居つた方が丈夫になり、東宮御學問所御用係りを仰付けらるゝに至つた。之れが氏の最も適役であるか何うか。もつと適した事が無いかと疑はれるが、兎も角も適役の一つたるを失はぬ。

□

吉田松陰が最も悲慘な運命であつたは云ふまでもなく、品川念佛庵は子爵で内務大臣になり、相應に榮達したのであつても、今少し滑り上手ならば、更に昇進して居るに極つて居る。維新頃の順序から推せば、少くとも伯爵になる可きである。芳川・渡邊が伯爵で品川が子爵とは合點し難い。割合に榮達しなかつたのに、かゝる榮達を念頭に置かなかつたのである。何うでも可く、自分は唯自分の職務を盡くせば可いとする、一種洒脱な所がある。松方内閣に內相となつた時、事實は品川内閣であり、無事に過さうと思へば過せるが、衆議院が何でも反對するを忌々敷く感じ、國家の爲めを思はぬ者共を極力抑へつけようとし、遂に失敗に終つた。三菱を叩かうとし失敗に終つたのと同じい。何時でも惡い奴を懲してやらうと思ひ、高官に有勝ちの金儲けなど全く考へず、賄り物は絶對に排斥した。金が無く

ても平氣である。其處が無暗な選擧干渉をしながら惜まれなんだ所以である。然し榮達す可くして、順當に榮達しなかつたと云はねばならぬ。

□

杉浦氏が御用係りとなつたのは、松陰から見て餘程都合が好く、念佛庵に較べて劣つて居る。一中學校長で勅任御用係りとなつて居るのは、中小學教員より觀て榮達と思はれようが、勅任官ならざるにあるところより觀れば、殆ど云ふに足らぬ。貢進生で勅任官となり親任官となつたのが幾人あるか知れぬ。然し帝王の師といふやうなところで、職務の重きを感せずに居れぬ。果して氏に限る程の事あるか、他人でも堪ふるところであるか、考へ樣次第であるか、氏が自ら任ずる所があり、單に俸給の爲めにせぬを認めねばならぬ。氏は金に豐かな方でなく、俸給を得るに如くはなけれど、何時でも之を棒に振るの覺悟がある。氏は割合に才があり、融通も利き、所謂一徹者と趣を異にしつゝ、一旦思ひ立つた事があれば、辭表を懐にして出掛ける事、決して今日に初まらぬ。今回の事は種々のいきさつがあり、責任の論議立をすれば、前に遡らねばならぬ。元老など大きな顔をして何を爲て居つたか。其の政治に當つて功過相償はぬのも押して知られるでないかと云へるが、何にしても面白からぬ事の起つたものであり、斯かる場合に杉浦氏は誂へ向きの人物である。今日の事件は單純に斷定し難いとし、氏の腕を振ふべき場所の、此の邊に在るを認むべきである。氏の友人は強い身體を以つて續々歿し、之に氣の毒がられた氏が能く生き存へて、以つて今に及んだのは、此處に特色を發揮すべき譯になつて居つたと、運命論者は云ふであらう。理學宗に於て何となるか。晩年に及んで漸く輪廓を明かにし得たとする。

杉浦重剛先生

大町桂月

明治の初に、各藩から秀才を選んで、貢進生として、大學に出したことがあつたが、杉浦重剛先生は近江の膳所藩から出された貢進生であつた。大學の秀才の中の秀才を選んで、西洋に留學せしめることが始まつたが、先生は其一人であつた。帝國議會の始めて起つた時は、今のやうに運動することなく、唯默つて居て、選擧せられた人物が少なくなかつたが、先生は其一人であつた。

皇太子殿下の御學問所が出來た時、他の學課の教師は其人を

得るに困難でなかつたが、唯倫理を講じ、帝王の道を說く人を得るには、大に困難であつた。當時の東京帝國大學總長山川健次郎氏をして、大學教授の中から選ばせるが至當であると云ふことになつて、山川氏に掛合ふと、山川氏は頭を掻いた。『恥しいが、大學教授中には一人も然るべき人が無い。』と答へた。『そんなら御自分で引受けられるより外あるまい』といふと、『いよいよ其人が無いならば、自分で引受けますが、民間に唯一人、最適任者がある』と云つて、先生を推薦した。命を傳ふるには誰が好からうと評議の末、濱尾男が其任に當ることになり、往いて先生に說き勸めた。先生は『一人で決することは出來ません。親友にも相談しますから』と、即答せずに、四五人の親友に相談した。親友はみな贊成した。次に先生は弟子を集めて、事の次第を告げ、『いよいよ今度の大任を御受けする以上は、お前達も其氣になつて、父を辱しめぬやうにしてくれねばならぬが、果して實行が出來るか。實行が出來なければ、お斷りする。よく考へて返答をして呉れ』と云ふと、弟子は相顧みて熟考した。先生の末弟の五郎氏も來て居て、『お前達は皆身を謹みて、父上にお受け申させるが道であらう』と口を切つたので、弟子一同に『さうです』と堅く誓つた。それで先生は愈決心したが、先生は御幼少な皇太子殿下がお判りになるやうに說くには、どれくらゐの程度がよいかと云ふことに苦心し、原稿を作つて、殿下と年齡の略ぼ同じな子に讀ましめ、判かりましたと云つたといふのをたしかめて、それで講義の程度にも決心が出來た。なほ先生は靖國神社に詣でゝ、講義の原稿を神前に捧げ、維新以來の忠魂に祈誓して、然る後、始めて御進講することになつたのである。

先生が皇太子殿下に帝王の道を說き奉るやうになつたのは、大正三年であつたが、其翌年に今上陛下の御大禮式が行はれた。皇太子殿下は其式に列せられないやうになつて居たが、先生は躍起して忠孝の大道を說いて、百方苦心の結果、殿下も其式に列せられるやうになつた。この一事を見ても、滿朝人なし、唯先生あるのみの觀がある。

先生はさき頃東宮御用掛を辭したが、それに關することは記してはならぬことになつて居る。唯先生の平素は大に通じて國家の爲めに計劃すべき次第であると云ふの外は無い。頭山滿氏は先生を評して、和氣清麿の再來だと云つたが、決して過言でないのである。先生には寸毫も私慾が無い。功名もなければ、富貴もない。先生には唯國家がある。先生の一生は愛國の至誠を以て一貫して居る。今の『日本及び日本人』は雜誌の『日本人』と新聞の『日本』とが合したものであるが、『日本人』も

『日本』も、その發頭人は先生である。『日本人』が先づ現はれたが、それは國粹保存の爲めである。明治二十年頃あたりまでは、西洋崇拜が其極に達して、國體爲めに危からむとする勢であつたので、先生は國家の爲めに蹶起した。『日本人』もその手段の一であつた。明治二十二年に、大隈侯が條約を改正しようとした時、憂國の志士は奮起して、之に反對した。先生も國家の爲めに蹶起した。百方手を盡したが、大隈侯は頑として聽かない。『日本』はこの際、先生を中心とする國士に由つて起された。先生は寢食を忘れて奔走した。いよ〳〵策盡きて、學習院々長は天皇陛下に直接奏上するを得る身分であるのを利用するの外なく、時の學習院々長三浦梧樓氏が、暮夜、白衣を着て、條約の不可なることを奏上し、封事を奉つて、嘉納あらせらるゝことゝなつた、三浦氏は實は傀儡で、之を操つゝたものは、先生であつたのである。

先生が八九歲の時、あちらでも蜂にさゝれた、こちらでも蜂にさゝれた。蜂が人家の間に出沒する爲めに大騷をした事があつた。終に蜂の根據を全滅しようといふ事になつて、大人も交り、面を掩ひ、棒を執つて、征伐に行つた。先生もその一人であつた。進んで蜂の巣を叩き落した。蜂は雲霞の如く襲來した。其勢に辟易して、みな逃げ去つた。獨り先生のみは留まつた。數萬の蜂が一身に群集して毒刄を揮ふにも屈せず、棒を打揮り打振り、終に蜂を征伐し盡したことがある。この一事は能く先生の精神氣魄を現はして居る。先生は今日に至るまで、この精神氣魄を何事にも盡した。教育に盡した。世道人心に盡した。國家の危機に盡した。王者の師となつて、帝王の道にも盡したのである。

御用
早慶明法大學
帝大學習院
極東體育協會
各國大公使館

撓まざる改良の

美津濃運動用品



地方特約店募集

名譽ボール Y1.60 Y1.00

日本少年野球

輕便運動靴 Y1.70 Y1.50

發賣元
東京
神保町電車通
長電話神田三二二四
振替東京一一五四五

想　華

字に依る寫生（三篇）

木村荘八

祖母と別る

大正七年の春のことですが、私はRY堂から或る本のことをたのまれて、それにエヂプトやギリシアの美術史（？）を書くことに氣が向き、次第に乘氣になつてマスペロやペトリー、ガードウナー等の本を讀みました。大ていくどい純學術的な考古學の本で人を退屈にする古物鑑識の法や、比較批判のこと、地中海諸地方の古蹟發掘記事など、さう云ふ（私には）どうでもいゝことが多いのですが、たまに然しいろ〳〵面白い「材料」があつて、「智識」が滿足を感じます。

私はそれに比較的多くの時を使つた。

が、實際我々の生活は分らないと思ふ。尤もその前から病氣してゐて、歳も七十だし、決して「安心」はしてゐなかつたが、私は赤ん坊の時母に長らく病氣されて、その後ずつと二十代までお婆さん子です。ずい分可愛がつて貰ひました。

そのお婆さん——祖母が、前の年から家にゐて、一月前から病氣で階下にねてゐました。

私が夜ふかしして時々夜中にミシミシ下へ行くと、たつた一人起きてゐて、あゝうれしいと云ふ聲で、「莊八さんかい」と云ふ。

そして牛乳をのませたり、抱き起して話をしたり、――ありありと思ひ出します。ある時は三時頃起して便所へつれて行き、用がすんだので、「お婆さん僕は又二階へ行きますが、いゝかい」と云ふと、ぐつたりうなだれて、寂し相に、しよんぼり座つてやせた手をだらりと膝へ垂れ、下を向いてから云つた。

「みんなに親切に世話になつてうれしい。然し之れが長いお別れかも知れない。」

さう云つた。私は、

「なあに大丈夫だ」

位ひに云ひましたが、一層寂しい感じがしました。

然し一途に、この愛の中で、もう一度元氣にしたいとつくづく思つた。

――今思ふと、このあとの何をお婆さんは全く心からの寂しさと情で云つたのです。

然し如何しても相手の丈夫な、若い僕にはぴつたりは通じなくて、さぞ寂しかつたらうと悲しく思ふ。――あの頃お婆さんは一人でいつもねながら、全く「一人で」何をしみじみと思つてゐたらう。――こつちは之れから生き殘るのに、向ふは死ぬのだ。

そんな日があれで幾日もつゞいた。

病氣は輕くても、段々にからだへやつて來るどうにも仕様のない老衰。――四月十三日に近い或る夜は、M子に、もう櫻の咲いた話を聽いて聞いて、「癒つたら一所に見に行かう」と約束してゐた。「M子のこしらへるおかゆは米からだらう。あたしもよくこしらへたおぼへがある。お飯からのかゆはまづい

「お米のおかゆはうまい

手數をかけるね」――と、禮を云つてゐた。

「おばあさん。あれはお米からではないのよ」
「さうかい。うまいよ」
と話しをしてゐた。——變な思ひ出す會話。
又私とは、夜中に、突然繪が九州で賣れた話をして「ありがたいねえ」と云ひ、その翌朝になると繪の賣れたと云ふ話は自分の見た夢か、私の話した本當か聞いて、「落ち行く先きは九州相良と云ふから遠いんだねえ」と云つてゐた。
私一は笑つたが、自分では笑はなかつた。
私は段々仕事の材料調べに身が入つて來たので、多く二階にコツコツやつてゐました。
十二日の夜は別に「お休み」も云はず、否顏もろくに合せずに、又その日に限つて私は三日ぶり位でぐつすりとねた。
尤もその前夜起き通して、朝之れからねやうとした所へ丁度人に來られ、そのまゝずつと起きてゐたので疲れてゐた。

翌朝はいきなり一所にゐるYやM子に起された。
初めYがやつて來て「お婆んが變だ」と云つたが信じられなかつた。
少しねぼけて戸惑ひしたどつちつずの心地だつたが突差に頭が冴え、
「息があるか？」
と聞くと「ない樣だ」と云ふ。「冷たいか」と聞くと「冷たい」と云ふ。
「非常に冷たいか」
ときくとうなづいてゐたが、どうも併せない、信じられない氣がした。
Yもあやふやな顏をしてゐた。
私は「そんな筈はない」と思つた。
まだ起きずに、半信半疑でゐた。

Yはもう一度たしかめに急いで下へ行つた。

が入れ代りに此度はN子がやつて來て、

「私、胸の脈が合ない。」

ボロボロ涙をこぼしてゐた。

(もしかすると如何かしたな！)

と思つた。胸がドキドキした、が然し、俺が見ればなあにきつと大丈夫なのだ、とたしかに思つたし、信じて、飛び起き、階段を一息に下りて、病室へ來て、祖母の床の外に出してゐる右手をうんと掴まへた、が全く驚愕した。

僕にはすぐにわかつたがもうにもう死んでゐる。

死んでゐるどころではない。

もうとても如何にも仕様がない。全く死に瀕してゐる。冷たく、石のやうに、肩などそのまゝ堅まつてゐる。

私は

「お婆さん！」

弱つたなと思つて、祖母の首を抱き、何だか知らないが、

「悪かつた、御免なさい、御免なさい」

と一途に思ひ強く抱きしめた。

一時にこみ上げて來て涙がボロボロ出た。

如何して死體を離れて、二階へ行つたのか、前後をわきまへないが何しろみんなをかきわけて階段をかけ上り、元の寢室へ引返しました。

全く當惑したし、何か、一人になりたい氣があつたと思ふ。――あはてゝ了つて、それに何だか胸一杯の後悔、殘念

の念で無我無中だ。

とり返しがつかないと思つた。如何して死んだのか、何故知らなかつたのか、何が何だかわけがわからない。昨日一日祖母のことを、たしかに殆んど考へなかつたことがくどい刺戟で頭をかきまはしました。何しろ私は急いで床を戸棚へ押し込み、ねまきを着かへて、當惑してそはそは、うろうろとした。

下へ行かう——と思つてゐるとみんながゴソゴソ二階へ上つて來た。

私達は階段の入口にかたまつて立つて、顏を見合せた。——が誰の顏を如何見てゐたのか、思ひ出せない。みんなそこにゐて、たしかにみんな區別のない一つの考へや感じ、空氣の中に、かたまつてたより合つて立つてゐたことだけは明瞭に感じる。

——私は「死」に親しくは三度目、M子は二度目、Yは初めて、出逢つたのです。

然しこんなことはしてゐられないと思つた。

みんなつゞいて下へおりた。

で、不取敢知らせる所へYに電報を打ちに行つて貰ふことにして、誰と誰だとか、電文はかうしやうとか云つてゐる中に、段々と氣分が靜まり、出來事ははつきり秩序を立つて、感じられて來た。

前夜、何でも一時頃と思ふが、(祖母は四時頃亡くなつたとあとで醫者がいつた)病室のふすま越しに非常に太い息で鼻で、フム、フム、フム、と十回ばかり、つゞけて呼吸してゐるのを我々はみんな聞いた。——我々は茶の間に集まつて菓子を食べてゐた。

強い、頼もしい、しつかりした息だと私は思つた。

が、突差に、もし吐く息だけなら大變と思つて胸を躍らせ、注意して聞いたが、引く息も極く平均にしつかりと引いてゐるので、すつかり安心したことを思ひ起す。

Ｙも聞いてゐて、「しつかりした息だ。肺が強いのだね」と私に云つた。私も、強い肺だと思つた。——深呼吸をわざとして見てゐるのだらう。あんなに強い息が出來れば、存外恢復も間もないかも知れないと思つた。（お婆さん何してゐるのだ？）と聞いて見やうかとその時思つたが、どうしてか、聞かなかつた。

私は菓子を食ふ方に氣をとられてゐたかも知れぬ。

それから腹一杯無駄食ひをたんのうして私は一人で二階へ來たし、みんな別々に床についた。

それから今しがたまでみんな「今生きてゐる我々は」ぐつすりねてゐた。

その間に、祖母だけいつか、誰も知らない間に一人で死んで了つたのです。

ひどい、孤獨な寂漠な氣がした。

私はいく度も若しや夜中に死ぬ時、私を呼びはしなかつたか、又前の夜いつものやうに私が二階からミシミシ下りて來ると、それを心待ちしてゐはしなかつたか、——心にかゝりました。私は私が付き添つて、充分に祖母の手をとり、祖母のことを思つて、安んじて死出へ見とりをしたかつたと思つた。このはかない、然し眞情の思ひよ、亡きお婆さんに通じて下さい。どうせ別れるのは覺悟してゐました。然しせめてちやんとしみじみ涙を流してお別れしたかつた。その位ひ何か此の世でも手だてがあつてよさ相に思ふ。餘りに寂しすぎる。

ある夜、私はいろ〳〵に思つて、「死」に壓倒され、何にもせずに夜中二三時間机に突伏したまゝ、つく〴〵世の寂しさと悲哀、それに都ふ走馬燈のやうな心理を、夜明けまで過した。

それまでに調べて興味を持ちかけてゐた古藝術の年代や、流派別等「智識」の材料は一時、消え飛んで了つた。

生きる爲めに是非必要な第一のことを、字のまゝに「いつも」してゐたいとつく〴〵思つた。

デューラーがその父の死をおくつて書いて、
「予は神の御前に祈る。凡ての友よ。諸君が敬虔なる予の父の死を讀む時には、彼の心靈をピーター、ノスター、又はアヱ、マリアの名と倶に記憶されたい……」
と云つてゐます。この「凡ての友よ」の實感が初めてわかる。

故人は死ぬ前にすつかり無垢の人だつた。一寸起してやつても、藥をのましてやつても心からありがたう、ありがたうと云つて世を謝してゐた。……が、もうやめませう。

私は子供の時、もし天皇陛下とお婆さんが死んだら僕はどうしやうといつもその事を思ふと悲しくなつた。どうか死にませんやうに、「お婆さんは僕が死ぬまで死んではいけない」と時々お婆さんにたのんだことがある。

その考へからいつ脱したか——私は二十の時家を出て、二階がりの生活を初めたその當座、ある夜、思つた。ありありと。「お婆さんはまだゐた。」

それから「孝行」を意識に上せた。

「あたしが死んだらお前どうするヱ？」

「イヤだあ」

「イヤだつたつて私は年よりだからお前より先きに死ぬよ」

私は本氣に、

(死んだら蛇の口を立てゝやるよ)

フツと寂しくなつて、

「いやだい。ババババア。意地わるう。——死ねエ、死ねエ」

と祖母に無闇と食つてかゝり、とう〳〵心から情けなく、泣き嘆き、實に悲しかつたおぼえがあります。

その「蛇の口」のことをよく祖母が話した。實際、此度その祖母の葬儀に、私は「蛇の口」の立てものを立てたかつたことが、變に氣になつて笑ひながら然し、弱つた程です。すぐに「蛇の口」と思つた。

お婆さんも笑つてくれるだらう。

お婆さんと二人でだけ世で、笑つたことだ。

さう思ふと寂しい。

汽車のつれ

大正X年七月二十六日。午前十一時十分東京驛發。

新橋驛で、私の腰かけの前に一つ空いてゐた腰かけへ白服の男が腰かけ、之れで自分の同伴者も決まつた。

私はボヤけた簡單な氣持で、成る可くなら此所へは綺麗な感じのいゝ、女の人でも來てくれるといゝと思つた。――がこの考へはすぐ打ち消した。氣がつくと同時に氣が引けて。

私は實は見たのだ。さう云ふ人を。丁度自分の「つれ」の白服の人がはいつて來た時、その人のうしろに。若い細君、丸まげに結つてゐる。

私はその人は何處へ消へたか、見なかつた。見るのは惡いと思つた。

彼――自分の前の白服の男は、四十以上で、色黑く、あばたがある。

彼は腰をおろすと内かくしから金ぶちめがねを出して、かけ、此度は横かくしから肩をはすにして、細長くたゝんだ新聞を取り出し、ひろげて兩手に持つて、――チリチリ紙が云つた――靜かになつた。

突然、綺麗な眼が一つ、何處からか自分をのぞく樣に感じた。イヤ、それを見たのだ。

それは一つおいて向ふの席にさつきからゐる娘で、十二三らしく、中々立派な黒髪を編んでお下げに結び、フサフサとしてゐる。

澄んだ純粋な顔立ちをしてゐる。

その子が、窓わくに手をのせ、その上に首をかしげて頬を添へ、一つの眼で、こつちを見てゐる。キラキラ、——不思議な美感をそこに感じた。

で汽車は品川にとまり、又一息ドヤドヤと人が込んで來た。

一體自分の座席はある三等客車の一番はじで、地圖のかゝつたペタ付く板に、自分は背をよせて、腰をかけてゐる。

そして自分のとなりにはまだ充分に一人分あき、前の白服の人のとなりにも充分一人分はまだあいてゐる。

かなり樂であつた。

ところが品川で見る々々混亂の間にそれ等はふさがれ、私の右手には幅廣のカンナクズ帽をかぶつた見るから丈夫相な魚屋——と思ふ——が腰かけ、

「御免よ。ほら、御免よ。——早く、早く。」

と、彼は又シヤ二無二前の空き間へ二人、子供を追ひ込んだ。

ガタゴト下駄を鳴らして同じ様な子供が、前うしろにたかつた。腰かけへ出鱈目に。

それから子供はモガモガ動いたり廻つたり、キヨロキヨロ、ウロウロして、そこいらをいろ／＼手でさはり、とうとう乘つかり、世にも窮屈に、白服の人と並んだ。白服の人は窓ぎわへくつついた。

で、向き合ふ二つの椅子はギツシとなつた。

私はその間、男の無氣になつて子供を指揮する、その物々しさにあつけに取られた。

「さあ、之れでいゝ」

と男が云つた。

（なある程、之れでいゝ！）

おかしく思つた。

彼は濃くヒゲを顔中に生やして、太つてゐる。

子供は十に十一位ひか、見るからに「兄弟」である。——瓜二つどころか、すぐそこでまさつてわからなくなる位ひ、似てゐる。無形に、悉く。

共に目が大きく、眉根に蚊に食はれたやうな凝たコブコブの肉皺をよせて、そろひのムギワラ海軍帽をかぶり、絣の綺を着てゐる。

小鼻が二人共ひろがつてゐて、上から押した如く、二人とも口をあいてキョトンとしてゐる。（オヤヂの権幕には俺もさすが驚いた）と云つた形ち。可愛く思つた。

——之れは此の上なく、又いゝ今日のつれが出來た。

（この子達は何を真面目に考へてゐるだらう。）

汽車は次いで大森へとまる。

その時見たが、一軒おいて先きの可愛いゝ娘のとなりには、——たしか品川からに相違ない——見るも卑賤な角がりの男がのり、グラグラにゐねむり、女の子はちゞこまつて、弱つた顔をしてゐる。

男の顔を見、男の膝を見る。

男はフラフラ、よろけては立ち直る。——又よろける。

可哀相に。×子ちやん。

——結局私と目がカチ合つた。私が笑つたので、女の子もニツと笑つて、それから下を向いて、クスクス〳〵笑つた。

又上を向いて、又私と目がカチ合つて下を向いて笑つた。――暫く泣いてゐる様に、肩を上げ下げしてすつかり頭を下にして苦し相に笑つた。

どこを見たらいゝのか、困つた、私は。

するとカンナクズ帽のとなりの「お父さん」がガサガサ、何か紙包みを小さな信玄袋から出して、――その信玄袋よ。女持ちの。きつと「お母さん」がお出かけに持たせたにちがひなく思ふ。「お父さんに持つてお貰ひよ！」とでも云つて。――

――愛情が目に見える。

その出したものをいきなりおやぢは前の子の一人の膝に、のせてやつた。

「仲よく食べるんだぞ」

そして自分も指をつつ込み、何か小さなものを三つ四つつまみ出して、ポリポリと食つた。

（おこしかな？）

兄弟は腰かけに行儀よく座つて、あたりを見い見い、その菓子を食つた。

「まだ二時間もかゝるんだぞ」

とおやぢが説明してゐる。

今日は天気がよく、もし海へでも行くのなら二人ともさぞ楽しからう。自分は鎌倉へ行く道だ。（列車にて書）

満洲列車

私は今満洲の汽車で、奉天へ向ひ、走つてゐます。

昨夜十一時に京城から乗つて、今朝安東の手前で起き、それから全く何時間だか分りません。――グラグラ揺れて走つてゐます。

火炎地獄の道中のやうです。

——實に暑い。且倦怠が甚だしい。

身體中至るところに蠅がたかつて、追へども追へども盡きません。からだの何處か腐つたのではないか、全く。——汽車は、片側まともに日を受けるので裂のやうに黒の日よけがおろしてある。そのすきまからクラクラ日がさし込む。重い眼睛に擽むやうです。

私の側の方は反對になるのでガラスはすつかり明けてあります。ところが二重窓故、思ふ様には明かない。——まあ、やつとそこから然し風がはいる。ヌルヌルの古い風。それもポツポツ途中にトンネルがあるので、かなひません。そこを通る間のクサく息苦しくボヤボヤとして生温かな、不快な感じは！——誰にも思へまい。たまらない道中です。多分午後五時頃でせう。火連寨とか云ふ驛を過ぎた。まだ二三時間強、奉天まではかゝる。

車中を賑うだつてゐます。

向ふ側とうしろに外人の女が三人連れでゐますが、一人は氣の毒なことに、髪ふり亂して、ねてゐる。又その反對の一人腰掛の方には日本陸軍將校がゐますが、上着をぬいで、外には一杯にオレンヂの西日のこびり付く黒カーテンをバックに、タコの様です。彼もドロドロのひどい顔をしてゐる

私はヨレヨレのねまきに浴衣で、腕まくりをして、窓わくのおちた段とこつちの鞄とに毛布を渡して、その上でプルプル、之れをかいてゐます。

丁度はすかひの向ふの窓が一つ、カーテンなしで明いてゐる爲め、足から腰一面へサッと斬られたやうに日が當つて來て、あつくていけない。

然しその窓下には外人の女がねてゐるから、手がつけられない。實に暑い。むし暑い。そのくせ汗の出るエネルギーもない。世にもたまらない生活の一瞬です。實にイヤです。

私は金剛山へ行つた時の車中の様を今回想してゐます。
それは始終冷風が通して涼しかつたからと、何か思ひ出す機緣があるからとです。
非常に廣い、次第に遠方へ球面のやうにふくらんだ張ち切れた大地が、窓から右手にもち上つて見えて、野になり、その上を列車が傾いて走るやう。一列の豆の様に。――何一つ眺めを遮らず、ふくらみの外れの地平線のキワには、遠く小さく、木が見えた。梢が。
よく晴れて風があつた。
イヤ、汽車が野の風の様な、壯快な日だつた。
私の向ふに子供づれがゐました。
子供に母親が湯をのませてゐた。
家庭の場面のやうに悠久に落付いて。
「もういゝかい、エ？」
と彼女は下向いて熱心に聞いた。
どんなに可愛からう。
子供は白エプロンをかけ、――それから忘れたが、…………
何しろ汽車中ではない様な氣がした。

今私の背中合せのうしろに、黒く動くものがある。
何だと思つて見ると外人のたばねた頭髪です。うしろ向きのその人の首。
女の外人がゐねむりをしてゐる。
髪の毛から長い足の眞鍮ピンが出てゐる。

ピンの先きに豆位ひ大きな眞紅な石玉が濃く光つてゐる。――頭へ針がさゝつて、その針を傳はつて今そこへ血が吹き出したやう。生々しい。

あゝ、暑い。

早く日がかげるといゝ。（列車にて、八月十七日）

時論

二重政府より二重日本へ

法學博士　吉野作造

所謂軍閥外交に對する非難は今度の議會に於ても上下兩院を通じ、開會の初めからいろいろの人によつて發せられた。軍事當局が多年其活動の範圍を不當に擴張して外交の圏内に干入し、而かも外務當局は之を奈何ともする能はざる狀態に在ることは今や公知の事實である。政府當局の月並の答辯としては、そんな事はありませんと例によつて一言の下に否認し去るけれども、事實は之を爭ふべくもなく、遠く亞米利加の方まで知れ渡つたと見えて、日本に於ける二重政府（ダブル・ガヴァーメント）の說は、去年以來頻りに彼地の新聞に喧傳されて居る。ヴァンダーリップを初め、親日派を以て任ずる來朝の諸名士中にも我々に質すに此事を以てするもの頗る多い。不幸にして政府は、極東に於ける我が軍事的並に外交的行動に關し、赤裸々な詳報を許さない所から多數民衆の眼は、比較的事實の前に掩はれて居る。二重外交の事實については我々國民が却つて案外に知る所が薄い感がある。それでも昨今之を難ずるの聲が內外相應じて漸く高からんとするのは、一面に於て遺憾に堪へないが又一面に於て悅ぶべき現象と認むる。

つひ此間まで我が日本は諸外國から、徹頭徹尾侵略的軍國主義の國と觀られて居つた。政府の名に於て海外に活動するものは素より、商人、勞働者、果ては女、小兒に至るまで、侵略的精神に浸み切つて居るものと觀られて居つた。今でも支那の多數民衆は斯く觀て居り、又稍特別の事情あるが、朝鮮人などは深く信じて之を疑はない。成程朝鮮滿洲乃至西伯利などに於ける一部軍隊の行動には斯く觀られても仕方がないものがあつた。而して日本內地に殆んど之を責むるの聲を聽かざるのみならず、偶々外國より之を批判するものがあると、事實の有無は棚に上げて一向ら（ひたすら）難者に逆襲すると云ふやうな態度を觀ては、國民の全體が實に侵略的行動を後援して居るものと考ふるに至

るのも無理はない。併しながら日本内地に此等の誤つたる行動を非難するの聲を聞かざるは、之れ日本人の良心の鈍きに由るにあらず、不當なる言論自由の抑壓に依つて、全然事實の報道を與へられて居ないからである。此等の點は今更ら改めて論ずるまでもなからう。兎に角我々は永く事實を知らされてゐなかつたが、併し世界は案外に狹い。何時までも人の耳目を掩ふことの出來るものではない。軈て我々はいろ〳〵の方面から斷片的に實際の出來事を傳聞した。初めは事の意外なるに其誤傳なるかを疑つたが、傳ふる所必ずしも虛構の誇張にあらざるを知つて大いに驚いた。此驚きは一轉して悔恨羞恥の情となり、又憤激の情ともなつた。斯くして此一兩年以來、國家の名を借稱する此等一部の野蠻的行動を國民の耳目に曝け出し、一つには國民の反省を求め、又一つには國内の軍閥に對する新十字軍の道徳的戰爭を起さんとするものが出て來た。之れ正に今日の情勢であるから、此上喋々しく之を說くの必要はなからう。而して斯くの如き新形勢は幸にして漸く米國などにも知られるやうになつたものと見え、先年まで日本を徹頭徹尾軍國主義なりと非難し來たのであつたが、此頃は必ずしもさうでない。日本が如何にも侵略的に見えるのは、一部の軍閥が外交に干涉するが爲めである。國民的監督を受くる所謂政府の意の如くならざる所に外交權活用の一中心があるが爲めである、と云ふ風にいて、所謂二重政府は、日本をして世界に誤り觀られしむる原因を造つたのだと云ふやうに觀るに至つた。外人の日本觀が玆まで變つたのも大勢の上から觀れば一つの進步と見ていゝ。

二重政府の事實は我々も之を認むる。而して之が我國の外交をして最も混亂せしめて居る主要原因であることは疑ひない。よしんば實際の弊害がなかつたとしても、通說の容れざる憲法の解釋に基き、閣議決定の政務範圍外に置いた統帥權の範圍を不當に擴張して、之も大權の作用だ、あれも大權の作用だと、内閣の毫末も與り知らざる行動を海外に縱まにすると云ふ制度は、どう考へても許すべからざる且つ怖るべき惡制であると思ふ。而かも此等の行動によつて、國家は常に重大の責任を負擔せねばならぬ。責任負擔の問題になると、始末は常に内閣にさせられる。今日我國の内閣は自分の與り知らざる出來事についてどれ丈け面倒な責任を背負つて居るか分らない。殊に此點に於て我々は痛切に外務大臣の職責に同情を寄せるものである。要するに最近我國の慣行では、閣議の決定を經べき一般政務の外に、軍事統帥權の作用として閣議を經ざる、否之を經べからずとせられたる特別の政務があつた。一部の人は之を特に防務と稱へ、政務と相對する觀念と觀て居る。政務と防務と相併せ

て國權の行動は盡くる。國策といふ文字は、此兩方を統轄する意義を表はす爲めに作られた。國策の遂行は陛下之を統べ給ひ、而して其中政務は之を內閣に諮詢して行ひ、防務は之を大權獨立の行動として親裁し給ふといふと、如何にも尤もらしい憲法論になるやうだけれども、よく考へて見ると、國權發動の實際の中心點を政府の外に、例へば防務會議と云つたやうで純粹な軍人のみの諮問機關と、此二つに置くものであつて、國家の統一を破る之より甚しきはない。此邊の事情について從來國民が餘り之を意に留めなかつた。一つには又此問題の性質極めて微妙にして輕々手を下し難いといふ點もあつたらう。二月十八日貴族院に於て江木翼氏が、大正七年十月より十二月にかけての一部撤兵は政府の政策として極めたのか、軍事統帥の必要に基いてやつたのかを內田外相に問ひ、外相が閣議決定の結果なりと答ふに及び、其事の善惡は別として、斯くては從來の例を破り、政府が統帥權の發動に干涉したものと認むと念を押したのは、此重要問題に觸れた極めて興味ある質問應答であつたが、いゝ加減の所で有耶無耶に終つたのは甚だ遺憾の次第である。

何れにしても日本に於ける國權發動の中心點は今の所二つある。而して其中の軍閥系統のものは、容易に文官系統の政府の力を以て動かすことは出來ない。此處に帝國外交混亂の一つの理由が伏在する。更にも少し考へて觀ると、政府は理論上少くとも議會の監督の下にある。議會も亦理論上民間輿論の制肘を受くるから、政府を通してする國權の發動は少くとも理論上は民間の輿論と調和することが出來る。故に現在の政府が偶々軍閥と握れ合つたとしても、政府が國權發動の唯一の中心なら制度としては先づ安心が出來る。然るに日本には全然民間輿論の手の及ばない第二の中心點がある。之が多くの禍の基だ。東洋に於ける外交は概して多く此處から指揮されて居る。けれども多數の國民夫自身は必しも之を後援するものでもなければ裏書きするものでもない。斯う云ふ所から二重政府の說は日本に對する無條件非難の勢を多少緩和して、幾分日本に同情ある議論を起らしむるやうにもなつたと思ふ。

然るに外人の日本觀は昨今に至つて又變つた。彼等は云ふ、成程日本の政府は軍閥外交の露骨なる侵略的態度に苦しめられて居る。けれども、政府夫自身が夫れ程平和的、協同的かと云ふに必しもさうでない。詮じ詰めると、彼等も矢張り侵略的思想に沾染み切つて居る。只些か軍閥者流より眼界が廣い丈け露骨無遠慮な態度に出でないまでゝある。畢竟日本の所謂二重政

時は、共に侵略的軍國主義の思想をも主流とするものであつて、只其間に輕重の別はあるが、畢竟するに五十歩百歩の差に過ぎない。故に我々は軍閥外交を他日抑ふるの日がありとしても、まだ日本の政府を信頼することが出來ない。只今日我々の最も欣幸に堪えざるは民間青年の間に本當の平和思想なり國際的精神なりが燃え上つて居ることである。青年の勢力は現實の政界に於ては固より計算の數に入るものではない。が、近き將來に於て發現すべき潜勢力に至つては實に偉大なるものがある。玆に我々は光明ある希望を日本の前途に繋け得ると思ふと。斯くて彼等は今や日本は舊い日本と新らしい日本と、換言すれば老人の日本と青年の日本と二つに分けて考ふるの必要ありとする。是に於て彼等は最早や二重政府の言葉は餘り使はない。轉じて頻りに二重日本（デュアルヂャパン）の文字を用ふるやうになつた。

此事は支那の青年の間にも段々分つて來たやうだ。けれども支那でも最も早く此點に着眼し初めたものは外人、殊に英米人であるやうだ。其爲めであらう、昨今英米の本國からは固より支那在留の英米人にして這般の觀察を目的として來朝するもの甚だ多いやうだ。從來日本を非難したものも、日本が徹頭徹尾侵略的であると云ふ事は彼等の最も苦とせる所であらう。圖らず二重日本の説を聽いて彼等は來つて其調査研究に從事し、若し唯の如くんば日本に於て眞に語るに足るの友を見出さんとするのである。斯う云ふ意味の來朝者の最近頗る多い事は讀者の中にも已に氣附かれて居る方があるだらうと思ふ。

只此際返すがへすも遺憾に堪へないのは、政府當局の神經過敏な無用の取締である。彼等が所謂國情偵察の爲めに來たのを誤解して、軍事探偵に對すると同樣の制肘を加へたり、彼等が其抱く特殊の目的の點から、知名の政治家や實業家の月並な訪問を避け、政府當局の觀て以て危險人物や注意人物となすものを頻繁に而も平然として往訪するのを見て、露西亞過激派の所謂世界宣傳の手先でないかと云ふやうな誤解から、往々不當の拘束を加へたり又種々不愉快な不便を與へたりするのは予輩の甚だ遺憾とする所である。此等の人は初めから政府や政商を談ずるに足らずとして居る。又此等の人との對談は從來の來朝者に飽きて居る。彼等は今や別個の新らしいプランに基いて大いなる同情を以て日本の眞相を研究せんとするのだから、斯う云ふ人々にこそ調査研究の自由と便宜とを與ふべきではないか。日本が世界に誤解されて居るから其眞相を紹介する爲に、大いに對外的プロパカンダを遣らうなど〻云つて居る際に、態々日本を見に來、又之を世界に紹介せんが爲めに來たものに、故らに不便と不自由とを與ふるとは何事ぞ。只幸にして彼等は初めから政

府を當てにして居ない。政府側から不當の拘束を受ける丈け却つて日本に於ける新舊兩思想の對立が鮮かに讀まれて面白いと云つて居る。斯くして之から我日本は二重政府としてよりも二重日本として世界に紹介せらる丶ことであらう。

徹頭徹尾軍國主義の國と云ふ評判から二重政府の尊稱を受け、更に二重日本の美名を受くるに至つたことを考へて見ると、一つには斯う云ふ觀方の變遷に應ずる丈けの發展を我々國民がなしつ丶あるを悦ぶと共に、又一つには段々日本の眞相が世界に有りの儘に知れて來るのを滿足するものである。必ずしも世界の評判に拘泥するのではないが、兎に角斯く觀らる丶の當然である以上、我々は更に之から努力して二重日本を單純な平和的協同的日本に築き直さなければならない。強い日本の迫害が益々猛烈になるのは殘念ながら覺悟せねばならぬが、我が日本を世界の舞臺の上に、平和的な永遠の繁榮を得せしむる爲めには、我々青年は萬難を排して驀進するの決心を要する。

軍備制限論の一批判

先月の議會に於ける尾崎行雄氏の軍備縮小の提案が、極めて無雜作に否決されたことは、いろ〳〵の意味に於て我々の大いに遺憾とする所である。結局否決の運命を見るにしても、あ丶いふ、昨今の世界各國の均しく重大視して居る問題の討議に際しては、もう少し眞面目な含蓄の多い議論が鬪はされても然るべきであつた。況んや尾崎氏の提案は、或意味に於て、英米の議會に於ける同種の提案と相應ずるものであり、其討論の模樣は、可なり大きな反響を諸外國に與ふるものなるに於てをや。又況んや尾崎氏の提案其者は、具體的一方策として相當の根據あるものたるに於てをや。

尾崎氏は、海軍については、英米と協定して、差當り五年間擴張計畫をお互に中止しようと云ふのである。氏は海軍の必要は之を認めて居るけれども、互に擴張を競爭し合ふのでは、到底財力並びに工業能力に秀でた英米に敵はない。彼我の比較的勢力は、年と共に日本の低下を見るのみであるから、今の中に縮小を協定するのが、國防と云ふ立場から觀ても必要だと云ふのである。海軍縮小を之れ丈けの論據に止めて置くに滿足するや否やは、人によつて異ならうが、兎に角尾崎氏の擧げた事實丈けは大體に於て疑ひを容れない。若し夫れ陸軍に至つては、近隣に假想敵の消滅した今日、大々的削減を加ふるの必要極めて明白だから、自發的に縮小すべきであるが、少くとも同〻協

會議の決定に從ふと云ふ點まで讓歩してもいゝと云ふのであつて、多數の軍備制限論者からは、餘りは徹底過ぎるの非難を受くる程度のものである。之れ位のものなら、日本は徒らに侵略主義を喜ぶものにあらずと中外に宣言した體面から云つても、義理にも賛成して然るべきと思ふのに、極めて無雜作に之を否決し去つたのでは、日本は斯う云ふ問題には全然理解のないものと認められても致方はあるまい。我々は議會及び一般政界に於ける、軍備問題に關する思想の不思議な程頑迷なるに驚かざるを得ないものである。而して之は一般國民の意思の代表的發現かと云ふに、どうもさうではなささうだ。何故なれば、昨今の青年の間には、寧ろ尾崎氏の所說に共鳴するやうな傾向が著しいやうに思はるゝからである。現に先月中旬、東京帝國大學で、特に招聘して一場の講演を乞うた尾崎氏の特別の需めにより、氏の說の贊否を學生の一般投票に附して見た。僅か二時間許りの短時間を限つた事とて、投票者の數は案外に多くなかつたが、投票した程のものは、皆熱心な眞面目な人のみであつた。其結果を聞くと、反對は僅か二十五六票で、他の二百六七十名は尾崎氏の說に賛成であつたのである。尾崎氏は他の場所に於ても一般投票に贊否の意見を聞かるゝさうであるから、早晩其結果の發表に接することが出來るだらう。之を直ちに國民の聲と云ふ譯には行かないとしても、法律上國民の代表者たる議會の議員よりも、此方が寧ろより多く事實上國民を代表するに近い事丈けは疑ひを容れない。

果して然らば、國民の多數が、今日の尨大なる軍備を不必要として居るのに、何故に獨り政治家階級が、多數の輿論と逆行するの態度に執着するのか。予輩はこゝに其邊の原因を少し考へて見たいと思ふ。

今日の議會政治家の多數は、殆んど獨立の政治的見識無く、一に幹部の專制に盲從して居る。而して幹部も亦遠大の經綸がなく、目前の政權獲得に腐心して居ることは疑ふべくもない。そこで軍備制限問題の如きも、斯くすることが國家の爲めになるか否かよりも、斯う云ふ問題をどう取扱へば、元老軍閥なぞの諒解を得ることが出來るかを、彼等は第一に顧慮する。何となれば、其諒解を得ずしては容易に政權に有り附くことが出來ないから。そこで我々は、現代議會政治家の軍備觀乃至國防觀を研究するには、遡つて之に關する元老軍閥の思想を研究する必要を認むる。元老軍閥が或る特殊の意見を固執して居つては、民間の輿論が如何に沸騰しても、容易に之を實現することが出來ないのである。

然らば元老軍閥は軍備問題についてどういふ考を有つて居るか。茲に元老軍閥と併稱する所以は、少くとも今日の實情に於て兩者は全然其觀る所を一にして居ると認めて差支ないからである。伊藤公の在世當時は、兩者は必ずしも一致してゐなかつた。今日以後も此點はどうなるか分らない。が、少くとも最近までの形勢から云へば、元老の手足は軍閥であつて、軍閥の頭目は元老であつた。而して此元老軍閥は軍備乃至國防については特殊の偏見を有つて居る。乃ち軍備國防の計畫を絶對神聖視して、張れば益々張るを可とし、之を減削する意味では一指も染むべからずとする考之れである。予輩はこゝに斯う云ふ思想を如何にして彼等が抱き、又斯う云ふ思想が如何に最近日本の政界に發展したかを考へて見よう。

此事を考へるに際し、第一に念頭に置かねばならぬ事は、明治維新の當事者たる今日の元老は其教養を封建時代に受けたと云ふ事である。封建時代の武士道は彼等に教ゆるに門を出づれば七人の敵有りと云ふ事を以てした、他人を見たら泥棒と思へ、と云ふ程極端な考に支配されない迄も、少くとも斯う云つたやうな人生觀を對外的交渉には好んで適用するやうに教養されて來た。加ふるに幕末の數十年は段々外國船の所謂我邊彊を覗ふものが頻繁にあつて、外國の侵略と云ふ聲に不當に怯えて居つた時代である。如何に天下の人心が之が爲めに動搖して居つたかは、恰度今日の政府が國民を無智ならしむることによつて安定を得んと期するが如く、德川政府が如何に熱心に外國事情の研究者を迫害したかに見ても分る。心あるものは斯る政府の態度を却つて有害だと認め、禁を犯しても外國の事情を研究して國民の警醒に盡さずしては居れなかつた。之に對する幕府の取締は恰度今日の政府の遣り口と異曲同巧である。隅田川の水がテームス河の水と相連るよと説いた林子平は閉門の人となり、「夢物語」を書いた高野長英は雄志を抱いて白刃の露と消えた。古くは渡邊華山より吉田松陰の邊に至るまで、どれ丈け天下の志士が時の政府の姦策の犧牲となつたか分らない。併し時の政府の頑迷を論ずるのは予輩の目的ではない。只此等の事實によつて如何に當時の人が外國を侵略的に觀たかを想像すべしと云ふのである。斯る外國觀と又一種偏つた人生觀乃至國際觀に養はれた青年が嘗に新日本を造つたのである。彼等が新らしい日本を世界の眞中に漕ぎ出して國運の開拓に努力しようと云ふ時、自ら國防を以て立國の第一義と考ふるやうになるのは當然と云はねばならぬ、

加之明治維新當時の歐洲の形勢と云ふ事も亦念頭に置くの必要がある。幕府の倒壞、明治の開國は日本國民の政治思想の發

遠の當然の結果ではあるが、其機運を促した主たる動因の外交問題にあるは疑ひを容れない。一言にして云へば德川幕府は外交問題の處理に窮して倒れた。從つて明治新政府に取つても外交は最重大問題の一つであつた。さういふ所から明治政府建設の衝に當つた有爲の靑年は自ら率先して外國の研究に志し、留學の目的を以て彼地に赴いたものもあつた。卽ち今日の元老は其頃智識を海外に求めた當年の秀才である。而して彼等の觀た當時の歐洲の形勢はどうであつたか。卽ち普魯西の勃興を中心として、歐洲の天地が殺伐なる軍國的競爭に極度の爛熟を見つゝあつた時勢ではないか。そこで彼等は今後の國際關係に處するには是非共强大なる國防を有たねばならないと云ふ感想を深うしたのである。前にも述べた通り、彼等は西洋に行く前から斯う云ふ考を有ち易い素質を備へて居つた。歐洲の見聞が彼等の先入思想を一層高めたのである。現に明治二年に歸朝した山縣公の如きは、普佛戰爭以前の緊張せる國際關係を觀て、徵兵制度の實行と云ふ案を抱いて歸朝早々西鄕隆盛を說くに全力を擧げたと云はれて居る。日本軍制の創設者といはるゝ山縣公の思想の基く所も、考へて見れば此邊に胚胎するのであらう。

當時の政治家の軍國的思想は、當に變態狀態にある當年の歐洲の觀察竝びに外國に關する先入的僻見に基くばかりでなく、內政上の事情からも强められたのである。何故なれば當時新政府は創立早々の事とて防備未だ整はず、佐幕派の逆襲を大いに懸念したのみならず、新政府部內に於ける不平黨の僣勢力にも大いに辟易するの必要があつた。要するに新政府の統一的威力は未だ甚だ微弱である。現に內亂も屢々起つた。西南戰爭を以て一段落は告げたものゝ、民心の動搖は猶止まない。斯う云ふ難局に處するには當時の政治家として專ら軍備の整頓に賴まんとするに至るは勢ひ止むを得ない。軍備さへ整頓すれば當面の難局は切り拔けらるゝ。其外にも重要なる政務は澤山ある。けれども之は後廻しにしていゝ。軍備整頓の急には他の仕事は之を犧牲にしても妨げはない。斯ういふ所から彼等の頭には軍備とか國防とか云ふ事は非常に大事な事になつた。又當年の事情としては事實之が非常に大事なのでもあつた。之に反對するやうな不心得なものはなかつた。軍備國防の整頓に反對するやうなものが不忠の臣と云ふ風に觀て居つたのも亦止むを得ない。

先輩の政治家が、斯う云ふ思想を以て新日本を經營したと云ふ事は最も著しく教育にあらはれて居る。明治十年頃から日淸戰爭の頃までにかけて、如何に露骨な排外的精神と軍國的精神とが我教育界を風靡したか分らない。此等の點を委しく論ずる

ことは甚だ興味あることではあるが今は略する。只玆には斯う云ふ雰圍氣で養成された當年の學生が今日實に政界の樞機に參し、又軍隊で云ふなら實際的活動の指揮權を握つて居ると云ふ事を一言して置かう。

先輩の苦心によつて日本が軍備を整頓したと云ふ事は夫れ自身甚だ幸福なことであつた。爲めに日本は日淸戰爭でも勝つたし、北淸事件でも、日露戰爭でも大いに日本の國威を輝かした。只日淸戰爭後に於ては三國干涉等の苦き經驗を嘗めて益々軍國主義的精神を鼓舞作興したのであるが、後日露戰爭等に於て大いなる成功を收めると云ふ段になると、之れ亦成功を鼻にかけて、大いに軍閥の跋扈を見るやうになつた。或る一つの途を取つて成功したものは、其事の外に成功の途無しと云ふ風に考へ勝ちのものである。斯くして今日の日本は軍閥者流橫行の形勢を馴致したのである。

以上は元老一派の軍國的思想の歷史的解剖であるが、更に進んで予輩は此思想がどう云ふ風に今日の政界に實際の勢力を作るやうになつたかを考へて見よう。

國防の事は非常に重大な國務であるから漫りに民間の容喙を許さないと云ふのが當初からの彼等の心情であつた。勢に押されて止むを得ず立憲政治は布いたものゝ、重大なる問題の決定は、少數の手に留保すると云ふのが、保守的思想家の確信である。從つて憲法創設の當初でも、彼等の重要なる政務殊に軍務を特別專門家の獨占權內に置かんとした事は怪むに足りない。初めは伊藤公の所謂超然內閣の獨裁で、政府の意思決定は全く民間容喙の上に立つて居つたから、大した問題は起らなかつた。やがて時勢の進步は政黨の發達を促し、超然內閣では押し切れなくなつた。斯くして表はれたものは桂、西園寺を代表者とする官僚政黨の交代時代であるが、政黨は元老官僚の庇護の下に始めて政權に有り付き得たので、國防問題は事實上元老軍閥の領分として手を着けなかつたから、先づ無難に濟んだけれども、日露戰爭後だん／＼政黨の勢力も增へ、彼等は必ずしも餘り元老の後援に依らずして政府を造り得る形勢になりさうなので、斯くては國防問題も亦政黨者流の自由な料理の內に落ち來る恐れがあると云ふので、玆に軍事の事は內閣會議の權限外に置くといふ新例を開くに至つたのである。之れを開いたのは明治四十二年であるが、あの時伊藤公の如きは有繫に斯かる新例を頗る非なりとし、當時の陸相寺內伯の懇求を排し、最後まで贊成の意を表さなかつたさうである。

斯う考へて見ると、今の元老が國防問題を何う考へて居るか

の大槻が分る。議院政治家などが之に氣兼ねして、思ひ切つた議論を吐き得ぬ以上、否、元老一派の感化を受け、自然間違つた國防觀を抱いて居るのも容易に看取し得られる。貴族院邊には國防費を一文でも減ずる事は如何にも賣國的行爲なるかの如く考へて居るものもあるさうだ。之れ我國に於て總歳出の半額を軍備に割くと云ふ尨大の豫算が苦もなく採用さるゝ所以である。

政治家現の國防偏重論は右述べたやうな特別な事情を背景として發生したものだから、全然斯ういふ背景を缺く今日の青年が、彼等と全然別個の國防觀を持つのは怪しむに足らない。即ち現代の青年が自由平和の思想に傾き、侵略的軍國主義に對し著るしき反對を抱いて居るのも怪しむに足らない。尤も同じやうな平和主義者、自由主義者は明治の初年にもあつた。併し之は西洋思想に感染れた根柢の無いものであつて、あゝいふ時勢には真面目に考へる者程多少軍國的專制的になるのが當然であつた。故に吾々は明治三十年頃德富蘇峯氏の所謂急激な變說を見て、有體に現實の時勢に忠實であつたものと認めざるを得ない。德富氏の外にも當年の自由民權論者にして今日官僚軍閥の走狗となつて居るもの甚だ多いが、予輩は彼等の變說には總て限りなき同情を有つものである。只德富氏初め此種の人々に遺憾の點は、最初思ひ切つて變つた正直な態度を今日にも執らないといふ事である。今度の歐洲戰爭を機として時勢は更に一轉した。元老を初め今日の多數政治家は此事に些しも氣附かない。依然として國防が大事だ、軍備の豫算は一厘一錢も減ずべきでないといふ妄想に囚へられて居る。

以上は今日の政治家が國防軍備といふ問題について特別の謬見を抱いて居ると云ふ點の分析的說明であるが、更らに昨今の形勢に關する重大たる誤解から、軍備制限の時期未だ來らずとする二種の意見ある事を附け加へて置かう。一つは西北の脅威未だ去らず、尨大なる陸軍を維持する必要は減じないといふ說であり、も一つは亞米利加の態度未だ心を安んずるに足らずとし、海軍軍備の整頓一日も之れを忽せにすべからずといふ說である。

日本に於ける分不相應の尨大なる陸軍軍備は、專ら露西亞の東侵に對するものであつた。內地の警備に殆んど軍隊の必要なきは云ふ迄もなく、支那は又如何に陸軍を擴張したからとて今の所更に恐るべき勢力となつて居ない。幾分軍隊の力を必要とするのは朝鮮の警備であるが、これとても大した數は要らないだらう。是等を外にしては只露西亞のみが考への中に來るのであるが、これとても今の所兵力的侵略として恐るべき理由は殆

んど無いと確信する。過激主義を以てする世界的征服なる言葉の何を意味するやは、前號に於ても一通り之を說いた。其他陸軍當局などは盛に猶太人の世界的顚覆の陰謀を云々するけれども、其荒唐無稽の作り話であるといふ事は、彼等が作つて廣く民間に流布したと傳へられるかのマッソン秘密結社の陰謀なる印刷物を見ても分る。フリー・メーソンリーとサイオニズムの運動と、並びに露西亞人が爲にする所とあつて作つた猶太人に關する虛構の說と、本來まるで關係ないものを盲目的に搗き混ぜたのが即ち前記の文書であり、而して之れを誠しやかに振り廻して、そして增兵論の根據としやうと云ふのだから堪らない。知つて斯かる惡戯を爲すとすれば其狡猾誠に憎むべく、知らずして之れを信じたとすれば其無知無識の甚だしきに呆れざるを得ない。

終りに海軍の問題については、本論文の冒頭に尾崎氏の說を評する傍ら、我輩の意見を述べた。假令んば亞米利加が海軍の擴張をどんどん斷行するとしても、之れと競爭するに憂き身を窶すの甚だ恐るべきは云ふ迄もなく、實の所米國は制限の協定が出來るまでは擴張計畫を進める。一旦協定が出來たら即刻制限の約束に從ふ事を斷言して居る。此事は我國とても同じ事だ。協定の出來る迄は制限に着手する必要はない。たゞ併し乍ら協定の出來次第直ちに擴張中止を斷行するに躊躇しないといふ誠意を見せる丈けは必要だ。此點に於て米國の信頼する足るは、いろいろの點から我々の斷定するに憚らさる所である。

昇格問題と臣節問題の側面觀

學校昇格に關する中橋文相の二枚舌問題と尼港責任に關する田中陸相の臣節問題とは、隨分激しく又頻繁に上下兩院の論壇を賑はした。併し大體に於て予輩は、之が討論の調子に甚だしき不滿を感ずるものである。尤も考へて見れば不滿なのは之ればかりではない、一體に議會に於ける討論は餘りに末節に拘泥して、國利民福の實質を外るゝの嫌ひはないか。今茲に右の二問題を例に取つて議會討論の調子の如何なる程度のものかを明かにして見よう。

昇格問題を中心とする紛亂は、中橋文相の約束と云ふ事から起る。文相は某々高等專門學校の教授又は卒業生有志の或る者に向つて、大正十年度を期して昇格を實行すべきを約束したと

云ふ。文部當局は夫れは約束ではない、見込の意思表示に過ぎないとか言つて居るけれども、斯かる字句の末に拘泥するは問題の解決に何の係はりがあるか。又學校側も單に約束だから實行せよの、約束に背くのはどうと云ふ譯かのと、云ふ風にのみ議論するのなら、之れ亦甚だ取るに足らぬ。人の意見は時々變り得る。變つてわるい事もあれば又いゝ事もある。約束すべからざる事をウツカリ約束することもあれば、其他言葉の上のしくじりはどんな人にも免れない。而して言葉尻を捉へて其責任を糺したり、一度約束した事だから是非履行せよと云ふやうな事は、私的關係に於て之を主張するは妨げない。けれども公けの問題について同じやうな事を責め立つるのは如何なものであらうか。我々は文相の言葉の上のしくじりの爲めに公利公益を犠牲にしてはいけない。國民の一人として我々の第一に見んとすべきは、人格其物が本來文教の發展の爲めに得策なりや否やと云ふ事に歸着せねばならない。得策なら其點を理由として斷行を迫るがいゝ。得策でないなら、假令文相が約束した事があつてもこつちから之を辭退すべきが當然ではないか。其利害得失の判斷を實質的に定めて文部大臣が堂々と出て來るなら、前の約束がどうだらうが、心あるものは一人として彼の態度を非難するものはない筈だ。

文相に人格を約束して居るのに、教育調査會議の反對の決議が彼をして約束の履行を困難ならしめたと云ふ事が問題の焦點になつて居る。此會議の決議に最後の決定權があるものなら、之を楯に取つて前言の取消を求むるに何の不都合がなく、否らずんば文相は只之を參考に聽くに止めて、何處までも自分の所信を貫徹するを妨げない。何れにしても彼は、前の約束や、會議の決議にさう左右される必要はない。國家の爲めに最良とする所に考を決めて、先づ以て自分の執るべき態度を決める必要がある。人は云ふ、文相は前の約束と調査會の決議との間に板挾みとなつて苦んで居ると。併し苟も一國の文相として敢て其任を引受けた以上は、こんな下らない問題に板挾みになる必要は何處にあるか。人には多少の過失はある。過失の結果板挾みになつたと云ふ事夫れ自身は決して文相を責むるに當らない。若し彼に責むべき點ありとすれば、堂々と獨特の見識を表明して進んで板挾みの窮境から自分自らを救ひ出すの見識と勇氣とを缺く點でなければならない。然るに世上では此點から彼を責めて居ない。之では丸で、責め所が違つて居るではないか。

中橋氏の經歷から云ふと、彼が文相の任を瀆したのは、もと甚だ滑稽だ。從つて彼に文政上の大問題に關する獨立の見識も

りやを疑ふ餘地はあるが、併し彼は幾多の佼﨟を部下に有つて居る。必要があれば相當の意見を出し得ない筈はない。それを出せば直ぐ問題の解決が出來るのに、出さずに獨りで苦しんで居るのは甚だ不思議のやうであるが、實は此處に我國政界の拔くべからざる弊害が流れて居るのである。それは何かと云ふに、從來我國では良心の命ずる所に從つて斷乎たる所置を取ると云ふ事は許されてゐない。斯う云ふ種類の人間は何を造り出すか分らない、險吞な人物として實際の政權から遠ざけられる。そこで政治家として立ち得る程のものは、すべての人に幾分かづゝ氣に入るやうな妥協的態度を取り得るものに限らるゝことになる。二人の人から物を買ふに、適當の相場は此邊だらうと云ふ確信に基いて値段を附けるやうな眞面目な人間は用ひられない。一人は十圓といひ、一人は廿圓と云ふ場合に、十五圓と云ふ相場に双方を納得せしむる事の出來るやうな人が即ち當世に於て調法がらるゝ政治家だ。日本の法律などはすべて此調子で拵へらるゝ。例へば昨今問題になつて居る勞働法案にした所が内務省案と農商務省案とは著しく違ふ。兩者共に其立場を執つて讓らない。そこで甲の言ひ分を若干立て、乙の言ひ分を若干通し、双方の面目を立てたものが結局の成案となる。理論徹底せさるは勿論、實行に際しても飛んでもない馬鹿げた結果を生ずることあるは當然である。斯くして彼等は不知不識の間に一人一省の面目の爲めに平然として國家の利益を犧牲にして居る。斯くしていろ〳〵小矢釜しい事を云ふ連中の鼻息を覗ふ事を以て政治家の能事畢れりとして居る。なまなか獨立の見識などゝ稱して突飛な意見を出すことは、假令それが國家の爲になつても徒らに局面を紛糾するものとして排斥される。從つてさう云ふ獨特の見識は出さない事がいゝと云ふ事になつて居る。出しても駄目だから事實出す氣にもなるまい。之は甚だ樂な方法なやうだけれども、實は少し遣り損ふと事が甚だ面倒になる。外格問題の紛糾も實は主として此點から起つて居る。文相の困惑否な内閣の苦境は要するに河童の川流れの類に外ならない。

斯うなつた以上は中橋文相にしても、又原首相にしても、局面展開の策は只一つ、昇格の得失に關する根本方策を決定し、速かに之を内外に聲明して群疑を一掃する事の外にない。此對策を堂々と發表しさへすれば、二枚舌の問題も調査會の決議の問題も煙の如く消えて了ふだらう。然るに餘りに悧巧な原首相は今尚此點に悟らず、貴族院の主立つたものを内々招待して、何とかしますから暫時御猶豫をと云ふやうな態度に出づるのは、いはゞ借金を以て借金を拂ふやうなもので、啻に問題の根

本的解釋に一指をも染めざるのみならず、却つて將來に一難を胎すに外ならない。

同じやうな事は田中陸相の臣節問題についてもいへる。尼港に於ける多數同胞の虐殺は、上に對して甚だ恐懼に堪へない。之に對しては不肖敢て臣節を全うするの途を知つて居る。と云つたと云ふ言葉尻を捉へて、なぜ辭職しないかと迫つて居るが即ち此臣節問題だ。田中陸相が何といはうが、言つた言葉はどうでもいゝ。辭職すると云つたから辭職しろと云ふのは丸で小兒の喧嘩のやうなものだ。我々の此問題について切に知らんとする所は、尼港事件の眞相と、之に關する陸相の責任の性質的範圍とである。之を明かにしなくては濫りに其進退を議すべきではないではないか。我々の新聞紙等を通して知る限りに於て、尼港の虐殺は殆んど不可抗力に等しい、彼處にあれ丈の人數を置いたのが間違かも知れない。併し置いたからとて必ず殺されるとも限らない。若し此點について當局の責任を問ふべくんば、例へば尼港にあれ丈けの人數を多留りさせながら、之と通信上の連絡を取る爲めの完全なる設備を整へず、事起つてから急遽北海道某地點の無線電信機を取代へて初めから完全なものを備へ[illegible]た、此點に[illegible]つたと云ふ形を後から造つたと云ふやうな噂でも問ひ糺すべきではなかつたか。併し單に之れ位の事なら何も大臣の進退に影響する程の問題ではない。陸相の臣節云々の言明は此問題に關する責任を道德的に痛感したと云ふ位に觀て然るべきものかと思ふ。

陸相の進退問題が假りに之に關聯して起ることありとすれば、それは陸相に用兵上重大の失態があつて、斯う云ふ重大な失態をするやうたものなら、他日亦同じやうな誤りを繰り返さないとも限らないと云つたやうな場合か、若くは西伯利出兵と云ふ一般政策が甚だ當を得なかつたと確定的に非難せらるゝ場合かでなければならない。此度の過失が餘りに重大で、斯う云ふものに安心して國政が托されないと云ふのなら臣節云々の言葉を發したか否かに拘はらず、速かに其職を退いて貰はないと困る。若し夫れ一般政策を不當とするの結果、進退問題が起るのなら、それは連帶責任として內閣全體の更迭を要求せねばならぬ事になる。此點まで事が運ばなくては國利民福の安全なる發達は期せられないからである。昨今問題となつて居るやうな理由で爭はるゝのでは、陸相が罷めようが罷めまいが、少しも全體の公益には關係がない。字句の末節に拘泥して無用の議論に時間を徒費するは、其事自身に於て大いなる損害である事の外、公利公益の討論を極めて淺薄な形式論に墮せしむる點に於て我々の切に

排斥せんとする所である。

小題小言四則

●古今判官氣質

星島・片山兩法學士が帝大少壯教授の後援によつて一月來出して居る「中央法律新報」は、法律の社會化といふ見地から觀て、寔に有益な事業であると思ふ。單に友人の事業である點から許りで無く、予輩は敢て之を世上に推薦するに躊躇しない。最近第二號の寄贈を受けた。其中に飯塚法學士の「名判官の輪姿」といふ一文があるが、其中に青砥藤綱は法廷に莅んで理否の判斷をする時には、何時も目を閉ぢて對手の面を見ない。何故と問へば、面を見ると悧げなる者、惘れな者、可愛らしい者、種々の相が先入主となつて、訴へを聽かない中に心が亂れる、と云つたといふ話が出て居る。又、板倉周防守は對手の顏の美醜に迷はされて偏頗な裁判になるを恐れ、白洲の緣先へ明り障子を立てゝ障子越しに、中で茶臼挽きながら訴を聽いたといふ事や、大岡越前守も法廷で大きな鐺を以て髯を拔きながら訴を聽いたと云ふ傳說が書かれてある。事の眞僞は筆者と共に必ずしも吾々の問はざる所であるが、昔の裁判官が出來る丈け公平無私の判斷をせんが爲めに、如何に先入の偏見に囚へられさらん事に昂めたかの苦心が覗はれる。今の裁判官にもかういふ用意があつて欲しい。最近思想問題などの處分になると、判事は間違つた先入の偏見によつて、輕々に罪を斷じ、檢事に至つては强ひて嫌疑者を本當の罪人にせんが爲めに事實を枉げるのではないかと思はるゝ程に辛辣を極むる。虛心平氣公平無私といふ事は、昔から裁判官の第一の心得となつて居つたのに、近頃の判官の間に著るしく此原則の顧られなくなつたのは、吾々の甚だ憂ふる所である。判裁官の間には固より此非難に對して相當の辯解はあらうけれども天下の人は悉く此點に於て吾々と感を同じうするやうだ。「中央法律新報」には他に見るべき記事は多いのだけれども、飯塚君の趣味ある記事が烏滸僕の興味を惹いたから、此處に此のみを引合に出したのである。

●政友會内に於ける地方制度改正問題の紛擾

地方制度に於て選擧權の擴張と階級の撤廢とは政友會多年の主張であつた。普通選擧には反對したけれども、地方制度には思ひ切つた改革をするといふのが彼等の夙に天下に聲明せし公約であつた。彼等は云ふ、物には順序がある。普通選擧にしようと云ふなら、先づ以つて地方制度から之を初めるがいゝと。斯くして政友會では納稅資格を全然撤廢するのみならず、階級選擧制をも廢めようとしたのであるが、意外にも幹部の間に異議を唱ふる者があつて行惱みの姿となつた。之を聞い

て少壯派は大いに憤慨し、今や立つて老人派の頑迷固陋を攻擊して止まざらんとして居る。此問題について吾々の注意すべき點は三つある。一つはいざとなると會の內部に階級撤廢反對論も納稅資格存續論も案外に強いといふ事である。彼等は今まで之に贊成して居つたのは唯大勢に押されての事であつた。心から改正の必要を信じて居るのではない。だから勢が必ずしも迫つて居ないと見ると直ぐ逆轉する事を躊躇しない。第二には地方制度改革の必要は實は未だ餘り國民に感じられて居たいといふ事である。日本國民は國會議員の選擧に於ける普通選擧には可なり熱中して居るが、地方制度は餘り興味を惹いて居ないのである。西洋では地方の自治大に發達して遂に自ら議會政治に及ぶのであるが、日本には中央の議會先づ開けて、漸次地方に及ぶのであるから、實は政友會の云ふが如く、先づ地方政治に於て訓練した後に中央政治に普通選擧を行はうなどゝいふ事は、我國には適用しないのである。我國では寧ろ中央政治に普通選擧を訓練して而る後地方政治に及ぼした方が本當の順序だらうと思ふ。第三に、斯ういふ問題で政友會が所屬議員の意嚮を確める爲めとして、各地方團體の所屬議員の意嚮を集めるのは、事を徒らに紛糾せしむるに止まる事である。各地方團體の所屬議員は得手勝手な事を云ふ。之を纏めて凡ての人の納得するやうな案を作る事は殆ど不可能である。其間から一の成案を得んとなら、各種の意見を自由に戰はしめなければならない。意見の討論は出來る丈け之を避け、いろ〳〵勝手な事を云ふ奴を內

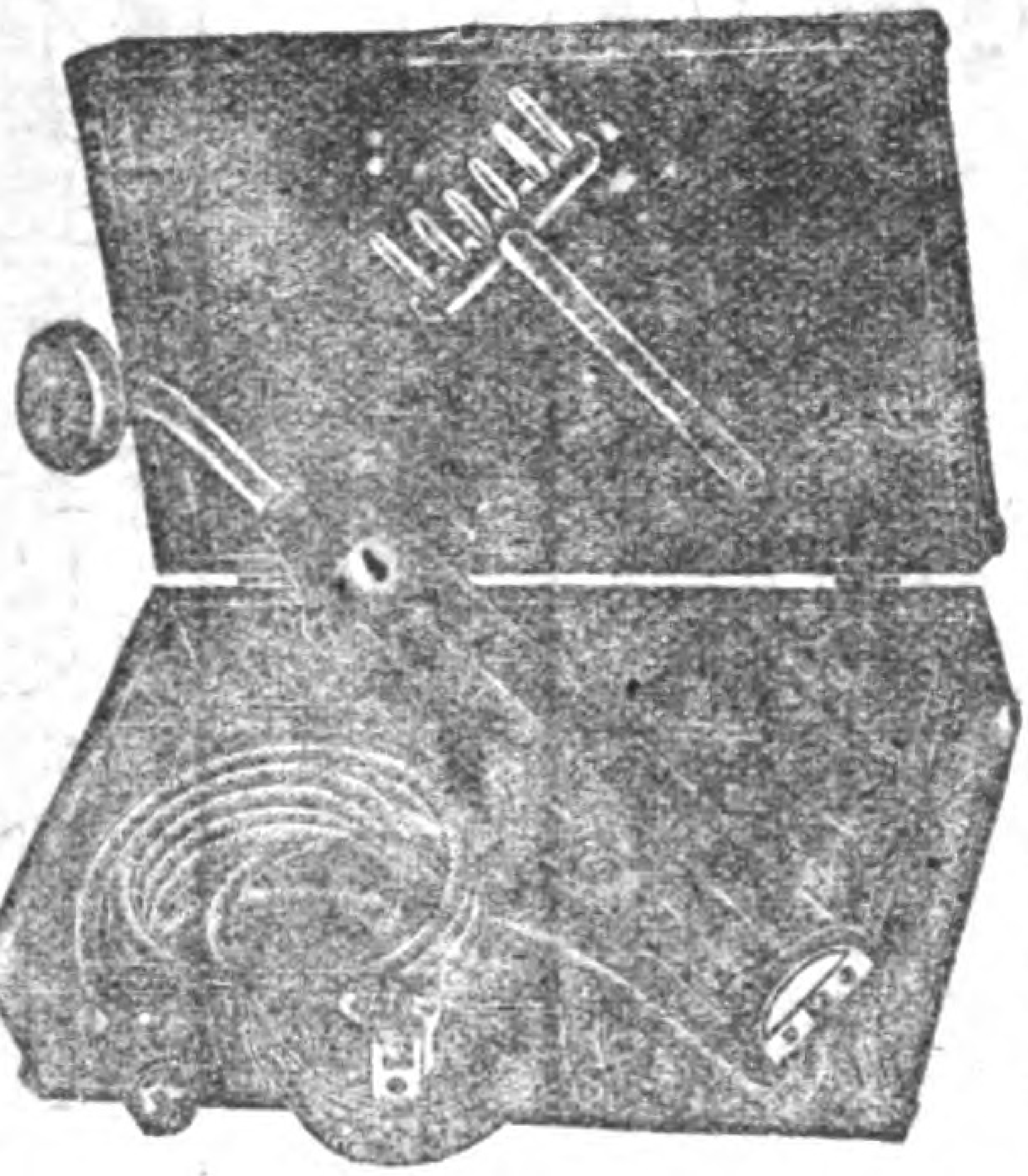
癖の運動で少しづゝ讓歩させ、以つて成案を作らうといふのだから、何うせ碌なものが出來ないに極つて居る。天下の大政黨としてはも少し氣の利いた捌き方が無いものだらうか。

⦿官憲の露骨な差別待遇　日本政府の名を冠する某地の某官憲で、公の仕事に日支鮮三民種を使つて居る。給料は日給日本人が五圓、支那人が四圓、朝鮮人が二圓五十錢である。爲に仕事は同じだ。而かし虐使する事は一番朝鮮人に烈しい。之は極めて數多い內のほんの小さい一例に過ぎない。官憲が自ら無意識の間に、平氣で斯ういふ事をするやうでは、異民族統治の成功は覺束ない。敢て當局の反省を促して置く。

⦿滑稽なる海外宣傳　外務省では情報局を設けて盛んに海外宣傳に努めて居る。外國の大公使館では澤山の機密費を新聞社に與へて日本の用を辯さしめて居る。斯ういふ關係だから大抵の記事は、日本政府の欲するがまゝに向ふの新聞に出して與れるのであるが、不幸にして本國政府より發信し來る材料には、時としてとんでもない愚劣なものが多いさうだ。丁度議會の質問に對して當局の誤魔化し答辯のやうな白々しい虛飾の云ひ分けを長々と書き連ねて、それを外國の新聞に出せと云ふのだから、第一直接取扱ふ任に當る大公使館員が堪らない。送つても新聞社は餘り馬鹿々々しいので、こんなものは出さない。海外宣傳といふ方針はいい。けれども變な頭の持主を其局に當らして置いては、巨額の金は排資無益の濫費に終つて了ふ。もつと確かりした人間を集めて貰ひたいものだ。

有名なる

「若返り器」



驚くべき最新發明の電波治療器來る

歐米にて目下流行を極むる美容健康器……

トーマス・エヂソン氏發明のヴアイオレーヤー機……

永久使用――正價金參拾五圓

世界的の科學者**ニコラ、テスラ**氏の發見せる電波は今日無線電信、電話として驚くべき作用を顯して居る、此の電波を人體の細胞に應用すると、衰へたる細胞に活力を與へ、病的細胞を破壞して健康を增進する事を醫學者によりて發表されたるを以て米國發明王**トーマス、エヂソン**氏は之れを小型にして輕便なる電波應用器を完成して發表した、歐米の婦人は之れを顏面に應用して美顏術を行ひ、醫師及家庭にては唯一の治療器として、多大つ歡迎を博し、目下流行を極めて居る、之れを顏面に常用すると血色を良くし皮膚を細かにし、色を白くし、凡ての皮膚病を根治する之れを身體に使用すると、凡ての慢性難治にして醫藥の効なき疾患に應用して偉効を奏して居る。今回米國本社と特約し大々的に我國に紹介する事になつた顏面の改造と無比の健康とを欲するものは東京市本鄉一ノ九**ヴアイオレーヤー**商會へ即刻說明書を申込まれよ無代進呈する。





不幸な母の話

谷崎潤一郎

不幸な母の話――或は「不幸な姑の話」と云つても差支へはない。――

世の中には、姑が嫁をいぢめる例は澤山ある。人の妻として、又は母親として立派な婦人であつたものが、姑の地位に置かれると、今迄思ひもかけなかつた意地の惡い根性が出て、まるで別人のやうにガラリと性質が變ることは、間々ある話である。わたしの母も、わたしの兄が嫁を貰つてから、たしかに性質が一變した。兄の結婚を一轉機として、彼女の半生は全く前と違つてしまつた。此の點に就いては、彼女も所謂「姑根性」があつたことは爭はれない。さうして、母は今から四五年前に亡くなつたのであるが、彼女が死んで間もなく、ちやうど一年ほど過ぎて兄も死んだ、――此の二つの死には、今から思ふと恐るべき因緣の絲が繋がつて居たので、或る意味では母を殺した者は兄であり、兄を殺した者は母だとも云へる、殊に、兄の死に方は尋常の死に方ではなかつたのであるから。

斯う書いて來ると、わたしの母は鬼のやうな姑で、わたしの兄は又彼女を虐待し抜いた不孝者のやうに聞えるであらう、が、讀者諸君よ、どうかわたしの母の爲めに、また兄の爲めに、決してさう思つては下さるな、たとへ一分間でも諸君にさう思はせることは、死んだ二人に對していよいよ氣の毒な譯があるのだ。私の母は鬼のやうな人ではなかつた、夫に對しては貞淑な妻であり、子に對しては慈愛深き親であつた。私の兄も不孝者ではなかつた、妻に對しては熱烈な愛を捧げた夫であり、母に對しては溫良によく仕へた息子であつた。それがあゝ云ふ苦しいハメになつたのは、運だ、――と、云ふより外にあるまい。

しかし私は、孰方かと云へば母の方に同情する。あゝ云ふ氣質の人が、あんな風に變つて行つた徑路を辿つて見ると、彼女としては充分尤もな理由がある。けれども又、私が若し兄だつたとして、彼が遭遇したと同じ場合に遭遇したら、私は果して兄よりより善き行ひを爲し得ただらうか?「爲し得る」と私は答へたい、願はくばさう云ひ切れる勇氣が欲しい、――さう云はなければ母は私をまでも恨むであらう、だが、私にはやはり其れを云ひ切る勇氣のないのを口惜しく思ふ。さう思ふ時、私は私の胸の中で、(あゝ母よ、どうか私を赦して下さい、私も恐らく兄と同じやうな人間です!)さう云つて叫ぶ良心の聲を感ずる。斯くてその聲を感ずれば感ずるほど、生前の母の悲しい俤がありありと眼の前に浮かんで來るのである。

生前の母の俤――それは今も云ふやうに非常に悲しいものだつた、母と云ふ人間全體が、寧ろ母の存在その物が、悲しい音樂のやうに悲しかつた。母自身も、その悲しさがどんなに深いものだつたかは恐らく意識しなかつたであらう、たとへ意識する折があつても彼女は努めて其れを避けたことであらう、――さうでもしなかつたら、彼女の弱い心と體とはきつと其の悲しみの重みに堪へ切れなかつたに違ひないから。

私は前に、母は兄の結婚を一轉期として人間がガラリと變つたと云つた。で、母と云ふものが私たちの胸にそんなにも悲しい印象を留めるやうになつたのは、實に其の一轉期以後のことなのである。母はそれ迄は決してそんなジメジメした女ではなかつた。彼女の後半生の淋しさがあまり強く私の記憶に殘つて居る爲めに、前の事は動ともすると忘れられるけれど、昔の母は思ひ出しても賑やかな陽氣な人だつた。父が死んだのは彼女が四十五六の年、私が十七の時だつたが、それから四五年の間のことを考へて見ると、あの時分が私たちの「家庭の幸福」の絶頂だつた。母は、「時岡の隱居」と云へば「あんな氣樂な身の上はない」と皆が羨んだくらゐだつたのを、私はよく覺えて居る。「時岡の伯母さん」「氣さくな御隱居樣」「いつも達者で氣が若くて面白い御隱居」――さう云つて、親類の女子供も彼女になついたし、出入りの商人たちもお世辭を云つた。奉公人には氣むづかしやで口やかましかつたので、あまり評判はよくなかつたやうであるが、世間では誰からもちやほやされた。又、そんな風に大勢からちやほやされ大事にされるのが、彼女には何より嬉しかつたのであらう。――さう云ふ折の彼女の得意な笑顏は、全く幸福な人の其れだつた。「元氣で、おしやべりで、派手好きで、見え坊で、その癖極く氣の弱い涙脆い婦人」――まあ斯う云つたら一言で盡せるだらう。彼女の涙もろさと來たら哀れなよりも寧ろ滑稽であつた。ほんの些細の事にも嬉しいと云つては直ぐに泣き、悲しいと云つては直ぐに泣いた。だから其の涙は、その時分には彼女の幸福の保證のやうに美しく花やかなものに過ぎなかつた。私の父――彼女の夫が死んだ時に、母は亡骸に取り着いて子供のやうに聲を擧げておいおいと泣いたが、「そんなに力を落さないで」と云つて親類の誰彼が心配したほどのこともなく、好い鹽梅に其の悲しみは彼女の胸に大した創痍を留めなかつた。父は一年も前から胃癌を煩つて到底助からないことは分つて居たし、遺族が不自由なく暮らして行ける貯へはあつたのだから、彼女も豫め覺悟はついて居たので、たゞ其の場合「夫の死」と云ふ事實が發作的に悲しみを與へただけで濟んだのである。それ

に、わたしはまだやつと中學を出る頃だつたが、もう一二年で學士になれる兄が居た。わたしも兄も、それから十五になつて居た妹も、みんなで母を慰めて、芝居へ連れ出すとか物見遊山に引き廻すとか、出來るだけ彼女の氣を紛らせるやうにした。親類の人たちも機會がある度に誘つてくれた。母は芝居が大好きで、浄瑠璃物や音曲の事には可なりの通だつたのである。で、彼女は間もなく「夫の死」と云ふ悲しい事實を忘れることが出來た。その後それを思ひ出して涙を浮べるのは、年に一度、祥月命日にお寺へ行つて坊さんのお經を聽いて居る間だけだつた。そんな折の涙は、たゞ母をやさしく奥床しい人にしたに過ぎない。子供たちは孝行をつくす、親類からは大事にされる、「仕合はせな御隱居」の彼女は何も泣くことがなくなると、芝居へ行つて悲しい狂言を見て泣いた。

「お母様はほんたうに泣き虫ね」

さう云つて妹がからかつたりすると、

「だつてお前、可哀さうぢやないか。」

と、彼女は紅くなつた眼の縁にハンケチをあてゝ、涙の中から笑ふのであつた。

父が死んでから、母は却つて太つたくらゐだつた。以前もさうだつたが、一と入血色がよくなつて、色白の肉づきのいゝ體にはゆつたりした脂肪分が出來て、年よりはずつと若く見えた。兎に角わたしたち五人の兄弟の親であり、且未亡人であるらしい窶れたところや老い込んだところは見えなかつた。夫には不幸にして先立たれたが、自分は此の後まだいくらでも長生きをしたい、早く子供たちの身を固めさせて、孫の顔を見て、老後の樂しみを味はひたい、――彼女は始終さう思つて居たばかりでなく、誰に向つても其れをしやべつた。しやべるだけでも餘程うれしさうな様子だつた。「年を取る」こと、「死ぬ」と云ふこと、――それくらゐ彼女の嫌がつたものはなかつた。五十近くなつても彼女はま

だ髮を染めて居た。「死」を恐れる程度がどんなにひどかつたかは、親類や家内中での笑ひ草になつた一つ話が殘つて居るのでも明かである。或る時彼女は鰻をたべた後でうつかり梅干をたべてしまつた、と、二三時間立つてから腹がしくしく痛み出したので、急に顏色を變へて眞靑になつて騷ぎ出した。早速醫者に電話をかけるやら、床を取らせて大病人のやうに寢込むやら、其の時ちやうど房州へ行つて居た兄を電報で呼び寄せるやら、——さうして私たち兄弟は殘らず彼女の枕もとに侍つて居なければならなかつた。驅けつけた醫者は、譯を聞いて笑ひを噛み殺しながら氣休めの處方を書いてくれた。

「先生、ほんたうに大丈夫でございませうか？　大丈夫死ぬやうなことはございますまいか？」

「大丈夫です、大丈夫です」

と、醫者は彼女の訴へるやうな眼つきを呆れ顏で見返しながら、幾度も念を押して歸つたが、歸つたあとで母は「あの醫者は冷淡だ」と云つてひどく恨んだ。しかし、醫者は恨まれただけで濟んだけれど、濟まなかつたのは私であつた。私は其の時あまり事件が馬鹿々々し過ぎるので、醫者と入れ違ひに病室を逃げ出して、近所の友達の家へ一時間ほど話しに行つて來た。それが母には非常に氣に入らなかつたのである。母は私が病室へ戾つて來るのを見るや否や、眼に一杯涙をためてぢつと私の姿を眺めた。

「弘や、お前は此處に居てくれなくつてもよござんす。………みんなが斯うして心配して側に居てくれるのに、そんなに遊びたけりや何處へでも出ておいでなさい。お前はきつと私の子ではないんだらうから。」

靜かに、顫へを帶びた、鼻にかゝつた潤み聲で云ふと同時に、涙がぽろぽろと頰を傳はつた。その癖母はもう腹痛も氣分もすつかり恢復して居たのである。

わたしは其の權幕に對して大いに面喰つた、が、考れば考へるほどおかしくなるばかりであつた。

「何ですお母様、冗談ぢやありませんよ。たかが鰻と梅干の喰べ合はせぐらゐで死ぬ奴があるもんですか。こんな事で僕に叱言を云ふなんて、又みんなに笑はれますぜ。」

「いゝえ、さう云つたものぢやありません。物事と云ふものは得て斯う云ふことから間違ひになるんです。昔から鰻と梅干とは喰べ合はせになると云ふ事を、よく人が云ふ。お前は馬鹿にするけれど、若しその爲めに私が死んだらばどうします。」

「だつてお母様は死ななかつたぢやありませんか。」

「そりや死ななかつた。今度は好い鹽梅に助かつたけれど、若し死んだらどうします。お前のやうに飛び歩いて居たら、親の死に目に會へないことになるぢやないか。」

「ですが、それほどの御病氣なら僕だつて内にぢつとして居ますけれど、何でもない事は僕には初めから分つて居たんだし、お醫者も大丈夫だと云つてましたし、現にお母様もさうやつて居らつしやるんだから、………」

「いゝえ、それがいけません、それがいけないと云ふのです。お前が何でもないと思つたつて、人間と云ふものはいつ死ぬか分りやしない。よしんば死なないにしたところが、兎に角私が死ぬか生きるかと云ふ心配をして居る最中に、表へ出て行くと云ふ法がありますか。お前のその心があんまり薄情だと云ふんです。そんなことだと、若しも私がほんとに病氣になつた時が思ひやられる、………」

さう云つて、母は昂奮して又涙をこぼした。

「いや、邪どさんした。薄情だと云ふ風に取られちや困りますが、初めから安心して居たのでつい表へ飛び出したんで

す。惡ければ詫りますよ、ねえお母様——」

わたしはだゞッ兄をあやす氣で云ひながら、眼をしばだゝいて居る彼女の顔を覗き込んで、

「でもまあ、何でもなくて結構でした。お腹の方はもうすつかり好いんですか。」

と、御機嫌を取る爲めにわざと眞面目くさつて云つた。

「あゝ有りがと、もう大抵いゝやうだけれど、」

母はさすがに少し極まりが惡さうだつたが、その時まで堪へて居た妹や女中たちは其處でとうとう笑ひ出してしまつた。

「まあほんたうに好かつたけれど、でもお母様みたいに神經質な方はないわ。直ぐに死ぬ死ぬッて大騒ぎなんだもの。」

「だつてお前、死んでからぢや叱言を云ひたくつてもう駄目ぢやないか。」

母がさう云つたので、みんながどつと吹き出すと、彼女も仕方なしに笑ひながら、

「ほんたうに笑ひごとぢやありませんよ。お前たちが笑ふのは笑ふ方が間違つて居るんです。此れが笑つて濟ませるやうになつたからいゝやうなものゝ、ほんたうにお前、先はまあどうしようかと思つて、………」

と、いつの間にか言譯のやうな口調になつて、嬉し泣きだか嬉し笑ひだか分らない妙な顔つきでニコニコし出した。

無論私に對する恨みも晴れたやうだつた。

が、明くる日の朝。電報で驚ろかされた兄が夜の汽船で房州から歸つて來た時、母は極まりが惡くもあつたが、然し内心は兄の親切が沁み沁み氣に入つたらしかつた。ちやうど大學の二年から三年へ移る時で、試驗勉強に行つて居た兄は、そんな事で呼び返されて大切な時間を潰した譯だつたのである。母は口先では其れを頻りに氣の毒がつて見せたけ

れど實は氣の毒なよりも嬉しい方がほんたうだつた。彼女にはさう云ふ我が儘な無邪氣さがあつた。で、その朝わたしに向つて何と云ふかと思ふと、

「御覽、お前よりも兄さんの方が孝行だよ。お前は内に居ても外へ出て行つてしまふのに、兄さんは忙しい中をわざわざ夜徹し歸つて來てくれましたよ。」

──母はまだ幾分か昨夜の事が恨めしかつたのである。

此の一つ話はほんの一例に過ぎないので、斯う云ふことは度び度びあつた。わたしたちは屢々孝行の試驗をされて居るやうな氣がした。

ちよいとした腹下し、風引きにすら大病らしく寢込んで、みんなに心配さうな顏をして貰つて、思ふさま子に甘へなければ承知しなかつた──他人が死んだ噂を聞いてさへ身顫ひした母、──彼女の「死」を怖れることは其のやうに極端だつたのである。凡べて、少しでも「死」の脅迫の感ぜられることに對しては、その脅迫だけで彼女は氣を失ふほどビツクリ仰天して狼狽した。自分が狼狽するだけでは足りなくて人をも狼狽させなければ收まらなかつた。彼女はいかに流行病を恐れたか、いかに小さな地震を恐れ、遠くの方で微かに響く雷を恐れたか、おまじなひほどの僅かな音がゴロゴロと、鳴り出すと、もう身動きが出來なくなつて、直ぐに線香を立てさせ蚊帳を吊らせ蚊帳の中に少くとも子供たちの一人に護られてぢつと竦んで居るのだつた。若し、雷が次第にエラクなつてピカツと一つ光りでもしたら、──彼女は其の刹那に殆んど死んで居た。(あゝ、あれほどにして「死」を怖れた母が、誰よりも死にたくなかつた母が、遂々死んだことを思ふと私は悲しい。)わたしは其の時分、度び度び母の護衛を云ひつかつて蚊帳の中に居たことがあるが、見るも氣の毒な樣子に對してさう思はずには居られなかつた、──若しも私が神樣だつたらば、此の母だけは死なないや

うにしてやるであらう。こんなにも「死」を怖れて居る人に、いつか一度は「死」を與へると云ふことは餘り殘酷だ。外の人を十人殺すよりも殘酷だ。——で、そんな場合にふと、母も一度は死ぬんだと考へると、わたしは溜らなく哀れだつた。母が哀れなばかりでなく、「世の中ッてものは何てイヤなもんだらう」と云ふやうな氣がした。

母が死を恐れる一面には、子に甘へたいと云ふ了見が餘程手傳つて居たことも明かだつた。「子供たちはこんなにも自分を大事にしてくれ、ちやほやしてくれる。自分は何不足のない仕合はせな身の上だ」——それを確かめ信じる事が、彼女には此の上もない喜びであり慰藉であつた。彼女は自分の事でお世辭を云はれるよりも、自分の子供たちの孝行を褒められる時の方が、餘計滿足な顏つきをした。

「ほんたうに結構な御身分で居らつしやいます。第一お坊つちやん方やお孃樣方があの通りお優しくつて居らつしやいますし、——」

だから、お世辭を使ふことのうまい人は、母の氣持ちをちやんと呑み込んでしまつて、いつもさう云つたのである。

以上で、私たちの母がどんな人だつたかは大體分るだらうと思ふ。威張り屋のくせに意氣地なしで、吝氣のくせに神經質で、我が儘な人の好い婦人、——さう云ふ婦人はよくあるタイプである、さう云ふのに限つて機嫌買ひで虛榮心が強いものである。殊に私の母は下町の商人の家に生れた生粹の江戸ツ兒だつたし、苦勞を知らずに育つて來た箱入娘だつたから、五人の子の母になり五十の歲になつてまで駄々ッ子氣分が拔けなかつた。が、さう云ふ婦人を親に持つて見ると、そんないろいろの缺點が母親としては殊に忘れ難い懷しさを覺えさせるもので、わたしたち兄弟は昔から父よりも母の方になついたものだつた。母は私たちに甘へ私たちは母に甘へ、兩方で甘やかし合ふところに深い情愛があつた。私たちはよく母に怒られたり泣かれたり「不孝者」呼ばはりをされたものだが、怒る方でも怒られる方でも腹の底では

信頼し合ひ安心し合つて居た。「何でお前たちが不孝なものか」――母はきつとさう思つて居たであらう。さればこそあんなに氣樂に快活に暮らして居たのである。

その母が、兄の結婚以來まるで別人の如くガラリと變つた。

なぜ彼女は變つたか？　彼女は兄の結婚が氣に入らなかつたのであるか？――しかし、そんな事は斷じてあるべき筈がなかつた。なぜかと云ふに、母は最初から此の結婚に、異議がなかつたばかりか、嫂の性質にひどく惚れ込んで、緣組を急いだくらゐだつた。いよいよ輿入れの日が近づいた前後には、眼を細くしてホクホクして居たのを、わたしはよく覺えて居る。

有體に云へば、母は兄が大學を卒業するかしない時分から、もうそろそろ彼の爲めにいゝ嫁の口を搜して居た。それが彼女自身の爲めでもあつたことは云ふ迄もないが、何にしても一日も早く兄の身を固めさせ、自分は又、「孝行な子供」だけでは滿足出來ないで「孝行な嫁」や「孫」を見たかつたのであらう。かう云ふ母を持つて、彼女のお目がねにかなつた嫁を持たされることは、時としては子息の爲めに迷惑なこともないとは云はれない。好い鹽梅に母が子息の氣持ちを理解してくれて、双方に滿足な人を撰んでくれゝばうまく纏まる場合もある。だが、さう都合よく行くかどうか、其の事に就いては兄も勿論さうであらうが私もうすうす氣を揉んで居たのであつた。前にも云つたやうに私たちは皆母を愛して居たし、母も其の實頗るのお人好しだから、其處を呑み込んでしまへばさう扱ひにくい人間ではないやうなものゝ、それでも母が本人の氣に入らない者を頭から押し付けるやうな場合があつたら、兄も困りはしないだらうか。それに、外のことは兎に角、兄は結婚や戀愛の問題を可なり重要視して居る青年らしく私には見えた。此の問題ばかりはいくら親孝行の兄でも、母親の撰んだものを拒絶しないとは限らなかつた。ところが母はそんな場合をとんと豫想しては居なかつ

たのである。「うちの伜は感心な者だ。大學では秀才だし、品行は方正だし、親には從順だし、――」と、成る程さうには違ひなかつたが、さう思つて彼女は兄を信じ切つて居た。若し兄があんな謹直な男でなく、放蕩でもやり始めたら氣の弱い母は嘸泣かされたことだらうに、其の點に於いて彼女は全く運が好かつたと云はなければならない。けれども母は其の好運を當然のやうに考へ、あんな優しい子息が自分の云ひつけを背く筈はないと極めて居た。だから萬一兄の反對に出遇ひでもしたら、彼女はどんなにびつくりし、どんなに腹を立て、且どんなに落膽し、狼狽するか。さうなつて來た時、道理から云つても當然兄に加勢をしなければならない私は、その爲めに一層母をびつくりさせ、落膽させるに極まつて居る。母は私が裏切りをしたとも思ふであらう、――たとへそれが一時の感情であつても、私には辛いことだつた。で、私としては、兄が其處を如才なく立ち廻つてくれて、彼の理想通りの戀人を迎へると共に、母の手前をも上手に繕つてくれる事を望まざるを得なかつた。

幸ひにも當事者たる兄は私より先に其の事を心配し出し、其處を圓滿に通り拔けるやうに氣を揉んで居たのである。殊にその時分、兄には既に戀人があつたので、猶更心配せずには居られなかつた。一體兄はいつ頃から如何なる機會に嫂と戀に落ちたのか、ハツキリとは分らないけれども、私と妹とが其れを知つたのは結婚の半歳ほど前であつた。それを知つた時、私たちは兄に同情もしたが何だか羨ましくもあつた。なぜなら、嫂――當時の藤子は音樂學校出身の才媛として、若いピアニストとして名を知られて居たばかりでなく、私たちは二三度も或る音樂會で、派手な縮模様を着た彼女の姿を見たことがあつたからである。兄も恐らくさう云ふ機會に彼女を知つたのであらう。その時兄は二十七で藤子は二十二だつた。彼女の歳が母の注文より更けて居ること、それから、母は日本の音曲が好きで且派手好きではあるけれども、さう云ふハイカラな人を好くかどうか、此れが第一に問題であつた。それでも兄は此の結婚を絶對に望んで

居るらしかつたので、私たちは淚みながらも兄の成功を祈り、又藤になつて力を藉したことも事實だつた。無論兄から許しが出ないうちは母に知らせはしなかつた。

然るに、最初わたしたちが心配したほどの事もなく、案外容易に縁談は纏まつてしまつたのである。——それは全く兄のやり方がよかつたからであつた。よかつた、——或はよくなかつたかも知れないが、兎に角上手にはやつた。さうして、あの場合兄としてはあゝするより外仕方がなかつたであらう。兄は、どうしても目的を遂げたい一心で或る手段を取り、それがうまく圖に中つたのである。

兄は斯う考へた、——「己は決して自分の戀愛のために母の利益を度外視しては居ない。藤子ならば氣だても優しいし、あの母の性分を呑み込んで意を迎へることは譯なしである。それに、淋しいことが嫌ひで、いつでも家に客のあるのを喜ぶ母は、藤子のやうな交際の廣い附き合ひ上手な女を好むに違ひない。母と藤子とは舊式と新式の差こそあれ、孰方も女流交際家のタイプである。あの姑にはあの嫁でなければ勤まらないくらゐなものである。たしかに此の結婚は己を幸福にすると同時に母をも幸福にすると信じる。が、己が母に其の譯を話しても、恐らく聞いてはくれないだらう。母は自分が擇んだ嫁でなければ安心しないのだから。己に戀人があるとか、結婚の約束をしたとか、そんな事を云ひ出せばてんから撥ね付けられるに極まつて居る。そこで、此の結婚を纏めるには、己は受身の地位に立つて、母自身に藤子を擇ばせるに限る。藤子が母の眼に觸れさへすれば、母は必ず彼女を擇ぶ。己は其の點について心配はいらない。——」

兄は其のくらゐなずるさは持つて居る男だつた。——此れは私が後に氣が付いたのだが、事に依ると此の考へは兄一人の智慧ではなく、彼と二人で諜し合つた結果だつたかも知れない。が、さうだとしても、兄も彼も共に非難されるべ

きではないのである。ずるいにもせよ、それは完全に善良な動機から出たのであるから。

で、事件は左の如く運んだ。

兄は正直に自分の考へと事情とを妹のS子に打ち明けて彼女の助力を乞うた。つまり、藤子を彼女の友達にしてくれて、自由に内へ出入りが出來る機會を與へてくれるやうにである。さうすれば藤子が母の眼に留まることは請け合ひだつた、——その時分、母は何かそんな考へもあつて、妹の許へ友達が遊びに來て居ると、ぶらりと部屋へ話しにやつて來ては、それとなく娘たちを彼れか此れかと物色して居た。S子が快く兄の頼みを引き受けたことは云ふまでもない。藤子は直ぐに彼女と親しくなつた、さうして直ぐに母に認められた。いや、「認められた」ぐらゐの段ではなかつたのである。

此の邊のいきさつは、くどくど述べないでも大凡そ想像のつく話だが、しかし私は、讀者が其の間の消息を正當に理解して下さることを望む。——藤子は才氣煥發の女だつた。美人ではなかつたけれども表情や態度や口のきゝ方が非常にチヤアミングだつた。で、その固有のチヤアムを以て容易に母を魅し去つたのである。それにはいくらかの技巧も用ゐられたであらう。或は又、母のかんどころをよく心得て居る兄の指し金にも依つたであらう。だが「魅し去つた」と云ひ「技巧を用ゐた」と云つても、決して惡い意味ではなかつた。そのチヤアムは彼女の生れつきのチヤアムであつて特にたくんだのではなく、技巧にしても、交際の廣い女なら知らず識らずさうなるところの「如才なさ」に過ぎなかつた。彼女くらゐの悧發さで二十二にもなつて居れば、それは仕方のないことだつた。要するに、彼女は兄を愛するが故に、どうかして兄の母の氣に入らうと努めた、——或は取り入つたとまでは云へよう、が、彼女は母を「欺いた」とは云へないのである。それは私は今でもさう思ふ。私と妹とは、當時幾分か彼女の才氣に壓され氣味だつた、少し眩しい

やうな氣もした。

「あんな立派な方を姉さんに持つたら、あたしなんかほんとに耻かしいわ。」

妹などは、彼女が既に結婚しないうちから母の寵愛を一人で浚つて行きさうな形勢だつたので、さう云つて、しよげても居た。成る程藤子は才を恃み過ぎる嫌ひはあつたかも知れないが、でも腹はいゝ人だつた。その點は私にも妹にも最初から理解があつたので、彼女の立ち場を諒として居た。

母は兄にも私たちにも知らせないで、藤子の身元や家柄や平生の素行や交友の範圍や學校での評判や、そんなことを細かに調べたやうだつた。結果は何處にも惡い條件は見出だされなかつた。母は西洋音樂の知識は皆無だつたので、女流音樂家に對する何等の偏見をも用意して居なかつたのが、大變都合が好かつたのである。其の上ピアニストとしての藤子は上流の家庭に澤山知己を持つて居たし、母の調べ上げた「交友の範圍」には名門の子女が多かつた。此れは何よりも母の虚榮心に投じた。藤子を嫁に持てば華族の奥樣やお孃樣ともお附き合ひが出來る、――母はきつとさう考へたであらう。

かうして、兄の計略は中り過ぎるほど圖に中つた。母は自分で藤子を擇び、仲人を以て先方へ縁談を申し込み、極く有り來たりのコンヴェンショナルな形式で、兄の爲めに嫁を迎へてやつたものである。

「いゝえねえあなた――わたくしも今日までになりますにはねえ、そりやもうどんなにかあなた――全くでございますとも！　あなた方にも又いろいろと御心配をかけまして、――まあ御蔭樣で、それでもまあ、仕合はせと滯りなく濟みましてこんな有り難いことはございません。――わたくしも今夜からはほんたうにほつと重荷を卸したやうでございます。――」

婚禮の披露の晩に、母は親戚や知人の誹彼に取り巻かれて、「おめでたう存じます」とか、「もう此れで御安心で」とか、「今度はお孫さんのお顔を御覧になるばかりで」とか、「御隠居様も嘸かし」とか、四方八方から浴びせられて相恰を崩しながら、こんな言葉を頻りに繰り返して居たのだつた。たしかにあの晩まではさうであつた。

兄夫婦は其の夜新橋から新婚旅行に立つた。箱根から熱海へ一週間ほどの計劃で出かけたのである。その留守中も、母の喜びはまだ續いて居た。「散々世話を焼いたのだから、此れからはちつと夫婦の者に恩返しをして貰はなくちや」とか、「旅行から歸つて來たら何處其處へ連れて行つて貰ひませう」とか、「早く孫に手を曳かれてお花見にでも行くやうな身の上になりたい」とか、いろいろたわいのない空想を描いて其れを來る人來る人にしやべつて聞かせて居た。旅先からは毎日夫婦別々に繪ハガキを寄越した。わたしたちにもたまには寄越したが、殆んど母へのみ宛てゝあつた。母は其れ等の繪ハガキを見て居るうちに、とうとう夫婦の歸りを待ちきれなくなつたものか、二人がちやうど箱根から熱海へ廻つた時分に、——それでもいくらかは遠慮して、一日二日置いてから豫め電報を打つて出かけて行つた。「新婚旅行の邪魔をするなんて止せばいゝのに」と思つたが、母は聴かなかつた。習慣とかしきたりとか云ふものを迷信的に重んじる母が、そんな非常識な事をしたのは其の時だけである。まあ魔がさしたと云ふのかも知れない。今になつて考へると、私たちもあの時實はイヤな氣がした。是非何とかして止めるところだつた。しかし此の一事でも、母がどんなに夢中になつて喜んで居たかは分るであらう。

母のお供をして行つた女中は、無事に熱海へ送り届けて明くる日東京へ歸つて來た。「御隠居様は輕便鐵道でひどくお醉ひになりましたが、でも彼方へお着きになつてからは御機嫌でございました。旦那様も奥様も大さうお喜びでございます。」と云ふ話であつた。

「大さうお喜びでもなからうぜ、きつと。」

さう云つて私が笑つた。

「ほんたうだわ、いやなお母様ねえ、人の邪魔に行つたもんだから、罰が中つて輕便に醉つたんだわ。好い氣味！」

と云つて、妹はペロリと舌を出した。

ところが妹の所謂「罰」は、單にそれだけでは濟まなかつた。わたしたちは熱海に於ける母と兄夫婦との間に、どんな事があつたかは知らない。が、それから二三日立つて、今日か明日は歸つて來さうなものだと心待ちにして居た或る晩の十時頃に、左の如き不思議な電報を受け取つたのである。

「三ニントモミヅニヌレタキガヘヂサンコフヅヘスグコイ」

此れは兄から來たことは明かだつた。けれども「三人とも水に濡れた」と云ふのが奇妙だし、着換への衣類は用意して行つた筈だのに、さうして既に國府津まで來て居るのに、「着換へ持參直ぐ來い」は分らなかつた。

何かよくない事があつたのぢやないか？——ふいとさう云ふ氣がした。で、私が行くことになつて、三人の着換へを鞄に入れて終列車で國府津へ立つた。

「コフツニコイ」とばかりで國府津の何處へ行つたらいゝのだらう？——さう思ひながら停車場へ着くと、兄が男に提灯を持たせて、宿屋のどてらを着て、（それは二月のことだつた）獨りぽつ然とプラットフォームに立つて居た。

「どうしたんです、お母様や姉様は何處に居らつしやるんです。」

「なに直き其處の宿屋だ。」

並んで歩きながら、兄は俯向いて重い聲で云つた。矢張り何かあつたんだなと、私は思つた。

「水に溺れたと云ふ電報でしたね。」

「うん、大した事もなかつたからお前たちに心配させまいと思つて、あゝ書いたんだがね。實は船が引くり覆つて、エライ目に會つたんだよ。三人とも無事に助かつたからいゝやうなもの〻――」

「船が引くり覆つた？一體何處で船へお乗りになつたんです。」

宿屋へ行く途々その話だつた。

「熱海から船で來たんだよ。輕便で歸らうと思つたら、お母様が輕便はもう懲り懲りだつて云ふのさ。それぢや俥か自働車より外にありませんて云ふと、それも嫌だと云ふのだ。あんな危い路で崖から海へでも落とされたら大變だつてね。」

「またお母様のいつもの傳が始まつたんですね。」

わたしは笑ひながらさう云つたが、兄は笑ひさうにして笑へなかつた。何となく晴れ晴れとしない顔つきだつた。

「俥もいや、自働車もいやで、それぢや仕方がないから船と云ふことになつたんだ。船で醉ふのは知れて居たけれど、醉つても何でも命に別條のない方がいゝと云ふ譯だつたもんだから、――」

その時の兄の口調は一種妙であつた。母に不愉快を感じて居ると云ふ風にも取れた。事件の起つたのは何時頃だか知れないが、それから受けた心の動揺と體の疲勞とがまだ殘つても居るやうであつた。さうして、寒さの爲めにか昂奮の爲めにか、聲がふるへて、嗚咽を堪へて居るやうな曇りを帶びて居た。兄は泣いて居るのぢやないか知らんと、私は思つたくらゐである。

「それで何ですか、船の轉覆したのは何處だつたんです。お母様も誰も怪我はなかつたんですか？」

母は其の時どうしたゞらうか？——それが私には何よりも氣がゝりだつた。

「なあに、顚覆と云ふと大袈裟だが、艀が引くり覆つたんですよ。國府津へ着いてから直ぐ其處の濱ツ端のところで。だから一時はびつくりしたけれど、誰も我はしやしないさ。ほんの水に漬かつただけなんだ。」

兄は成るべく事を小さく話して居た、が、だんだん聞いて見ると、事實はそれほど簡單ではなかつた。——

母と兄夫婦とは其の日の午後に熱海を出帆する船に乘つて、國府津の沖合へ着いたのはもう日がどつぷりと暮れてからであつた。それまで生きた空もなく突俯して居た母は、やつと少し元氣を出したが、艀へ乘り移るのが又一と苦勞だつた。彼女は恐らく、つい二三丁先に國府津の町の灯がチラチラ見えて居なかつたら、それへ乘り込む勇氣はなかつたであらう。母自身に云はせたら「全く死ぬ氣で」乘り込んだのであらう。それに、彼處の海は可なりたちの悪い所で、おまけに其の日は夕方から風が出たりして、波が高かつたのである。のみならず小さな船には乘り切れないほど一杯客が乘つて居た。

それが顚覆したのは、海岸から僅か二十間ほどの距離へ近づいた時だつた。顚覆の刹那、二人の間に挾まつて居た母は、夫婦の者に兩手でシツカリと摑まつたさうであるが、水へ落ち込むや否や三人ともバラバラになつた。兄は勿論泳ぎの心得があつたので、見知らぬ人々が直ちに彼に縋り着かうとしたけれども、二人の身の上を案じた彼は、それ等の人を一生懸命に拂ひ除けて暗い海の中を捜した。と、直ぐ自分の側に、二三の人影が一と塊りになつて口々に「助けてくれー！」と叫びながら、浮きつ沈みつして居るのに心付いた。「あ。あすこに妻が居る」——兄はその騷々しい叫びの一

つが、たしかに妻のそれであることを、――彼女が聲を振り搾りつゝ良人の救ひを求めて居るのであることを、――何分混雜の際ではあり眞暗な海上であるから、ハッキリした見分けは付かなかつた筈であるにも拘らず、それはたゞ戀人同士が感じ得る或る不思議な力によつて（と、兄自身が云つたのではないが、私はさう思ふのである）直覺した。兄は急いで聲のする方へ泳ぎ着いて、今や溺れようとして居た嫂の體を掬つた。「だが母はどうしたらう」――その考へは其の時直下に兄の胸へ浮かばなければならない筈であり、又兄自身も浮かんだと云つて居る。しかし同時に、兄は咄嗟の間に斯うも考へた、「自分は一度に一人以上を救ふことは出來ない、若し二人を一遍に救はうとすれば、三人ながら溺れ死ぬばかりである。さうして今、偶然にも先に發見されて、自分の手に縋り着いて居る妻がある。自分は先づ此の妻を陸上へ運んでから、然る後に母を尋ねよう。」――で、さう決心した彼は、猶も水面に藻掻き苦しみつゝ執拗に縋り着かうとする人々を夢中で突き除けながら、嫂を擁いて辛くも岸へ泳ぎ着いた。

陸へ着いたとき、嫂は氣を失つて居たが、兄は彼女のぐつたりとなつた冷めたい體を濱へ投げ捨てたまゝ、再び水中へ躍り込んだ。さうして凡そ三十分もの間、隈なく其の邊を捜し求めたけれども、母の姿は見出せなかつた。もう其の時分には五六艘の救助船が出て、片端から客を救ひ上げて居たので、水の面には既に一人の人影もなかつた。「お母あさアーん」兄はさう云つて、淋しく暗い海上に向つて聲を放つた。その時の兄は「海と云ふものが不思議に恐ろしくも懷しく思へた」さうである。「海と云ふ茫漠とした眞暗な所が、自分の幼い折に住んで居た故郷であつて、自分は今そこに居る母に會ひに行くのだ」と云ふやうな氣がした。水の中で聲を限りに母を呼ぶ自分と云ふものが、乳を求める哀れな赤兒のやうに思はれ、自分こそ母に救つて貰ひたい氣がした。「妻には氣の毒だけれども」と兄は私に云つた、「自分は或る一瞬間全く妻の事を忘れた、自分の頭は母で一杯になり、母に會へなければ此處で死ねばかりだと思つた」さうであ

る。——

私は此の兄の言葉を、決して疑ふものではない。兄は確かにさう思つたに違ひないであらう。なぜなら、救助船の船頭が彼を見出して「船へ上れ」と云つた時にも、彼は猶母を呼び續けて、「自分は母を殺したのだ、申譯がないから死なせてくれ」と叫びながら、狂氣の如く船頭に抵抗したさうであるから。日頃からあれほど母に優しかつた兄としては、いかに嫂を愛して居たにもせよ、その場合母に對してそれほど氣を揉むのは當然であり、又さうでなければならない事でもあると、私は思ふ。が、幸ひにして、母は兄の知らないうちに一人の漁師に助けられて、停車場前のＳ館と云ふ旅館へ擔ぎ込まれて、奥座敷で介抱されて居たのであつた。然るに兄がそれを知つたのはズツト後だつた。彼は無理やりに救助船へ引き擦り込まれて陸へ上つたが、そこには漸く正氣づいた嫂が一人待つて居た。彼女は兄の姿を見るなり、「お母樣は、お母樣は、——」と云つて彼に抱き着いた。「お母樣に濟まない濟まない」二人は抱き着いたまゝ、さう云つて長い間沙濱に倒れて泣いた。

夫婦が母の無事な顏を見たのは、それから暫く過ぎてからだつた。ほんの少し水を飲んだだけで、直きに救ひ取られた母は、疾うに意識を恢復して居たのだけれども、二人がその部屋へ這入つて行くと、重病人らしく枕に就いて、眞青な顏をして、默つてちいツと眼を閉ぢたきり、ロクロク口も利かないのだつた。

「お母樣、濟みませんでした。」

と、兄が云つた。

「嘸びつくり遊ばしたでせう。御氣分は如何で居らつしやいます。」

と、嫂が云つた。

母は悲しげな眼を細く靜かに開いて、聞えるか聞えないほどの小さな聲で、

「みんな無事でよござんしたね。」

と、たつた一と言云つて、又ぢいツと死人のやうに眼を閉ぢたきり、それからはもう何を云つても返辭をしないのだつた。「御氣分がお惡ければお醫者を呼びませうか。」さう云つても唯首を振るばかりである。その樣子を見ると、氣の毒なやうでもあり申譯がなくもあり、兄夫婦は此のだゞツ兒の母を、どう取り扱つていゝか分らなかつた。

以上の話を聞いて、私は其の晩の母と兄の心の中を略々推察することが出來た。母があの通りの性質であるから、斯う云ふ場合に、此の親子と夫婦の間に多少の不愉快が蟠まるのは、已むを得ない事だと思つた。母としては、「夫婦が先へ助かつて自分はもう少しで死なうとした」のが、此の上もなく淋しく悲しいのであらう。兄は又母に對してそんな氣持ちをちよつとでも味はせた事が、溜らなく辛いのであらう。けれども、兄の行爲に批難すべき所はないのだし、母にしても無事に助かつた以上は息子の眞心が天に通じたのでもあらうし、それに就いて兄をいつ迄も恨むと云ふのは勝手過ぎる。――と、私は最初、母よりも寧ろ兄に同情しないでは居られなかつた。

「どうしましたお母樣、ちつとやそつと水を飮んだつて心配な事はありませんよ。怪我がなかつたのが何よりです。兄さんたちが氣を揉んで居ますから、何卒元氣を出して下さい。」

私は、兄と一緒にS館の座敷へ通ると、わざと氣輕にさう云ひながら、母の枕元へ据わつた。しかし、母は私に對してもやはり返辭をしなかつた、やはり悲しさうな眼を開いて、恨めしげにまぢまぢと私の顏を見て居たが、やがてホロ

りと涙をこぼした。母の答へはその一滴の涙だけだつた。

日頃から「泣き虫」で通して居た母、愚にもつかない事にでも直ぐ泣きたがる母、――歌舞伎座の芝居を見ても泣き、小說本を讀んでも泣く母の涙なら、私は始終見馴れて居た。だが其の晩の涙は、さう云ふいぢらしく、美しい涙ではなかつた。その涙に接すると同時に、私は今、氣輕さうに云つた自分の言葉を深く後悔した。これ程ガツカリして淋しがつてゐる母に對して、そんな言葉を吐いたことがいかにも殘酷に感ぜられた。

「母はたしかにいつもの母とは違つて居る。」

と、私は思つた。いつもの母だつたら、私が取る物も取り敢へず駈け付けて來た事に對して、どんなにか喜ぶであらう。「あゝよく來てくれたね、ほんとにお前、エライ目に會つちやつたんだよ。」と、例の仰山な口調で云つて、何や彼やと我が儘を云つたり甘へたりするであらう。さうして兄夫婦や私たちが親切にしてやれば、それこそ嬉し涙を流して感謝するだらう。然るにその晩の母は少しもそんな風ではなかつた。彼女はたゞぢつと押し默つて、死んだやうに大人しかつた。私たちに何か云はれると、「あゝさうかね」と悲しい聲で返事をして、逆ひもせず怒りもせず、云はれるまゝに、素直にして居るだけだつた。

「いつもの傳とは大分違つて居るが、此れも一種のだゞなのだ。打擊がひどかつたので、だゞの捏ね方が深刻にやつて來ただけなんだ。」

私はさうぢやないかとも思つた。「一つ伜どもをウンと驚かしてやれ」と、母はさう思つて居るので、私たちがうまうまと其の手に載つて盛んに氣を揉んでやれば、お人好しの母の事だから二三日も立てば直きに機嫌が直るだらう。とも考へられた。けれども、事實は私の豫想通りには行かなかつた。私たち三人は明くる日の朝、母を連れて東京へ戻つたが、

汽車の中でも、家へ歸つても、母の樣子はいつかな改まらなかつた。私たちが機嫌を取らうとすればするほど、母は一層悲しい眼つきをして顏を背けた。そこには少しもだゞを捏ねて居るやうなわざとらしい風はなかつた。却つて母自身も、出來るなら私たちに親しみたいのであるが、さうすると尚更悲しくなつて、口が利けなくなると云ふやうに見えた。一と月立つても二た月立つても、母は遂に、昔の賑やかな母には復つてくれなかつたのである。その晩以來、母は全く別人のやうに、ガラリと變つてしまつたのである。

母はなぜそんなにも變つたか？そこにはどんな深い譯があつたか？——その話は後に述べるとして、それから死に至る迄の母の生涯は、此の物語の冒頭にも書いた通り、それ自身が一つの悲しい音樂のやうに悲しいものだつた。私は其の頃の母を憶ふ毎に、いつも薄暗い隱居所の奧の、佛壇の前に畏まつて、父の位牌に向つて一心に經ヶ誦して居た彼女の俤を胸に浮かべる。——亡き良人の跡を慕ふ心持ち、それがその時分の彼女の生活の基調を成して居たやうであつたたまたま私たちが觀劇や物見遊山に誘はうとしても、

「いゝえ、私は留守居をして居ますから、お前たちで行つておいで。」

さう云つて、淋しく笑ふばかりだつた。強ひて誘ひ出さうとしたり、ちやほや云つたりすると、直きにホロリとして、極まりが惡さうに奧の間へ引込んでしまふ。私や妹に對してもさうだつたけれども、兄夫婦に對しては殊に、それが甚しかつたやうに思はれる。彼女は兄夫婦の仲の好いのを嫉むのではない、が、それを眼の前に見るのは辛い。——と云ふやうな風であつた。あれほど「伜自慢」「嫁自慢」であつた彼女は、もうふつつりと子供の事を口にしなかつた。

晩飯の時には家族が食卓の周圍に集まつて、賑やかに食事をするのが以前からの習慣になつて居たのだが、母はそれを別に拒みもしない代りに、決して私たちの會話の中へ口を挾まうとはしないのだつた。たゞ用事のある時にだけ「は

い、はい」と云つて、猫のやうに從順に云ふ事を聽いた。どうかすると、彼女は食事の最中にカタリと箸を投げ捨てゝ、慌てゝ奥の間へ駈け込んで行くことがあつた。それは母が、急に泣きたくなつた爲めであることを、私たち兄弟は云はず語らずのうちに知つて居た。實際、私たちはさう云ふ母に對して、どんな態度を取つたらいゝか分らなかつた。最も困つたのは、たまに親戚の者などがやつて來て、

「お子さん方はあの通りお優しくつて居らつしやいますし、ほんとに御隱居樣はお仕合はせで、――」

などゝ、さも羨ましさうな口調でお世辭を云ふ時である。そんな時、母は何かしら胸に痛手のあるのをヂツと堪へるやうな風に、

「ほゝ」

と淋しく笑ひながら、靜かにうつむいてしまふのである。その苦しげな笑顏は、涙よりも一層私たちに傷々しい思ひをさせた。母は泣くべきところを、一生懸命に笑つて居るのだとしか見えなかつた。

だが、母に涙があるうちはまだ好かつたのだが、恐ろしかつたのは、遂に其の涙さへ乾き切つてしまつてからの彼女だつた。その時分の母は、ロクに物も喰はないで、たゞ影の如く生て居るに過ぎなかつた。さうなつてから間もなく、次第に痩せ衰へて、消えるやうに死んでしまつたのである。息を引き取らうとする時、兄夫婦や私たちが枕もとへ顏を出すと、

「あゝお前達、そんなに側へ寄らないでおくれよ。お父樣がお迎ひに來て居らつしやるんだから。――」

さう云つて、手で私たちを拂ひ除けるやうにしながら死んで行つた。それが彼女の最後の言葉だつた。

その後、兄が自殺したことは前にも書いた通りである。

私は、母がまだ死なない時分から、母に對する兄の態度、兄夫婦の間柄、等に就いて、それとなく注意を怠らなかつた。母は私たちに顔を見られるのを厭ふ樣子だつたが、兄に對しては特にさうだつた。兄を恨むと云ふのではなく、兄の前へ出ると、心細さうにコツソリと下を向く。さうしてそれが、一々兄の方へも反響する。兄とても勿論母を恨むのではないが、進んで愛することも出來ない、——愛する事を禁ぜられて居る、と云ふ風に見えた。けれども兄は全く不幸な人であるとは云へなかつた。なぜなら、彼はそんな苦しい立ち場にありながら、嫂からは絶えず熱烈に愛せられて居たから。兄夫婦は、母にも私たちにもそれを出來るだけ押し隱して居た。しかし私にはそれがよく分つたし、隱せば隱すほど二人はシツカリと結び着いて居るやうに思へた。斯う云つたからとて私は何も兄を批難するのではない。たゞ母の心になつて見れば、それがどんなにか彼女の淋しさを深めたでもあらうし、兄にしても嫂に愛せられたが爲めに、一層の苦しみを嘗めたであらうと、さう考へるまでである。

母が亡くなつてから、兄は次第に激しい神經衰弱に陷つたが、或る年の夏、嫂がちよつと外出した隙に、書齋に籠つて居た彼は突然ピストルで自殺を遂げた。その死が母の死と如何なる關係があつたかは、左に掲ぐる書き置きが示す通りである。遺書は嫂と私たち兄妹とへ別々に認められてあつたので、此れは私たちが受け取つた方の手紙である。——

「私は今自殺する、私はどうしても死ななければならない。それは疾うから分つて居たのだが、實は今迄決心が付かな

かつたのだ。だが、もう私は決心した、私は死ぬ事に覺悟をきめた。

その理由は?——あゝ、私はそれを云ふのを恐れる。これから死んで行く私にしても、それを云ふのは實に恐ろしい。私はいつそ、私と母とのみが知つて居る共の秘密に就いて、此の世の人には知らせずに死んで行く方がいゝかとも思ふ。けれどもさうする事は私の良心が許さないのだ。私はあの國府津の晩の出來事に就いて、今日までお前たちに嘘をついて居たのだ。しかし許してくれ、私は妻をさし置いてそれをお前たちに打ち明けることは出來なかつた。心から私を愛し、私を信じてくれた妻にさへも隱して居ることをお前たちに打ち明けるのは、彼女に對して忍びなかつたのだ。——あゝ、私はほんたうに死にたくない。私は今はの際までも猶彼女を愛して居る。彼女を捨てゝ此の世を去ることは、さうしなければならなくなつたのは、何と云ふ悲しい運命だらう。さう云つては此れから冥途でお目に懸る母に對して濟まないのだけれども、……

私がどんな苦しい立ち場に陷り、どんな心持ちで此の世を捨てなければならなくなつたかは、此の書き置きを最後まで讀んでくれればお前たちにも分る筈だ。繰り返して云ふが私は決して世の中がイヤになつたのではない、人間が淺ましくなつたのでもない。私は全くあの偶然の出來事のために葬むられるのだ。生木を裂くやうにして戀ひしい戀ひしい彼女の住む世の中から、永久に去るべく餘儀なくさせられるのだ。私は誰かを恨みたいけれども誰を恨むアテもない。ただたゞ恨めしいのはあの偶然の出來事だ、多くの人の中から撰りに撰つて私だけが、あんな恐ろしい出來事に打つかつてしまつたその運命だ。

私はあの國府津の晩の出來事に就いて、お前たちに嘘をついたと云つた。けれども其れは少しでも自分の非を隱さうとする卑劣な根性からしたのではない。私は母の爲め、妻の爲めに、それを明白にする事が堪へられなかつた。お前た

ちは定めし、母があの晩以來淋しい人間になつてしまつた事に就いて、何か深い事情があることを豫想しただらう。ただ表面に現れたあれだけの出來事では、母の變りやうが餘り激しいとも思つただらう。今こそそれを明白に云ふが、私はあの晩、眞暗な海の中で妻を救ひ上げた刹那に、母に對して實に濟まないことをしたのだ。私がそれに氣が付いたのは、――妻を抱へて居た私の腕にいきなり縋り着かうとした人が、それが若しや母ではなかつたかと云ふ事に氣が付いたのは、もう大分時が過ぎた後だつたけれども、――その恐ろしい疑惑に對して私は出來るだけ眼を潰らうとはしたけれども、――しかしやつぱりその疑ひは事實だつたのだ。私は妻の一身を案ずる餘り、母の見分けが付かなかつたのだ。私は妻を救ふので夢中になつて、私の手で私の母を水の中へ突き放したのだ。妻はそれには氣が付かなかつたが、母は確かにそれを知つて居た。死ぬまで其の事を口に出しはしなかつたが、母がそれを知つて居た事は、あの晩以後の彼女の變りやうを見れば、とても疑ふことは出來ない。

私はなぜ、母を見分けることが出來なかつたか？　母を忘れるほど妻を愛して居たのだらうか？――私は決してさうは思はない。若し私の手に、妻より先に母が抱かれて居たならば、私はきつと妻を見分ける餘裕を持たなかつただらう、その場合にたとへ妻が私に縋り着いて來ようとも、『私は母を助けなけりやならない。』さう云つて彼女を見殺しにしただらう。さうして又、私をあれ程愛して居る妻は、私の母の爲めならば喜んで死んでくれただらう。けれども不幸にして、あの時眞つ先に私の手に縋り着いた者は妻だつたのだ。今や溺れかゝつて居る妻だつたのだ。私の頭は『妻の命を救ふ』と云ふことで一杯になつてゐたのだ。『兎に角一人だけでも生きなけりやならない。』私がその時さう思つたのは不自然だらうか？　私でなくとも、誰でもさう思ひはしないだらうか？　ただその『一人』のうちの一人が母でなくて妻だつたこと、その偶然が私に恐ろしい過誤と不幸とを齎らしたのだ。私は運の惡い籤を引いたのだ。

斯う書いて來れば、母があのやうな變り方をした理由は、説明する迄もあるまい。私は偶然を恨むと云ふが、母は恐らく偶然ばかりを恨んでは居なかつただらう。彼女は、嫁を救ふ爲めに情なくも自分を海へ突き放した我が子を見たのだ。世の中にこんな殘酷な目を見た母が幾人あるだらう、さうしてそれがあれほどに死を恐れて居た、あれほど『我が子』を頼りにして居た私たちの母であつたことは、何と云ふ忌ま忌ましい廻り合はせだらう。あの晩私は妻を救ひ上げるや否や、直ぐに母を捜し出すべく再び海へ引返した。母が見附からなければ自分も生きては歸れないとまで思つた。だが今になつて考へると、母が他人の手で助かつたことは、母の爲めにも私の爲めにも幸福ではなかつたのだ。いや、たとへ私の手で助かつたにしても、母は決して喜びはしなかつただらう。『助けるならなぜ最初に助けてくれない？　なぜ私よりも嫁を先にしたのだ！』我が佳な母はきつとさう云つたに違ひなからう。『お母様が後になつたのは偶然です』と云つても、『その偶然が恨めしい』と云ふだらう。『私を後にするくらゐなら、なぜ三人で一緒に死なない？』と云ふだらう。實際、こんなことになるならあの時私は死ねばよかつた。母を救ふために死んだと云へば、母もどんなにか喜んでくれただらう。母と私とがなまじ助かつた事が、二人に取つて此の上もない不仕合はせだつたのだ。母はそれから長い間、嘗て自分を海へ突き放さうとしたところの、『親殺し』の伜の顔を毎日々々見なければならなかつた。死ぬ迄その恨みを忘れることが出來なかつた。私の顔が彼女の眼には惡魔のやうに見えたでもあらう。いや私ばかりではない、『子供』と云ふものは凡べてアテにならない、戀人の爲めには親を裏切る不孝者だと思はれたであらう。私は晩年の母が、いつも父の位牌に回向して居たことを思ふと、その心の中が推し測られて溜らなく悲しくなる。……

……母は死んでしまつたけれども、私にはさうは思はれない。私が生きて居る限り、母も生きて居るやうな氣がする。

『どうかお前は孝行な伜だと云ふことを、私に見せておくれ。私を心から喜ばしておくれ。嫁の爲めに命を捨てゝかゝつ

たやうに、私の爲めにも命を捨てゝかゝつておくれ。」母は始終私の耳に、さう囁いて居るやうな氣がする。私が死なゝければ母は決して喜んではくれないのだ。……」

兄の書き遺きはまだまだ長いのだが、以上を引用すれば、私たちの母の不幸は略々明瞭になつたと思ふ。さうして私は、兄が死んでしまつてからも、やつぱり母は生きて居るやうな心地がする。兄が氣の毒である以上に、母は氣の毒な人として、いつ迄も私の胸に生きて居るだらう。

瀧田君足下

今月はとても「鮫人」の方を書き續ける氣持ちになりませんから、代りに此の短篇を載せることにしました。此の前もお斷りした通り、何分活動の方をやつてゐると長い物に取りつく餘裕がなし、氣分が統一されないので弱つて居ます。いづれそのうちに一と月なり二た月なり、他の一切の仕事を捨てゝかゝれる餘裕を作つて、悠々と「鮫人」の筆を執りたい考へです。尤も其の前にも短篇なら書けさうに思ひますから、書けたらお送りします。右不惡御含み置き下さるやうお願ひします。

谷崎潤一郎

萬華鏡

室生犀星

一、川蝦

夜が白みかかると、石垣の穴から、ひげの長い水晶いろの川蝦が這ひ出して、石のへりにならんでゐた。が、日が水の上にさすころには皆うすぐらい穴の奥へはいり込んで、一つも姿を見せなかつた。晩かたちかく、水が冷たさを加へるころには、また、ぞろぞろ石の上に這ひ出してゐた。

仙吉は、よく夢にさへ川蝦の手さわりを手の平にかんじた。尾をあたまの方へ曲げる間もなく、ぴいんと竹箆返しに親指のつけもとを叩いた。握りしめるとぴりぴりした。手網が水をふくんで、指さきにあたる網の目の快よい觸りもよく感じられた。

「蝦でも捕つて來ておくれ。」

飴釜をぐいぐい廻しながら母親がよくさう言ひつけた。

「だつてお母あはちつとも食べないぢやないか。」

いつも汁で煮しめたのは、父親の膳の上につけられるばかりで、ついぞ母親がたべたことがなかつた。母親に食べて嘗ひたかつた。

「わたしはほしくないから……」

「ふん。」

仙吉は、いつも父親ばかりが食べてゐるので腹が立つた。二時間も水につかつて、やつと二三合捕つてきたかと思ふと、一どきに、父親がまづさうに食べてしまつた。

「けふは何んにもないからお前ちよつと行つて捕つてきておくれ。」

母親は、よくさう言つて仙吉のあたまを撫でた。

「あ、どつさり捕つてくるから。」

方四すくらゐの手網と、鴉の羽根を結びつけた棒切とをもつて、うらの川へでかけるのであつた。

晝間は、石垣の穴の奥や、ゴミクタの裏や、蛇籠のコワれたところに、ぢつと潜んで滅多に出てゐなかつた。鴉の羽根を静かに石の奥へさし込んで、手ぎわよく追ひ出しながら、その逃げ口に手網をあててすくのである。川蝦は擽ぐつたがるもので、それゆゑ、羽根が長い髯の尖きとか、尾やからだにむづむづ觸れると、いきなり一と刎ねして、じつと泳ぎ澄んで、またつうゐと刎ね飛ぶのである。それきり水垢のたまつたところで姿がみえなくなるのもあつた。

仙吉は、黒黒した鴉の羽根をひと目みるとだんだんうしろ退さりしたり、横に逼ふたりしてコワがつてゐる蝦の心持がよくわかつてゐた。それゆゑ、なるべくからだに觸れないやうにして穴から追ひ出すのを常としてゐた。同じ水のなかまで漬つてやつてゐるので、こちらの足をうごかせば、水が搖れるおそれがあるので、ほとんど想像も及ばぬほど靜

かに動いたり手網をはこんだりするのだつた。甲の穴にたくさん居て、乙の穴に居ないといふことまで何時の間にかおぼへてゐたし、深い穴はどれだけ掬ひ捕つても、ふしぎに次から次へと數がふえてゐるし、はじめから一疋もゐない穴は、たとへ逃げたやつでもそこへは這入らないで、もとの穴へもどるのだつた。

仙吉が手網をさげてかへる途中、いちばん嫌な思ひをするのは、友達と出會することであつた。きつとその中の二三人が追つ取りかこんで、

「見せろ。」

さう言つて尾籠を振つてみることである。そればかりではなく

「晩のおかづにするんぢやらう。」など毒づくものが居た。

「こんなものを食ふもんか。みんな生かして置くんぢや。」

赤くなつて素足でいつも逃げるやうに友だちの群をはなれる仙吉は、けふも會ひはせぬかと、出がけから胸がへんに悸つくことが多かつた。

母親は、いつも尾籠を振つてみて、きまつたやうに賞めてくれた。

「上手ね。お前は、くらうとだつて恁麼に捕れはしない。」

仙吉は默つて足を洗ふと、ひとりで飯をたべて了ふのが常であつた。あとで父親は、にがひ顔をしながら蝦の煮びたしで、わづかな酒をちびりちびりと飲んでゐた。ただの一度も蝦のことなぞ賞めなかつた。

「いつも蝦かい。こんなものは拙くて食へはしない。」

膳の上からわざわざ皿を疊の上におろしたりした。

「せつかく掛つてきたものですから食つてやつて下さいな。」

母親がさう哀願するやうに言つても

「水くさくてな。」振りかへりもしないでゐた。仙吉は二間しかない店の方で、父親をじつと見つめたまゝ口惜しさうにしてゐた。明日から掛つてきてやるものかと考へながらゐた。

「だからなるべく養生させるやうにしてやつて下さいな。働いたからだですから。」

母親のことばの終らないうちに、怒鳴るやうに不機嫌さうに

「借金まで背負つてよく謂れた義理だ。そんなものまで此方で引受けて耐るものかね。」

父親は、かんときせるを叩いた。それきり母親はなんとも言はなかつた。頭の大きい掌の異常に頑固な父親の顔を仙吉は舌打ちしながら見つめてゐた。

「では家で泊めてやつて下さらないつもりですか。」

「はあ。」

それには父親も困つたらしい顔をした。仙吉は、誰がくるのかちよいと見当がつかなかつた。

「いくら何でも病気をしてゐるものを来た早々いやな顔をしないで下さい。後生ですから。それに次の間も空いてゐることだし、彼処なら差支へありませんから。」

頬骨の出た蒼い色つやのよくない母親が、心配事のあるときによくする眉を寄せながら言つた。

父親は、鼻さきであしらつた。

「困ることは仕方がないさ。けれども此上、医者だの薬だのと言つてはどうにもならないぢやないか。」

母親は、溜息を一どきについた。仙吉はそれを自分の胸のところで感じた。

「起し飴をすこし下さい。」

髪のそそけ立つた貧しげなお内儀さんが、店へ立停つた。

「お母あ、お客様。」

仙吉が障子をあけて言ふと「あい。」とこたへて、母親が桶の固い飴をのみさきで、手首のあごで、かんかんと叩いた。飴はわれた。

「おいくらでございますか。」

「ちよいとの煮物で、三錢ばかり……。」

低い臆病さうな聲だつた。仙吉は、雨で濡れた狭い往來をうしろにして立つてゐるおかみさん風な女の、提げてゐる風呂敷に穴があいてゐて、明りに透いてゐるのをぼんやり見つめてゐた。

竹包みを懐中へ入れて、うそ寒い剰錢を握ると、女は裏町をぐずりぐずりと歩いて行つた。すぐさきの空地に遊んでゐる此界隈に多い汚ない子供等の聲が、晩秋の濕つた空氣のなかに、甲高くひびいてゐた。

母親は座にもどると、ちからなささうに座つて、また溜息をついた。

「何年になりますかね。」

「あと一年で自前になれるのだが、こんどの借金で又延びるだらう。」

父親はかういふと、急にまた怒つたやうな口調になつた。

「いつまで經つても同じぢやないか。住み變えて借金が重なる一方だ。あいつが氣次がないからだ。」

母親は默つて何か胸思案をしてゐた。

ひよつとすると、姉が歸つてくるのではあるまいか。話の工合がどうもさうらしかつたので、仙吉は、店の帳場——と言つても、形ばかりの小机や仕入帳や竹の皮の束を雜多にならべた——方から聲をかけた。

「姉さんがかへるの。」

母親は、振りかへつた。つやのない青白い顏が、をりもをりとて姉のお濟にほそづくりなところまで似てゐた。

「ちよいとね、からだを惡くしたものだからね。」

「何時？」

「明日だよ。」

仙吉は何かいはうとしたが、父親がきびしい目つきで、くだらないことを尋ねるといふやうに此方をみたので「さう。」と言つたきり默つてしまつた。が、何か言ひたくなつて、嬉しくなつて靜かにして居られなかつた。

「學校へ行つてる間に着くの、さうだと詰らないなあ。歸つてからだといいな。」

母親は、仙吉の顏をちらりと見て、低い聲で言つた。

「多分晩方でせう。」

「此間來られた態ぢやあるまい。」

父親が話をぶち切つて、れいの、煙管の雁首をかんと叩いた。何かといふと、荒い口汚ないことをいふ父親が憎らしかつた。ついぞ優しい言葉の一つも母親へはもちろんのこと、仙吉にさへかけなかつた。この前も姉のお濟がかへつてきたときも、殆ど怒鳴り散らしてばかり居た。派手な着物で、一しよに歩くと氣まりが惡いほど目立つて、こちらで顏が

赤くなつた。存さきで凧や凧流しの彩紙を買つてくれた。優しくて歩いてゐるうち一度だつて手を離したことさへなかつた。その姉がかへつてくるだけでも仙吉は胸内が酸つぱくなるほど嬉しかつた。

「ずつと長く居るの。それともすぐ歸つてしまふの。」

父親の目をみいみい言つたが、母親はすぐ返事をしなかつた。それで仙吉もしかたなしに默つて、爪で小机の上にむだ書きをしてゐた。……うすぐらい穴に、勢ぞろひをしたやうな川蝦の水晶いろの肌と、きりぎりすのやうな長い髯とをいつの間にか目にうかべた。姉にも捕つてきてやりたいやうな氣がした。

その翌日の晩方、仙吉のうちの前で一臺の車がとまつた。仙吉は母親のかげから血色のよくない病身らしい姉の顔を幌をおろすと同時に目にいれた。この前みたときに較べると稍々瘠せぎみになつて、輪廓も鋭どくなつてゐた。

「すこし瘠せたわね。」

自分でさうさきに言つて、車をかへすと、母親のそばにゐる仙吉を見つけた。

「仙ちやん、ずゐぶん大きくなつたわね。恥かしいの、そんなに陰にばかり隠れてゐてさ。」

お濱は、仙吉のあたまに手を置いた。車の上で冷えたのであらう、うつすりと髮の地を透してもなほつめたかつた。

「……………」仙吉は、默つてゐたが、やがて「お歸へりなさい。」と低い聲で言つた。悲しくなつて胸が一杯になつてゐた。

「お父さんは。」

母親は、すぐ奥にゐるといふことを無表情で答へた。姉はきうに默つて、店の次の間へはいつた。むんずりとした不

機嫌な父親は、乏しい晩酌をしてゐた。
「飯は……」
ずばりと、はじめての言葉だつた。
「ほしくないんですの。」
姉もあらたまつたやうな聲でこたへた。
「まだなら食べるといい。せつかく用意したんだから。」
母親は、小さい膳立をしに立つた。
「あたし仙ちやんと一しよにいただきますわ。仙ちやんもまだでせう。」
姉の聲は明るく仙吉の耳にひびいた。今にも父親が何かがみがみ言ひ出しはしないかとはらはらしてゐたが、べつに異狀もなかつた。ただ强情に默つてゐる父親は、姉のからだを上からと下からと見つめてゐた。
姉と一しよに食事をすますと、それきり退屈な晩がきた。父親は、土間でもう明日の飴釜を焚きつけてゐた。
「いつたい荷物はどうしたんだ。」
母親と何かひそひそ話をしてゐたお濱は、くらい土間から父親が突然思ひ出したやうに聲をかけたときに、はつとしたが持前のはつきりした聲でこたへた。
「預けてきました。さうでないと面倒になるものでしたから。」
「ふん。」
父親は鼻をならした。

「だつて仕様がないんですもの。」

「手前がだらしがないからだ。もう幾つになると思つてゐるんだ。いつまで商賣をしてゐるつもりなんだ。」

焚きつけた火照りで、父親の顏が赭くなつてみえた。仙吉は、その一語ごとに胸がさわいだ。

「あたしだつて好きでやつてゐるんぢやあるまいし、來た早々つけつけ言はれるんぢや耐らない……。」

姉は負けてゐないで言ひ放つたが、かげ口ほどもなく父親は默つて控え目にしてゐるらしかつた。

「いくら言つたつて根性骨がなほらないから駄目さ。」

父親はかういふと、かまどの前で煙草をすひつけてゐた。

「働かせるほど働かせて、たまに病氣になつてかへれば邪魔物あつかひにされるしさ。」

姉はさういふと、ぷいと店へ出た。

「仙ちやん、活動へでも行きませう。」帶の間をさぐりながら言つた。

「あとで叱られはしないかな。」

「大丈夫よ。くさくさしてくるから出掛けた方がいいのよ。」

これでも仙吉は、ぐずぐずしながら躊躇つてゐた。母親が出てきたので

「行つてもいい。」と尋ねた。

「いいにはいいけれど……お前來るか來ないうちに出かけるのはいけないぢやないか。」

母親は、お須の先がつた目つきをよみながら、おどおどして言つた。

「だつて家に居ては諍ひをするより宜いんですよ。」

母親などに叫ひつけないで、先刻土間にぬきすてたばかりの極立つて派手な日和下駄をひつかけた。仙吉は制帽をかむると、一しよにそとへ出た。すこし泥濘つてゐたが、ちらつく電燈が捏ね返された泥にまみれて美しかつた。

大通りへ出て常設館へはいると、いままで座つたことのない赤い天鵞絨の特等席へ這入つた。まばらな看客はみな二人を振りかへつて見た。仙吉はなんだか眩しいやうな氣がして、坐りなれない椅子なので、つるつる辷つて落ちつかなかつた。けれども姉のお濱は、まるで自分の家のやうに馴れた風で、仙吉を自分のよこに座らせた。

「烟草を買つてきてくれないこと。」姉は紅い紙入れを出しながら言つた。仙吉は、敷島を買つてくると、姉はそれをすぱりすぱりと吸つてゐた。するどい紙卷が仙吉のあたまの上で赤い火口を覗かせてゐた。

青白い陰影と樂しげな樂隊につれて、ふしぎな西洋人が悲しんだり泣いたりしてゐた。最後に姉は白い手巾を目にあてた。それは、海濱のしぶく波のところで、やはり西洋人が別れてゆくやうな場合だつた。仙吉もわけが判らなかつたが、ヴイオリンの細い糸でうすら甘い曲がきかれたとき哀しい思ひがした。その哀しい心持はすぐ姉といまかうして一緒に座つてゐるために一層深かつた。

歸りの大通りは、街燈も更け輝いてうすら寒かつた。姉は、コートの袖で仙吉のからだを蔽ふやうにして、いつかのやうに手をひいてゐた。永い間かうして歩いたことのない仙吉は、感激とちひさい嬉びとで、なにか姉の喜びさうなことを言ひたくて仕方がなかつた。けれども云へなかつた。

小綺麗な大阪壽司屋の二階へあがると、姉は一本つけさせた。皿の上にならべられた美しい色とりどりな食べものがところ狹いまでにならべられた。

「仙ちやん、みんなおあがり、きらひなのは殘したつて關はないから。」

「うん。」

「お刺身はきらひ……。」

「もういいの。ほんとにいいの。」

仙吉は、あまり數多く取寄せられたので、どれから食べていいか分らないほどだつた。

家へ歸ると父親はもう寢てゐた。母だけが夜なべの麻糸をつなぎながら居た。湯も鐵瓶に湧いてゐた。

「おなかが減つたら茶漬けでも食べたらどう。」

母親は、お櫃の上に伏せた碗と香のものに目をやりながら言つた。

「何にもほしくないの。」

仙吉は姉と顏をあはせて微笑んだ。小じんまりしたおすし屋の二階で、だまつて座つて箸をうごかした樂しさが、仙吉には今ゆめのやうに思ひうかんだ。舌ざわりのよい平常あまり食べたことのない物の味ひが、しんみりと舌の上に感じられてきた。

母親は、すぐそれと悟ると、これも寂しさうに微笑んでみせた。

「ほら。」

仙吉は、おみやの竹の皮を母親の前に置いた。

「それりやいいことをしたね。お母さんも御馳走になりませう。」

茶をいれると、母親はおすしをうまさうに食べはじめた。お考へ考へ

「おあしはあまり使はない方がいいよ。あるときには有るが、ないときには無いからね。」

姉は微笑ひながらゐたが、妙に仙吉には何かを胡麻化してゐるやうで寂しかつた。

翌朝、仙吉は手網と鶏の羽根をもつて、裏の川へでかけた。ひと朝ごとに秋凉を加へてゆく川水は、起きぬきの足には痺れるほど冷たかつた。

二三日來ないうちに、秋肥りは一寸五分ほどある蝦のからだにみつちりと行き亘つてゐて、なかには、驚くほど大きい奴が、じつと長いひげを伸しながら、黒い出目をゆるい流れに向けてゐるのもゐた。さういふ大きい奴は一度刎ねると二三尺は飛ぶので、ほとんど、その行衛さへわからなかつた。あるものは流れ瀬に捲まれてゐながらも、いつの間にか、穴の方へ舞ひもどつてきた。

仙吉は、樂しいそはそはした心持ちで、調子よく掬ふことができた。しづかに鶏の羽根をうごかしながら石の上にすらせると、蝦はだまされたやうになつて皆手網の罠にかかつた。もう一疋もう一疋と出來るだけ數多く捕つて姉にみせたい心持ちは、晴れて澄んだ水底のやうに明るく樂しかつた。

いつになく礒に深山の渡り鳥が、礫のやうに下りては啼いて、晴れ蒼んだ空の色がよどんだ流れ一杯にみちてゐた。

家へかへると、姉と父とがいがみ合つて居た。母は默つて長火鉢のところに座つてゐた。仙吉は尾籠をさげたまま、愉しい空想をブチ壊されたやうにぼんやり立つて見てゐた。

「今からでも出て行け。自分で身動きもならんやうにしてゐて、よくも親のためだなんて言やがる。」

父親は、帯を締めなほして朝餐をおろしに行つた。

「出てゆきますよ。誰がお世話になんかなるものか。」

母親は手でおさへるやうにして言つた。

「そんな口をきかないものだよ。お前のやうに二言目には口答へをするからいけないんだ。」

「だから此麼家になんか厄介になりませんよ。仙ちやん、車屋さんを呼んできて頂戴。」

仙吉は、どう返事していいか不明らなかつたので、やはり茫然とまだ尾籠をさげたまま立つてゐた。

「よう行つてきて頂戴。仙ちやんはあたしの言ふことをきかないの。」

思ひ上つた姉の顔は青くなつて、鋭どく唇を顫はしてゐた。母親は

「仙や、行かなくともいいんだよ。」とおさへた。

「仙ちやん行つてくれないの。」

姉は怨めしさうに見詰めた。いま呼びに行けば、いつかのやうに、すぐ歸つて行つてしまふに決つてゐる。呼びに行つていいか、それとも呼ばないでゐた方がいいか、どうしていいか仙吉には分らなかつた。

「仙。足を洗へ。」

父親が飴釜のなかを手繰つては、飴の張りを强めながら言つた。尾籠と手網とを流しもとに置いて足を洗つた。せつかく捕つてきた川蝦が尾籠のなかで、むづむづ這ひあるいてゐることを考へながら、姉の顔をちよいと眺めた。そのときは最う口諍ひが歇んでゐた。

「蝦は捕れて……。」

姉は荒んだ表情のなかから優しく微笑んでみせた。尾籠をもつて來てみせようかと思つたが、父親のそばを通らなければならないので、とりに行かなかつた。

「え、すこし。」

「あとで見せてね。」

姉がかう言つたとき、仙吉は思はず涙ぐんだ。姉のかほが二つになつてみえた。尾籠のなかに刎ねて濺つた音を立ててゐる川蝦の、やさしい手ざわりまで思ひうかんだ。

母親はこの機會に話をまぎらせるやうに、仙吉に尾籠をとつてきて、姉に見せるやうにと言つた。仙吉は喜んで取つてくると、姉のお濟は、尾籠のなかへ手を入れて大きな奴を一疋つまみ出した。

「水がなくてもよく生きてゐるわね。」

「半日ぐらゐ生きてゐるの。」仙吉は甘えたやうな聲で言つた。なるべく先刻のやうな口諍ひが起きてくれなければいゝと、尾籠のなかの蝦を幾つも出して見せたりした。父親は今まで怒鳴りちらしてゐたが、三人が蝦を這はせたりしてゐるのをちよいと目にいれたが、飴を手繰りながら何んにも言はなかつた。

往來では北國の町の夕方近くを知らせる油賣の鈴が遠くで鳴りながら居た。

「仙ちやん。」

姉は低いこゑで呼んだ。

「なあに。」

「今晩も行かない。」

「どこ。」

「活動へ。」

さういふ姉の顔を仙吉は悲しげに見つめた。すぐ返事ができなかつた。母親は昨夜の今夜だからよしたらいいだらう

と言つた。

「だつてあたしくさくさするんですもの。」

姉は、ぷいと店へ出た。が、仙吉は一しよに出ては惡いやうな氣がしてじつとしてゐた。

日は向側の屋根庇にはすかいに移つてゐるばかりで、店のうちは既う暗くなつてゐた。

二、俳諧寺一茶

一茶は朝出ちの客のために、もう勝手へ出てかまどを焚きつけてゐた。四五日前からふりつゞいた雨ですつかり溫かくなつて、去年から末枯れた零餘子の蔓がそのまま吹き通しになつてゐるのも、それほど氣にかからなくなつてゐた。

加賀の越山は間もなく目をさますと、すぐ懷紙に小粒を包みこんで、それから着換えも手早くすませた。紙包みは、一茶の女房おとくにおくるためである。

早起きの柏原在では、名物の鍛冶屋の鎌を叩く鎚の音が、雨のなかにひゞいて美しくきこえた。双の齒を合せるやうな澄んだ音いろを縫つて、勝手の薪の燃え撥く音もまぢつてゐた。庭と言つても五六坪しかなかつたが、昨夜ながく話し込んだ土藏の南側が、よこしぶきの雨に濡れてゐた。

「や、もう起きなすつたか。もうしばらく休んで居られたらよいのに。」

頭の地のうすい一茶が、長いかまど火箸をもつたまま、勝手の板じきから顏を出した。北國人にありがちな顴頰の凸起した臉が弛んでゐた。

「あまり鎚の音がいいものだから、つい目をさましました。えらいお邪魔をして濟みません。」

いつも句作で見る一茶とは、こんど初めて會つて見て雲泥の相違のあることを感じた。目つきから臆々としてしよつちう悲しげに人の心を覗くやうなにぶい光をもつてゐた。それに越山をおどろかせたのは、その苦勞をしぬいたらしいところであつた。

「さうあの鎚の音だけは、この里ではききものですよ。今朝はまだ來ないやうだが、いつも鶯がきて啼くのですよ。それが鍛冶屋の音とまじつて仲々ようございます。ことに雨の日などは。」

喉袋を破つた素謡のやうな聲音を越山は氣持よくききながら――。

「その鶯もききたいものですな。」と又「だいぶ古木な紅梅ですな。」

「七八十年も經ちますかね。隣のものですが毎年目を喜ばしてくれます。」

まだ蕾は固いが、色はもう冴えを拔いで、充分な雨氣をふくんで濃く枝々に綴ふてゐた。ながめてゐると、朝のすずしい心持ちにうつすりと影がしてくるやうだつた。

雨は濡やかに垣根や、その裾に燃えかけた時なし草や小米花をぬらしてゐた。遲いとはいへ濃やかな北國の春のあゆみが、あぶらぐんで、日一日と、あたりに泥み合つてくることを感じた。はじめは道寄りすまいと思つたが、結局寄つてよかつたと越山は考へてゐた。

「まあ、これからが息がつけるのですが、冬ぢゆうはいやはや蛙の冬ごもりと同じいんです。」

「わたしの方もその通りですよ。お互ひ北國に生れたものはこれからが樂しみですね。」

焚きつけはぱちぱち撥ねてゐた。そのたびにかまどのへりの燃えさしが板じきへ落ちるのを手ぎわよく、奥の方へ押

し込んでゐた。越山はそれをよほど手なれたもののやうに眺めた。

噴井戸の水も温かくて、手さばきもさつぱりしてゐた。洗面をすますと、そこらの庭をていねいに見てあるいた。菊、萩、蒔きぞこないの菜つ葉、雪の下など目にふれた。藁灰を焚いたらしいあとが、黒々と、それも雨晒しに會つてうすく剝げてゐるそばに、蕗の薹が泥色の皮のまま擡げかかつてゐるのも、朝の目にはこころよかつた。

箒の音がしたので、ふりかへると、うそ寒げな一茶が座敷をはいてゐるのが見えた。わざと彼れは座敷からみえないところに、しばらく蹲踞んで掃除の済むのを待つてゐた。

十分ほどあとに座敷へあがると、手垢でよごれた瀬戸火鉢に焚木のおきをこんもりと、田舍らしく盛りあげてあつた。燻ぶつてゐるのも氣にかからなかつた。――三間しかない家の奥で、女房の聲と、子供らが、がやがや何か言つてゐた。

「すこしも行きとどきませんで……。」

一茶は座ると、煎茶のあついのを前に置いて言つた。

「突然に出て大へんご迷惑をかけてすみませんでした。」

一茶の指をふいて見ると、爪のところがササくれ立つてゐた。親方のところへ奉公してゐたころよく雨戸を繰つたり箒をとつてゐたので、そのササくれが立つたものである。女には妙に立たないものであるが……と考へ込んで、朝働きする人に限るカチカチと乾いた一茶の指の皮膚を目にいれた。

「加賀はお城下のことゆゑ、俳道はさかんなことでせうな。」

「いや、みな二十俵取りの紺間俳人で話にはなりません。それに帶刀が自慢で、はや物騒なことです。」

一茶はさう話してゐるうちにも、むづむづと尻をうごかしながら、話が宙に浮いてゐるやうであつた。子供を叱る女

房の聲が手にとるやうに二人の間にきこえた。

「それにくらべると、此方は土くさいところでして……。」口數のすくない一茶は、拗りかねたやうに、れいの悲しげな光を目にたたへて

「ちよいと失禮します。」と立つて、隣室へはついてゆくと、何かひそひそと刺々しい口あらそひがきこえた。ついで子供の泣きごゑが起つた。

「ええ、先妻の子供があるものですから、それに女などといふものは、ほんとにわたしどもから見れば、わけのわからない犬畜生どもで……」と陰氣に言つて、へり下つて微笑つた聲が、酒の上とはいへ、昨夜の闇のなかの暗い行燈と蜘蛛の巣と、よごれた座布團と一しよにあたまへ浮んだ。

「女房をかへるといふものは苦勞の多いことでせうな。」

越山はさう言ひながら、古り妻を國の家で將へ出した。何を云つても、苦情もいはないで優しい一方の氣立てが物足りなかつた。からだばかり大きくて、姿がきりつとしないのも、ふいに目にうかんだ。

「女房の苦勞はからだを削りますよ。お話にはなりません。」

「けれども時々あたらしいのと換えるのもよいものですよ。」

「いやはや家のやつときては――。」さう一茶がはじめて微笑つたときに、越山ははじめて一茶らしい碎けた或るものを感じた。れいの悲しげな光がきえて、愉快な、開け放しな一茶がその鼻にしはを寄せて微笑ふ顔にあらはれてゐたからであつた。

「どうしても先きの女房が戀しくなるといふが、本當のことですかな。あなただけのお心持では。」

越山はさう言ひながら、その口調がいかにも呉服屋ものらしく自分で自分がおかしかつた。いまの妻とは十年近くも一しよになつてゐたが、ときには變へてみたらと、をりをり考へることもあつた。

「まあまあ、そんなものですね。あとほど惡くなるやうな氣がしますが……いやこの道だけは分りません。」

低い聲で考へ考へ言ふ一茶をかれはまだ打とけて呉れないのだといふ風にかんがへてゐた。――土藏の夜は更けて、隙間漏る風にともすれば行燈の張紙が、はためいて寂しい音を立てた。

「何ひとつ詮じつめれば樂しみはごわせん。まづ俳道だけが一番あとに殘つて氣がゆるみますがね。」

「ほんとですな。この年になれば皆さう考へるより仕方がありません。」

一茶は目をぱちぱちやつて、さて又悲しげな目つきをして言つた。

「お宅はお子供衆は――。」

「女がふたりきりですよ。女ができてみれば男がほしいと思ひました。」

窓ぎはに机が一つ、その上に折目の不規律な書類がおかれてあつた。越山はそれをちらりと見たが、何かの日記ものらしかつた。

「何かおかきですか。あれは。」

一茶はあかくなつて答へた

「ちよつとしたものですよ。ひまに任せてかいてゐるのですが。」

袖を机に片よせたので、越山は見てはわるいもののやうに思つた。顔つきがさきからよりもずつと陰氣になつてゐた。

しばらくして一茶ははいつて來たが、子供の泣きごゑが歇まなかつた。荒い息をしづめやうとする努力が、越山の目にすぐ感じられた。

「子供が煩さくてお氣の毒です。」

「いやお互様です。」

話の尾がきれたときに、襖をあけて、女房のおとくがお膳をもつてはいつてきた。

「おかまひ致しませんで……今朝もうお立ちださうですて。」ちらと一茶の方をみて、田舍ものらしくどす黒く肥つた顔を越山の方にむけた。襟垢でよごれた胸もとがはだけてゐて、重いししをきが一週間以上も行商にあるいてゐた越山の目にうつつた。

「かへつてお邪魔ばかりして申譯がありません。」

「何んにもございませんがごゆつくりなさいませ。」

膳がならべられた。干鰯としいたけのおつゆで、辛し菜の冷たいおひたしが甘美かつた。一茶は默つてゐたので、越山も窮屈に食べてゐた。

「魚と言つても鰯くらゐなものでして――それも極く不味いやつです。」

一茶は膝の上にこぼした飯粒をそのまま口へもどしながら言つた。おとくは、正面から越山の口つきを見つめてゐるので、かれは、うちへかへつて妻に客があつてもその口もとを見るものでないことを話さうと考へてゐた。

「この辛し菜はたいへん結構です。」箸のさきで葉と莖とをわけると、もう鮭の子のやうな粒々な花の用意が匂やかにされてあつた。

「もうこんなになつてゐるのですからね。早いものですね。」

かれは箸のさきの蕾を一茶に見せた。

「雪の下でもう蕾んでゐるんだなら大したものです。」

ふたりは、さう言ひ合つて快よげに微笑ひ合つたが、おとくは、ぽかんとして詰らなささうにそれを眺めてゐた。それよりも早く食事が濟めばいいくらゐに考へてゐた。あと一時間も經てば、おさらひにくる騷々しい村の子のことをも氣にかかつてゐた。それに一面識もない越山がずうずうしく泊り込んで、落着き拂つてゐるのや、夫がそれを金儲けか何かのやうに喜んでゐるのも、不服で腹立たしかつた。

食事が終へてから、風呂敷の荷をかついで發つときに、紙包をおとくの方へおしやつた。

「いえ、こんなことをして戴いては――。」

さういふのを無理におさめさせた。一茶はちよつと赤くなつて禮を言つた。

一茶は庚申塚のはずれまで、雨のそぼふるなかを送つてきた。その途中二三人の子供が一茶にあいさつをしながら、物珍らしさうにその背後姿を見送つてゐた。

「ではこれで失禮します。――又どうか入らしつて下さい。」

「いや大へんお世話になりました。」越山は着物の前合せの片跛にした一茶が、想像したよりもずつと平凡な人であるやうにおもはれた。

越山は「どうか内儀へもよろしく。」と揉み手しながら別れた。又一度ふりかへつて見たときに、やや溫かい路傍のかぜに吹かれた一茶の寂しげな髪がほほけ立つて眺められた。どこか村の子供であらう二人づれになつて歩いてゆくのが

見えた。

家へかへると、村の子供らが座敷の方にもう二三人來てゐて、かへつてくる一茶を待つてゐた。

おとくは、干菜の繩を綯つてゐた。

「あんな方ならもつとお泊めすればようござんしたに。」

一茶の顏いろを讀みながら言つた。

「どうして。」

一茶は、むづかしげに懷手をしたまま立つて言つた。

「どうしてつてことはないんですけれど……。」

さういふと、きふに氣がついたやうに、やや擦り切れた寢衣帶の間から、小さな紙包をとり出して前の方においた。

「却つて氣の毒なことをしたな。」

手にとらうとしないでゐた。おとくは、又あらためてそれを手にとると

「いただいておいていいでせうか。」

夫の顏をちらと見た。こすいやうな目だと思つて

「あゝいいとも。」

と次の間へ行つた。子供が三人、板机を出してちやんと座つてゐた。昨夜の睡り不足のせいか、だるい勞れをかんじてゐて、すぐ板机に向ふ氣がしなかつた。

雨はいつの間にかあがつて、しつとりした雨後の庭に、いかにも、ほがらかな日かげがさしさうに思はれてしかたがなかつた。

「けふは叔父さんのお友達が發たれたので、疲れてゐるから休みとしよう。」

一茶がさう言ふと、三人とも喜んで、さつき一しよに行つた人かとか、えらい人かとか、いろいろ尋ねながら行つた。

みんな歸つたあとで、我子の混藏だけが板机にむかつて本をよんでゐた。

「みんなと一しよに勉強なさいといふけれど、すこしも聞かないんですよ。しぶとい子だつたらない。」

出あひがしらにおとくが言つて、ちらと混藏の方をみた。混藏は最初の妻の子で、默つた陰氣なたちであつた。どういふのか、父親と二人向ひ合はないと、本や手習をしなかつた。

「みんなと一緒にしなければならないこともないから、さう小言をいふな。」

一茶は、さう言つて、こんどは混藏に向つて

「お清書ができたら土藏の方へもつてきたらいい。」

汚ない襟垢でまみれた混藏は、母親と一茶の顔を見くらべてゐた。

「はい。」

さう返事をすると、わるい墨をすりはじめた。父親に似た悲しげな目つきをしながら、きちんと座つてゐた。」

「あなたがあまやかし過ぎるものだから、わたしの言ふことただ一つもきかないんですよ。」

一茶はうしろから險しいおとくの聲をききながら、土間へ出てすぐ土藏の二階へあがつた。

ひいやりとした空氣と、日あたりのわるい内部は、濕けてかびくさかつた。その上、今日はまだ火もきてゐなかつた。

机は北窓にむけられてあつた。枯れ枯れな庭をへだてて、人家の屋根越しに白い梅がはじいてゐた。

混蔵が十能に炭火をもつて、二階へあがつて來た。

「よく氣がついたね。お母さんがさう言つたのかい。」

「いえ。」

「お前が氣をきかしたのか。」

「え。」

混蔵は、父親とよく似たれいの悲しげな目をした。階下へおりて行つたあとで、一茶は机に向つた。したで、おとくが口汚なく子供を叱つてゐる聲がして、どうしても落ちつけなかつた。泣くと又怒鳴り出すので、耳について、いらいらしかつた。

「ああ、厭だ。」

さう心から言つて、火鉢の上に兩手をかさねてあぶつてゐるばかりで、べつに筆をとるらしくも思はれなかつた。

梯子段がみしみし鳴つた。「又おとくが來たな。」と思つてゐると、すぐ眉がひとりでに顰められた。

「あの混蔵がね。あなた。」息せき這入つてきたおとくの言葉をきくと、手でその口をおさへるやうに、頭をふつた。

「子供のことなぞ言はんでをいてくれ。」

一茶は、さういふと反對の方を向いた。おとくは、出さきを挫かれたので、口惜しさうに一茶のかほをながめた。

三、春分

篆刻師碧眼は、どういふときでも、娘を二階の仕事場にあげなかつた。

小さいときからの習慣で、仕事場へは行つてならぬもののやうに思つてゐた。階下では印刻の弟子が二人、店の間の障子戸のうちに彫鑿を動かしてゐた。すぐ往來の上野黒門町では、駕屋のかけ聲がときどき遠近にするくらゐで、冬越しの羽音の鈍い蠅が二疋、障子に動いてゐるきりで靜かな午後であつた。

店のつぎの間の窓さきに、凧の唸りごゑが朝からだんだん數をふやしてゐた。目金橋あたりで揚げてゐるらしかつた。

日あたりがいいので「眠り彫り」が弟子達の方ではじまつてゐた。

となりの藥種屋では、相かはらず草根の粉藥で甘草やげんのしやこを叩く〱音がしてゐた。

「碧眼といふ篆刻師はこちらか。」

表の方で、障子戸が開いて二三人の町奉行の下役が這入つてきた。

「主人は。」

さう尋ねたときに、弟子の一人がうつかりして二階を教へた。かれらは、すぐ、お縫と女中のゐた次の間から二階へあがつて行つた。

お縫はあはてて店の弟子達の青くなつて震えてゐるのを見るとたづねた。

「どうしてお役人さまがいらしつたのでせう。」

氣が氣でなかつた。

古参の弟子は、ときをり二階へあがるので、落ちついてお縫に「なんでもないことだから慌てないで、じつとして居らつしやい。」と言つて、無理に次の間へ坐らせた。女中もおろおろしてゐた。

役人等は、すぐ碧眼を引立てた。梯子段を下りしなに、お縫にむかつて、いつものやうに落着いて云つた。

「すぐ歸つてくるから心配せんでいい。」

お縫は、どう言つていいか分らなかつた。下役は、桃割に結つた水ぎわ立つたお縫をうすぐらい梯子段のかげに見いだすと、同様にささやき合した。

「後程にかへすからの。」

一番年を老つた白髪まじりの役人體が言つてなだめた。もう一人の若い方は、風呂敷包みをさげてゐた。下繪と彫りさしの材料がはいつてゐるらしかつた。ああいふ色の風呂敷をもお縫ははじめて見たのである。

腰繩を打たれた碧眼のさきに一人、あとに二人連れ立つて行つた。晴れた日の通りのはげしい目ぬきだつたので、あちこちから、あとを跟けて行く子供もあつた。お縫は、わけが分らないので、すぐ涙もでなかつた。明日あたり何處へか父と一しよに出かける筈の豫定もくずれて、かういふ穏やかな日に、しかもこんな事件がもちあがることなぞ思ひもかけないことであつた。

それから二年後に、碧眼は、黒門町の家へかへつた。物堅い弟子達が留守の間を濟ぎつけてゐたので、華客も減らなかつた。碧眼は非常に衰へて、頭髪などは眞白になつてゐた。

お縫は十八になつてゐた。

「おれも階下で仕事をやるかな。」

いつも餘り饒舌らない碧眼は、出牢後は、なほ寡默になつてじつと考へ込んでゐるやうなことが多かつた。これまでに較べると、わけても二年間の無理もあつたので、くらしの方がうまく行かなかつた。女中のおつゆが殆家の遣り繰りを年の甲で甘くやつてゐたものの、そのころでは手に終へぬらしかつた。

二文や三文の印行は、一日に幾つも彫れたが、ふしぎに家中ががさがさ乾いて、お縫などはもう着古しばかりを着てゐた。

それから間もなく碧眼は、二階で仕事をするやうになつた。弟子たちは何ともいはなかつた。以前のやうな淺草方面の繪草子屋や、刷屋や、結ひ立ての美しい髮をした下町ものが絶えず出入してゐた。金廻りがよくなつてきたことが、お縫にもわかつてきた。下町ものは來るごとに、お縫にちやほやしてゐた。お縫はむかしどほりに老女中と、あちこちを遊んであるいてゐた。

ときをりどうかすると父の碧眼は、のつそりと梯子段を半分ばかり下りてきて、お縫を手招きした。そして低いこゑで、

「誰か表にゐはせぬか見てきておくれ。誰か變つた人がな。」

老眼鏡の上からおどおどした目つきで言つた。どういふものか、たまではあるが、しやくりのやうに、妙に物に脅えたやうな聲音を出す碧眼になつてゐた。

表には誰もゐなかつた。さう告げると、安心したやうに

「さうか、それでいい。」座つて居れといふやうな手つきをした。

「どうなすつたの。恐いわ。そんな聲をお出しなすつては……。」

お縫は、不安さうな目つきでさう言つた。

「何でもないのぢや、さあお入り。」

よく肉づいた圓んまるいお縫の肩を叩いて二階へあがつて行つた。さういふことがあつてから、お縫は、よく表へ出て見たりした。役人らしいきらりとした黒塗の鞘光りを往來の人込みにみつけると、おもはずはつとした。編笠や腰を用した二俵取りをみてさへ氣もちがわるかつた。

父が入牢後、召取りにきた若い下役がその當時よく家の前を朝夕となくぶらついて氣味がわるかつた。印行をこしらへにきたり、用事もないのに茶をのんで行つたりした當時のことが考へられた。

翠眼は、もう鬢尻の毛が刷に、茶微塵の結城の高價なお茶人羽織を着込んで、よく獨でお縫をつれて、淺草へ芝居見にでかけたりした。妻を失つてから永い間の翠眼は、派手好きで茶屋や芝居ものの引手女にさへ、よく盆暮の仕着の手當などをしてゐた。

「わしはもういくらも生きて居られん。わしの居る間わしと一緒にゐてくれ。」

さういふ翠眼は、どういふいい口があつてもお縫を嫁入らせなかつた。さういふ話があると、寂しさうに手を振つた。

「まあ、そんな話はあとにして下され。それより芝居の話でもな。」

對手にならなかつた。

出牢後父にしたしむ心はお縫には烈しくなつてゐた。芝居をみるにつけても、老ひた翠眼がいとしかつた。わけても例のおどおどした調子が、芝居の桝にゐても、小料理屋で何か食べてゐるときにも現はれてゐた。お縫は、それはやはり入牢してからこのかた習慣になつてゐるもののやうに思はれた。

「わしが亡くなるまで何處へも行つてはならんぞ。」

さう碧眼は、樂しいときにでも口へ出して言つた。または

「ほんとに行かぬかどうぢや。」

しつこく尋ねることがあつた。そんなときの碧眼は、寂そりした齢の食んだ顔のなかに、沈みがちな微笑みをうかべてゐた。

「あたし、いつまでもお父樣のおそばにゐますわ。いつまでも。」

お縫は、さう言つて心から悲しかつた。

「ほんとか。さうか。」

碧眼ははじめて安心したやうな顔をして言つた。

それから二年經つた春のことであつた。いつも春さきになると、れいの召取りのことがお縫には考へられて仕方がなかつた。ちやうど、その日のやうに靜かで、人通りがはげしくて、しかも風のうなりまで窓さきに落ちてきて、いつかの日によく似てゐた。

店では長閑な「眠り彫り」がはじまつてゐた。梅の鉢を仕事机の上において、二人とも居睡りながら機械的に鑿をうごかしてゐた。

碧眼は二階に閉ぢこもつてゐて、いつの間にか表のことなどを言ひ出さなくなつて、のんびりと仕事ができるらしかつた。ことりといふ音すらなかつた。

女中のおつゆは、古着の解ものをしてゐた。身寄りのないこの老女は、ここで死水をとつて貰ふのだと言つてゐた。

碧眼は、よく目をかけてやつてゐた。

お縫は、このごろ家へ出入する大髻の源五郎のことをぼんやりと、考へるともなく考へてゐた。ひとの噂によると、髻のなかへ藏破りの道具をしまひ込んでゐるので、みんな大髻と呼んでゐるやうだつたが、お縫には、その優しい顔立ちからして、その人がさういふ恐ろしいむすめ師であらうなどとは、夢にも思はなかつた。來るごとに、ただ、ちよつとだけ聲をかけて行くだけだが、そのせいの高い、たつぷりした髮の地まで忘られないでぼんやり浮んできたりした。が、四五日前からばつたり來なくなつた。それは碧眼にお縫をもらはうと言ひ出して、れいによつて斷られたものらしかつた。

お縫は、そのとき、ふいと窓さきを見てゐると、庇にひらひら引つかかつてゐる下絝らしいものが見えた。

「お父さんが窓をあけて仕事をなすつてゐらつしやるのか知ら。」

お縫がさういふと、老女は立つて窓のところへ行つた。往來からあふられた風をくらつて下絝がひらひらして落ちかかつた。

窓さきへ出したお縫の手に、その下絝がふうわりと受とれた。何心なくみると、お縫は聲をあげて驚くほど、びつくりしてしまつた。

老女がすぐそれを引き奪つた。

お縫は顔をあからめながら、もう、それを見ようとしなかつた。老女は、疊んでしまふと、ふところへ入れた。

そのとき篆刻師碧眼は、移つてくる春さきの日さしのなかに、老ひこんだやうに居睡りをしてゐた。あたりにある×××さまざまな下絝が、そよかぜにすこしづつ動いてゐた。

中央公論

四月一日發行

文壇論壇第一流大家の力作名篇滿載

春季大附錄號

日本現代の最高文化を表徵する大册

二倍若くは二倍半號

○定價　金六拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金參圓六拾錢	金四圓貳拾錢
十二冊	金七圓貳拾錢	金八圓四拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾圓貳拾錢外國は金拾壹圓九拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず
　一金一圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十年二月二十八日印刷納本
大正十年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　中央公論社
電話（因）小石川一四四一
小石川三四二〇
電信略號コウロン

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 11.90; Single copy 70 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



春の此の日和を

……三越へ、必要品揃ひの三越へ……

三越の店は常に清新の氣に滿て居ります、殊に流行の新品や、その他澤山取揃て御座います。

◆◆東洋品陳列

支那を中心としたる、東洋の雑貨を集め三月五日より

◆◆春季新柄陳列

三越獨特の流行の新柄呉服類を三月二十日より陳列

◆◆三越の三月の定休日◆三月十日◆三月廿五日◆

東京

(越)

三越呉服店